

博士論文

青年期きょうだい関係に関する
家族心理学的研究
-親役割と子役割に着目して-

森川 夏乃

要約

本研究の目的は、青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにすることである。また、従来のきょうだい関係研究では、性別や出生順位、きょうだいの性別構成といった、きょうだいの属性の煩雑さや知見が一致しないことが課題となっていた。そこで、相互作用を捉える概念として役割を用い、きょうだいの親役割および子役割の役割期待と役割行動に着目し、きょうだい関係との関連について検討を行うことで、煩雑な属性に代わってきょうだい関係を説明するための手法を提案する。本研究の目的を達成するために、青年期きょうだい関係に関する基礎研究を行った上で、役割ときょうだい関係との関連について検討を行う。

【研究Ⅰ】では、本人の視点から、きょうだい関係の発達的变化について検討を行った。きょうだいを持つ50代、60代の第1子に対して質的調査を行った。その結果、5段階からなるきょうだい関係の発達段階が見出された。青年期にかけて、きょうだい関係が次第に対等になり、きょうだいが互いに個と個としての付き合いができるようになることが示された。

【研究Ⅱ】では、家族関係を包括的に捉えるために、家族構造として家族を捉え、きょうだい関係との関連について検討を行った。大学生に対して質問紙調査を行った結果、家族全体の結びつきの強い家族構造であるほどきょうだい関係は親和的になり、家族全体の結びつきが弱い家族構造であるほど、きょうだい関係は分離的になることが示された。また、数名に対してインタビュー調査を行い、家族構造ごとに見られる家族の相互作用について詳細に検討した結果、夫婦関係、親子関係、きょうだい関係において家族構造ごとに特徴が見られた。その中で、家族全体の結びつきが弱い家族構造においては、家族内に葛藤が多いために結びつきが弱いと認知している場合と、家族から

離れていることで結びつきが弱いと認知している場合が含まれていることがうかがえた。したがって、家族との心理的・物理的距離がひらく大学生という時期においては、青年が親役割を担うことに着目することで、より家族の状態を捉え、きょうだい関係を説明することができるのではないかと推察された。

【研究Ⅲ】では、「親役割」と「子役割」からなる「家族内の役割尺度」の作成と、内的整合性および妥当性の検討を行った。大学生に対して質問紙調査を行った結果、「親役割」因子 5 項目、「子役割」因子 5 項目の計 10 項目からなる尺度が作成された。「親役割」は、親と青年が横並びになる関係で、「子役割」は、親と青年が上下になる関係であることが示された。また、ある属性であることで、特定の相互作用のパターンが生じていることが示された。

【研究Ⅳ】は、家族機能の高群と低群におけるきょうだい間の役割の関連について比較検討を行い、家族の状態を反映し、きょうだいがどのように役割を担っているのかを明らかにすることを試みた。大学生に対して質問紙調査を行った結果、高群では、きょうだいと同じように親役割期待を感じ、親役割行動をとっていることや、自分が感じている親役割期待に従って同胞が親役割行動をとっていると感じる傾向があることがわかった。反対に、低群では、自分と同胞それぞれが別個に、親役割期待に従って親役割行動をとっていることが示された。また子役割は、高群と低群の間で、ほとんど違いが見られなかった。したがって、家族の機能状態によって、自分の親役割に対して、同胞がどのように親役割を担ってくれているのか、という感じ方に違いがあることが示された。

そのため、【研究Ⅴ】では、きょうだいの親役割期待と親役割行動の程度ときょうだい関係との関連について検討を行った。「自分の親役割期待」高・低と「同胞の親役割行動」高・低の組み合わせからなる 4 群あるいは、「同胞の親役割期待」高・

低と「自分の親役割行動」高・低の組み合わせからなる4群を独立変数とし、きょうだい関係を従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果、自分の親役割期待と同胞の親役割行動が同程度に高いほど、きょうだい関係は親和的になり、同胞の親役割期待に対して自分の親役割行動が低いことで、きょうだい関係は分離的になることが示された。すなわち、青年本人が、自分の親役割の程度に対して同胞がどの程度親役割を担っているかと認知しているか、という自分と同胞の役割期待と役割行動のバランスによって、きょうだい関係は説明されることが明らかにされた。

【研究VI】では、自分と同胞の親役割および子役割からなる役割の種類ときょうだい関係との関連について検討した。役割の種類化を行い、役割類型を独立変数、きょうだい関係を従属変数とした1要因分散分析を行ったところ、きょうだい共に親役割得点が高いほど、親和的なきょうだい関係や対立的なきょうだい関係が見られるようになり、一方で、きょうだいの親役割得点が高いほどきょうだい関係は分離的になることが明らかにされた。

役割を用いて青年期きょうだい関係の規定について検討した結果、きょうだいそれぞれが同程度に高い親役割を担う場合にはきょうだい関係は親和的になるが、きょうだい間に親役割の偏りが生じていると認知している場合にはきょうだい関係は分離的になることが明らかにされた。また、役割を用いることできょうだい関係が説明されたことから、役割は、煩雑な属性に代わってきょうだい関係を説明するための新しい手法となることが示された。

【目次】

序文	1
第 1 部 問題と目的	
第 1 章 先行研究の概観および問題点の整理	
第 1 節 家族とは	6
第 2 節 きょうだいとは	12
第 3 節 親役割への着目と役割理論	32
第 4 節 きょうだい研究の課題	44
第 2 章 本論の目的と実証研究の構成	
第 1 節 本研究の目的	50
第 2 節 青年期きょうだい関係の基礎研究	52
第 3 節 役割理論の援用	56
第 4 節 役割尺度の作成	61
第 5 節 青年期の家族ときょうだいの役割	62
第 6 節 本研究の仮説と実証研究の位置づけ	65
第 2 部 実証研究	
第 3 章 【研究 I】きょうだい関係の発達的变化に関する研究	
第 1 節 目的	74
第 2 節 方法	75
第 3 節 結果	79
第 4 節 考察	89
第 4 章 【研究 II】青年期の家族構造ときょうだい関係との関連	
第 1 節 目的	97

第 2 節	方法	98
第 3 節	結果	103
第 4 節	考察	114
第 5 章	【研究Ⅲ】 青年が担う家族内の役割尺度の作成	
第 1 節	目的	127
第 2 節	方法	129
第 3 節	結果	132
第 4 節	考察	135
第 6 章	【研究Ⅳ】 家族機能ときょうだいの役割パターンとの 関連	
第 1 節	目的	142
第 2 節	方法	145
第 3 節	結果	147
第 4 節	考察	154
第 7 章	【研究Ⅴ】 きょうだいが担う役割ときょうだい関係 との関連	
第 1 節	目的	163
第 2 節	方法	165
第 3 節	結果	167
第 4 節	考察	172
第 8 章	【研究Ⅵ】 きょうだいが担う役割のバランスときよ うだい関係との関連	
第 1 節	目的	180
第 2 節	方法	180
第 3 節	結果	183
第 4 節	考察	186

第 3 部	討 論	
第 9 章	総 合 考 察	
第 1 節	仮説の検証	193
第 2 節	青年期のきょうだい関係と家族関係について	204
第 3 節	役割ときょうだい関係について	207
第 4 節	役割理論の援用について	212
第 10 章	今後の課題と展開	
第 1 節	今後の課題	216
第 2 節	本研究の意義	219
引用文献		226
付記		249
資料		250
謝辞		252

序文

Adler(1930, 岸見(訳), 1970)が, 長子や末子のタイプを述べたように, 心理学分野ではかねてよりパーソナリティ形成においてきょうだいの意義が見出されてきた。現代においても, 一般的に長子的性格, 末っ子的性格というような言葉はよく聞かれる。しかしながら, きょうだいの意義はパーソナリティ形成におけるものだけではなく, その後の研究によって様々な意義が認められてきた。しかしながら, 検索エンジン PsycINFO を用いて 1975 年から 2014 年までの心理学の文献を検索したところ, “marriage” あるいは “marital relationship” をキーワードとするものは 1859 本, “parenting” あるいは “parental relationship” をキーワードとするものが 2396 本であったのに対して, “sibling relationship” をキーワードとするものはわずか 135 本であった(2014 年 11 月 16 日現在)。この検索結果から, 家族研究分野において, 夫婦関係や親子関係と比べてきょうだい関係への関心は非常に低いことがわかる。特に, わが国においてはきょうだい関係に関する蓄積された知見はほとんど見られないのが現状である。

きょうだい関係研究の知見が蓄積されない要因はいくつかあるが, その要因の一つとして, “少子化によりきょうだいのいる人が少なくなっている” という社会的認知があるだろう。国立社会保障・人口問題研究所が発表した第 14 回出生動向基本調査(2011)によると, 夫婦の完結出生時数は 2011 年時点, 2 人を下回り 1.96 であることが示されている。しかし, 第 13 回出生動向基本調査(2005)を見ると, 夫婦が最終的に生んだ子どもの数は, 1977 年から 2005 年までの間に, 1 人っ子世帯の数や 2 人きょうだい世帯の数はほとんど変わらず, 対して子どもを産まない夫婦の世帯数が増加し, 3 人以上のきょうだいを持つ世帯数が減少傾向にあることが示されている。それでも, 全体の

7割近い世帯にきょうだいがいることが示されている。このように、人口動態変化に伴いきょうだい構成に変化はあるものの、半分以上の世帯においてはきょうだいがいることから、きょうだい関係は決して無視できる存在ではない。加えて、柏木(2003, p.p.47-48)は医学の進歩、衛生・栄養の改善によって乳幼児死亡率が急激に低下したことによる家族や家族メンバーへの影響について、「子どもは生まれればほぼ確実に育つことが保証され、他方、工業化社会は子どもに高い教育を与える必要を生じさせた。この2つがあいまって、『少なく生んでよく育てる』家族戦略が定着した」と述べている。きょうだい数の少ないきょうだいが増加し、子どもに手がかけられるようになった現代においては、きょうだい間の付き合いがより密になることも考えられる。

また、“青年期”という概念が発見されて以来、進学率の増加により青年期の延長が指摘されている(例えば、馬場・永井, 1997)。戦後、高校卒業後の進学率は上昇し続け、現在では大学・短期大学・専門学校・高等専門学校への進学率は77.9%にのぼる(文部科学省, 2013)。つまり、約7割の青年が20代前半までを学生として過ごすようになった。そのため、経済的自立も遅れ、20代前半までを実家で過ごす者も多く、青年期における家族とのかかわりは増加していることが想定される。同時に、青年期のきょうだいのかかわりもかつてよりも増加していることが予想される。すなわち、青年期のきょうだい関係は、家族からの影響も受けながら、それぞれが自立に向かう中で形成される関係といえるだろう。しかし時に、青年期のきょうだいの間に生じるきょうだい間虐待やきょうだい間殺人が社会問題となることもある。青年期のきょうだいはどのように関係を築けばよいのであろうか。

さらに、きょうだい関係を囲む環境には、社会状況、家族の社会文化的・経済的状況、家族関係等、様々なものがある。個

人はいくつものシステムに内包されていることから (Bronfenbrenner, 1981, 磯貝・福富(監訳), 1996), きょうだい関係も, いくつものより上位のシステムの中で存在している。すなわち, きょうだい関係は独立して存在するのではなく, 社会, 家族等の上位システムからの様々な影響を受けているといえる。中でも, 上述したように青年期のきょうだい関係は, 家族からの影響も受けながら, それぞれが自立に向かう中で形成される関係と考えられることから, 家族とのかかわりに着目しながら, 青年期きょうだい関係を捉えることが必要であろう。

だが, きょうだい関係を検討する際, きょうだいの性別, 年齢差といった属性を, どのように組み合わせで検討するかによって結果が異なることがある。例えば, きょうだいの性別の組み合わせときょうだい関係との関連について検討する際にも, 年齢差を考慮するのか, 考慮するならば年齢差が大きいきょうだいか, 小さいきょうだいかによって, 結果が異なってくることもある。属性の組み合わせは無数に生じるという煩雑さや, どの属性を用いるのかによって結果が異なるために一貫した知見が得られていないことが, きょうだい関係研究の課題だといえる。したがって, 属性の煩雑さを回避し, 一貫した知見を積み上げていくための手法の検討も求められる。

よって, 本研究では, 家族心理学的な観点から, 青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかについて検討を行う。その際, 属性を回避し, 一貫した知見を積み上げていくための, きょうだい関係を捉える新しい手法についても提案を行う。

第 1 部

問題と目的

第 1 章

先行研究の概観および問題点の整理

第 1 節 家族とは

きょうだい¹を家族の文脈で述べるにあたり，家族について理解しておく必要があるだろう。家族は，社会学，歴史学，心理学等，様々な学問分野の中で論じられてきた。

特に，家族社会学の中では，社会状況の変遷に伴い，家族の定義をめぐって多くの議論がなされてきた。Parsons & Bales (1956, 橋爪・溝口・高木・武藤・山村(訳), 2001)の家族理論においては，家族は社会システムの下位システムとして位置づけられ，特有の機能を有する小集団として概念化された。この理論は我が国にも導入され，家族の定義，機能を巡って議論がなされてきた。森岡・望月(1983)は，「家族とは，夫婦・親子・きょうだい等少数の近親者を主要な成員とし，成員相互の深い感情的包絡で結ばれた，第一次的な幸福追求の集団である」と定義し，特定の構造と特有の機能から概念的に家族を把握している。また，90年代以降は，母子家庭・父子家庭，ステップファミリー，ホモセクシュアルの家族等，家族の多様化とともに社会構成主義的な家族研究が行われるようになった。木戸(2010)によると，社会構成主義のパーспекティブにとって家族は，家族に関する言説によって形作られる構築物であると述べられている。つまり，以前は家族の血縁関係に基づいて家族のしかるべきあり方が示されてきたが，家族の在り方は，人々の日常生活の中で文脈に応じて様々に認知・理解され，社会的構成物の一つとして捉えられるようになってきた。柏木(2003)は，社会変動と連動する形で，現在も家族の最適化が起きていることを主張している。

以上のように，家族は，確固としたものが存在するのではなく，社会変動に応じて変遷し，また家族を取り上げる研究者の

¹ 本論文において，きょうだいすべてを指す場合には「きょうだい」と表記し，きょうだいのうちの自分以外の子どもを指す場合には「同胞」と表記する。

理論的枠組みによって様々に定義されてきたといえる。したがって本節では、これまで議論されてきた家族の定義を踏まえながら、本論において家族をいかに理解するか of 理論的枠組みを示す。

第 1 項 家族システム理論の観点

家族研究は、心理学分野においては発達心理学と臨床心理学を母体に誕生した家族心理学において理論的に発展してきた(中釜, 2006)。家族心理学において、家族は一つのシステムであると思なす。特に、家族は誕生から始まり発達し、死に至るという性質を持つことから、生物体システムとして見なすことができる。長谷川(1987)は、生物体システムである家族システムの性質として、①変換性、②全体性、③自己制御性を挙げている。①変換性とは外的な条件に合わせて自分を変化させていく能力をいい、②全体性とは、家族をメンバー個々人の総和として捉えるのではなく、家族を全体として捉えることを指す。そして③自己制御性とは、システム自体が平衡状態を維持しようとする力を持つことである。すなわち、家族システム論においては、家族の成員は他の家族成員から独立して存在するのではなく、常に家族成員と複雑な相互影響過程の中に置かれている。そして、家族とは、成員同士の相互作用からなるひとまとまりの意味を持った集団だといえる。

つまり、家族システム論の観点に立てば、きょうだい関係もまた複雑な家族の相互作用の中で存在しているといえる。後述するが、これまできょうだい関係を規定する要因として属性や特性等に多く着目がなされてきた。しかしながら、家族は一つのシステムであることから、きょうだい関係のみを切り取るのではなく、家族の文脈の中できょうだい関係を捉えることが必要であろう。

第 2 項 家族を捉える手法

システムとしての家族を理解するために、これまで「機能」と「構造」という概念が着目されてきた。中釜・野末・布柴・無藤(2008)によると、家族システムは、父・母・子どもという構成員(要素)が結びついた家族構造と、構成員の間でなされる秩序だったコミュニケーションや役割パターンを指す家族機能を持っていると述べられている。遊佐(1984, p.p. 39-41)および中釜ら(2008, p. 22)は、家族の構造と機能は密接に関連しており、家族の「構造」が家族の「機能」を規定する場合もあれば、家族の「機能」が家族の「構造」を規定する場合もあることを述べている。例えば、父親が単身赴任中である父親・母親・子どもからなる「構造」の家族においては、母親 1 人が母親と父親の「機能」を果たしている場合がある。これは、父親が不在がちな家族という「構造」によって母親の「機能」が規定されているともいえる。一方で、母親の「機能」によって父親が不在がちであるという「構造」が規定されているともいえる。このように、相互に密接に関連する「機能」と「構造」だが、これまで「機能」あるいは「構造」を測定することで家族を理解することが試みられてきた。

家族機能については、様々な測定尺度が開発され、用いられてきた。代表的なものの一つに、Olson, Portner, & Lavee(1985)による円環モデルを理論的背景とする Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale III (FACES III)がある。円環モデルでは、独立した凝集性と適応性がそれぞれカーブリア曲線を示すという仮説を持っており、適度な凝集性と適応性である家族を機能的な家族と見なしている。その他、家族機能を測定する尺度としては、問題解決、コミュニケーション、役割、情緒的敏感性、情緒的関与、行動の統制の 6 次元で家族機能を捉える Family Assessment Device (FAD; Epstein, Baldwin, & Bishop, 1983)や、家族に対する評価、家族の凝集性、家族組織

の柔軟性・構成度，家族内の秩序・ルール，親密で自由な家族内交流の 5 次元から家族機能を捉える Family Assessment Inventory (FAI; 西出, 1993) 等，いくつかのツールが提案されている。そして，これらの家族機能を測定する質問紙を用いた研究において，家族機能の高さと子どもの抑うつ²の軽減との関連(西出・夏野, 1997; 菅原・八木・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002) や，母親の育児ストレスの軽減との関連(田中, 1996) 等が指摘されている。しかし，FACESIII，FAD，FAI といった家族機能を測定する尺度は，いずれも家族全体の状態を捉えるに留まっている。

そこで，狐塚・野口・閏間・石橋・若島(2008)および野口・狐塚・宇佐美・若島(2009)は，夫婦間，父子間，母子間の 3 者関係の組み合わせから構成される形態として家族構造を定義し，全体の構成に寄与する各成員間の関係の査定を試みた。そして，「結びつき」，「勢力」，「利害的關係」，「開放性」の 4 因子，各因子 1 項目からなる効率的家族構造測定尺度 (Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship; ICHIGEKI) が作成され，妥当性の検討が行われた。その結果，十分な妥当性があることが示された。また，本尺度によって，家族関係を捉えるための最少数の項目が示されたことで，各関係からなる家族を捉えることが可能となった。狐塚(2011)は，効率的家族構造測定尺度を用いて家族構造と家族内のコミュニケーション・パターンおよび家族内ストレス²を測定したところ，結びつきが高く勢力が均衡した家族構造では，青年²が認知する家族内のストレス²が低く，家族構造によって家族内のストレス²や家族内のコミュニケーション・パターンに違いが見られることを明らかにしている。このことから，各関係を測定し，そ

² 青年期の子どもを指す場合には，基本的に「青年」と表記する。ただし，親と対比して述べる場合や，家族の構成員として述べる場合には，「子ども」と表記する。

れらを組み合わせることで、包括的に家族を捉え、家族の複雑な相互作用を捉えることができるといえる。したがって、きょうだい関係について検討を行う際にも、家族構造として包括的に家族を捉える手法を採用することで、家族をひとまとまりのシステムとして捉え、家族関係の文脈の中できょうだい関係を検討することができると思う。

第 3 項 家族のライフサイクル

家族システムは常に一定の形をとるものではなく、ライフサイクルがある。家族心理学分野で最初に家族の発達を提唱したのは、戦略的家族療法家の Haley(1976, 佐藤(訳), 1985)である。Haley(1976, 佐藤(訳), 1985)は、家族にも心理的な発達過程があると述べている。その後、Rhodes(1977)は、Erikson(1963, 仁科(訳), 1980)の発達課題を家族に適用させた 7 段階からなる家族ライフサイクルを示している。さらに、Carter & McGoldrick(1989)は、6 段階からなる家族ライフサイクルのモデルを提案し、各発達段階に必要な第二次変化³を示している。例えば、幼児を育てる時期においては、子どもを含めるように夫婦システムを調整し、親としての役割の取得、家族成員の役割を調整する第二次変化が求められる。そして、青年期の子どもを持つ時期には、家族は、青年が家族システムに出入りしやすいように親子関係を調整することや、親世代は老後への関心

³ Watzlawick, Weakland, & Fisch(1974, 長谷川(訳), 1992, p.p.26-28)によると、第二次変化とは、「変化の変化」とであると述べられている。システムの内側で生じ、システム自体は変化しない第一次変化に対し、第二次変化は、システム自体の変化であるとされる。Watzlawick *et al.*(1974, 長谷川(訳), 1992, p.p.26-28)は、以下のように悪夢の例を用いて第一次変化と第二次変化を説明している。例えば、悪夢をみている人は、夢の中で闘ったり、叫んだりするといった行動をとるが、夢の中の行動である限り悪夢自体を止めることはできない。この種の変化を「第一次変化」としている。それに対して、眠りから覚めることで、悪夢から脱するという変化を得ることができる。この種の「全く異なった状態への変化」を「第二次変化」と呼んでいる。

を持ち始めるような第二次変化が求められることが示されている。Carter & McGoldrick(1989)のモデルから，発達に伴う夫婦関係や親子関係の再編は必ず求められ，家族は元の状態を維持しようとする形態維持と，変化しようとする形態発生のバランスをとりながら変化をしていくことがわかる。

中でも青年期の子どもがいる時期の家族は，家族ライフサイクルの中でも最も困難で問題が表面化しやすい時期にあたり，親子間の価値観の相違が顕著になることが指摘されている(渡辺, 1996)。実際に，回想法を用いて幼児期から青年期現在に至るまでの家族関係ならびに家族内外のストレスを調査した若島・狐塚・板倉・宇佐美(2010)および Usami, Kozuka, Hiraizumi, Morikawa, Furuyama, & Wakashima(2011)において，思春期から青年期にかけて親と子の勢力が転換することや，家族内のストレスが増加していくことが示されている。つまり，青年の独立を進め，他の家族成員との境界が柔軟になるよう家族関係を変化させていくことは，家族にとってストレスとなることがうかがえる。

家族は，発達に伴い夫婦関係や親子関係を再編していくことから，家族ライフサイクルのどの段階に位置するのかによって，家族成員の関係は異なることがわかる。したがって，きょうだい関係を捉えるにあたっては，家族ライフサイクルのどの段階に位置しているのを踏まえることは必要であろう。例えば，児童期や学童期においては，親がきょうだい関係に対して統制的なかかわりをする必要があるかもしれないが，青年期のきょうだい関係に対しても，親のきょうだい関係に対する統制的なかかわりが有効であるとは限らないと考える。中でも，青年期の子どもを持つ時期の家族は，家族関係の再編がなされ(Carter & McGoldrick, 1989)，家族にとってストレスフルな時期であることから(渡辺, 1996)，きょうだい関係も家族から多大な影響を受け変動が生じると考えられる。

第 2 節 きょうだいとは

きょうだい関係は，第 2 子が生まれてから一方が死ぬまで，生涯に渡って付き合いが続く関係である。そのため，親子・夫婦関係以上に長期に渡るかかわりとなる。安達(1999)は，同胞は最も長期に渡って付き合う存在であることから，同時代を生きてきた身近な人間だと述べている。

これまで，1 人っ子の家族との比較を通じて，同胞を持っていることの機能が論じられてきた。例えば，1 人っ子の子どもと比較すると，同胞を持つ子どもは，わずかに神経症傾向が少ないという指摘もある(Riggio, 1999)。子どもの成長過程において，同胞を持つことで言語性や社会性の学習が促進され，きょうだい関係は，抑うつ感や自尊感情といった子どもの精神的健康に影響を及ぼすことが多く示唆されている(例えば，Patterson, 1984; Brown & Dunn, 1992; Oliva & Arranz, 2005; Kim, McHale, Crouter, & Osgood, 2007)。また，Caya & Liem(1998)および Bank, Burraston, & Snyder(2004)は，同胞がいることで 1 人っ子家庭とは異なる家族の相互作用が生まれるために，1 人っ子家庭では経験することのない家族との葛藤や，家族との葛藤を緩衝するような同胞からのサポートも経験することを指摘している。

このように，きょうだいは生涯に渡って相互影響をし合う関係であり，着目すべき関係である。これまで様々な年齢のきょうだいについて，同胞を持つことによる子どもの心理社会的発達や精神的健康への影響，同胞から受ける恩恵等が論じられてきた。また，多様なきょうだい関係について，その背景要因やメカニズムについても検討がなされてきた。本節では，生涯に渡るきょうだい関係の展開や，きょうだい関係の臨床的重要性，そのメカニズムについて概観していくことで，きょうだい関係について理解を深めていく。

第 1 項 生涯に渡るきょうだいの影響

上述したように、きょうだい関係は同胞の誕生から始まり、同胞の死まで続く、夫婦関係、親子関係よりも長期に渡る関係である。それゆえ、乳幼児期から老年期まで、幅広くきょうだい関係の検討が行われてきた。

まず、就学前から思春期頃までは、きょうだいのうちの年長者は親子関係の中で教育的な振る舞いを覚え、年少者は年長者をモデリングすることで振る舞いを学習していく時期であることが明らかにされている(McHale, Updegraff, Helms-Erikson, & Crouter, 2001)。そのため、行動特徴として、年長者が年少者を褒めたり、教えたりする教育的な行動が多く(Minnett, Vandell, & Santrock, 1983; Brody, Stoneman, MacKinnon, & MacKinnon, 1985)、養護的・保護的なきょうだい関係が見られる。一方で、磯崎(2007)によると、思春期前までのきょうだい関係は、思春期以降のきょうだい関係と比較して、きょうだい喧嘩が多く存在するとされる。そして、きょうだい喧嘩や葛藤を通じて、きょうだいは会話のスキル、交渉、説得、問題解決技術を身に付けていくことが指摘されている(Brown, Donelan-McCall, & Dunn, 1996; Dunn, 2007)。つまり、就学前から思春期頃までのきょうだいは、身近な同世代の他者として、養護的・保護的なかわりを通して社会スキルの学習がなされる一方で、きょうだいのかわりが密であることから、喧嘩も生じやすい時期であることが考えられる。Brown & Dunn(1992)は、幼児期や学童期のきょうだい間の相互作用は、子どもの言語発達や社会性の発達を促進する働きを持つと述べており、喧嘩も含めたきょうだい間の密なかかわりによって、互いの心理社会的発達の成長が促されていることがうかがえる。加えて、親和的なきょうだい関係であることは、親友との良好な関係も増加させることが指摘されており(McCoy, Brody, & Stoneman, 1994)、親和的なきょうだいは、社会的なスキルが

高いことが推察される。つまり、きょうだい喧嘩等があっても、肯定的なきょうだい関係を築いていく中で、子どもの言語性や社会性は促進されていると考えることができる。以上のように、就学前から思春期頃までのきょうだいは、養護的・保護的なかわりやきょうだいとの喧嘩を通じて、互いに言語性や社会性を学習しており、心理社会的発達が促されるという意味において、重要性を持っていることがわかる。

さらに、思春期・青年期になると、きょうだい関係は次第に対等になり対立は少なくなっていく(Buhrmester & Furman, 1990)。そのため、養護的・保護的なきょうだい関係による心理社会的発達の促進に関する研究はあまり見られなくなる。むしろこの時期には、きょうだい関係と青年の精神的健康や社会適応との関連が多くの研究で指摘されている。例えば、きょうだい関係が悪いことで、薬物使用、性的に危険な行動、反社会的行動のリスクが増加すること(Bullock, Bank, & Burraston, 2002; East & Khoo, 2005; Richmond, Stocker, & Rienks, 2005)、抑うつ症状が増加すること(Kim *et al.*, 2007)が指摘されている。また、Bullock *et al.*(2002)は、きょうだい間の批判的な感情表現は、現時点あるいは将来的な、年少者の反社会的行動、薬物使用、逸脱した仲間とのかかわり、犯罪率の増加、早熟な性行動と関連があることを見出している。つまり、否定的なきょうだい関係は青年の精神的健康を悪化させたり、問題行動につながることを示している。反対に、良好なきょうだい関係は、抑うつ症状の低下、自尊心の高まり、人生満足度の増加と関連が見られている(Richmond *et al.*, 2005; Oliva & Arranz, 2005; Kim *et al.*, 2007)。加えて、青年期のきょうだい関係においては、同胞は社会や学校生活についてアドバイスをするサポート源となったり、家族内の問題と一緒に取り組むサポート源となり、家族ストレスの緩衝材となることも指摘されている(Tucker, Barber, & Eccles, 1997; Caya & Liem, 1998; Tucker,

McHale, & Crouter, 2001)。Tucker *et al.*(1997; 2001)は一連の研究から、年少者は、年長者から社会生活のアドバイスやサポートを受けたり、興味や目標について影響を受けており、年少者は、年長者を社会や学校生活のような家族外の問題についてのサポート源と見なしていることを示している。対して家族の問題については、年長・年少にかかわらず、お互いをサポート源と見なしていることが明らかにされた。この結果から、青年期においては、家族外の問題については、年長者は年少者よりも先に経験をしてきた者として年少者にとってのサポート源と見なされるが、家族内の問題については、対等に取り組むことができる存在としてお互いを認識していることがわかる。また Caya & Liem(1998)は大学生を対象に調査を行い、家族内の葛藤度が高くてもきょうだいからのサポートのある青年は、葛藤度が高い1人っ子の青年やきょうだいからのサポートが得られない青年よりも、青年の適応状態が良いことを示している。また、葛藤度の低い家族の場合には、きょうだいのサポートと適応状態との関連は見られなかったことを示している。この結果から、葛藤的な家族の青年にとっては、同胞の存在はストレスの緩衝剤になると考えられる。以上のように、思春期・青年期のきょうだい関係は、青年の精神的健康、問題行動等に影響し、青年の社会生活において支えとなる存在だといえる。特に、家族内の問題については、青年期のきょうだいは互いにサポート源になりうることから、家族内のストレスが増す青年期において、重要なストレスの緩衝剤になると推察される。

そして成人期以降は、子どもが原家族から心理的・経済的に自立し、きょうだいは互いに自分の家族を持ち始めるようになる。そのため、青年期を過ぎて中年期頃まで、きょうだい間の接触は減少し、中年期以降に一定の接触が見られるようになる(White, 2001)。Parsons(1943)は、同心円からなる家族の結びつきを示した親族モデルにおいて、きょうだいは幼児期には愛

着を要求する内側の円の一員と見なされるが、大人になると内側の円には子どもや配偶者や親が入り、きょうだいは外側へ押し出され次第に愛着を要求しなくなると説明している。子どもや配偶者とのかかわりが中心になってくるため、成人期以降のきょうだいは、互いに情緒的な結びつきや、きょうだいとしての義務感を動機として、意識的にきょうだい関係の維持がなされている(Lee, Mancini, & Maxwell, 1990; Myers, 2011)。また、成人期以降は、自らの意志によって選択的な接触が可能となるため、対立的な関係は影を潜め、親密さを中心としたきょうだい関係が多く見られるようになる(Stewart, Kozak, Tingley, Goddard, Blake, & Cassel, 2001; Scharf, Shulman, & Avigad-Spitz, 2005)。親密なきょうだいでは、きょうだいはサポート源となり、不足した母親、父親、友人からのサポートを補足する働きがあることが指摘されている(Milevsky, 2005)。また、White(2001)や吉原(2006)によると、高齢期において、きょうだいは重要な情緒的サポート源となることが指摘されている。加えて、Riggio(2000)は、成人期におけるきょうだい関係の良好さが人生満足度や幸福感を増加させることを指摘している。つまり、成人期以降のきょうだいは、情緒的な結びつきによって関係が維持されていることから親和的でサポートティブな関係であり、母親、父親、友人からのサポートの不足を情緒的・道具的に満たし、人生の充足感を高める存在であることが考えられる。一方で、互いに接触する機会がなくなり無関心になるきょうだい関係も見られる(Stewart *et al.*, 2001)。松山(1988)は、家族問題に対し、老親ときょうだいが一体となって積極的に克服していくようなまとまりのあるきょうだい関係もある一方で、巣立ち前から葛藤が目立ち孤立したきょうだい関係や、一見まとまりがあるように見えるが実は様々な家族問題を巡って対立しながらも付き合わなければならない妥協なきょうだい関係も存在しており、後者のようなきょうだい関係で

ある場合には各時期において様々な問題が噴出することを指摘している。

以上のように各年齢段階のきょうだいを概観すると、常にきょうだいは互いに影響し合っていることがうかがえる。幼児期から思春期に入るまでの原家族の中で一緒に過ごすことで、言語性や社会性の発達が促される。青年期には、きょうだい関係が良好な場合には、きょうだいの存在は、自身の精神的健康や社会適応に肯定的な影響をもたらす。さらに、成人期以降、親や友人からのサポートを充足し、人生の満足感を高める存在となる。つまり、きょうだい関係は、原家族を共有する同性代の人間として、生涯に渡って心理的に影響し合ったり、支え合ったりする関係であるといえる。また、夫婦関係や親子関係ほどの直接的なかわりはないとしても、血縁関係として付き合いを続けなくてはならない関係でもあると言い換えることもできる。葛藤的なきょうだいにとっては、成人後においても親の介護や葬儀、財産分与の際等、血縁関係の者として回避することのできない葛藤場面に直面することもあるだろう。夫婦関係や親子関係の研究と比べてきょうだい関係への関心は低いですが、生涯に渡って様々な影響を与え合いながら続いていく関係であることから、夫婦関係や親子関係と同じように、きょうだい関係も焦点をあてるべき重要な関係である。

また、先行研究の概観を通じて、家族ライフサイクルの中でも最も困難な時期である青年期(渡辺, 1996)において、きょうだいは対等な関係になっていき、互いを家族内のサポート源と見なすようになり、同胞からのサポートは家族ストレスを和らげることがわかった。また、きょうだい関係は青年の精神的健康や社会適応に作用することが明らかにされていた。したがって、青年期きょうだい関係は、青年の精神的健康や社会適応を支える重要な関係といえるだろう。そこで、次項では、思春期から青年期のきょうだい関係に特に着目し、整理する。

第 2 項 思春期・青年期のきょうだい関係とその関連要因

思春期・青年期のきょうだい関係は、幼児期のきょうだい関係から質的な変化が生じることが指摘されている。思春期・青年期までは、第 1 子から第 2 子に対する養護的・保護的なかかわりが中心になっており、きょうだい間には上下関係がある (Brody *et al.*, 1985; Furman & Buhrmester, 1985)。また、対立的なきょうだい関係も目立っていた (磯崎, 2007)。しかしながら、3 年生 (平均年齢 8.4 歳)、6 年生 (11.4 歳)、9 年生 (14.4 歳)、12 年生 (17.5 歳) の学生に対してきょうだい関係に関する横断的調査を行った Buhrmester & Furman (1990) によると、4 学年に渡って徐々にきょうだい間の葛藤度は低くなり中立的な関係が多く見られるようになることが示された。このことから、思春期にかけて、次第にきょうだい関係は平等的になり、対立的な激しさが弱くなっていくことを指摘している。また、縦断的にきょうだい間の親密さの変化を調べた Buist, Deković, Meeus, & Aken (2002) および Kim, McHale, Wayne Osgood, & Crouter (2006) によると、次のことが明らかにされた。まず、男きょうだいの場合には、11 歳から 12, 13 歳頃まで親密さが高く、13 歳頃に一度親密さは低下するが、14 歳から再び親密さが増していくことが示された。異性きょうだいの場合には、11 歳時点の親密さが最も低く、その後増加と減少を繰り返しながら親密さが増していくことが示された。そして、女きょうだいの場合には、他のきょうだいペアに比べて常に親密さが高く、増減は見られず一定の高い親密さが保たれていることが示された。きょうだいの性別構成によって、きょうだい間の親密さの変化にやや違いは見られるものの、主に、思春期に入る頃である 11 歳から 13 歳に一度親密さは低くなるが、その後、親密さは増加する傾向があることがわかる。

また、高校生、大学生になるにつれ、さらにきょうだい間の対立は減少し、親密さが増していくことが指摘されている。

Stocker, Lanthier, & Furman(1997)は 383 人の大学生(対象者の平均年齢 19.95 歳, 同胞の平均年齢 22.7 歳)を対象に質問紙調査を行ったところ, きょうだい関係の因子として, 「温情(Warmth)」, 「対立(Rival)」, 「葛藤(Conflict)」が見出された。そして, 上記の因子を用いてきょうだい関係について検討したところ, 大学生から大学院生にあたる青年期の子どもによって報告された葛藤や対立の程度は, 中学生から高校生にあたる思春期の子どもによって報告された葛藤や対立の程度よりも低いことが示された(Scharf *et al.*, 2005)。また, Scharf *et al.*(2005)によると, 青年期の子どもは思春期の子どもほど, 同胞と一緒に過ごす時間や一緒にする活動は見られなくなるが, 思春期の子どもよりも同胞と感情のやり取りが増え, 同胞に対して親密な気持ちを抱いており, きょうだい関係について成熟した認知をしていることが示されている。さらに, Reese-Weber(2000)は, 高校生と大学生を対象に葛藤場面における対処方法を調査し, きょうだい間の攻撃行動は大学生よりも高校生のきょうだいに有意に多く見られ, 譲歩的解決方略は高校生よりも大学生のきょうだいに有意に多く見られることを示している。つまり, 中学生から高校生, 高校生から大学生へときょうだい成長していくにつれて, きょうだい間の攻撃が減少し, 互いを思いやる行動が増していくなどの親和的なかわりかかわりが中心になっていくことがうかがえる。

上述したようなきょうだい関係の変化が生じる背景として, 個人の心理的発達や友人関係の重要性の増加, 親子関係の変化が存在することが示唆されている(McHale, Crouter, McGuire, & Updegraff, 1995; Updegraff, McHale, & Crouter, 2002; Kim *et al.*, 2006)。

思春期・青年期にかけて, 青年は親からの心理的な自立という課題の達成が求められる。その中で, 青年は次第に家族外の世界に目を向けるようになり, 同性の仲間や異性との交友に関

心を持つようになっていく。尾形(2006, p.101)は、親からの心理的自立を果たす上では友人の役割が大きく、青年期の友人は、青年が直面する悩みや不安といった多くの負の側面を緩和させ、青年の正の側面を際立たせていくという重要な役割を持っていると述べている。つまり、子どもの心理的成長に伴い、親やきょうだいといった家族とのかかわりよりも、家族外の友人とのかかわりを重視するようになってくることが考えられる。実際に、青年期においては、感情的な親しさはきょうだいよりも友人関係において見られるようになることが指摘されており(Updegraff *et al.*, 2002)、青年がきょうだいよりも友人を身近に感じ、必要としていることがうかがえる。また McHale *et al.*(1995)は、きょうだいのうちの思春期の年長者よりも、学童期の年少者の方が親の養育態度を敏感に感じ取り、きょうだい関係に影響していることを指摘しており、思春期に入ることによって青年の興味が親の養育から家族外のかかわりに移っていることを示唆している。Kim *et al.*(2006)は、自分のことに没頭することで、同胞と張り合ったり競うことが少なくなり、また家族外の世界に興味が増していくことで家族から離れて過ごす時間が増していくために、同胞に主張したり喧嘩をする機会が減ると述べている。こうして、きょうだいは思春期・青年期になるにつれ、きょうだいとの量的なかかわりが減少し、代わりに、かかわりの中心は友人関係に移っていくことで、きょうだい関係の葛藤や対立が目立たなくなることが考えられる。

加えて、思春期・青年期にかけて子どもの心理的変化に伴い、親子関係の変化が生じる。前述したように、青年の家族は、家族ライフサイクルの中で「青年期の子どもを持つ家族の時期」にあたる(Carter & McGoldrick, 1980)。Carter & McGoldrick(1989)によると、青年期の子どもを持つ家族の時期は、家族は青年の独立を進めるために、家族の境界を柔軟にするよう心理的移行を求められる時期にあたり、親子関係の再編

が必要になる。小学生から大学院生までの親子関係を調査した落合・佐藤(1996)によると、青年期にかけて、親子関係は次第に対等になっていくことが指摘されている。また、心理的には、親を配慮する気持ちが生まれ、親子の心理的距離が近くなることが指摘されている(宮下, 1996)。落合・佐藤(1996)や宮下(1996)の指摘から、思春期・青年期にかけて、親子関係は対等な関係へと再編されていき、子どもがひとりの大人として扱われていくことがうかがえる。そのような親子関係の変化の中で、きょうだい関係も対等になっていく等の変化が生じることが考えられる。Kim *et al.*(2006)は、200家族(最初の時点で第1子11.82歳, 第2子9.22歳)に対して4年間に渡る縦断調査を行ったところ、母親の支持的態度の増加に伴ってきょうだい関係の親密さも増加し、父子間の葛藤の増減に伴い、4年間に渡ってきょうだい葛藤にも増減が見られたことを指摘している。つまり、親子間の支持や葛藤の移り変わりや連動してきょうだい関係にも変化が生じていることが示されている。

以上のように、青年期にかけてのきょうだい関係の変化の背景には、きょうだいの成長とともに、きょうだい間の接触の量の減少や親子関係の変動があると考えられる。ただし、青年期になるにつれて、同胞との感情のやり取りが増え、同胞に対して親密な気持ちを抱くようになることや(Scharf *et al.*, 2005)、譲歩的解決方略が増していく(Reese-Weber, 2000)という指摘を踏まえると、接触が減少し単にきょうだい疎遠になっていくのではないことがわかる。つまり、接触が減少していく中で、きょうだが適度な距離を保つことが可能になり喧嘩や対立といった否定的な出来事が生じにくくなることで、同胞に対して親和的な感情を持ちやすくなることや、少ないかかわりの中で関係を維持しようとするために親和的なかかわりが増していくことが推察される。すなわち、接触する量が少なくなる分、かかわりの質を重視していることが考えられる。青年にとって、き

ようだいのかかわりの質が重視されているために、きょうだい関係が精神的健康や社会適応に影響を与えるなどの影響があり、また、同胞からのサポートが有効に機能すると考えられる。加えて、親子関係の変化に伴いきょうだい関係の変化が生じていると考えられることから、きょうだいをとり巻く様々な要因を踏まえながら、青年期のきょうだい関係がどのように規定されているのかについて理解する必要があるだろう。よって、次項では、きょうだい関係を規定する要因について整理していく。

第3項 きょうだい関係を規定する要因とは

きょうだい関係には、「温情・親密さ」、「相対的な地位・勢力」、「葛藤」、「競争」(Furman & Buhrmester, 1985)、「分離」、「信頼」、「親和」、「養護」、「対立」、「畏敬」(森下・山口, 1992)、「保護・依存」、「対立」、「共存」、「分離」(飯野, 1994)、「温情」、「対立」、「葛藤」(Stocker, Lanthier, & Furman, 1997)等の多様な関係が見出されてきた。これまでの研究において、多様なきょうだい関係は様々な要因によって規定されることが明らかにされてきた。

まず多く着目されてきたのは、きょうだいの属性である。例えば、きょうだい間の年齢差に着目した研究では、きょうだい間の年齢差が大きいほど、きょうだい関係は親密になり葛藤が少なくなることが指摘されている(Buhrmester & Furman, 1990; Stocker, Lanthier, & Furman, 1997)。きょうだいの性別構成に着目したものであれば、同性きょうだいの方が、異性きょうだいよりも、攻撃性や支配関係が見られることが指摘されている(Minnett *et al.*, 1983)。また、学童期の同性2人きょうだいに対して観察法による調査を行った Stoneman & Brody(1993)によると、同胞の活動レベルが高い場合にきょうだい関係は否定的・葛藤的な関係になり、きょうだいの活動レベルに類似性が見られる場合にきょうだい関係は肯定的・親和

的になることが示されている。また、年少者の適応性が低い場合、きょうだい間の力関係が最大になり、年長者が活動的で、年少者が非適応的である場合にきょうだい間の葛藤は最大になることが指摘されている。このように、属性だけではなく、属性と気質の組み合わせから、きょうだい関係の特定の側面が影響を受けていることを示す研究も存在する。

さらに、きょうだい関係は、きょうだいをとり巻く周囲の環境からも様々な影響を受けている。例えば、家族をとり巻く社会文化的要因が異なることで、両親の養育態度に違いが見られ、それによってきょうだいの持つ価値観、きょうだいの感じる公平性、きょうだいの抑うつ感、きょうだい関係に違いが見られることが指摘されている (McHale, Updegraff, Shanahan, Crouter, & Killoren, 2005; McHale, Crouter, Kim, Burton, Davis, Dotterer, & Swanson, 2006; McHale, Whiteman, Kim, & Crouter, 2007)。また、家庭環境という意味では、MacKinnon(1989)が就学前から学童期の2人きょうだいを持つ母子家庭に対して観察法と質問紙による調査を行ったところ、離婚しており第1子が男の子のきょうだいは、離婚していない第1子が男の子のきょうだいよりも、きょうだい間に反抗的、否定的なかかわりが見られることが示された。この結果から、きょうだいが否定的なかかわりをするか、肯定的なかかわりをするかは家族の状態によるところが大きいことが指摘されている。さらに、Deater - Deckard & Dunn(2002)が就学前から学童期のきょうだいを持つ家族に対して質問紙と聞き取りによる調査を行ったところ、シングルマザーの家庭で、きょうだい間の否定的(葛藤、敵対的)なかかわりが多く見られることが明らかにされ、きょうだい間の敵対は、家族の形態によって緩和されることが示唆されている。その他、社会経済状況の視点から、家族の収入の低さや、両親の教育歴の低さと、葛藤的・対立的なきょうだい関係と関連があることも指摘されている (Tucker

et al., 2001; Eriksen & Jensen, 2006)。どのような社会文化的背景を持ち、どのような環境の家庭で育つかによっても、きょうだい関係は異なってくるのがわかる。

一方で、きょうだい 2 人に対する母親の異なる養育態度、子どもの気質、年少者の年齢はきょうだい関係を説明するが、家族構成(養子縁組の状況、きょうだいの年齢差や性別の組み合わせ)はきょうだい関係を説明するのにあまり重要な変数ではないことを指摘する立場も存在する(Stocker, Dunn, & Plomin, 1989)。Jenkins, Rasbash, & O'Connor(2003)は、学童期までのきょうだいを持つ 3762 家族に対して質問紙調査を実施し、2 人親の家庭と一人親の家庭の養育態度を調査した。その結果、1 人親の家庭のきょうだいだけではなく、夫婦関係に不満感のある家族のきょうだいも高いレベルの否定的な養育態度を受けていることが示された。したがって、家族形態にかかわらず、子どもがどのように家族の相互作用を経験しているのかという要因に着目することが重要であると考えられる。そこで次項からは、家族とのどのような相互作用の中できょうだい関係が規定されているのかについて、母子関係・父子関係の養育態度との関連、夫婦関係・親子関係との関連から述べる。

第 4 項 養育態度ときょうだい関係

家族関係との関連では、母親の養育態度、父親の養育態度によってきょうだい関係がどのように規定されるのかについて、多くの研究がなされてきた。

まず、母親の養育態度に多くの研究が着目した。それらによると、きょうだい間の葛藤は、母子間の高い葛藤度や統制的な養育態度、不安定な母子間の愛着と関連がみられることが示されている(Brody, Stoneman, & McCoy, 1992a; Erel, Margolin, & John, 1998; Dunn, Deater-Deckard, Pickering, Golding, & the ALSPAC Study Team, 1999)。Dunn *et al.*(1999)は、学齢

期のきょうだいを持つ家族に対して4年間に渡る縦断調査を行い、葛藤的な母子関係は、親和的なきょうだい関係を減少させ、敵対的なきょうだい関係を増加させることを指摘している。反対に、母親の支持的、肯定的な養育態度によって、きょうだい間の親密さは高まることが明らかにされている(Stocker, Ahmed, & Stall, 1997; Kim *et al.*, 2006)。また Kramer, Perozynski, & Chung(1999)は、幼児期のきょうだい喧嘩に対する母親の葛藤解決方略を観察し、きょうだい間の喧嘩に対して親が介入をしない葛藤解決方略をとる場合、その後に対立的なきょうだい関係が有意に多く見られることを明らかにしている。このことから、幼いきょうだいに対しては、母親の喧嘩への介入の仕方によってきょうだい関係が異なってくるのがわかる。つまり、普段のきょうだいに対する母親のかかわり方や、葛藤時における母親のかかわり方によって、葛藤的、敵対的なきょうだい関係や親和的なきょうだい関係が見られることが指摘されてきた。

また、母親の養育態度だけではなく、次第に父親の養育態度の重要性にも着目されるようになり、母親・父親の養育態度との関連が検討された。Volling & Belsky(1992)は、幼児期の2人きょうだいを持つ母親・父親に対して3年間に6回に渡る縦断調査を行い、きょうだい間の葛藤と攻撃性は、3年目時点の母子間の葛藤レベル、2年目時点の統制的な母親の養育態度、1年目時点の不安定な母子間の愛着と関連があることを示した。また、促進的で愛情のある父親の養育態度は、より向社会的なきょうだい関係を促しており、父親の養育の重要性が示唆されている。学童期の同性2人きょうだいに対して観察法と質問紙を用いて5年間の縦断調査(調査開始時点・1年後・4年後の3回の調査を実施)を行った Brody, Stoneman, & McCoy(1994a)においても、最初の時点の肯定的な父子関係は、1年後の肯定的なきょうだい関係や、4年後の肯定的な子どもの行動と正の

関連があることが示された。

母親・父親の養育態度によって、きょうだい関係が影響を受けることから、きょうだいに対する直接的な養育態度だけではなく、きょうだい間における両親の養育態度の差にも着目されてきた。それらによると、きょうだいそれぞれが平等に扱われているという認識は、子どもが感じる幸福感や、親和的なきょうだい関係、低いきょうだい間の葛藤と関連があることが示されている(Stocker *et al.*, 1989; Brody, Stoneman, McCoy, & Forehand, 1992 ; McHale, Updegraff, Jackson - Newsom, Tucker, & Crouter, 2000)。しかし、McHale *et al.*(2000)によると、きょうだいがすべての養育態度において差を感じているのではなく、親の暖かさ・親の関与・家事の分担の各領域によって、きょうだいが認知する親の養育態度の差の程度には違いあることが指摘されている。つまり、あらゆる養育態度が平等である必要があるわけではなく、差を感じやすいものとそうではないものがあると考えられる。したがって、養育態度の差は親視点から客観的に判断するのではなく、子ども自身が親の養育態度を主観的にどのように捉えているのかという点を重視する必要がある。

また、養育態度の差の要因としては、子どもの特性が関連することが指摘されている。Brody, Stoneman, & McCoy(1992b)は、きょうだいに対する異なる養育態度が、きょうだいのネガティブな情動性の違いに関連するのかを検討している。98家族(父・母・2人きょうだいで年長者は6歳から11歳、年少者は4歳から9歳)に対してインタビュー調査ときょうだいに対する両親の養育態度を観察した。その結果、年少者の方が年長きょうだいよりもネガティブな情動性をより示すと親が感じている場合、親の養育態度には差が生じることが示された。つまり、きょうだいのネガティブな情動性は、続くきょうだいに対する親の養育態度に差を生じさせることが示唆されている。この結

果から、親は一方的にきょうだいに対して養育態度に差異を作っているのではなく、子どもの特性や状態に合わせて差異を作っており、親の養育態度は子どもとの相互作用の中で作られていくことが考えられる。

また、きょうだい間における親の養育態度の差は、子どもの特性だけではなく、夫婦関係との関連も指摘されている。Deal(1996)は、養育態度の差の要因として夫婦関係に着目し、幼児期のきょうだいを持つ家族の両親に対して5年間に渡る観察調査と自己報告式の調査を行い、夫婦関係ときょうだいへの養育態度の差について検討した。その結果、夫婦間葛藤は、両親間でのきょうだいに対する異なる養育態度につながり、両親が相互に尊敬しあう肯定的なコミュニケーションがとれていると、両親間できょうだいに対する養育態度の差は少なくなることが明らかにされた。学童期の2人きょうだいを持つ家族の両親に対して質問紙調査を行った McHale *et al.*(1995)においても、子どもに対する両親間での異なる愛情の差は、夫婦間でのストレスと関連があることが指摘されている。つまり、夫婦間に葛藤があることで、母親と父親との間で子どもに対するかかわり方が異なり、きょうだい間においても養育態度の差が生じることが考えられる。

以上のことから、母親・父親の養育態度ときょうだい関係は関連しているといえるが、特にきょうだいがどのように親の養育態度を感じ取っているのかに着目する必要があることがわかる。また、養育態度は独立して存在するのではなく、子どもの特性や夫婦関係の状態等、家族成員の相互作用の中で形成されることがわかる。養育態度のみを取り出し、きょうだい関係との直線的な因果関係を述べることはできない。したがって次項では、家族成員の相互作用に着目し、夫婦関係・親子関係とどのように関連しながらきょうだい関係が規定されているのかについて述べていく。

第5項 夫婦関係・親子関係・きょうだい関係の関連

かねてより夫婦関係は子どもの問題行動，社会適応，抑うつ等 (Grych & Fincham, 1990; Davies & Cummings, 1994; Amato & Afifi, 2006) に影響を与えることが明らかにされており，子どもにとって重要な要因であることが主張されてきた。また，夫婦関係と親子関係も関連することが多くの研究によって明らかにされてきた。例えば，夫婦関係満足度の低さや葛藤的な夫婦関係は，否定的で愛情の少ない養育行動や，葛藤的な親子関係と関連することが指摘されている(例えば，Erel & Burman, 1995; Fauchier & Margolin, 2004)。さらに前項でも述べたように，夫婦間の葛藤や夫婦間のストレスが，きょうだいに対する養育態度の差として生じることが明らかにされている(例えば，McHale *et al.*, 1995; Deal, 1996)。このことから，夫婦関係の不和や葛藤があることで，子どもに対する親のかかわり方や子どもに対する愛情に何らかの影響が生じることがうかがえる。加えて前項でも述べたように，きょうだい関係は親子関係と関連があることが示されてきた(例えば，Volling & Belsky, 1992; Brody *et al.*, 1994a; Dunn *et al.*, 1999)。ゆえに，夫婦関係，親子関係，きょうだい関係がそれぞれ関連し合っていることが考えられる。

Stocker, Ahmed, & Stall(1997)は，学童期のきょうだいを持つ母親の感情表出に着目し，夫婦関係・母子関係・きょうだい関係の関連を検討した。その結果，きょうだい間の敵意は夫婦関係満足度，夫婦間の情緒的な感情表現と負の相関が見られた。加えて，母子間のネガティブな感情表現も，夫婦関係満足度，夫婦間の情緒的な感情表現と負の相関が見られた。同時に，きょうだい間の敵意は母子間のネガティブな感情表現と正の相関があり，きょうだい間の親しさは母子間のポジティブな感情表現と正の関連があることが示された。これらの結果から，Stocker, Ahmed, & Stall(1997)は，母親の養育における結婚へ

の不満足感情の表出を通じて、夫婦関係がきょうだい間の敵対や対立関係に影響していることを指摘している。また、親子関係を媒介して夫婦関係が間接的にきょうだい関係へと伝達されている間接モデルを提案している。Stocker, Ahmed, & Stall(1997)が指摘したような間接モデルは、他の実証研究からも支持されている。例えば Brody, Stoneman, & McCoy(1994b)は、6歳から11歳の年長者と4歳から7歳の年少者のいる71家族に対して4年間の縦断調査を行ったところ、夫婦間における葛藤の少なさは親子間における否定的なかかわりを減らし、きょうだいの肯定的な行動を高めることを示している。

一方で、夫婦関係が直接的に子どもに影響を与えているという直接モデルを支持する研究も存在する(O'Brien, Margolin, John, & Krueger, 1991; Emery, Fincham, & Cummings, 1992; Fincham, Grych, & Osborne, 1994)。例えば、身体的な攻撃が生じている夫婦間葛藤を経験している子どもは、夫婦間の葛藤に対して妨害行動を起こしたり注意をそらす行動が見られるが、葛藤度の低い夫婦の子どもでは、夫婦間葛藤に対して楽天的で、どのように夫婦間に葛藤が生じていくのかについてはっきりした考えを持っていることが明らかにされている(O'Brien *et al.*, 1991)。O'Brien *et al.*(1991)はこの結果から、夫婦間葛藤の経験は、子どもの家族への適応方法に影響を与えていることを指摘している。このように、夫婦間葛藤にさらされることによる子どもへの直接的な影響が指摘されてきた。そこで Erel *et al.*(1998)は、間接モデル・直接モデルの検証を行うために73組の同性きょうだい(3歳6か月から8歳6か月)とその母親に対して観察法と質問紙を実施し、夫婦関係・母子関係・きょうだい関係の関連の検討を行った。その結果、夫婦間の葛藤と、きょうだいのうちの年長者から年少者に対する否定的な相互作用との関連は、母親から子どもへの支配的な態度によって伝達されていることが示された。したがって、きょうだいの肯定的なコ

コミュニケーションは，夫婦の肯定的なコミュニケーションとは関係ないが，否定的な夫婦のコミュニケーションは母子関係によって媒介されきょうだい関係へ伝達されるメカニズムが存在することが示唆された。また，異なる年齢を対象とした調査結果(例えば，Brody *et al.*, 1994b)からも同様の結果が得られていることから，間接モデルは発達段階に限らず，家族の相互作用を理解するために利用可能であると考えられる。以上より，夫婦関係，母子関係，きょうだい関係の間には，否定的な関係がスピルオーバーしていることが考えられる。McHale, Updegraff, & Whiteman(2012)は，きょうだい関係と家族関係について検討した研究をレビューした上で，間接モデルと直接モデルのどちらを支持する結果が得られるかは，用いた変数によって異なるものであり，基本的には間接モデルの見方から理解することができると述べている。

夫婦関係・母子関係・きょうだい関係の関連が検討されたものが多く見られるが，母子関係よりも父子関係の方が夫婦関係の影響を受けやすいという指摘も存在する(Kerig, Cowan, & Cowan, 1993; Osborne & Fincham, 1996)。そこで Stocker & Youngblade(1999)は，夫婦関係，母子関係・父子関係，きょうだい関係の関連を検討するために，7歳から10歳の2人きょうだいのいる家族に対して調査を行った。その結果，母親の敵対的な養育態度を媒介して，夫婦間葛藤がきょうだい間の分離的・葛藤的な関係を高め，また，父親の敵対的な養育態度を媒介して，夫婦間葛藤がきょうだい間の葛藤的，対立的な関係を高めることが示された。また，夫婦関係との相関係数は，母子関係と父子関係との間に大きな差は見られなかったが，母子関係，父子関係と関連するきょうだい関係にはやや違いが見られたのは，夫婦間葛藤に対する父母間の認識の違いが関連していると示唆している。父母間にやや違いは見られるものの，Stocker & Youngblade(1999)の結果からも，夫婦関係から母子

関係・父子関係，母子関係・父子関係からきょうだい関係へ否定的な関係がスピルオーバーすることで，きょうだいの否定的な関係形成に至ることが考えられる。さらに近年，各関係には双方向の関連があることが指摘されている。Yu & Gamble(2008)は幼児期のきょうだいを持つ家族の母親 130 人に調査を実施したところ，夫婦関係が母子関係に直接影響を与えており，スピルオーバー仮説が支持されることを示している。また，きょうだい関係と親子関係は双方向の影響過程があることが見出された。そのため，夫婦関係が母子関係を介してきょうだい関係に影響を与えていると同時に，きょうだい関係が親子関係に影響を与えていることも明らかにされた。したがって，家族システム論が述べるような相互影響過程の中できょうだい関係は形成されていることが示唆されている。

以上のように，きょうだい関係は家族とのシステミックな相互作用の中で規定されているといえる。特に，夫婦関係，親子関係，きょうだい関係の否定的な関係がスピルオーバーすることで規定されていることがわかる。しかし，概観したように，先行研究の多くは幼児期や学童期のきょうだいを対象としたものがほとんどであり，青年期のきょうだい関係と家族関係との関連について，あまり明らかにされていないことがわかる。だが，思春期・青年期においても，夫婦間の葛藤は親子関係を通じて子どもの精神的健康や適応に影響を及ぼすことが指摘されており(例えば，Amato, 1986; Fauber, Forehand, Thomas, & Wierson, 1990)，青年期においても，子どもが家族成員間の相互影響過程の中に置かれていることがわかる。したがって，青年期のきょうだい関係も，幼児期や学童期きょうだい関係のように，家族成員の相互影響過程の中で規定されているといえるだろう。

また，実証研究において，否定的な夫婦関係が親子関係を介してきょうだい関係に伝達されることが明らかにされている一

方で、臨床場面においては、問題のある家族で、きょうだい結託している場合もあることが指摘されている（例えば、Bryant, 1987）。つまり、夫婦間や親子間の仲が悪い場合に、補償的にきょうだい仲が良い場合が見られることも考えられる。各関係のスピルオーバーが支持されている中で、この点についてどのように考えればよいのだろうか。

上記の点については、各関係の影響過程を捉えるのではなく、家族を包括的に捉える見方をすることが必要であると考えられる。家族関係に関する理論体系を示しものに Minuchin のモデルがある (Minuchin, 1974, 山根 (監訳), 1984)。次節では、Minuchin の理論モデルを提示し、どのように包括的に家族を捉えるのかについて整理する。

第 3 節 親役割への着目と役割理論

夫婦、親子、きょうだいの各構造からなる家族システムモデルを提示したのは Minuchin (1974, 山根 (監訳), 1984) である。Minuchin (1974, 山根 (監訳), 1984, p.63) は、家族は「相互交流パターンを通じて作用する 1 つのシステム」であり、さらに世代、性、関心、機能からなるサブシステムを通してその機能を遂行していると述べている。そして、「家族が健康的に機能するには、全体システムの統合と、その部分の機能的自立性とを守らなければならない」ことを指摘している (Minuchin, 1974, 山根 (監訳), 1984, p.166)。例えば、きょうだいサブシステムであれば、子どもに協力や競争の仕方や仲間と上手くやっていく方法を学習する機会を与えるという機能を有しているため、両親が過度に助力したり干渉することなく、子どものきょうだい間での成長の機会を尊重することが求められると指摘している (Minuchin, 1974, 山根 (監訳), 1984, p.p.168-169)。つまり、両親ときょうだいとの間に適度な境界が存在することが、きょうだい間での健康的な相互作用を促すといえる。しかし、境界が

曖昧になった家族，つまり絡み合った関係(enmeshment)では，家族システムの分化は曖昧になり，「ある成員の行動は直ちに他の成員に影響し，またある成員のストレスは境界を越えて強く反響し，またたく間に他のサブシステムに及ぶ」。反対に，過度に硬直した境界の家族，つまり乖離した関係(disengagement)では，「サブシステム間のコミュニケーションは困難となり」，「反応が必要な時にも反応がない傾向」があるため，「家族の保護機能が阻害される」。Minuchin(1974，山根(監訳)，1984，p.p.65-68)は，自身の臨床経験に基づき，両極端に絡み合っているあるいは乖離した関係の家族は，家族問題を引き起こすことを指摘している。例えば，絡み合った関係であるゴードウン家の家族に対するケースにおいては，他のきょうだいに対して親代わりとなっている子どもと，問題行動を呈する子どもが登場する。この家族においては，母子関係が絡み合い親子サブシステムやきょうだいサブシステムとしての本来の機能が阻害され，家族全体としてもストレスの多い機能不全状態となっていることがうかがえる。そのため，Minuchin(1974；山根(監訳)，1984)は，母親から親代わりとなっている子どもを分離させ，家族の境界の再構造化を図ることを試みている。つまり，世代間境界が曖昧な家族においては，きょうだい間のサブシステムが機能しておらず，子どもが親サブシステムに巻き込まれているという特徴が見られる。

Minuchin(1974，山根(監訳)，1984)が示したような，世代間境界が曖昧になり，子どもが親サブシステムに巻き込まれ，家族内に問題が生じているという事例は，Namysłowska & Siewierska(2010)等からも報告されている。

第 1 項 親サブシステムに巻き込まれる子ども

家族療法の分野において，子どもが親サブシステムに巻き込まれることに着目した研究はかねてより行なわれてきた。子ど

もが親サブシステムに巻き込まれているという状態は、「役割逆転(role reversal)」、「親役割(parentification)」、「配偶者役割(spousification)」等様々な表現が用いられてきた。「役割逆転(Role reversal)」は、「親が子どもからの関与や注意を要求し、必然的結果として、身体的・精神的ケアに子どもを巻き込むことになること」と定義されている(McCall, 1983)。同様に、「親役割(parentification)」は、「特別な家族における親を除き、一般に文化的に与えられた大人が負うべき責任の部分を、子どもや青年が任され、責任を負っているような家族内の相互作用パターン」と定義されている(Boszormenyi-Nagy & Spark, 1973; Mika, Bergner, & Baum, 1987)。また、子どもが親のパートナーのようになっているという意味で「配偶者役割(spousification)」(例えば, Sroufe & Ward, 1980)と表現される場合もある。その他、「曖昧な境界(boundary dissolution)」という表現を用いられることもある(例えば, Sroufe, Jacobvitz, Mangelsdorf, DeAngelo, & Ward, 1985; Rowa, Kerig, & Geller, 2001)。このように、様々な表現が用いられているが、これらの概念はほぼ同様の意味で用いられている。子どもが、きょうだいの世話をしたり、家事をしたり、親に対するアドバイザーになったりすることを含んでおり、子どもが親に代わって責任を負い、家族のニーズを満たす存在となっていることを意味している。

Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は、世代間の境界を越えた親のような子どもは、親と子どもの役割が逆転し、家族の中で発達上、不適切なほどの責任を負っていると述べている。そして、子どもに親の力を割り当てることは、子どもの助けが必要とされる場を家族内で自然に手配していると指摘している。そのような家族では、“親のような子ども”が責任や能力を伸ばしていくため、家族としてよく機能するかもしれない、とも述べられている。また Boszormenyi-Nagy & Spark(1973)はその

ような状態を，親のような役割を割り当てられた状態 (parentified) と表現をしており，1人または複数の子どもが家族システムの中で親の役割を満たすように期待されている状態だと見なしている。そして，家族に対する配慮や忠誠から生じる，子どもの責任や養育行動は，家族からサポートされ，認められ，子どものニーズが親によって満たされ続けている場合，親役割 (parentification) は適応的であるといえることを指摘している (Boszormenyi-Nagy & Spark, 1973)。つまり，子どもが親のような役割を担うことは，当面の家族システムを維持するためには適応的な役割であるといえる。

だが，Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は，子どもや青年が燃え尽きたり，子どもの発達に見合わないほど多くの責任を負わされたりしている場合，子どもが親のような役割を担うことは潜在的に危険性を含んでいることを指摘している。特に病理的な家族構造では，子どもが親のパートナーのようになり配偶者役割 (spousification) をとるようになることが指摘されている (Sroufe & Ward, 1980)。また，Boszormenyi-Nagy & Spark(1973)や Bowen(1978)によると，幼少期に子どもが親に巻き込まれる経験は，思春期に友人を持つことの恐れとなったり，自分が子どもを持った時に同じように子どもを巻き込むような親子関係を形成したりする等，続く発達段階に否定的な影響を及ぼすことが指摘されている。その後の研究によって，病理的な親役割 (parentification) の概念は整理され，子どもにとってリスクファクターとなることが明らかにされている。

中でも，Jurkovicの研究グループは，親役割 (parentification) の概念を整理し，親役割 (parentification) が孕む問題を明らかにしてきた (Sessions & Jurkovic, 1986; Jurkovic, 1997; Jurkovic, 1998; Jurkovic & Thirkield, 1998; Jurkovic, Morrell, & Thirkield, 1999; Jurkovic, Thirkield, & Morrell, 2001)。

まず、親役割 (parentification) を測定する尺度として、Sessions & Jurkovic(1986)および Jurkovic *et al.*(1999)によって、情緒的親役割代行、道具的親役割代行、不公平感からなる自記式質問紙である親役割測定尺度 (parentification questioniar: PQ)が開発、発展させられた。そして、親役割測定尺度 (PQ)を用いて子どもの精神的健康等との関連について検討されていく中で、親役割を担う子どもは親に対して絶望や恨む気持ちを抱いており、このような気持ちから恥や罪の意識を感じやすく、不安や自己卑下の感情が増加することが明らかにされた (Jurkovic, 1997)。また、Wells & Jones(2000)も、子ども時代に親役割を担うことはその後の恥の気持ちにつながることを示し、Jurkovic(1997)の結果を支持している。さらに、親役割を担う子どもは、達成した成功を自分の実力によるものと考えない傾向があること (Castro, Jones, & Mirsalimi, 2004)、身体症状、抑うつ、不安、苦痛と弱～中程度の相関があること (Hooper, Marotta, & Lanthier, 2008; Hooper & Wallace, 2010)が他の研究者からも示されている。病理的な親役割 (parentification)は、現時点、さらに将来的な子どもの精神的健康に負の影響を与えるリスクファクターであることが多くの研究から指摘されてきた。

また Jurkovic(1998)および Jurkovic, Jasse, & Goglia(1991)は、離婚や夫婦間葛藤によって“破壊的な”家族の形態が生じることで、子どもの親役割 (parentification)のリスクが高まることを指摘している。続く Jurkovic *et al.*(2001)は、1人親の子どもの方が親役割 (parentification)のリスクが高いことを指摘しており、親の物理的不在状況が、子どもが親役割を担う環境を作り出しやすいと述べている。また大学生に調査を行った Chase, Demming, & Wells(1998)によると、アルコール依存の親を持つ子どもは、そうでない家庭の子どもよりも親役割を担っていることが示されている。同様に Carroll &

Robinson(2000)も、アルコール依存や仕事依存の親を持つ子どもは、抑うつ感が高まったり、親役割を担いやすくなるといった問題を有していることを示している。つまり、親の物理的あるいは心理的不在によって親役割(parentification)のリスクが高まることが明らかにされてきたといえる。さらに、Peris, Goeke-Morey, Cummings, & Emery(2008)は、思春期の子どもに自己報告式の調査を実施したところ、子どもが担う親役割(parentification)の程度は、夫婦間葛藤、恐怖感、親子間の優しさが低いことと関連が見られた。また、親役割を担う子どもは両親の葛藤に介入しようとする傾向が見られた。このことから、親役割(parentification)は、両親が夫・妻あるいは父親・母親の役割を果たしていない場合に、家族システムを維持しようとすることで見られるようになることが考えられる。

Chase(1999)は、親の物理的・心理的不在によって親役割を担っている子どもの心理状態について、子どもは自立したいという気持ちを抱えながらも、親の要求を満たさなくてはならない葛藤的な状況に陥るため、親役割を担う子どもは、不安や期待を満たさなくてはならないという心配を抱え続けることになる」と指摘している。つまり、子どもが親役割を担うことは家族を維持するためには必要とされるものではあるが、その役割が固定し長期に渡る場合には、子どもの自立を阻害し精神的健康に負の影響を与えることが考えられる。

親役割(parentification)とほぼ同様の意味合いで用いられている「役割逆転(Role reversal)」、「配偶者役割(spousification)」、「曖昧な境界(boundary dissolution)」においても、青年の自律性や個性化等の心理的発達に阻害されることや、世代間連鎖が生じることが指摘されている(Kerig, 2005; Shaffer & Sroufe, 2005)。

一方で、親役割(parentification)の適応的な側面についても検討されている。Walsh, Shulman, Bar-On, & Tsur(2006)は、

15歳から18歳の70人の移民青年に調査を行い、非移民青年との比較を行なった。その結果、移民青年は、非移民青年よりも、配偶者の役割を多くとっていることが見られた。またその役割は、両親と良い関係をとるために行われており、ストレスフルな出来事に対する肯定的なコーピングとして行なわれていた。さらに、123人の移民青年に対して、親役割(parentification)の出現と家族風土について調べたところ、適度な凝集性の家族では、親役割をとること、配偶者の役割をとること、同胞に対して親のように振る舞うこと、道具的に親の役割をとることすべてが、非構造的で葛藤的な家族や統制的な家族よりも、有意に多く見られた。これらの結果から、ストレス状況下で青年が親役割を担うことは、青年にとって発達上、適応的な行動であると指摘している。加えて、適度な凝集性を持つ家族において、青年の親役割(parentification)がより多く見られたことから、最適な青年の発達は、高い家族の結びつきと、年齢に適した自律性を許す家族の雰囲気が必要であることを示唆している。また、Herer & Mayseless(2000)は縦断研究において、14歳から18歳の非臨床群の青年に調査を行い、長く続く親役割(parentification)は破壊的であるかもしれないが、離婚等によって一時的に家族形態が変化した場合に見られる親役割(parentification)は適応的であることを示している。また、非臨床群の青年は、家族と距離があると感じたり、彼らのニーズが満たされない場合、親と親密さを保ったりコンタクトをとるための機能的・適応的な手段として、親役割を担っていた(Herer & Mayseless, 2000)。

以上のことから、家族システムを維持するためには、子どもが親役割⁴を担うことは必要である一方で、子どもの発達に見合

⁴ 「Parentification」に対する的確な邦訳が現段階ではなされていないため、以降、本研究では「親役割」という表現を用いていくことを注記する。本研究で用いる「親役割」の意味は、Parentificationの先

わないほど過度に親役割を担ったり，長期に渡り固定的に親役割を担うと，子どもの精神的健康や心理的発達に否定的な影響が生じると考えることができる。つまり，適度な凝集性を持つような機能的な家族では，適応的な行動として子どもが親のような役割をとるが，家族関係が硬直したような非機能的な家族においては，子どもが過度で固定的に親のような役割を担っていると解釈することができる。したがって，家族の状態を捉えるにあたり，子ども達がどのように親役割を担っているのかを捉えることが，鍵になると考えられる。また，きょうだい関係は家族関係から影響を受けていることから，子ども達，つまりきょうだいの役割の担い方は，きょうだい関係にも影響を及ぼすものであると考える。

第 2 項 役割理論とは

役割とは，文脈によって様々な用いられ方がされている。例えば，“部長”や“書記”というように，公的に割り当てられた社会的地位を役割と見なす場合や，「あの人は，クラスの中で盛り上げ役だ」というように，集団の中で暗黙裡に求められている機能を意味する場合もある。また，「学校の果たす役割」，「医者への役割は，患者を治療することである」というように，文化的に定められた規範を指す場合もある。さらに，日常会話の中では，「この食材には代謝をあげる役割がある」というように，“機能”とほぼ同義の意味で用いられることもある。

上子(1979)は Neiman & Hughes(1951)によって体系化された役割理論，および Gross, Mason, & McEachern(1958)によっ

行研究で用いられている意味と同じように，子どもが家族システムを維持するために，親に代わって責任を負い家族のニーズを満たす存在となっているという意味で用いる。本論文で用いる「親役割」は，従来から用いられている，親自身が親として遂行する役割行動を意味する「親役割」(例えば，谷井・上地，1993；数井・無藤・園田，1996)とは意味が異なるものであることに留意が必要である。

て体系化された役割理論を概観し、役割の定義を行っている。上子(1979, p.p.30-31)によると、Neiman & Hughes(1951)は役割の定義を①パーソナリティ発達の力動に関連させた定義(発達過程の中で獲得していくべき社会的行動パターンや文化によって決定された行動パターンを役割と見なすもの)、②社会全体と関連させた機能的定義(行動と同義のものや、社会規範の意味で用いているもの)、③特定集団と関連させた機能的定義(社会的地位と同義のもの、集団の一員として特定の状況において果たす行動を指すもの)の3つに分類している。また、上子(1979, p.p.32-34)によると、Gross *et al.*(1958)は、役割概念を、①規範的文化パターン(ある地位にある人の行動基準になるもの)、②個人が自己および他者の社会的位置と関連させて、自分の状況に下す定義(所属する集団からの要求や期待を鑑み、その状況的に適切だと思われる社会行動のパターンを指すもの)、③行動と定義するもの(ある社会的位置にある人の行動そのものや、他者との相互作用の中で生じる行動、その行動による機能を指すもの)の3つに分類している。Neiman & Hughes(1951)および Gross *et al.*(1958)の役割概念の分類は分類基準の不明瞭さや、あらゆる役割定義を完全に説明するものではないが、上子(1979, p.36)は役割概念を規定する基礎的な要素を見出している。それは、「<社会的配置>(social location)において、<期待>との関連において<行動>する」ということである。さらに、期待との関連による行動パターンによって、社会、集団内で機能を有することも踏まえた上で、役割を定義している。上子(1979, p.40)によると、役割とは「社会システムに対する機能的意味の視点において、したがって社会的配置との関連において、把握された行為や性質のパターン」であると定義されている。つまり、ある社会的な配置である人が、要求された規範的行動パターンをとることで、社会システムの中で機能を果たすものであるといえる。また、役割は単独で成り立つものではなく、主体と客体の

存在する対人間において成り立つものだともいえる。

そのため、実証研究の中では、対人システムや集団システムにおける役割の機能について検討がなされてきた。次項では、心理学における役割に関する実証研究を概観することで、対人関係の中で生じる役割期待と役割行動によって、どのような心理過程が生じているのかを述べていく。

第 3 項 役割期待と役割行動による機能

役割期待の機能を示した実証研究として最初に挙げることができるのは、Haney, Banks, & Zimbardo(1973)によって行われた実験である。この研究は監獄における対人関係のダイナミクスを検証するために行われたものであったが、役割期待が果たす機能を十分に示している。この実験では 24 名の男子大学生を、半分は看守の役割、もう半分は囚人の役割にランダムに割り振った上で、監獄環境での生活を実験的に送らせた。その結果、1 週間もたたないうちに、看守役の者は囚人に対して支配的で攻撃的に振る舞うようになり、対して囚人役の者は受動的、依存的になり、抑うつや無気力感を呈することが示された。この実験結果から、Bronfenbrenner(1981, 磯貝・福富(監訳), 1996, p.100)は、役割を割り当てられることで、役割を与えられた人は、「その役割を占める人やその人と関係のある他者の行動にふさわしいという期待に対応した知覚、活動、対人関係のパターンが引き起こされる」という仮説を導き出している。他者から役割期待をされることで、人はその役割期待に対して自身の行動を調節し適合させていることが考えられる。また青木(1993)は、大学生に対して身近な他者に対する対話の内容を調査したところ、発話者は、相手に抱く役割期待に応じて対話の内容を選択していることを指摘している。このことから、身近な他者と発話者との間で暗黙裡のうちに役割期待が存在しており、その役割期待に合わせて話の内容が選択されていることを

示唆している。つまり、役割期待をすること・されることによって、コミュニケーションが拘束され、対人関係にルールが与えられると考えられる。

また、倉本・大坊(2010)は、役割期待をされることでどのような心理過程が生じるのかを検討するために、「教師が学習成果について学生に評価的なフィードバックを与える」場面を実験的に作成し、教師役の協力者に対して実験的に役割期待を与えた実験群と、役割期待を与えていない統制群との間で、学生に対する評価的なフィードバック(役割行動)後に感じる心理状態について比較検討を行った。その結果、役割期待がある群は役割行動後に自己信頼因子が高まることが示された。この結果から、役割期待をされることで自分自身が他者からの承認を得られると感じ、自分の行動や自己に対する信頼感が高まることを示唆している。つまり、役割期待をすることは、対人関係においてルールを与えるだけではなく、役割期待をされた人の行動や自己に対する信頼感を高め、役割期待と役割行動の一貫性を高めることが考えられる。また、赤澤(2006)が大学生のカップルを対象に実施した調査においては、男性においては結婚の可能性が男性役割行動を高めることが指摘されている。このことから、特に持続的な関係だと認識される対人関係において、役割期待に沿った役割行動をする傾向があることが考えられる。

さらに、役割期待と役割行動との関連にも着目がされている。下斗米(2000)は、大学生の男女 317 人に対して、友人関係における役割期待度とその遂行度について調査を行った。その結果、親密さの段階によって友人に対して期待する役割は異なっていた。また、顔見知り程度の親密さでは、役割期待と役割行動のズレの大きさによって友人関係の満足感に有意な差は見られなかったが、親密さが増し友達段階になると、役割期待と役割行動のズレの大きさによって、満足感に有意な差が見られた。また、大学卒業後の友人関係の調査を行った新美・松尾・永田

(2004)によると、友人関係の年数とともに、友人に対する「類似性」や「共行動」の役割期待は減少していくことが示されている。このことから、友人関係の段階によって、相手に求める役割期待は異なり、関係性を反映しながら役割期待がなされ、役割期待に対する役割行動がなされていることが考えられる。これらの結果から、役割期待に対して役割遂行をすることは関係を維持するために必要であることがうかがえる。また、親密さの深まりにより関係が持続的なものへと発展していくにつれ、役割期待の拘束力は高まるため、役割期待と役割遂行との間のギャップは葛藤として認識されやすいことが考えられる。つまり、役割期待に対して役割遂行をすることは、対人関係におけるルールに従っていることだといえる。

また、黒川・吉田(2006)は小学校高学年における仲間集団内での役割期待と役割遂行について調査した。それによると、対象者と集団の他の成員が共通に重要だと認識している役割の場合には、他成員から自分に対する役割期待が高いほど、自分から他成員に対する役割遂行も促され、自分の集団内における地位が高まることが示されている。また、男子では、自分と他成員との間で役割の重要性について共通認識が高いほど、女子では、自分と他成員との間で役割の重要性について共通認識が高く、他成員からの役割期待と他成員に対する自分の役割遂行が高いほど、仲間集団との関係満足度が高くなることが示されている。この結果から、2者の対人システムだけではなく、3者以上からなる集団システムにおいても役割期待はルールとなり、それを遂行することで仲間集団との関係維持がなされていることがうかがえる。

以上の実証研究の結果を踏まえると、役割期待をすること・されることによって、対人関係において個人の行動が拘束され、対人間にルールが生じ、そのルールの下で役割行動をとることによって関係の形成・維持がなされるといえる。これは、上子

(1979, p.40)の「役割とは社会システムに対する機能的意味の視点において、したがって社会的配置との関連において、把握された行為や性質のパタン」であるという定義にも合致している。役割期待と役割行動に着目することによって対人間で生じるコミュニケーションのパタンを捉えることができることから、本論文では、役割は相互作用を捉える概念として考えることとする。

第 4 節 きょうだい研究の課題

ここまでで述べてきたように、きょうだい関係は文化的要因、社会経済的状況、出生順位、性別、年齢差、家族構成、家族との相互作用等の、様々な要因によって規定されている。その中のどの要因を用いて検討を行うかによって、得られる結果は異なってくる。例えば、Buhrmester(1992)は同性のきょうだいは、異性きょうだいよりも、肯定的な関係が多く見られると報告しているが、Cole & Kerns(2001)が行った調査では、姉妹においてしか、この傾向は支持されなかった。また、大学生を対象に調査を行った Stocker, Lanthier, & Furman(1997)は、異性きょうだいは同性きょうだいよりも葛藤が少ないと報告している。挙げた 3 つの研究の知見が異なる要因としては、調査対象者の出生順位等の要因を加味していないことが考えられる。例えば、第 1 子は、第 2 子よりも、親密さが少なく否定的にきょうだい関係を認知しているというように(Stewart, Verbrugge, & Beilfuss, 1998)、出生順位によってきょうだい関係の認知が異なっていることが指摘されている。一方で、第 1 子は、第 2 子よりもきょうだい関係をより温かいと捉えていることを報告する研究もあり(Dunn, Slomkowski, & Beardsall, 1994)、出生順位によるきょうだい関係の認知についても一致した知見が得られていない。この知見の不一致もまた、きょうだいの性別等の要因を考慮していないために、異なる知見となったことが考え

られる。このように、きょうだい関係の研究においては、どの要因を用いるかによって結果が異なり、ある要因を除外することによって、結果の不一致が生じていると考えられる。きょうだいの性別構成や出生順位の要因以外にも、きょうだい間の年齢差に着目した研究では、きょうだい間の年齢差が大きいほど、きょうだい関係は親密で葛藤が少なくなることが指摘されている (Buhrmester & Furman, 1990; Stocker, Lanthier, & Furman, 1997)。さらに、子どもの性別やきょうだいの性別構成によって、親子間のコミュニケーションが異なり、きょうだい関係が異なってくることも指摘されている (Cortner, Abramovitch, & Pepler, 1983; Noller, Feeney, Peterson, & Sheehan, 1995)。

このように、きょうだい研究を行うにあたって考慮すべき要因は非常に多く、どの要因を取捨選択するかによって、無数の組み合わせと結果が生じるといえる。白佐(2004)は、このような煩雑性のために、きょうだい関係研究自体が非常に困難になっていることを指摘している。きょうだい関係研究において、どの要因をどのように用いて検討を行うのかはかねてより課題とされてきた。

Hoffman(1991)は行動遺伝学と発達心理学の研究をレビューし、きょうだい関係研究から得られる知見は、用いられた変数や方法等の制限があるために知見が一致しにくいものの、結果が過剰に述べられている恐れがあることを主張している。むしろ出生順位、年齢差、性別によって、きょうだいが主観的にどのように家族の経験をしているのかを重視する必要性を指摘している。このように、子どもの属性を要因とするのではなく、子ども自身が認知している主観的な経験を要因として重視する立場は、近年多くの研究で見られるようになってきた。

事実、きょうだいは、半分は同様の遺伝子を持ち同じ家庭で育っていながらも、発達過程においてきょうだい間には大きな

違いが見られる。遺伝的要素を共有し、同じ家族内で生活していても、成長過程の中できょうだい間で見られる関連は、認知態度は相関係数.40 から.50 程度、性格は相関係数.15 から.25 程度である (Rowe & Plomin, 1981; McCall, 1983; Scarr & McCartney, 1983)。また、Daniels & Plomin(1985)は 396 の思春期と青年期のきょうだい(平均年齢 18.1 歳)に対して自己報告式の調査を実施したところ、きょうだい間の相互作用、同胞の性格においてきょうだい間での認知に大きな差があることを示している。このことから、遺伝的要因もわずかに影響はあるが、環境要因が大きいことを示唆している。同様に Dunn & Plomin(1991)も、このようなきょうだい間の違いは遺伝学だけでは説明できず、むしろ、きょうだいが共有していない家庭内の相互作用の影響が大きいと述べている。そして、きょうだいそれぞれが経験する家族との相互作用の違いが結果として、その後の異なる発達過程へと結びつく指摘する。つまり、遺伝的要因以上に、きょうだいそれぞれが、家族内の相互作用をどのように経験しているのかは大きな要因であるといえる。このことから、きょうだいそれぞれが、どのように家族との相互作用を経験しているのかを重視する必要があるといえる。

例えば、親の養育態度についても、子どもがどのような発達過程にいるかによって、どのように経験しているのかは異なることが指摘されている。McHale *et al.*(1995)は、学童期の 2 人きょうだいを持つ家族に対してインタビューによる調査を行ったところ、年少者の方が年長者よりも、きょうだい間で両親の養育態度に違いがあることを敏感に感じ取っていることが示された。このことについて、McHale *et al.*(1995)は、出生順位による要因だけではなく、子どもの発達段階による違いがあることを指摘している。つまり、年長者は思春期に入りつつあり、家族よりも外の世界に目が向きつつあるが、年少者はまだ家族関係が重要な部分を占めているために、親の養育態度の差によ

り敏感であるのではないかと考察している。このことから、子どもが置かれている発達段階によって、経験する家族関係には違いが見られることが考えられる。

さらに、きょうだいそれぞれが家族関係をどのように経験しているかについて検討したものでは、きょうだいそれぞれが経験する家族関係の程度は異なっており、それによって、きょうだいが呈する症状にも違いが生じることが明らかにされている。**Richmond & Stocker(2003)**は、10歳から12歳の2人きょうだいに対して自己報告式の質問紙調査を実施したところ、きょうだい間でも、経験している夫婦間葛藤の程度には大きな違いが見られた。実際に子どもが経験した夫婦間葛藤の程度と、子どもの抑うつ気分、外在化した問題行動とは関連が見られ、きょうだい間で比較した場合、より夫婦間葛藤を経験している子どもは、夫婦間葛藤の経験が少ない子どもよりも、より適応上の問題が見られることが示されている。さらに、**Richmond & Stocker(2008)**が学童期(8歳から10歳)と思春期(14歳から16歳)の時点で行った質問紙調査においても、より母親からの敵対的な育児を受けていると認知している子どもは、きょうだいのそうでない子どもよりも、外在化した問題行動が多くなることが示されている。これらのことから、子ども自身がどのように親子関係や夫婦関係を経験しているのかによって内在化した問題や外在化した問題に違いが見られてくるといえる。つまり、本人の視点から、本人がどのように家族関係を経験しているのかに主眼を置いて検討する必要が求められる。

以上より、どのような属性であるかを要因とするのではなく、その属性であることや、ある発達段階にあることで、どのように家族関係を経験しているのかを、本人の視点から捉えることが必要である。

しかし、従来のきょうだい関係研究においては、学童期までのきょうだいを対象にしている場合が多い。そのため、本人に

よる回答が困難であるため、両親あるいは母親に回答を求めている場合が多い(例えば, MacKinnon, 1989; McHale *et al.*, 1995)。しかし, きょうだい間の葛藤は親が報告した親子関係よりも, 子ども自身が報告した親子関係が説明することが指摘されている(Noller *et al.*, 1995)。あるいは, 観察法によってきょうだい関係を捉えているため(例えば, Brody *et al.*, 1992; Erel *et al.*, 1998), 子ども自身がどのように感じているかは不明である。だが, ここまで述べてきたように, 家族の相互作用を本人が主観的にどのように経験しているのかによってきょうだい関係は規定されると考えられる。したがって, 属性に主眼を置くのではなく, かつ本人の視点から, 子どもが家族とのどのような相互作用パターンを通じてきょうだい関係が規定されているかを捉える必要がある。

第 2 章

本論の目的と実証研究の構成

第 1 節 本研究の目的

生涯に渡って持続する関係であるきょうだい関係は、様々な心理社会的な影響を及ぼすものである。例えば、言語性や社会性の促進、精神的健康や社会適応の向上、情緒的サポート源となり人生満足感の向上につながるということが明らかにされてきた(例えば、Brown & Dunn, 1992; Riggio, 2000; Bullock *et al.*, 2002 Kim *et al.*, 2007)。家族との同居率の低下や一世帯当たりの子どもの数の減少、未婚率の上昇している近年、人生において頼れる存在としてのきょうだいの重要性は増してきているといえるだろう。

生涯の中で、青年期は家族や友人関係のストレスが増加する時期といえる(渡辺, 1996; 若島ら, 2010; Usami *et al.*, 2011)。青年期において、きょうだいはお互いを家族の問題に対するサポート源と見なすようになり、葛藤度の高い家族においては同胞からのサポートは家族ストレスを和らげることが指摘されており(Tucker *et al.*, 1997; Caya & Liem, 1998; Tucker *et al.*, 2001)、ストレスが高まる青年期の子どもの精神的健康や社会適応を支える存在になりうるということが考えられる。一方で、きょうだい関係の悪化は青年の問題行動や抑うつにも影響を与える(Bullock *et al.*, 2002; East & Khoo, 2005; Richmond *et al.*, 2005; Kim *et al.*, 2007)。したがって、青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにし、肯定的な青年期きょうだいを促進することは、青年の精神的健康や社会適応の支えとなるだろう。

先行研究を概観したところ、きょうだい関係のメカニズムについては、きょうだい関係は文化的要因、社会経済的状況、出生順位、性別、年齢差、家族構成等の属性、家族との相互作用等の要因によって規定されていることが明らかにされてきた。特に、これらの要因の中でも、子ども自身がどのように家族関係を経験しているのかが、子どもの精神的健康やき

ようだい関係の規定にとっては重要になってくることが示されている (Hoffman, 1991; Richmond & Stocker, 2003; Richmond & Stocker, 2008)。つまり，子ども自身がどのように家族と相互作用しているかを受けて，きょうだいとのかかわりも形成されてくることが考えられる。よって，どのようにきょうだい関係が規定されているのかを明らかにするためには，本人の視点から家族との相互作用を捉える必要があるだろう。

だが，それにもかかわらず，従来のきょうだい関係と家族関係について検討した研究では，本人以外の視点からきょうだい関係のメカニズムについて検討されたものが多く見られる。なぜなら，従来の研究においては，幼児期や学童期等の幼い子どもを持つ家族を対象にしている場合が多いため，養育態度については親にたずねたり，親自身が親子関係の評価を行ったり，また観察法によってきょうだい関係を観察しているためである。加えて，青年期のきょうだい関係と家族関係との関連には，あまり関心が寄せられていない。それゆえ，青年期，特に青年期後期になるほど，親和的なきょうだい関係や葛藤的なきょうだい関係が，どのような家族とのかかわりの中で形成されているのかは明らかにされていない。以上のことから，本論文では，青年自身の視点から，家族関係との関連から青年期のきょうだい関係について検討を行う。加えて，従来の研究は，各関係との関連を検討したものであるため，スピルオーバーあるいは補償仮説の一方が主張され，研究知見が一致しない場合もみられている。そのため，本論文では，各関係の関連に着目するのではなく，家族をひとまとまりのシステムとして捉えて検討を行うこととする。

また，これまできょうだい関係のメカニズムを検討するにあたり，どの属性を取捨選択するかによって結果が異なり，一貫した知見が得られにくいという問題があった。そのため，

煩雑な多くの属性を回避して一貫した知見を積み上げていく方法についても、本論文を通じて提案を行う。本論文では、青年期きょうだい関係の規定を検討するための鍵概念を示し、その概念を用いることによって、青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにしていくこととする。

以上を踏まえ、はじめに、探索的に、青年期の家族関係ときょうだい関係との関連について検討する。その上で、きょうだい関係研究を行う上で課題となる煩雑さを回避する方法について述べ、青年が担っている家族内での役割に着目することの提案を行う。次に、きょうだいそれぞれの家族内での役割に着目することで、青年期きょうだい関係の規定について検討を行う。これらを通じて、きょうだい関係を捉えるための新しい視点を用い、青年期のきょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにする。

この目的の検討をするために、次節以降では、第1章で指摘した青年期きょうだい関係の特徴およびきょうだい関係を規定するメカニズム、きょうだい関係研究の諸問題をまとめ、それらを克服する提案と実証研究を行う意義について示していく。

第2節 青年期きょうだい関係の基礎研究

第1章において、各段階におけるきょうだい関係の特徴について先行研究の概観を行った結果、青年期には、同胞からのサポートがある場合には、ない場合よりも青年の適応が促されることが示されており(Caya & Liem, 1998)、青年の社会適応にとってきょうだいが支えとなることが示された。また、きょうだい関係は青年の精神的健康に影響を与えやすく、青年の自尊心や問題行動との関連が指摘されている(Bullock *et al.*, 2002; East & Khoo, 2005; Oliva & Arranz, 2005)。つまり、肯定的な青年期きょうだい関係の形成が、青年の精神的

健康や社会適応のために求められるだろう。したがって、きょうだい関係の規定に関する検討が求められる。

これまで、きょうだい関係を規定するメカニズムについては属性、社会・経済的要因、家族の形態、養育態度、親子関係・夫婦関係から検討が行われてきた。その中でも、きょうだい関係と家族関係との関連については、多く検討がなされてきた。先行研究を概観したところ、幼児期や学童期のきょうだいを持つ家族を対象とした研究において、きょうだい関係は、親の養育態度から直接的な影響を受けており、母親の否定的な養育態度、あるいは父親の否定的な養育態度が葛藤的なきょうだい関係に影響していることが指摘されている。さらに、Stocker, Ahmed, & Stall(1997)によると、親子関係は、夫婦関係の影響を受けており、否定的な夫婦関係が親子関係に伝達されることで、きょうだい関係が規定されているという間接モデルが示されている。加えて、近年では、きょうだい関係と親子関係が双方向に関連し合っていることも指摘されている(Yu & Gamble, 2008)。このことから、きょうだい関係は夫婦関係・親子関係を含めた家族成員との相互作用の中で規定されていると考えることができる。ただし、前述した知見は幼児期や学童期のきょうだいを対象として行われた研究がほとんどであり、青年期の家族関係ときょうだい関係との関連については十分な検討が行われているとはいえない。つまり、青年期きょうだいの親和的、対立的、葛藤的等の関係と家族関係との関連や、また、どのように青年が家族関係を経験することで、各関係が規定されているのかについては明らかにされていない。そこで、第3章および第4章において、家族関係と青年期のきょうだい関係との関連について探索的に検討を行うこととする(【研究Ⅰ】【研究Ⅱ】)。

また、きょうだい間においても夫婦関係の認知や夫婦関係から受ける影響が異なること、きょうだい間の葛藤は親が報

告した親子関係よりも、子ども自身が報告した親子関係が説明することが指摘されている(Noller *et al.*, 1995; Richmond & Stocker, 2003; Richmond & Stocker, 2008)。したがって、誰の視点から家族関係を捉えるかという点は重要である。先行研究を概観したところ、幼少期・学童期のきょうだい関係と思春期・青年期のきょうだい関係との比較や、青年期にかけてのきょうだい関係の変化やそれに伴う家族関係の変化が指摘されているものの、親の視点や観察法等の本人以外の視点から捉えられている研究も多く存在する。視点が異なることで関係の認知が違ってくることから、他の発達段階と比較し青年期のきょうだい関係の特徴を論じるにあたっては、本人がどのように捉えていたかに配慮する必要があるだろう。したがって、第3章では、本人の視点から、きょうだい関係の発達的变化について検討し、青年期きょうだい関係の特徴について検討を行う(【研究I】)。

さらに、母子関係・父子関係、夫婦関係ときょうだい関係という、各関係ときょうだい関係との関連に着目するだけでは、スピルオーバーあるいは補償仮説であるということが議論されるにとどまっており、一致しない知見となっている(例えば、Fincham *et al.*, 1994; Stocker, Ahmed, & Stall, 1997)。そのため、家族の諸関係それぞれの関連を検討するのではなく、ひとまとまりのシステムとして家族を捉え、その中でどのような相互作用がなされているか、という視点で捉える必要があるだろう。狐塚(2011)は、家族構造として家族を包括的に捉える手法を提案しており、家族構造によって家族内の相互作用が異なることを示唆している。つまり、きょうだい関係を捉える際においても、家族構造との関連に着目することで、家族の相互作用の中できょうだい関係がどのように規定されているかを示すことができると考える。したがって、第4章では、家族構造に着目し、どのような家族構造の中で、

どのようなきょうだい関係が見られるのかについて検討を行う(【研究Ⅱ】)。

加えて、青年期のきょうだい関係は主に高校生を中心に米国で行われてきた。しかし、我が国においては、近年青年の進学率の増加とともに、青年期の長期化が指摘されてきた。つまり、大学生の時期に、進路や将来についての選択を迫られ、高校の時よりも自分の生き方や意義について葛藤に直面することが増してきたといえるだろう。したがって、従来述べられてきた青年期の解釈を拡大し、大学生の時期も青年期と見なしていくことが必要になっている。例えば、大学生においても、進路選択に伴うストレスや、自分の性格や容姿に否定的であることでストレスを感じたり大学生活への不満から無気力感を抱く等の問題が生じていることが指摘されている(例えば、下村・木村, 1997; 戸田・牧野・菅原, 2002)。その中で、学校生活の適応の促進や、家族関係のストレス緩衝剤、コミュニケーションの意欲向上など、きょうだい関係が果たす役割は大きいことが指摘されている(Caya & Liem, 1998; Rocca & Martin, 1998)。きょうだいによるストレス緩衝作用や、社会生活のサポート源になるという利点を踏まえると(Tucker *et al.*, 1997; Caya & Liem, 1998; Tucker *et al.*, 2001), 今後さらに、大学生においてもきょうだい関係の重要性は増してくることが考えられる。しかしながら、現段階では大学生のきょうだい関係の規定について検討したものはほとんど見られていない。そこで本論では、特に大学生を対象に青年期のきょうだい関係と家族関係について検討を行う。

以上より、第3章においては、本人の視点から、生涯に渡るきょうだい関係の中で青年期のきょうだい関係がどのように位置付けられているのかについて検討を行う(【研究Ⅰ】)。そして第4章において、大学生を対象として、青年期の家族構造ときょうだい関係との関連について検討を行う(【研究

II])。

第 3 節 役割理論の援用

属性等の煩雑な変数を用いるのではなく，家族を一つのシステムとして捉え，その中でどのような相互作用がなされているかに着目することが必要である。ここでは，どのように家族システムでなされている相互作用を捉えるかについて示す。

第 1 項 鍵概念としての親役割

Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984, p.63)は，家族とは，「相互交流パターンを通じて作用する 1 つのシステムである」と述べている。家族システムはさらに，世代，性，関心，機能等によって形成されるサブシステムに分化しており，サブシステムを通してその機能を遂行する(Minuchin, 1974, 山根(監訳), 1984, p.65)。Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984, p.166)によると，家族が健康的に機能するには，全体システムの統合と，部分の機能的自立性とを守らなければならない。つまり，世代間に適度な境界が存在することが，きょうだいサブシステム内での健康的な相互作用を促すことになるといえる。しかし，境界が曖昧になった家族，つまり絡み合った関係(enmeshment)では，家族システムの分化は曖昧になり，子どもは親代わりの子どもとして親サブシステムに巻き込まれ，家族システムの意思決定をしたり親に配慮をする等，親あるいは配偶者としての機能を果たすようになると指摘されている。そのため，巻き込まれた子どもはきょうだいサブシステムからは外れ，きょうだい同士の相互作用の中で生まれる情緒的交流や社会性の発達，親和的な対人関係形成はなされなくなる。よって，きょうだいのうちの一部の子どもが親サブシステムに巻き込まれた状態は，家族システムにおける

世代間境界が曖昧になっている状態でもあるといえる。したがって、親役割に着目することは、家族の形態を理解するための助けになることが考えられる。

親役割を担う子どもについて研究したものからは、“破壊的な”家族関係に伴い子どもが親役割を担うことが指摘されている(Jurkovic *et al.*, 1991; Jurkovic, 1998)。一方で、親役割を担うことが一時的であれば、それは家族関係を調整するための適応的な役割となることも指摘されている(Herer & Mayseless, 2000; Walsh *et al.*, 2006)。つまり、親役割は、家族システムを維持するために出現し、家族関係の状態によって過度なものや固定的になることもあれば、適応的にもなると考えられる。

よって、家族の形態を捉えるにあたり、きょうだい親役割を担っている状態が鍵になると考えられる。また、きょうだい関係は家族全体の相互作用の中で規定されているといえることから、きょうだいがどのように親役割を担っているかは、きょうだい関係とも関連することが予想される。したがって、きょうだい親役割を担っている状態に着目することで、家族関係を反映して、きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにすることができると思う。

第 2 項 属性に代わる手法としての役割

第 1 章で述べたように、きょうだい関係はきょうだいの性別、年齢、出生順位、年齢差、きょうだい構成等のきょうだいの属性の組み合わせによって大きく異なってくる(例えば、Buhrmester, 1992; Stocker, Lanthier, & Furman, 1997; Cole & Kerns, 2001)。また、家族とのコミュニケーションは、性別やきょうだいの性別構成によって異なってくることが指摘されている(Noller *et al.*, 1995)。つまり、性別、出生順位、年齢差、きょうだいの性別構成等のきょうだいの属性によっ

て、家族関係をどのように認知し、きょうだい関係が規定されるかは、組み合わせ方によって多種多様な結果が生み出されるといえる。このように、性別、年齢等を考慮するのは夫婦関係・親子関係に関する研究でも同様のことである。しかし、きょうだい関係研究に関しては、自分の性別、年齢に加え、出生順位、同胞の性別、同胞の年齢、年齢差等、非常に多くの属性(変数)が考慮された上で検討がなされている。だが、白佐(2004)は、きょうだい関係には考慮すべき属性があまりにも多く、それによってきょうだい関係に関する知見の複雑さが増し、研究の発展が阻害されていることを指摘している。第1章でも述べたように、考慮すべき属性の組み合わせによって異なる結果が得られるために、一貫した知見も得られにくい。また、研究者によって考慮する属性は異なる。母親の養育態度、子どもの性格、年少者の年齢は、それぞれきょうだい関係を説明する変数であるが、家族構成(養子縁組の状況、きょうだいの年齢差や性別の組み合わせ)はきょうだい関係を説明するのにあまり重要な変数ではないことを指摘する研究も存在する(Stocker *et al.*, 1989)。以上のことから、きょうだい関係研究を行うにあたって、多くの煩雑な属性をどのように用いて研究を行っていくかが課題となっていた。

ここで提案したいのは、属性に変わる他の変数を用いることである。属性のうちのいくつかを組み合わせることも可能であるが、属性を他の視点から言い換えることも可能であると考えられる。例えば、第1子であることで、下の子に対して養護的な行動が多く見られること、女子は男子よりも養護的、教育的な行動が多く見られることが指摘されている(Brody *et al.*, 1985)。つまり、ある属性によりもたらされる特定の相互作用に着目すると、属性を役割と言い換えることが可能になるのではないかと考える。上子(1979, p.40)によると、役割とは、「社会システムに対する機能的意味の視

点において、したがって社会的配置との関連において、把握された行為や性質のパターン」であると定義されており、相互作用を捉える概念であると考えうる。先ほどの例を用いれば、ある属性(例えば、兄や姉)であることで、家族から年少者の面倒をみることを期待され、その期待を感じて年長者は年少者に対して養護的な行動パターンが見られるようになる、と解釈することができる。このように属性によりもたらされる相互作用に着目することで、どの属性をどのように組み合わせるかという煩雑な問題を回避し、数種類からなる家族との相互交流パターンからきょうだいを定めることができると考えられる。したがって、本論では、それぞれの属性を考慮するのではなく、青年が家族との間でどのような相互作用をしているか、つまり期待に対する行動パターン(役割)を担っているのか、という視点から捉えることとする。

第 3 項 家族システム論の観点から見た役割

しかしながら、役割に着目しただけでは(例えば、姉役割等と捉えるだけでは)、属性を用いた従来の研究と変わらない。上述してきたように、きょうだい関係は家族との相互作用の中で規定されているが、役割に着目しただけでは家族をシステムとして包括的に捉える視点が欠落してしまうことが懸念される。だが、役割理論を整理し、役割の持つ性質を用いることで、システム的に捉えることが可能である。

第 1 章で役割研究に関する先行研究の概観を行ったところ、Haney *et al.*(1973)の実験から、役割期待をされることで特定の行動パターンが引き起こされることや、役割期待に合わせて話の内容が選択されていることが示された(青木, 1993)。つまり、役割期待をすること・されることによって、コミュニケーションが拘束され、対人関係にルールが与えられる。また、役割期待をされた人は自分に対する信頼感を得ることで、役

割期待と役割行動の一貫性を高めることが考えられた(倉本・大坊, 2010)。特に, 持続的な関係だと認識される対人関係において, 役割期待に沿った役割行動がなされる傾向があることが示唆されている(赤澤, 2006)。

さらに, 役割期待に対して役割遂行をすることは関係を維持するために必要であり, 親密さの深まりにより関係が持続的なものへと発展していくにつれ, 役割期待と役割遂行との間のギャップは葛藤として認識されやすいことが示唆されている(下斗米, 2000; 新美ら, 2004)。つまり, 役割期待に対して役割遂行をすることは, 対人関係におけるルールに従っていると考えることができる。さらに, 2者の対人システムだけでなく, 3者以上の集団システムにおいても役割期待はルールとなり, それを遂行することで仲間集団との関係維持がなされていることが示唆されている(黒川・吉田, 2006)。

以上の実証研究の結果を踏まえると, 役割期待とは, 対人関係において個人の行動を拘束するルールとなり, そのルールの下で役割行動をとることによって関係の形成・維持がなされるものであると解釈することができる。

この考え方は, システム論の観点に立つことでより理解できる。システムの重要な特徴として, 自己制御性, つまりシステムの安定状態を維持しようとする性質がある(Hoffman, 1981, 亀口(訳), 1986)。役割期待に対して従うことはシステムを維持することといえ, 自己制御的なシステムの性質に基づく行動として捉えることができる。このように, 役割の期待と行動に着目することで, システミックな観点から家庭内における青年の役割を捉えることができるのではないかと考えられる。

第1項から第3項までに述べたことをまとめると, 役割を用いる利点として, 次の3点がいえる。まず, 1点目は, 青年がどのように親役割を担っているかに着目することで, 家

族システムの状態を捉えることができるということである。2点目は、属性によりもたらされる他の家族成員との相互作用に着目した場合、ある属性であることで、他者との間に一定の行動パターンが見て取れることから、属性は役割だと言い換えることができ、属性の煩雑さを回避することができるということである。そして、3点目は、役割期待と役割行動に着目することで、システムの性質を反映して、家族をシステムとして包括的に捉えることができるということである。以上の3点から、青年の親役割期待と親役割行動を捉えることによって、家族システム内において、どのようにきょうだい関係が規定されているのかを明らかにすることができると考えられる。したがって、本論文では、きょうだい担う役割に着目することで、青年期のきょうだい関係がどのように規定されているのかについて明らかにする。

第4節 役割尺度の作成

先行研究の概観を通じて親役割を捉える必要性が示唆されたものの、我が国において、「親役割」を測定する尺度は見当たらない。家族内での役割は、主に「母親役割」や「父親役割」といった両親の役割を問うものであったり、「女性役割」「男性役割」といったジェンダーに基づく性役割に着目がなされてきた(例えば、関井・斧出・松田・山根, 1991; 尾形・宮下・福田, 2005; 森下, 2006)。

また、青年期の子どもを持つ家族システムにおいては、親子関係の再編が進み(Carter & McGoldrick, 1989; 中釜, 2006)、親子が対等な関係に近づく(落合・佐藤, 1996)。したがって、青年期の子どもを持つ家族システムにとっては親役割期待および親役割行動が高まることが予想される。青年の発達上適した親役割であれば、適応的であるという指摘もある(Krieg, 2005; Shaffer & Sroufe, 2005; Walsh *et al.*, 2006)。したが

って、青年期の子どもが親役割をとることは適応的な側面もあるといえる。一方で、子どもの発達に見合わないほど過度に親役割を担ったり、長期に渡り親役割が固定されると、子どもの精神的健康や心理的発達に否定的な影響が生じると考えることができる。だが、子どもが担う役割を測定している親役割測定尺度(parentification questionnaire)(Sessions & Jurkovic, 1986)は、子どもが親に代行してどのような役割を担っているかを測定することが目的となっているため、子どもがどの程度の比重で、家族内でその役割を担っているのかは不明である。発達上不適切なほど過度な割合で親役割を担っているか、固定的に親役割を担っているのかを捉えるためには、親役割だけではなく同時に、子どもが、子どもサブシステム内において担っている役割についても着目することが必要だといえる。

したがって、親役割測定尺度(parentification questionnaire)(Sessions & Jurkovic, 1986)を参考に親役割の項目を作成し、同時に子役割の項目を作成する必要があると考える。親のような役割と、子どもとしての役割を測定することで、青年期の子どもが担う発達上適切・不適切な役割を明らかにすることができるだろう。よって、第5章では、青年が担う親役割および子役割を測定する尺度を作成する(【研究Ⅲ】)。

第5節 青年期の家族ときょうだいの役割

先行研究の概観を通じて、きょうだい関係は家族システムの下位システムとして、家族との相互作用の中で規定されるといえる。また、役割は相互作用を捉える概念と解釈することができる。したがって、家族システムの状態によって、きょうだいが担う役割およびきょうだい関係は異なってくるということが考えられる。

Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)によると, 明確な世代間境界が保たれている家族, つまり機能的な家族では, 夫と妻の間で情報が保持されるが, 養育のために親が子どもに接近できる柔軟さも持ち合わせている家族であるとされる。一方で, 世代間の境界が曖昧な家族, つまり非機能的な家族では, 子どもが親サブシステムの階層に入り, あるべきポジションにおらず, 親のような役割を担うと述べられている。また, きょうだいサブシステムでの相互作用が阻害されると述べている。このことから, 機能的な家族では, 夫婦・親子・きょうだいの各サブシステム内で相互作用がなされるが, 非機能的な家族では巻き込まれた子どもと親との間で相互作用がなされ, きょうだいサブシステムでの相互作用が阻害された状態と考えることができる。

しかし, 青年期の子どもが親役割を担うことの, 適応的な側面も指摘されている。Walsh *et al.*(2006)は, 凝集性の高い家族においては, 凝集性の低い家族よりも, 青年が親役割を担うことを指摘している。また, 青年期という時期は, 子どもが親と対等な関係に移っていくことから(落合・佐藤, 1996), 親のように家族のメンバーを励ましたり, 時には親を情緒的に支えることがあっても不思議ではない。凝集性が高く適応的な役割として青年の親役割が出現する家族を, 機能的な家族であると考えたと, 機能的な家族では, 発達に適したものとして, 青年が親役割を担っていると考えることができる。

Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)のモデルと, 青年期という発達段階を踏まえると, 機能的な家族では, 青年期のきょうだいが, 発達に適したものとして, それぞれ親役割を担っていると考えることができる。さらに, きょうだいサブシステム間での相互作用があることから, きょうだいが独立して親役割を担っているのではなく, 互いに影響し合いながら親役割を担っていることが考えられる。したがって, 家族機能

の高い家族では、自分も同胞も親役割期待を受け、親役割行動をとっているが、さらに自分の親役割期待と同胞の親役割期待、自分の親役割行動と同胞の親役割行動が関連し合っていると推察される。一方、家族機能の低い家族では、親サブシステムに巻き込まれた青年は親役割を担っているが、巻き込まれていない子どもは親役割を担っていないと考えられる。さらに、きょうだいサブシステム間の相互作用が阻害されていることから、きょうだい間で役割は関連し合っていないであろう。したがって、家族機能の低い家族では、きょうだいのうちに親役割期待を受け親役割行動をとっている青年と、親役割期待を受けていない、あるいは受けても行動しない青年とが見られ、さらに、自分の親役割期待と同胞の親役割期待、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連は見られないと推察される。

したがって、第 6 章(【研究Ⅳ】)では、第 5 章(【研究Ⅲ】)で作成した尺度を用いて、家族システムの状態によって、きょうだいがどのように役割を担っているかについて検討を行う。特に、家族システムの状態を捉えるために、家族機能を測定する尺度である *FACES III* (Olson *et al.*, 1985)を使用する。本尺度は、独立した凝集性と適応性がそれぞれカーブリーニア曲線を示すという仮説を持つが、日本語訳版では、凝集性と適応性の概念が明瞭に分離できず、円環モデルの基本的な仮説が得られなかった(田村, 1994; 立山, 2006)。また、凝集性や適応性が高いほど夫婦関係満足度や子どもの精神的健康や心理社会的発達の程度も高いという結果が得られている(Green, Harris, Forte & Robinson, 1991; Vandvik & Eckblad, 1993)。そのため、凝集性・適応性が高いほど、家族機能が高いことを示すと考えることができる。

第 6 章(【研究Ⅳ】)を通じて、家族システムの状態によってきょうだいがどのように役割を担っているかが明らかにさ

れる。さらに，Namysłowska & Siewierska(2010)は，家族療法場面では，世代間境界が曖昧になった家族では，葛藤的なきょうだい関係が見られることを指摘している。したがって，家族機能が低い家族で見られるようなきょうだいの役割が見られた場合には，きょうだい関係も葛藤的になると考えることができる。よって，第7章(【研究V】)および第8章(【研究VI】)では，きょうだいの役割の担い方ときょうだい関係との関連について検討を行う。具体的には，第7章(【研究V】)において，自分と同胞の親役割期待と親役割行動に焦点を当て，それぞれがどの程度親役割を担っているのかという点から，きょうだい関係の説明を試みる。さらに，第8章(【研究VI】)において，親役割および子役割どちらも用い，すべての役割のバランスときょうだい関係との関連について検討を行う。第7章(【研究V】)および第8章(【研究VI】)を通じて，自分と同胞がどのように役割を担うことできょうだい関係が規定されているかについて示す。この結果から，これまで家族療法場面で見られてきた，世代間境界が曖昧な家族関係ときょうだい関係との関連を実証的に示すことができるだろう。また，煩雑な属性に代わって役割を用いることできょうだい関係を説明しうることが提案される。

第6節 本研究の仮説と実証研究の位置づけ

以上，青年期きょうだい関係研究に関する研究領域の問題点とそれらを克服する提案について，本研究の目的に沿って検討した。これらの論点を踏まえ，本研究では，家族システム論の観点に立ち，本人の視点から，青年期きょうだい関係がどのように規定されているかを明らかにすることを目的とする。その際，新たな手法として役割理論を援用する。そこで，本研究の目的を検討するための仮説を以下に示す。

きょうだい関係のメカニズムを検討した先行研究において，

否定的な夫婦関係が親子関係を媒介しきょうだい関係に伝達されていること (Stocker, Ahmed, & Stall, 1997; Erel *et al.*, 1998), 親子関係ときょうだい関係は相互に影響をし合いながら形成されていること (Yu & Gamble, 2008) が指摘されている。これらの知見は, Minuchin (1974, 山根 (監訳), 1984, p.63) の指摘する, 「家族とは相互交流パターンを通じて作用する一つのシステムである」という家族システム論の考えを支持するものである。家族システム論の観点からすると, 家族成員の相互作用の中できょうだい関係も規定されているといえる。Minuchin (1974, 山根 (監訳), 1984) の提示したモデルによると, 家族の世代間境界が曖昧になり, 子どもが親サブシステムに巻き込まれ親役割を担っている状態の家族においては, 家族として機能不全状態になることが指摘されている。また, Namysłowska & Siewierska (2010) は, 家族療法の経験から, 家族の世代間境界が曖昧になり, 子どもが親サブシステムに巻き込まれている家族においては, 親サブシステムに巻き込まれた子どもと巻き込まれていない子どもとの間に葛藤が生じることを指摘している。そのため, 子どもの親役割に着目することは, 家族を捉える指標となり, きょうだい関係を説明しうると考えられる。一方で, ストレス状況下で親役割を担うことは青年にとって発達上, 適応的な行動であることや (Walsh *et al.*, 2006), 離婚等によって一時的に家族形態が変化した場合に見られる青年の親役割は適応的である (Herer & Mayseless, 2000) ことが指摘されており, 青年期に親役割を担うことは必ずしも不適切なものではなく, 適応的な行動と見なすこともできるとする立場もある。これらを踏まえると, きょうだいが発達段階に見合わないほど過度に親役割を担っているのか, あるいは青年期の子どもとして適応的な役割として親役割を担っているのかによってきょうだい関係への影響は異なることが推察される。つまり, 青年期の子どもにと

っては、きょうだいのうちの親サブシステムに巻き込まれた子どものみが過度に親役割を担っているのか、それとも適応的な役割としてきょうだいそれぞれが親役割を担っているのかというように、どのようにきょうだい親役割を担うのかによって、きょうだい関係への影響は異なると考えることができる。

また、家族の相互作用を捉えるために、役割理論に着目することができる。Haney *et al.*(1973)の実験、およびその実験について考察を行っている Bronfenbrenner(1981, 磯貝・福富(監訳), 1996, p.100)は、役割を割り当てられることで、役割を与えられた人は、「その役割を占める人やその人と関係のある他者の行動にふさわしいという期待に対応した知覚、活動、対人関係のパターンが引き起こされる」という仮説を立てている。さらに近年、心理学分野における役割研究の結果から、役割期待による対話や自己認知の制限機能(青木, 1993)、役割期待に対する役割遂行による対人間の関係維持(下斗米, 2000)が指摘されている。これらを踏まえると、役割は、役割期待により対人関係におけるルールができ、そのルールの下で役割行動をとることによって関係の形成・維持がなされるという機能を持っていると理解することができる。つまり、対人間における役割期待と役割行動に着目することで、相互作用を捉えることができるかと考える。そのため、特定の家族内での役割期待と役割行動を捉えることで、家族成員との相互作用を捉えることができるのではないだろうか。

さらに、これを家族システムに援用すると次のように考えることができる。Walsh *et al.*(2006)は、親役割は、青年の適応的な役割として強い結びつきを持った家族において出現することを指摘している。したがって、青年期の子どもとしての適応的な役割として親役割を見なすと、きょうだいが共に、親役割期待を感じ親役割行動をとることで、家族システムの

一員として関係維持を図っていることが推察される。よって、きょうだいと共に親役割期待を受け、親役割行動をとっている場合にはきょうだい関係は親和的になることが考えられる。反対に、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は、世代間境界が曖昧な家族では、子どもが親サブシステムに巻き込まれ、きょうだい間の相互作用が阻害されると述べている。この場合には、巻き込まれた子どもは親役割を担うのに対し、巻き込まれていない子どもは親役割を担わないため、きょうだい間で親役割を担う子どもと、そうではない子どもが存在するだろう。また、親サブシステムに巻き込まれた子どもは、家族関係を維持するために、親役割期待に従って親役割行動をとるが、巻き込まれていない子どもは、そもそも親役割期待を受けていなかったり、親役割期待を感じても親役割行動はあまり見られないのではないかと考えられる。加えて、世代間境界が曖昧な家族においては、親サブシステムに巻き込まれた子どもと巻き込まれていない子どもとの間に葛藤が生じることが臨床上、指摘されている(Namysłowska & Siewierska, 2010)。また、きょうだいの接触が減少する思春期・青年期以降は、目立ったきょうだい間の対立や葛藤は見られにくくなるという指摘を踏まえると(Buhrmester & Furman, 1990; Scharf *et al.*, 2005), 葛藤的な感情を抱いていたとしても、同胞とかかわろうとしないという分離的な関係として生じてくることが推察される。すなわち、親役割期待に従って親役割行動をとっている子どもと、親役割期待が少なかったり親役割期待を受けてもあまり親役割行動をとらないといった、きょうだい間に役割の偏りがある場合には、きょうだい関係は分離的になることが考えられる。したがって、親役割に関する指摘と、役割理論の考え方を踏まえると、「きょうだいそれぞれが親役割を担う場合にはきょうだい関係は親和的になるが、きょうだい間に親役割の偏りがある場合にはきょうだ

い関係は分離的になる」, という仮説が立てられる。本研究の仮説を実証していくことで, 家族関係との関連の中で青年期の親和的, 分離的なきょうだい関係がどのように規定されているのかが明らかにされる。また, これまで家族療法を通じて臨床的に報告されてきた, 曖昧な世代間境界の家族ときょうだい関係との関連(Namysłowska & Siewierska, 2010)について実証的に示すことができるだろう。さらに, 役割を用いてきょうだい関係の検討を行うことから, 属性の煩雑さを回避し, 一貫した知見を得るための方法を提案することができると考える。

仮説の実証に向けて, 以下 6 つの研究を行う。まず, 第 3 章(【研究 I】)および第 4 章(【研究 II】)では仮説の基礎となる青年期きょうだい関係に関する探索的研究を行う。具体的には, 第 3 章は, 生涯に渡るきょうだい関係の中で, 青年期きょうだい関係の特徴や, 家族関係の文脈から検討することの必要性を示すための基礎的研究として, きょうだい関係の発達的变化を検討する(【研究 I】)。第 4 章では, 家族構造として家族関係を捉え, 青年期の家族構造および家族との相互作用と, 青年期きょうだい関係との関連について探索的に検討を行う(【研究 II】)。そして, 第 5 章では, 青年が担う家族内の役割を測定する尺度を作成し(【研究 III】), 青年が担っている役割を捉える。第 6 章(【研究 IV】)以降, 上記に説明した仮説の検証を行っていく。第 6 章では, 作成された尺度を用いて, 家族の状態を反映してきょうだいがどのように役割を担っているのかについて検証を行う(【研究 IV】)。具体的には, 家族機能の高い群と低い群におけるきょうだいの役割期待および役割行動の関連の仕方について比較検討を行う。さらに第 7 章では, きょうだいの親役割期待と親役割行動に着目し, きょうだい関係との関連について検討する(【研究 V】)。この時, 第 6 章(【研究 IV】)において, きょう

だい間の役割期待と役割行動との関連について検討を行うことを受け、どの程度の自分の親役割に対して、同胞がどの程度の親役割をとることで、きょうだい関係が規定されるのかについて検討する。この検証を通じて、きょうだいそれぞれの親役割の程度と、きょうだい関係との関連について示す。第7章(【研究V】)では親役割のみ用いているために、実証研究の最後の第8章では、子役割も含め、役割のバランスときょうだい関係との関連について検討する(【研究VI】)。この検討を通じて、最終的に、自分と同胞がどのように役割を担うことで、どのようなきょうだい関係となるかが明らかにされる。本研究の構成を Figure2-1 に示す。

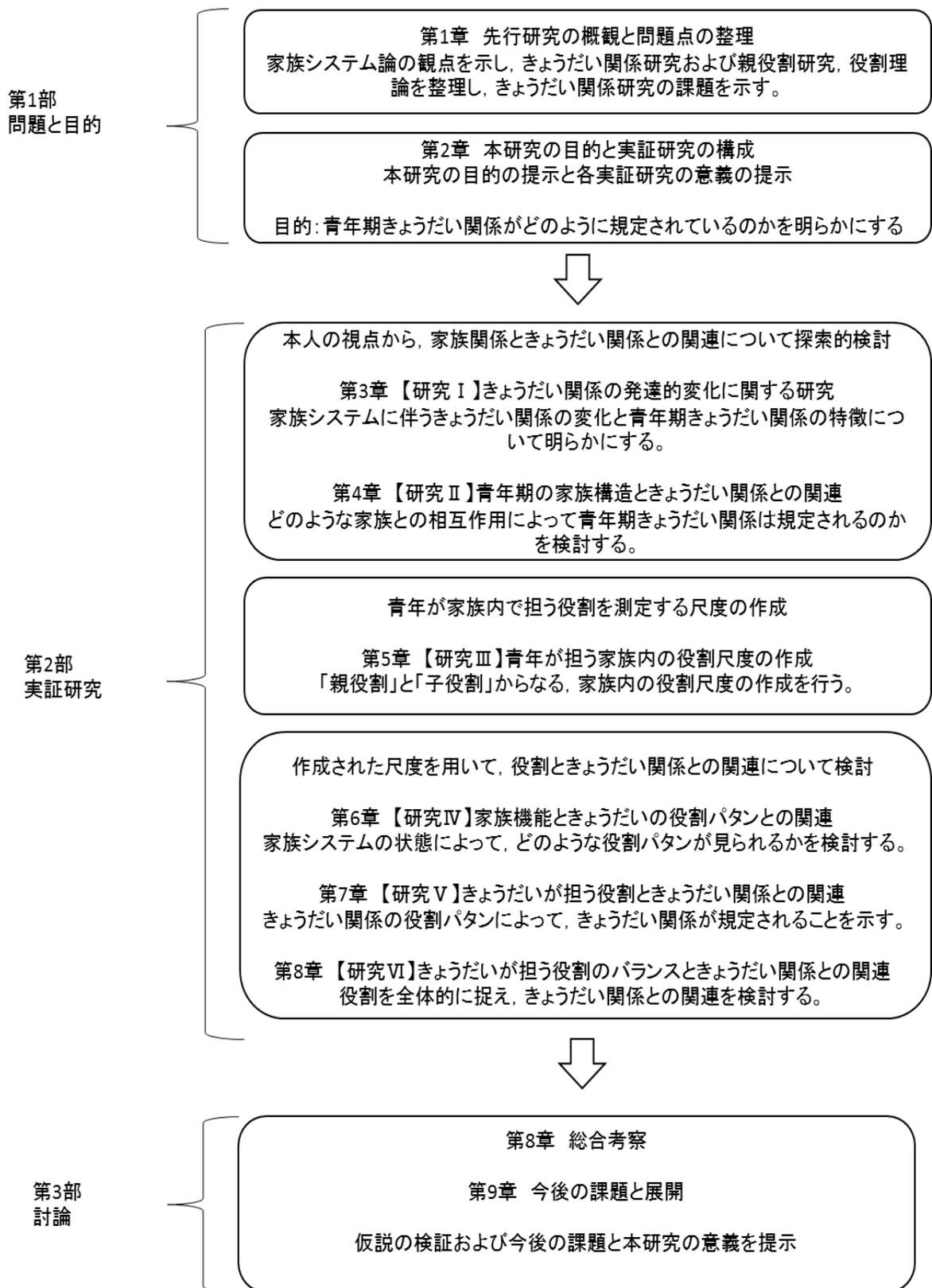


Figure2-1 本研究の構成

第 2 部

実証研究

第 3 章

【研究 I】

きょうだいの発達的变化に関する研究

第 1 節 目的

本章(【研究 I】)の目的は、本人の視点から、きょうだい関係の発達的变化を捉え、家族の発達的变化に伴うきょうだい関係の発達的变化および青年期のきょうだい関係に見られる特徴を明らかにすることである。

先行研究の概観を行ったところ、きょうだいは生涯に渡り関係性を変化させながら付き合い続けることが明らかにされた。例えば、幼児期や学童期には、きょうだいのうちの年長者から年少者に対する養護的・保護的なかわりが中心になっており、きょうだい間には上下関係がある(Brody *et al.*, 1985; Furman & Buhrmester, 1985)。しかし、青年期にかけて、徐々にきょうだい間の葛藤度は低くなり対等な関係が多く見られるようになる(Buhrmester & Furman, 1990)。また、Scharf *et al.*(2005)では、高校生、大学生になるにつれ、さらにきょうだい間の対立は減少し、親密さが増していくことが指摘されている。

このようなきょうだい関係の変化は、個人の心理的発達や友人関係の重要性の増加、親子関係の変化に伴い見られるようになることが示唆されており(McHale *et al.*, 1995; Updegraff *et al.*, 2002; Kim *et al.*, 2006)、きょうだいをとり巻く環境から影響を受けながらきょうだい関係が規定されていることがわかる。「家族は相互交流パターンを通じて作用する 1 つのシステムである」(Minuchin, 1974, 山根(監訳), 1984, p.63)という家族システム論の観点に立つならば、特に、家族との相互作用の中できょうだい関係は規定されていると考えることができる。

しかしながら、現段階においては、家族関係に着目している研究は、幼児期や学童期のきょうだい関係と家族関係との関連に関する検討が中心であり、青年期以降のきょうだい関係と家族関係との関連についてはあまり関心が寄せられていない。さらに、青年期に至るまでのきょうだい関係は母親の視点や観察法等の本人以外の視点から検討したものが多。誰の視点であ

るかによって、家族関係の認知が異なることから(Richmond & Stocker, 2003; Richmond & Stocker, 2008)、本人以外の視点と、本人の視点からでは、きょうだい関係の捉え方が異なってくることも考えられる。したがって、本人の視点から、家族関係の文脈の中できょうだい関係を捉える必要がある。また、青年期のきょうだい関係の特色は、幼児期・学童期のきょうだい関係や青年期以降のきょうだい関係との比較を通じて、より明確に示していくことができると思う。そこで、本章では、本人の視点からきょうだい関係の発達的变化について捉え、以下の点について検討を行う。

まず1点目は、家族システムの発達的变化に伴い、きょうだい関係は、どのように変化していくのかを検討する。これによって、家族関係の文脈の中できょうだい関係がどのように規定されているのかを示す。そして2点目は、他の発達段階との比較を通じて青年期きょうだい関係について検討し、青年期きょうだい関係の特徴について明らかにしていく。

第2節 方法

調査協力者および手続きについて示す。

第1項 協力者

調査協力者は東北地方と中国地方のきょうだいを持つ第1子の50代、60代の9名であった。対象者の平均年齢は57.65歳($SD=4.65$)で、男性3名、女性6名であった。調査協力者の性別やきょうだいの構成はTable3-1の通りである。

第1子に限定したのは、今回の研究では煩雑性を避けるため、兄・姉視点からきょうだい関係をどのように見てきたのかを中心に検討していくために限定した。また、分断された事実そのものよりも、一連の流れの中できょうだい関係の変化を検討していくために、対象は50代、60代の人に絞り、過去を回想し

てもらう方法を用いた。70代以上の人を除いたのは、ある程度のライフイベントを経験してきており、かつ戦後世代ということで、他の世代と社会経済、教育体制、家族像等において共通性があると考えられるためである。

Table3-1 きょうだいの構成

協力者の性別	年齢	きょうだいの人数	きょうだいの性別の組み合わせ	同胞の状況
A	女性	3	女・男(故)・男	市内に弟
B	女性	2	女・女	県外に妹
C	男性	2	男・男	県外に弟
D	男性	2	男・男	県外に弟, 自分は母親と同居
E	女性	3	女・女・女	市内に妹たち
F	女性	2	女・男	市内に弟
G	女性	5	女・女・男・男・女	みな県外
H	男性	2	男・男	県外に弟, 自分は母親と同居
I	女性	2	女・女	市外に妹, 自分は両親と同居

第2項 調査方法と調査時期

調査協力者へは、調査者から直接、あるいは知人を通して調査を依頼した。実施時期は2010年7月～9月で、30分～60分の半構造化面接で行った。面接場所は調査協力者との合意により決定し、面接内容は協力者の了解を得てICレコーダーに録音した。

第3項 質問内容

質問内容は、過去から今までのきょうだい関係がどのような状態であったかをたずねるために、下記のガイド項目に基づいて行った。ガイド項目を基本的には使用し、流れに応じて質問する順番や質問の内容は柔軟に変化させ、適宜内容を膨らませた。

<ガイド項目>

①「幼い頃(学生の頃・家を出た頃・結婚した頃・子育て中・現在)のきょうだい間の結びつきは強かったですか。弱かったですか。

すか。」

②「幼い頃(学生の頃・家を出た頃・結婚した頃・子育て中・現在)の結びつきを①のように感じたのはなぜですか。その時の、同胞とのかかわり方について教えてください。」

③「①の時の自分と家族(両親・配偶者)とのかかわりや同胞と家族(両親・配偶者)とのかかわりはどのようなものでしたか。」

第 4 項 倫理的配慮

調査にあたって研究の主旨, 協力者の匿名性が守られること, 質問・調査に対する拒否の自由, データは研究目的でしか使用しないこと, データの保存と処理・廃棄方法について説明し, 協力者の了解を得て実施した。

第 5 項 分析方法

本研究は仮説生成を目的としているため, その目的に照らし, インタビュー・データをもとにボトム・アップにモデル構築するのに適した木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を分析の枠組みとして採用した。分析手順は以下の通りである。

①録音データをプロトコルに起こし, テキストを作成した。
②同胞やその他の家族との関係の変化を見るために, データ中の「同胞とのコミュニケーションを表す箇所」, 「同胞に対して抱く(抱いていた)感情を表す箇所」, 「自分あるいは同胞と家族とのコミュニケーションを表す箇所」に着目し, これらが述べられている部分を取り出し, 概念名を付けた。③概念を作る際に分析ワークシートを作成し, 概念名・定義・具体例を記入した。④並行して, 他の部分や他のデータから具体例を探し, 随時分析ワークシートに追加した。同時に関係しそうな概念の可能性を考えることで, 相互の関連を検討した。そして, ③と④の作業を繰り返しながらデータ分析を進めた。⑤生成した概念

の完成度は類似例の確認だけでなく、反対の内容からなる対極例についての比較の観点からデータを見ていくことにより、解釈が恣意的に偏る危険性を防ぐよう努めた。⑥類似した概念が見られる時期を1つの発達段階としてまとめていき、いくつかの段階を作成した。⑦段階ごとに生成した概念と他の概念との関係を1つずつ検討しカテゴリーの生成を行ない、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめた。⑧最後に、その概念を簡潔に文章化し、各段階の結果を1つにまとめ、流れを確認したうえで、結果図を作成した。

以下に、「自分あるいは同胞と家族とのコミュニケーションを表す箇所」に着目し、概念を生成した過程の一例を示す。Iさんが自分が妹に対して母親的であることについて問われた時に、親からどのように言われていたかを振り返って語ったものの一部である。

「それはね、『お姉ちゃんだから』って。それは私がすごく小さい時から母は言っていたみたいですね。私が『おんぶして』、『抱っこして』って言っていた時も、私が3つで妹は当時0歳でしょ、妹がいるから自分はできないじゃない。そういうのもずっとあったみたい。近所の人も私が泣きながら母の傍をついて歩くと『ちょっと抱っこしてやればいいのに』、『おんぶしてやればいいのに』って。だからその頃から『お姉ちゃんなんだから』って言われてたんでしょね。」このことから、筆者はこの部分を、親とのコミュニケーションの中で“姉”として扱われることを通じて、姉は年少の同胞を優先させなければならないことを意識させられ、姉としての立場を教え込まれていると解釈した。そのため、“兄・姉役割のしつけ”と概念名を付け、“親から兄・姉として扱われることで、年少の同胞の面倒をみたり、年少の同胞を優先させる等、兄・姉としての立場を教え込まれること”と定義した。

第3節 結果

段階ごとに概念相互の関係を検討し、複数の概念の関係からカテゴリーを生成したものを Table3-2 に、各カテゴリーや概念間の関係を示したものを結果図(Figure3-1)として示す。この結果図を以下のストーリーラインを用いて説明した上で、各段階について得られたデータをもとに検討する。(“ ”が概念，【 】がサブカテゴリー，[]がカテゴリーを指す。)

第1項 きょうだい関係の発達のストーリーライン

年長の子どもは、同胞が誕生すると、親から同胞の面倒をみたり同胞を優先するように繰り返し言われることで“兄・姉役割のしつけ”をされ、“弟・妹の面倒をみる”ようになり、次第に【兄・姉役割の獲得】をしていく。特に、同胞に対しては体格差や能力差から【年齢差】を感じているために、一層兄・姉としての立場を意識せざるをえない。しかし、自由に友達と遊びに行くことができなかつたり甘えることの我慢を強いられることで、“兄・姉役割の煩わしさ”も感じている。同時に、“親からの兄・姉としての期待”も無言のうちに感じている。この相反する心理的状态から【兄・姉であることの負担】を感じている。このように、親とのコミュニケーションの中で、兄・姉として繰り返し扱われることで、年少の同胞に対するかかわり方を獲得していく時期である[家族期]が始めにある。

次第に、同胞に対して【年齢差】を感じなくなり、面倒をみる対象から、相談をしたりされたり、対等に張り合う相手となり、同胞と“対等に付き合う”ようになる。そして“きょうだい関係の転換”が起こり、【同胞への見方の変化】が生まれてくる。同時に、同胞よりも友人との付き合いが多くなり、同胞との接触頻度が減少し物理的にも心理的にも【距離があく】ようになる。また、【親への抵抗】も生じるようになってくる。このように、身体的な成熟とともにきょうだい関係が次第に対等な

関係へと変化し、家族とは少しずつ距離を取り始める[自立期]が訪れる。

そして、きょうだいそれぞれが就職・結婚すると、“各々の仕事や家庭を優先”するようになり、きょうだいが集まるのは盆と正月等の“節目節目の接触”だけとなるため、【接触頻度の減少】を感じざるを得なくなる。同時に、これまではきょうだいは一対一の付き合いであったが、それぞれが家族を持つことできょうだいそれぞれの“パートナー同士の付き合い”や“甥・姪との付き合い”が生まれ、“家族ぐるみのレジャー”を通してきょうだいは親族として【家と家の付き合い】をしていくようになる。しかし、実家の親と衝突が生じ、そこに同胞も加わることで【原家族との葛藤】が生じることもある。このようにきょうだい同士が親族として付き合うようになる[親族期]が訪れる。

その後、次第に両親が年老いてくることできょうだいで親の介護について話し合いを行っていく必要が生じてくる。[親族期]においては【接触頻度の減少】が見られたが、再びきょうだいが集まり“きょうだいで団結・協力”して介護に取り組まなくてはならなくなる。またこの時、自分あるいは同胞の“配偶者の協力”を得ることで、きょうだいがさらに団結・協力して介護に取り組んでいけるようになる。こうして、きょうだいとその家族も含めて【介護体制の形成】を行う。このように、必然的にきょうだいが集まり、年老いた親を介護するために新たな体制を作っていかななくてはならない[介護期]が訪れる。

[介護期]を乗り切ると、ともに親を看取ったことや、これまで同時代を生きてきたことを強く実感し、同胞に対してこれまで以上の親密さを覚えるようになり、同胞に対する“親密さの変化”が生じる。同時に、これまでのきょうだい関係を振り返り、上手く付き合えなかったことや過去の同胞との出来事を考え直す等“きょうだい関係に対する後悔”も生じ、同胞に対す

る【心理的変化】が生じてくる。それによって、互いの健康を気遣う等【きょうだいで思いやる】行動が生まれてくる。このように、これまでのきょうだい関係を振り返りながらきょうだい関係を見直し、親を介さない新しいきょうだい関係を築いていく[統合期]を過ごしていくこととなる。

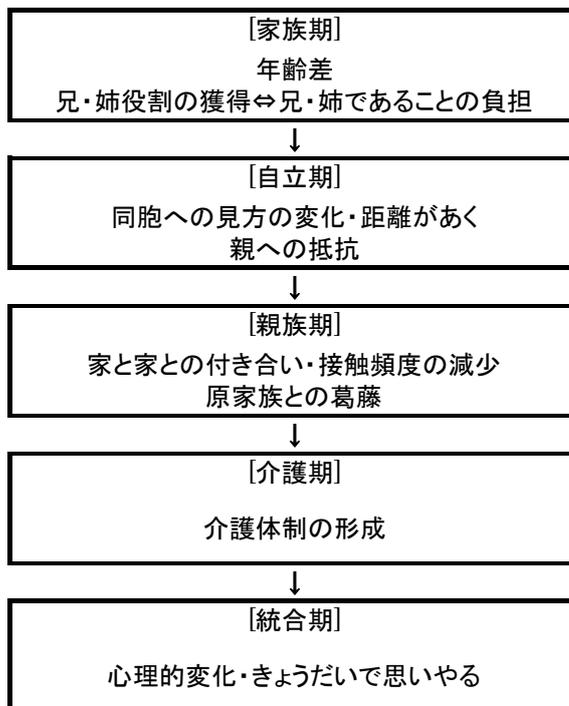


Figure3-1 きょうだい関係の発達的变化

Table3-2 カテゴリーと概念名

カテゴリー	サブカテゴリー	概念名	定義	語りの数	該当者数
家族期	兄・姉役割の獲得	兄・姉役割のしつけ	親から兄・姉として扱われることで、年少の同胞の面倒をみたり、年少の同胞を優先させる等、兄・姉としての立場を教え込まれること。	9	5
		弟・妹の面倒をみる	兄・姉として同胞のことを気にかけて、面倒をみること。	9	5
	年齢差	年齢差	年少の同胞に対して、自分より弱く小さいものとして認識していること。	3	3
		兄・姉であることの負担	親からの兄・姉としての期待	親からの役割期待を無言のうちに感じとっていること。	6
		兄・姉役割の煩わしさ	兄・姉として年少の同胞の面倒をみることを煩わしく思うこと。	5	3
自立期	同胞への見方の変化	きょうだい関係の転換	同胞に対して、何かをしてあげる対象という認識が、変化していくのを感じる。	5	5
		対等に付き合う	同胞と相談をし合ったり、おしゃべりをし合ったり、競争をしたりすること。	5	5
	距離があく	距離があく	学校や友人との付き合いが中心になり、同胞とかかわる時間が減ること。	4	3
	親への抵抗	親への抵抗	親のやり方に対して反発心がわき、反抗するようになること。	3	3
	接触頻度の減少	各々の仕事や家庭を優先	同胞との付き合いよりも、自分の仕事や家庭を優先するようになってくること。	3	3
親族期	家と家との付き合い	節目節目の接触	きょうだいが集まるのは、お盆や正月などの行事の時になってくること。	4	4
		パートナー同士の付き合い	自分のパートナーと同胞のパートナーとが仲良くやっていること。	3	3
		甥・姪との付き合い	同胞の子どもも可愛がり、甥・姪と親密な付き合いがあること。	3	3
		家族ぐるみのレジャー	一緒に旅行をするなど、同胞の家族と家族ぐるみで遊びに行くこと。	3	3
		原家族との葛藤	原家族との葛藤	親子関係をめぐって、両親や同胞と葛藤が生じること。	2
介護期	介護体制の形成	きょうだいで団結・協力する	親の介護をするために、きょうだいで足並みを揃え、協力して取り組むこと。	3	2
		配偶者の協力	自分の配偶者あるいは同胞の配偶者が親の介護に理解を示してくれること。	2	2
統合期	心理的变化	親密さの変化	親の死後、同胞に対して、これまで以上の親密さが生じてくること。	6	3
		きょうだい関係に対する後悔	同胞に対して、これまでのきょうだい関係を振り返り、後悔の念が生じること。	3	2
	きょうだいで思いやる	きょうだいで思いやる	きょうだいで互いに思いやり、気遣いをし合うこと。	6	4

第2項 きょうだい関係の各発達段階について

各時期のきょうだい関係について、より詳細に述べる。

(1) 家族期

Table3-2 から[家族期]は、兄・姉役割を感じ、かつ年齢差を強く意識する時期であることがわかる。このことから、第2子が誕生してから第2子が第二次性徴を迎えきょうだい間の体格差が少なくなってくる、おおむね0歳から中学～大学生までにあたると考えられる。この時期においてはきょうだいの体格や力の差も大きいいため、きょうだいのうちの年長者は年少者に対

して、自分が何かをしてあげなくてはいけないと意識せざるを得ない。しかし、すぐに兄・姉になれるのではなく、Table3-2にもあるように兄・姉であることの煩わしさを感じながら、親とのコミュニケーションを通して兄・姉となっていくことが見られた。

例えば、次の語りは、Bさんが妹の世話をどのように思いながらしていたか、という問いに対する語りである。「ストレスはありました。小さい時は、もう妹を置いて遊びに行きたかったですから。くっついてくるんですよ、お姉ちゃん、お姉ちゃんって泣きながら。もううるさいなと思いますけど。どうしても足手まといです。どうしてもしがみつく感じでくるんで。でも、それから妹がキリスト教の保育園に行くようになって、私は小学校に行っていたんですけど、そこから歩いたら子どもの足で15分かかるかな。私の母か父が妹を保育園に送って行って、私は小学校に行くんですけど、お昼寝してるかなどうかなって気になってしょうがなく、私は学校を抜け出して保育園まで走って行って、寝てるかなって見に行くと、寝ていないんですよ、みんなお昼寝しているのに。それで私が一緒に添い寝して、どうしたのって保育さんに言われるけど、うちの妹は私がいないと寝ないから、みたいな感じで。だから妹は私がいって始めてって、そういう時代はあったかな。保育園の時代とか。父からは一度もそういうことはないんですけど、母からは『妹大事にして』ってずっと言われていたし。母も働いていましたから。」このように、妹が自分にくっついてくることに煩わしさを感じつつも、妹が幼いことからどうしても面倒をみてしまっていたことがわかる。また、その都度、母親から妹を大事にするように言われ“兄・姉役割のしつけ”がなされることで、働く母親に代わって自分が姉としてしっかり面倒をみなくてはいけないと感じ、姉として振舞っていたことがわかる。

(2)自立期

Table3-2 から[自立期]は、体格差や能力差が目立たなくなり、弟・妹はおしゃべりをしたり、相談をしたり、競争をしあえる対等な相手であることがわかる。このことから、[自立期]は、きょうだいとともに第二次性徴を迎えてから、きょうだい結婚をする、中学～大学生から 20 代～30 代頃にあたると考えられる。Table3-2 にあるように、身体的な成長とともに、同胞に対する見方に変化が見られた。

例えば D さんは、[家族期]から[自立期]にかけて感じたきょうだい関係の変化を次のように語っている。「男のきょうだいておもしろくて、小さい頃って、たった 2 つの差でも体格が全然違うんですよ。だから、小学生くらいまでは力でねじ伏せられるんですね。だから絶対服従なんですよ、弟って。たぶんうちだけじゃないと思う。兄貴絶対なんですよ。親からは怒られますよ、お兄ちゃんなんだから泣かしちゃだめって。でも中学生くらいになるとそれほど差がなくなるじゃないですか。高校になるとほぼ同じですよ。そういう力の支配からだんだん、今度は精神的な部分の支配になってくるんですよ。大学くらいになると分別が色々出てきますから、そうすると、いったん兄弟の関係って見直すようになるのかなって。分別がつくと、それとは別に、大げさな言い方かもしれないけど、哲学的にきょうだいとか人間関係とか見直す時期ってあるじゃないですか。」このように、[家族期]においては、弟を自分よりも弱い者として力関係のみで認識していたのに対し、中学頃から、力以外にも人間性等も含めて弟を個人として認識し直し始めることで“対等に付き合う”ようになり、【同胞への見方の変化】が見られた。

そして、もはや同胞は世話をする対象ではなくなるため、同胞と一緒に過ごす時間も減り自分の学校生活や友人とのかかわりが中心になり、物理的にも心理的にも同胞と“距離があく”ようになる。

同時に、親の考え方や態度に対して反発心がわき、親に反抗したり、親の考え方を不快に感じ、“親への反抗”が生じていた。同胞だけではなく、家族から少しずつ距離をとり始めていることがわかる。

(3)親族期

Table3-2 から[親族期]は、きょうだいそれぞれの仕事や家庭が中心となり、互いに家と家として付き合う関係になってくることがわかる。このことから、きょうだいの一方が結婚し、親の介護を始めるまでの、20代～30代から40代～50代にあたりと考えられる。

Eさんは、きょうだい仕事と家庭を持ち始めた頃のことを次のように語っている。「それぞれ仕事して、私は銀行員だったんですけど、真ん中はデパートでチーフをやるくらいしっかり働いて、一番下は学校の教師になって。それぞれなので、やっぱり結婚して家を離れたりとすると、なかなか仕事が忙しいので、接触する暇が無かったかな。たまにうちに帰って、お盆とかお正月とかはありましたけどね。でもなかなか。デパートっていうところは日曜日休みじゃないですよ。私は銀行なので日曜日が休みで、なかなか会う機会がなくなってきたし、それぞれ自分たちの人生を歩んできたので。」このように、きょうだい“各々の仕事や家庭を優先”するようになることで自然と“節目節目の接触”となるため、【接触頻度の減少】が見られることがわかる。

また Table3-2 にあるよう、【家と家との付き合い】というきょうだい関係が見られるようになる。きょうだいの付き合いが次第に、パートナーや子どもも含めた付き合いとなることがわかる。同時に、自分が新しく築いた家族と原家族との間で葛藤が見られる。

例えば、Dさんは自分の妻と父親がぶつかるのを回避するた

めに、父親と別居することを決意したが、そのことについて弟から指摘され、弟との仲の良さが下がったことを次のように語っている。「僕の場合は親父との問題があった時に弟との関係はちょっと落ちましたよね。結局は弟は J 県にいるから分からないじゃないですか、K 県の状況って。そうすると、親父のことよく知ってるからしょうがないなっていうのもあるんですけど、『兄貴も兄貴でもっと大人の対応しろよ』とか、そういうことになったわけですよ。そんなのわからないですよ、一緒に住んでないとね。まあわかったわかったって言ってて、でもやっぱり別居しちゃったわけで、弟としてはやっぱり残念だったんじゃないですかね。」このように、両親との問題に同胞が入ってきたことで、同胞との関係にも影響があり、原家族との間に葛藤が生じたことがわかる。

(4) 介護期

Table3-2 から[介護期]は、親の介護をするためにきょうだい連絡を取り合い、配偶者も含めて介護体制を作っていく時期であることがわかる。このことから、親の介護が必要になり始めた時から両親を看取るまでの、40代～50代から60代にあたりと考えらえる。

Eさんは、母親の介護をするために再びきょうだいが集り、介護にとり組んだ様子を次のように語っている。「母が15年前に亡くなったんですけど、病気になったので。その時シフトを組んで、2人の妹は仕事があるので土曜とか日曜とか夏休みとか、そういう風に付き添って。毎日付き添わなきゃいけないくて、私はパートみたいなことやっていたんですけど、辞めて、シフトは私が夜8、9時頃までに病院に行って、泊まって、次の日の朝父が来ると交代して、妹たちが休める時をシフトしながらやってきた。」このように、きょうだいの互いの生活に配慮をしながら、親の介護に共にあたったことがわかる。

また、同胞は直接的には介護に加わらないが、同胞やその家族が自分の介護方針を支持してくれることで助かっている場合も見られた。

例えば I さんは、「私は自分の親と同居しているんだけど、妹は母親に対する考え方も一番良くわかってくれるじゃない。それはすごくいい相談相手よね。もし何かあった時っていうのも妹が協力してくれる。もし母が死んだら、当然相続権の問題がありますよね。そういう話にもなったことがあるんだけど、その時も妹婿が『お前(妹)は出ているんだからもらうことはない』ってそういう話は出たことがある。」このように、直接・間接的にきょうだいで足並みを揃え【介護体制の形成】をすることで[介護期]を乗り越えていくことがわかる。また、協力的なきょうだいのパートナーの存在によってきょうだい間での足並みがより揃うことで“きょうだいで団結・協力する”ことができ、よりしっかりとした【介護体制の形成】がなされることがわかる。

(5)統合期

Table3-2 から[統合期]は、きょうだい関係を振り返り、同胞に対してこれまでとは異なる感情を感じるようになり、思いやる行動が生じる時期であることがわかる。このことから、親の死後からきょうだいがいなくなるまでの、50～60代以降にあたると考えられる。

例えば F さんは、親の死後、弟に対して感じた気持ちを次のように語っている。「昔からの家族は 2 人しか残っていないので、子どもの頃は煩わしいと思ったけど、今は大切な存在だなと思います。つい最近父が亡くなったので、共通の思い出を持っている人が他にいない、叔父叔母はいますけど、そんなに一緒に住んでいたわけではないですし、この思い出を持っているのは弟だけなんだなっていうのはあります。それこそ歳が離れ

ているので、向こうは覚えてなくて聞かれたりするんですけど、記憶違いで違う風に覚えていたりするかもしれないですけど。」このように、親の死後、家族の共通の思い出を持っているのは同胞だけになったことを痛感し、大切な存在だと強く認識することで“親密さの変化”が生じていることがわかる。

また、Hさんのようにこれまでのきょうだい関係を振り返るようになり、きょうだいと希薄な関係であったことを後悔している場合も見られた。「基本的には、弟は、どうか知らないが、自分自身が人のことに干渉することも嫌いだし、されるのも嫌いなので、なんとなくこういうのもあって弟が近づかないのかなと、最近ちょっと反省しています。もう少し、弟も慕ってくれたかなと思います。頼りにされているかなという自信・・・いざという時に頼りにはしてくれるのかなとは思いますが。日頃はないですね。もしかしたら、自分で全部解決しているところを見ると、兄貴に相談してもしようがないといっているのかもしれない。一つは、弟は少し離れていて、僕はこっちで同じ敷地で、親父は亡くなったんですけど、お袋のほうの面倒を見ているみたいな形になっているので、一応兄貴に感謝していることになっているのかなと感じるところはあります。」このように、介護や親の死という大きなライフイベントを体験したことで、Table3-2に見られるような“親密さの変化”や“きょうだい関係に対する後悔”等の【心理的变化】が生じてくると考えられる。また、【心理的变化】が生じることで、互いにメールで健康を気遣ったり、共に旅行に行って楽しむようになる等、“きょうだいで思いやる”行動が見られるようになることがわかる。

以上のように、きょうだい関係は各段階において様々な様相を呈するが、常に同じ心理的状态なのではなく、幾度かの転換を経るものであった。また、同時に家族関係も変化しており、家族の発達と合わせてきょうだい関係も変化していることがう

かがえる。

第 4 節 考察

本研究により，5 段階からなるきょうだい関係の発達的变化が見出された。5 段階の発達的变化について，Cater & McGoldrick(1989)，平木(1998)を参考にした中釜(2001)の家族ライフサイクルを参考に，家族システム論の観点から考察を行う。また，青年期のきょうだい関係には，他の段階のきょうだい関係と比較してどのような特徴が見られるのか考察を行う。

第 1 項 家族システムの発達に伴うきょうだい関係の発達

最初の段階である[家族期]には，親から何度も兄・姉として扱われることを通じて，下の子の面倒をみるような養護的なきょうだい関係が見られた。Minnett *et al.*(1983)や，Brody *et al.*(1985)においても，就学前から思春期に入る前のきょうだいにおいては，年長きょうだいが年少きょうだいを褒めたり，教えたりする教育的な行動が多く見られることが指摘されている。[家族期]は，家族ライフサイクルでは，親役割に適応し養育のためのシステムづくりが必要になる“子どもの出生から末子の小学校入学までの時期”にあたりと考えられる。兄・姉が役割を獲得していく過程は，親が親としての役割に適応し親子間のコミュニケーション・パターンが形成されていく中で，子どもたちも次第に兄・姉としての役割が定着し，養護的なきょうだい関係が形成されるようになるのではないかと考えられる。

次に[自立期]には，次第に対等になっていき距離をとり始めるきょうだい関係が見られた。思春期から青年期にかけて，次第にきょうだい関係が対等になってくることは Buhrmester & Furman(1990)においても指摘されており，本研究の知見と一致する。[自立期]は，家族ライフサイクルでは親が自身の親役割を変化させたり，成員が個性化し，家族境界を柔軟に変化させ

ていくことが必要になる“子どもが小学校に通う時期”から“思春期・青年期の子どもがいる時期”に対応すると考えられる。このことから、きょうだい関係が次第に対等に変化していくのは、成員が個性化していくことを家族が許容するように変化していく中で生じることが考えられる。[家族期]においては、第1子は兄・姉としての存在が強調されたコミュニケーションがなされていたのに対し、[自立期]においては、兄・姉よりも個として扱われるコミュニケーションに変化してくるといえる。しかし、親子間のコミュニケーションが変化しない場合、親への強い抵抗や、上下関係の強いきょうだい関係になることが考えられる。

そして、[親族期]には、きょうだいは親族となり、それぞれの家族を交えた関係へと変化していく。家族ライフサイクルでは原家族から分化し、自身の家族を形成していく“家からの巣立ち”から“結婚による両家族の結合”の時期に対応していると考えられる。Parsons(1943)の親族モデルにおいて、きょうだい関係は幼児期においては強い結びつきがあるが、次第に重要度が低くなっていくことが指摘されているように、接触は自然と減少していくといえる。しかし、接触頻度は減少しても、親子間で葛藤が生じた場合きょうだい関係にも派生していくことが見られた。そのため[親族期]以降は、互いに家族を持っているため、親子間の葛藤がきょうだい間に派生していくとさらに両家族も巻き込み問題がより複雑化していくことが考えられる。[親族期]においては、きょうだいそれぞれが形成した新しい家族のルールを中心に、いかにきょうだい関係を維持するかが重要となると考えられる。

[介護期]には、きょうだい間での接触を再び増加させ、介護体制を形成していくこととなる。家族ライフサイクルとしては、祖父母世代の老化・死へ対処していくことが求められる“子どもの巣立ちとそれに続く時期：家族の回帰期”に対応すると考

えられる。このように、家族にとっても介護のためにシステムを変えていかねばならないが、同時にきょうだい関係の変化も求められると考えられる。また、きょうだいそれぞれの配偶者も協力的であれば、きょうだい間でより団結・協力しあう動きが促進されると考えられる。渡辺(2005)も、きょうだいが介護体制において重要な一員となることも指摘しており、介護体制を作っていく中できょうだい関係が規定されていくと考えられる。

最後に[統合期]は、親の死後、親を介さないきょうだい関係が形成されていく時期といえる。家族ライフサイクルでは、老年の知恵と経験を包含し、第2世代と交代する“老年期の家族の時期：家族の交替期”に対応すると考えられる。これまでは親や互いの家族を通して付き合ってきたきょうだいであったが、次第に中心的な役割を譲っていくことで、それらの関係を除いたきょうだい関係を築いていくこととなる。そのため、きょうだい関係の見直しがなされる等のこれまではない心理的な動きも生じるのではないかと考えられる。70歳以降きょうだいの接触は増加し始めることも指摘されており(White, 2001)、きょうだい間の親密性が増すことで接触頻度も増していくことが考えられる。

以上のように、きょうだい関係の発達的变化は、親子関係の変化や親族関係の形成、親の死等、家族関係やルールが変化していく中で規定されていることが考えられる。つまり、個人の発達による関係の変化もさることながら、周囲の関係の変化やルール変化に合わせてきょうだい関係は変化していくものであると考えられる。

第2項 青年期きょうだい関係の特徴

幼児期から高齢期のきょうだい関係を通して見た時、[自立期]すなわち青年期のきょうだい関係には、互いに距離をとり始

め個と個として対等な付き合いをし始めるという特徴が見られた。青年期において、きょうだい関係が対等になるという結果は、**Buhrmester & Furman(1990)**からも指摘されており、この結果を支持するものである。また、**Scharf et al.(2005)**は思春期から青年期にかけて、きょうだい間の親和的な関係が上昇することを指摘しているが、これはお互いが適度な距離をとりながら対等な関係に変化したことで、より親和的な関係になったと考えられ、[家族期]に見られる親和性とは質の異なる親和性であることが推察される。

もともと、青年期という時期は、身体的には大人に近いが、精神的・経済的には大人になりきれていない状態であり、子どもでもないが大人になりきれてもいない移行期にあたる時期である(笠原, 1976, p.7)。そして、**Erikson(1959, 小此木(訳), 1973)**によると、「私は私である」という感覚、つまりアイデンティティの感覚を獲得する時期だとされている。このように、青年期は物理的・心理的にも子どもから大人へ移行していく中で、自分自身の在り方を確立していく時期である。また、友人関係の研究において、思春期から青年期にかけて、友人関係はお互いを理解する「相互理解活動」が重視されるようになることが指摘されている(榎本, 1999)。同年代の人間であるという点から、きょうだい関係も友人関係に近い変化が生じていることが考えられる。つまり、青年期に差し掛かるにつれて生じる自分自身の問い直しとともに、同胞の存在も問い直し理解しようとし始めることで、きょうだい関係についても変化が生じていると考えることができる。特に、[家族期]まではきょうだい間での体格差も大きく年齢差が強調されていたが、互いに第二次性徴を迎えた青年期においては、体格差も小さくなることから、兄・姉や弟・妹というよりも、自分と近い存在として同胞は比較対象になるだろう。青年期においては、友人とのかかわりを通して自己を客観的に見つめ、自己の形成がなされていく

とされるが(宮下, 1995), きょうだい間においても同様に, 同胞とのかかわりを通して自己理解をし, 同胞の存在を捉え直していることが考えられる。このような子どもの心理的成長に伴い, きょうだい間での互いの関係認知には変化が生じると考えられる。また, 年少者の手もあまりかからなくなり, きょうだいの関心も家族外に移っていくことで, 自然にきょうだいに心理的・物理的な距離が生じ, 同胞のことをより見つめ直すことができていると考えることもできる。

加えて, きょうだい関係は, 家族システムの変化に伴い変化していくものであるといえるだろう。青年期の子どもを持つ家族においては, 親子関係の再編がなされ(Cater & McGoldrick, 1989), 親子関係が対等になっていくが(落合・佐藤, 1996), きょうだい関係も同時に再編されていることが考えられた。つまり, 子どもが青年期になるにつれて親が青年の自律性を尊重するかかわりをしていくことで, きょうだい間においても出生順位にとらわれないコミュニケーションが生まれてくることが考えられる。例えば, [家族期]においては, 兄・姉として扱われていたことが見られたが, [自立期]においてはそのような発言はあまり見られなかったことから, 青年期にはきょうだいの年齢差を強調した親とのコミュニケーションは見られにくくなることが考えられる。親子間において, 兄・姉や弟・妹として扱われるかかわりから, ひとりの人間として認められていくことで, きょうだい間においても対等なかかわりが促されると考えられる。それゆえ, Tucker *et al.*(2001)の指摘するように, 青年期においては, 出生順位にかかわらず, 家族内の問題に対しては対等に同胞を頼りになる存在だと見なすようになることと推察される。一方で, 青年期において親子間のコミュニケーションが変化しない場合には, 対等なきょうだい関係が促されず, 上下関係が強いきょうだい関係やきょうだい間の葛藤に発展することも示唆される。さらに, [親族期]には, きょうだいそれぞれ

れが原家族から独立していくために、きょうだい間の接触は必然的に減っていく。これは、青年期から成人期のきょうだいの接触を調査した White(2001)による、青年期から中年期頃まできょうだいのかかわりは減少するという指摘を支持するものである。そのため、[親族期]においては、Lee *et al.*(1990)や Myers(2011)が指摘しているように、互いに情緒的な結びつきや、きょうだいとしての義務感を動機として、意識的にきょうだい関係の維持がなされていると考えられる。よって、青年期の対等なきょうだい関係が形成されきょうだい間の親和的なかかわりが促されていない場合、[親族期]において非常にかかわりの少ないきょうだい関係となり、渡辺(2005)の指摘するように問題発生時に、きょうだい間の葛藤が噴出することも考えられる。

このように、[自立期]にあたる青年期のきょうだい関係は、養護的な関係が中心になる[家族期]のきょうだい関係と、対等な関係になり親族として付き合い始める[親族期]のきょうだい関係との間の過渡期に位置することが考えられる。つまり、青年期のきょうだい関係は、接触が密な時期から互いに独立していく時期の過渡期であるといえる。したがって、青年期のきょうだい関係は、幼児期や学童期までのきょうだい関係を転換させ、成人期以降のきょうだい関係の土台を作るための重要な時期になることがわかる。

第 3 項 第 4 章(【研究Ⅱ】)への示唆

本章(【研究Ⅰ】)では、5 段階からなるきょうだい関係の発達的变化が見出された。中でも、青年期のきょうだい関係は、幼児期・学童期のきょうだい関係から成人期以降のきょうだい関係の過渡期に位置する重要な時期にあたることが示唆された。この結果により、今後は青年期のきょうだい関係に焦点を当てる必要があるといえる。また、家族システムの変化に伴って

きょうだい関係も変化していくものであると捉えることができる。したがって、きょうだい関係を捉える際には、家族関係の文脈の中で捉え、家族内での相互作用に着目する必要があるだろう。

だが、本章の結果は、第1子のみを対象としていることから、結果の解釈には留意する必要がある。

第 4 章

【研究Ⅱ】

青年期の家族構造ときょうだい関係との 関連

第 1 節 目的

本章(【研究Ⅱ】)では、青年の視点から家族構造ときょうだい関係との関連を探索的に検討することを目的とする。

【研究Ⅰ】において、家族関係の発達に伴ってきょうだい関係も変化することが示された。このことから、きょうだい関係は家族システムの変化の中で規定されていることが考えられた。その中でも、青年期は、きょうだい関係が次第に上下の関係から対等な関係に移行していき、その関係性によっては、後のきょうだい関係のあり方も左右する過渡期にあたることが示唆された。このことから、青年期のきょうだい関係に焦点を当て、またきょうだい関係は家族関係の文脈の中で捉える必要性があるといえる。

従来の研究においては、夫婦関係や親子関係と関連しながら親和的なきょうだい関係や葛藤的なきょうだい関係が規定されていることが明らかにされているが、この知見は主に幼児期や学童期のきょうだい関係を対象としたものである。青年期のきょうだい関係と家族関係との関連はあまり検討されてきておらず、どのような家族関係の中で、青年期の親和的な関係や葛藤的な関係が規定されているのかについては明らかにされていない。また、従来の研究は、幼児期や学童期のきょうだいを対象とした調査研究であるために、親の視点や観察法といった本人以外の視点から得られた結果も混在している。

さらに、各関係ときょうだい関係との関連を示したものが多く、家族の全体性を踏まえているとは言い難い。しかしながら、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)が指摘するように、家族は一つのシステムであり、家族成員同士の複雑な相互作用の中できょうだい関係は規定されているといえる。そのため、きょうだい関係と他の成員間との関連について検討するだけでは、家族の複雑な相互作用を反映しているとは言い難

い。したがって、本研究では、各成員の関係を 1 項目で捉える尺度である効率的家族構造測定尺度(狐塚ら, 2008; 野口ら, 2009)を用いて、母子関係, 父子関係, 夫婦関係, 同胞と母親との関係, 同胞と父親との関係からなる家族構造として包括的に家族関係を捉え、きょうだい関係との関連を検討する。本尺度は家族成員間の関係を最少の項目数で測定することを目的として作成され、妥当性, 信頼性も確認された尺度である。本尺度を使用することで、被検者の負担なくきょうだいを含めた家族成員全員の成員間の関係を測定することが可能となる。

また、どのような家族構造であるかによって、きょうだい関係に違いが見られるとすれば、家族構造の類型ごとに家族成員間の相互作用に違いが見られると考える。よって、各家族構造において、どのような家族との相互作用がなされており、きょうだい関係の規定につながるのかを検討する。具体的には、家族構造の類型ごとに、家族の相互作用について詳細に調査し、それぞれの類型においてどのような特徴が見られるのかを明らかにする。

第 2 節 方法

上記の目的を達成するために、質問紙調査とインタビュー調査を実施した。質問紙調査およびインタビュー調査の対象者、手続きについて示す。

第 1 項 質問紙調査

(1) 調査対象者

調査対象者は東北地方の A 大学, B 大学に通うきょうだいのいる大学生 370 名であった。370 名のうち 294 名から質問紙が回収され(回収率 79.5%), そのうち、欠損のある者, 母子・父子家庭の者, 同胞との年齢が 10 歳以上離れている者を

除いた 267 名のデータを分析の対象とした。対象者の平均年齢は、19.8 歳 ($SD=1.56$) で、男性 107 名、女性 160 名であった。また、同胞の平均年齢は 20.1 歳 ($SD=3.75$) で、同胞の性別は男性 134 名、女性 133 名であった。出生順位については、第 1 子の者が 100 名、第 2 子以降の者が 137 名であった。きょうだいの性別構成としては、男きょうだい 57 名、女きょうだい 82 名、異性きょうだい 128 名であった。

(2) 調査方法と調査時期

きょうだいのいる大学生に対して自記式質問紙調査を行った。調査者から、授業を持つ教員数名に対し質問紙配布の実施の依頼をし、承認が得られた講義の時間を借りて、受講しているきょうだいのいる学生に対して質問紙を配布した。授業終了前に時間を取り一斉に質問紙に回答してもらい、終了後に回収を行った。

調査時期は 2011 年 8 月～11 月であった。

(3) 質問紙の構成

1) フェイスシート

性別・年齢・家族構成・同胞の性別・同胞の年齢の記入を求めた。

2) きょうだい関係スケール

飯野(1994)による「青年期のきょうだい関係スケール」16項目を用いた。この尺度は、「共存」、「対立」、「保護・依存」、「分離」の 4 因子からなり、青年の現在のきょうだい関係についてたずねるものである。「共存」は、“買い物や散歩など、一緒に出かける”といった項目のように、きょうだいと一緒に空間・時間等を共有した経験について問う項目からなる。「対立」は、“小さなことで言い争う”といった項目のように、

きょうだい間での喧嘩や衝突の経験について問う項目からなる。「保護・依存」は，“何かのときに頼りに思う”といった項目のように，きょうだいで頼った・頼られた経験について問う項目からなる。「分離」は，“きょうだいとは関わらない”といった項目のように，きょうだい間でもかかわりを避けた経験について問う項目からなる。回答は，「よく経験した(5)」，「しばしば経験した(4)」，「どちらともいえない(3)」，「あまり経験したことがない(2)」，「一度も経験したことがない(1)」の5件法で求めた。複数きょうだいの場合には，対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

3) 家族成員の結びつき

野口ら(2009)による「効率的家族構造測定尺度」の第1因子「結びつき」因子を用いた。教示文は「現在の家族成員ごとの結びつき(お互いの仲のよさや親密さ，連帯感)についてお聞きします。あなたから見て，『お互いの結びつきが非常に弱い』を1，『お互いの結びつきが非常に強い』を10とし，2者間におけるそれぞれの『結びつき』が1～10のどれに当てはまるかを()の中に記入してください。」となっており，家族成員の2者関係それぞれについて1から10点で結びつきの強さを記入してもらおう。記入してもらおう関係は，①あなたと父親の結びつき，②あなたと母親の結びつき，③あなたと相手きょうだいの結びつき，④相手きょうだいと父親の結びつき，⑤相手きょうだいと母親の結びつき，⑥父親と母親の結びつきの6項目であった。同胞が複数いる場合には，対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

(3) 倫理的配慮

対象者に対して質問紙実施前に口頭で，本調査は強制ではないこと，不快感を感じることも等があった場合には回答を途

中で中断することができ、その場合にも対象者が不利益をこうむることはないこと、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されることはないこと、研究以外の意図でデータを使用することはないことを説明し、それに同意した上で質問紙に回答するよう説明した。また、同様の内容は質問紙のフェイスシートにも記載し、対象者自身にも各自読んでもらい、質問紙への自発的参加、守秘義務について対象者が同意した上で実施された。

第 2 項 インタビュー調査

(1) 調査協力者

2011年8月に行った質問紙調査の対象者267名のうち、協力が得られた28名に対してインタビュー調査を実施した。協力者の平均年齢は22.64歳($SD=1.14$)で、男性8名、女性20名であった。また同胞の平均年齢は23.07歳($SD=3.22$)で、男性18名、女性10名であった。質問紙調査の対象者に対してインタビュー調査の協力者の方がやや平均年齢が高いが、両調査の対象者と同胞は20歳前後であり青年期に属するきょうだいであった。

また、第1子の者が13名、第2子以降の者が15名であった。きょうだいの性別構成としては、男きょうだい5名、女きょうだい7名、異性きょうだい16名であった。対象者をTable4-1に示す。

Table4-1 インタビュー協力者の基本属性

no	性別	年齢	家族構成	同胞性別	同胞年齢	きょうだいの性別構成	出生順位
1	男	24	父・母・兄	男	28	男きょうだい	第2子以降
2	女	24	父・母・弟・祖父・祖母	男	23	異性きょうだい	第1子
3	女	22	父・母・兄・祖父・祖母	男	25	異性きょうだい	第2子以降
4	女	22	父・母・姉	女	27	女きょうだい	第2子以降
5	女	23	父・母・妹	女	20	女きょうだい	第1子
6	女	22	父・母・弟	男	19	異性きょうだい	第1子
7	女	23	父・母・弟	男	21	異性きょうだい	第1子
8	男	22	父・母・姉・姉	女	23	異性きょうだい	第2子以降
9	女	23	父・母・兄	男	26	異性きょうだい	第2子以降
10	女	22	父・母・妹	女	19	女きょうだい	第1子
11	男	20	父・母・兄・妹	男	23	男きょうだい	第2子以降
12	女	25	父・母・弟・妹	男	22	異性きょうだい	第1子
13	女	21	父・母・妹	女	17	女きょうだい	第1子
14	女	24	父・母・姉・兄	男	28	異性きょうだい	第2子以降
15	女	23	父・母・妹・妹	女	17	女きょうだい	第1子
16	男	23	父・母・弟	男	22	男きょうだい	第1子
17	男	24	父・母・兄・兄・祖父・祖母	男	24	男きょうだい	第2子以降
18	女	24	父・母・弟・弟	男	22	異性きょうだい	第1子
19	女	23	父・母・兄・祖父	男	26	異性きょうだい	第2子以降
20	女	24	父・母・妹	女	21	女きょうだい	第1子
21	女	22	父・母・妹	女	20	女きょうだい	第1子
22	女	21	父・母・兄・兄	男	28	異性きょうだい	第2子以降
23	女	21	父・母・兄	男	25	異性きょうだい	第2子以降
24	女	23	父・母・兄	男	26	異性きょうだい	第2子以降
25	女	22	父・母・弟・妹	男	19	異性きょうだい	第1子
26	男	22	父・母・姉	女	24	異性きょうだい	第2子以降
27	男	22	父・母・姉	女	25	異性きょうだい	第2子以降
28	男	23	父・母・兄	男	26	男きょうだい	第2子以降

(2) 調査方法と調査時期

実施時期は 2011 年 8 月～10 月で、30 分～60 分の半構造化面接を行った。面接場所は調査対象者との合意により決定し、面接内容は対象者の了解を得て IC レコーダーに録音した。

(3) 質問内容

質問内容は、下記のガイド項目に基づいて行った。ガイド項目を基本的には使用し、流れに応じて質問する順番や質問の内容は柔軟に変化させた。対象者の発言を受けて、適宜内容を詳しく聞いていった。複数きょうだいの場合には、対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて回答してもらった。

<ガイド項目>

① 同胞とのかかわり方，② 同胞に対して思うこと，③ 同胞からのかかわられ方，④ 両親のきょうだいへのかかわり方，について順次聞いていった。

(4)倫理的配慮

調査にあたって研究の主旨，協力者の匿名性は守られること，質問・調査に対する拒否の自由，データは研究目的でしか使用しないこと，データの保存方法について丁寧に説明し，これらについて対象者の了解を得た上で実施した。

(5)分析の枠組み

インタビュー調査によって得られた情報を，家族構造の類型ごとに KJ 法を用いて分類し，カテゴリーの生成を行なった。まず録音データを文字起こしし，プロトコルを作成した。その後，プロトコルをエピソードごとに切片化し，切片ごとの類似度を検討した。類似度については，同じキーワードが似通った文脈で話されていることを判断基準とした。そして，ある程度類似した切片が集められたところで，カテゴリーとして抽出し，カテゴリーの命名をした。さらに，いくつかの類似したカテゴリーを集め，上位カテゴリーを作成した。この作業を，上位カテゴリーの数が 10 個以下になるまで繰り返した。

第 3 節 結果

質問紙調査およびインタビュー調査から得られた結果を示す。

第 1 項 きょうだい関係スケールの内的整合性の検討

「きょうだい関係スケール」の各下位尺度因子の α 係数を

算出したところ、「共存」因子は $\alpha = .81$ 、「対立」因子は $\alpha = .88$ 、「保護・依存」因子は $\alpha = .75$ 、「分離」因子は $\alpha = .94$ であった。

第 2 項 各下位尺度得点の平均値と標準偏差

きょうだい関係スケールの各下位尺度と家族成員の結びつき得点の平均値および標準偏差を Table4-2 に示す。

Table4-2 きょうだい関係スケール, 結びつきの平均値と標準偏差
($n=267$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
きょうだい関係スケール		
共存	3.02	1.11
対立	3.11	1.22
保護・依存	3.28	.95
分離	1.93	1.10
結びつき		
自分と父	6.25	2.19
自分と母	7.96	1.68
自分と同胞	6.73	2.41
同胞と父	6.06	2.21
同胞と母	7.52	1.82
両親	7.27	2.15

第 3 項 きょうだい関係スケールの関連

きょうだい関係スケールの下位尺度得点を用いて相関係数を算出した (Table4-3)。その結果、「共存」関係は、「対立」関係と中程度の正の相関 ($r=.31, p<.001$)、「保護・依存」関係と強い正の相関 ($r=.89, p<.001$)、「分離」関係と中程度の負の相関 ($r=-.60, p<.001$)が見られた。「対立」関係は、「保護・依存」関係と弱い正の相関が見られた ($r=.24, p<.001$)。また、「保護・依存」関係は、「分離」関係と中程度の負の相関が見られた ($r=-.51, p<.001$)。

Table4-3 きょうだい関係スケールの関連($n=267$)

	共存	対立	保護・依存	分離
共存		.31***	.89***	-.60***
対立			.24***	-.05
保護・依存				-.51***
分離				

*** $p<.001$

第 4 項 下位尺度得点と属性による比較

性別，同胞の性別，出生順位，きょうだいの性別構成別に尺度の平均値と標準偏差を算出した (Table4-4, Table4-5)。さらに，これらの属性によって得点に差があるかを検討するために，属性を独立変数，きょうだい関係スケールの下位尺度得点，結びつきの得点を従属変数とした t 検討および 1 要因分散分析を行った。

まず男女で得点の比較を行ったところ，「共存」得点 ($t(265)=4.73, p<.001$)，「対立」得点 ($t(250,20)=3.36, p<.01$)，「保護・依存」得点 ($t(265)=3.51, p<.01$)，自分と母の結びつき得点 ($t(265)=3.77, p<.001$)，自分と同胞の結びつき得点 ($t(265)=2.78, p<.01$)，同胞と母の結びつき ($t(265)=2.28, p<.05$) については男性よりも女性の方が有意に高い値を示した。

同胞の性別で得点の比較を行ったところ，「共存」得点 ($t(265)=3.86, p<.001$)，「対立」得点 ($t(261,76)=2.95, p<.01$)，自分と同胞の結びつき ($t(265)=2.36, p<.05$)，同胞と母の結びつき ($t(265)=2.78, p<.01$) について，同胞が男性よりも女性である方が有意に高い値を示した。

出生順位で得点の比較を行ったところ，「対立」得点は第 2 子以降よりも第 1 子の方が有意に高い値を示し ($t(226,32)=3.61, p<.001$)，両親の結びつきは，第 1 子よりも第 2 子以降の方が有意に高い値を示した ($t(235)=2.15, p<.05$)。

また，きょうだいの性別構成で得点の比較を行ったところ，

「共存」得点 ($F(2)=22.12$, $p<.001$), 「対立」得点 ($F(2)=13.85$, $p<.001$), 「保護・依存」得点 ($F(2)=7.86$, $p<.001$)において有意差が認められたため, Tukey 法による多重比較を行なった。その結果, 「共存」得点は, 「女きょうだい」が「男きょうだい」($p<.001$)と「異性きょうだい」($p<.001$)よりも有意に高かった。「対立」得点も, 「女きょうだい」が「男きょうだい」($p<.001$)と「異性きょうだい」($p<.001$)よりも有意に高かった。同様に, 「保護・依存」得点も, 「女きょうだい」が「男きょうだい」($p<.01$)と「異性きょうだい」($p<.01$)よりも有意に高かった。加えて, 自分と母の結びつき ($F(2)=6.01$, $p<.05$), 自分と同胞の結びつき ($F(2)=9.21$, $p<.001$), 同胞と母の結びつき ($F(2)=6.50$, $p<.05$)において有意差が認められたため, Tukey 法による多重比較を行なった。その結果, 自分と母の結びつきは, 「女きょうだい」($p<.01$)と「異性きょうだい」($p<.05$)が「男きょうだい」よりも有意に高かった。自分と同胞の結びつきは, 「女きょうだい」が「男きょうだい」($p<.01$)と「異性きょうだい」($p<.001$)よりも有意に高かった。同胞と母の結びつきにおいては, 「女きょうだい」($p<.01$)と「異性きょうだい」($p<.05$)が「男きょうだい」よりも有意に高かった。

Table4-4 基本属性ごとの集計結果と平均値の比較(性別・同胞の性別・出生順位) (n=267)

n		性別			同胞の性別			出生順位			
		男性	女性	t値	男性	女性	t値	第1子	第2子以降	t値	
		107	160	df	134	133	df	100	137	df	
きょうだい関係スケール											
	共存	M	2.63	3.28	4.73***	2.68	3.36	3.86***	3.12	3.02	1.34
		SD	.97	1.13	265	1.05	1.07	265	1.04	1.12	235
	対立	M	2.82	3.31	3.36**	2.90	3.33	2.95**	3.48	2.93	3.61***
		SD	1.08	1.27	250,20	1.27	1.13	261,76	1.10	1.24	226,32
	保護・依存	M	3.04	3.45	3.51**	3.19	3.37	1.56	3.45	3.22	1.81
		SD	.92	.94	265	.98	.92	265	.91	.94	235
	分離	M	2.08	1.83	1.83 [†]	1.97	1.89	.59	1.79	1.93	1.12
		SD	1.16	1.05	210,81	1.10	1.11	265	1.01	1.08	235
結びつき											
	自分と父	M	6.21	6.28	.22	6.15	6.35	.76	6.10	6.48	.87
		SD	2.06	2.28	265	2.26	2.13	265	2.19	2.15	235
	自分と母	M	7.50	8.27	3.77***	7.87	8.05	.91	7.86	8.17	1.36
		SD	1.57	1.69	265	1.69	1.68	265	1.78	1.49	235
	自分と同胞	M	6.21	7.04	2.78**	6.36	7.05	2.36*	6.94	6.75	.84
		SD	2.56	2.29	265	2.45	2.37	265	2.27	2.35	235
	同胞と父	M	6.07	6.04	.10	5.99	6.11	.47	5.93	6.26	.80
		SD	2.04	2.32	265	2.26	2.16	265	2.04	2.20	235
	同胞と母	M	7.21	7.72	2.28*	7.21	7.82	2.78**	7.68	7.53	.77
		SD	1.98	1.68	265	1.86	1.73	265	1.66	1.83	235
	両親	M	6.99	7.45	1.72 [†]	7.12	7.41	1.12	7.01	7.69	2.15*
		SD	2.03	2.21	265	2.28	2.00	265	2.26	1.82	235

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

Table4-5 基本属性ごとの集計結果と平均値の比較(きょうだいの性別構成) (n=267)

n	男きょうだい 57		女きょうだい 82		異性きょうだい 128		F値 df	多重比較 (Tukey法)
	M	SD	M	SD	M	SD		
きょうだい関係スケール								
共存	2.83	.92	3.68	.82	2.96	.88	22.12*** 2	男きょうだい, 異性きょう だいく女きょうだい
対立	2.88	1.21	3.67	1.12	2.86	1.17	13.85*** 2	男きょうだい, 異性きょう だいく女きょうだい
保護・依存	3.12	1.02	3.62	.90	3.14	.91	7.86*** 2	男きょうだい, 異性きょう だいく女きょうだい
分離	2.01	1.20	1.73	1.07	2.02	1.07	1.89 2	
結びつき								
自分と父	6.09	2.14	6.37	2.23	6.25	2.21	.27 2	
自分と母	7.32	1.57	8.28	1.72	8.04	1.64	6.01* 2	男きょうだいく女きょうだ い, 異性きょうだい
自分と同胞	6.32	2.56	7.63	2.05	6.28	2.44	9.21*** 2	男きょうだい, 異性きょう だいく女きょうだい
同胞と父	5.96	2.15	6.07	2.32	6.07	2.17	.05 2	
同胞と母	6.81	1.88	7.90	1.55	7.58	1.88	6.50* 2	男きょうだいく女きょうだ い, 異性きょうだい
両親	6.74	2.24	7.54	2.13	7.33	2.09	2.46 2	

*** $p < .001$, * $p < .05$

第5項 家族構造の類型ときょうだい関係との関連

父・母・自分・同胞の結びつきからなる家族構造を検討するために、家族成員同士の結びつき(自分と父・自分と母・同胞と父・同胞と母・両親の結びつき)の得点をz値に変換したものを変数としたクラスタ分析を行なった(Ward法)。クラスタ数の検討には、デンドログラムを基準に各クラスタに含まれる対象者数やクラスタの解釈可能性の観点から検討し、3クラスタを採用した(Figure4-1)。

第1クラスタは、すべての成員との結びつきの得点において、標準得点の平均が $-.50SD$ 以下の値を示していることから「低結びつき家族」と命名した($n=99$)。第2クラスタは、すべての成員との結びつきの得点において、標準得点の平均が $0.00SD$ 以上 $+.50SD$ 以下の値を示していることから「中結びつき家族」と命名した($n=114$)。第3クラスタは、すべての成

員との結びつきの得点において、標準得点の平均が $+1.50SD$ 以上の値を示していることから「高結びつき家族」と命名した($n=54$)。以上の3クラスを家族構造の3類型とした。

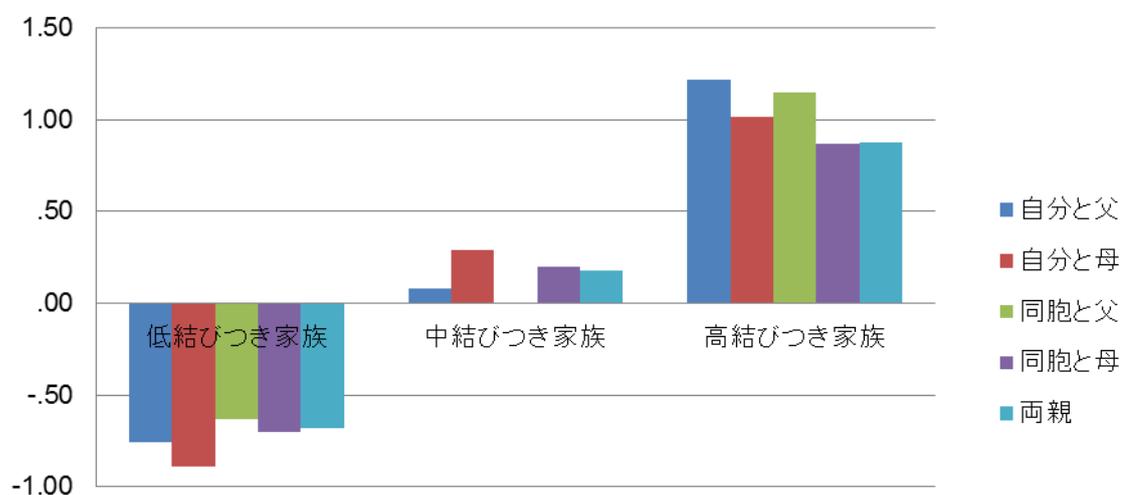


Figure4-1 家族構造の3類型

次に、家族構造の3類型を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度(共存, 対立, 保護・依存, 分離)得点を従属変数とした1要因分散分析を行なった(Table4-6)。その結果、「共存」得点($F(2)=10.91, p<.001$), 「保護・依存」得点($F(2)=12.70, p<.001$), 「分離」得点($F(2)=13.09, p<.001$)において有意差が認められたため、Tukey法による多重比較を行なった。その結果、「共存」得点は、「高結びつき家族」が「中結びつき家族」($p<.05$)と「低結びつき家族」($p<.001$)よりも有意に高く、「中結びつき家族」が「低結びつき家族」($p<.05$)よりも有意に高かった。「保護・依存」得点は、「高結びつき家族」が「中結びつき家族」($p<.01$)と「低結びつき家族」($p<.001$)よりも有意に高かった。「分離」得点は、「低結びつき家族」が「中結びつき家族」($p<.10$)と「高結びつき家族」($p<.001$)よりも有意傾向・有意に高く、「中結びつき家族」が

「高結びつき家族」($p<.01$)よりも有意に高かった。

Table4-6 家族構造ごとにおけるきょうだい関係の下位尺度得点の分散分析 ($n=267$)

n	低結びつき家族 99		中結びつき家族 114		高結びつき家族 54		F値 df	多重比較 (Tukey法)
	M	SD	M	SD	M	SD		
共存	2.68	1.13	3.09	1.03	3.51	1.05	10.91*** 2	低<中<高
対立	3.12	1.19	3.17	1.17	2.98	1.36	.46 2	n.s
保護・依存	3.04	1.03	3.24	.86	3.81	.79	12.70*** 2	低, 中<高
分離	2.24	1.16	1.94	1.12	1.33	.59	13.09*** 2	高<中<低

*** $p<.001$

注) "高"は「高結びつき家族」, "中"は「中結びつき家族」, "低"は「低結びつき家族」を示す。

第 6 項 内容の分析

家族構造の各類型における KJ 法の結果, Table4-7 ~ Table4-9 に示すカテゴリーを抽出した。

低結びつき家族($n=15$)においては、「夫婦間の葛藤」があり, 母親中心のかかわりをしたり, 母親の情緒的・道具的サポートをする等の「母子密着」になっている状態が見られた。また, 同胞が父親と衝突したり, 父親とのかかわり方がわからないでいるといった「子どもと父親との葛藤」が見られた。きょうだい関係としては, 同胞とは対等な関係ではないと感じていたり, 同胞は問題を起こす存在だと見なしている「きょうだい間の葛藤」や, 一方で, 同胞とまとまり夫婦仲をとるもったり, 趣味などについて話す「きょうだいの結託」も見られた。さらに, 家族から離れて好きにやっていたり, 同胞は家族にかかわって来ないと感じている「家族との最低限の接触」も見られた。

中結びつき家族($n=11$)においては、「夫婦間にルール」があり, 子どもは「両親に対する信頼」を抱いていた。「同胞と親の衝突」や「親の過保護さ」があるものの, 自分も同胞も母親に近況を報告したり相談するなどの「子ども達と母親との親密なかかわり」や, 母親は最終的に父親を頼ったり, 子ど

もも父親に信頼を寄せているといった「家族の父親への信頼」が見られた。さらに、母親がきょうだい仲を取り持ったり、母親を通して父親のことを聞いたり、母親が家族の話題を回すなどの「母親が家族を取り持つ」姿がうかがえた。きょうだい間では、「きょうだい喧嘩」が生じる場合もあれば、同胞と接触が多く、同胞を信頼している「同胞との親密なかかわり」が見られた。一方で、「同胞との必要最低限のかかわり」である場合も見られた。

最後に、高結びつき家族($n=2$)においては、「夫婦間にルール」があり子どもは「両親に対する信頼」感を持っていた。また、「母親と子ども達との親密なかかわり」だけではなく、「父親の子どもへの関与」も多く見られ、父親や母親を通して家族の状況を知ったり、両親を介して自分の状況が同胞に伝わるなどの「親によるきょうだい間の仲介」が見られた。きょうだい関係としては、「きょうだい間の親密なかかわり」が見られた。

Table4-7 低結びつき家族のカテゴリー (n=15)

カテゴリー	切片名	人数	該当する対象者	切片数
夫婦間の葛藤	夫婦間の意思疎通が上手くいかない	7	2,6,7,19,20,22,27	9
きょうだい間の葛藤				
-同胞とは対等な関係ではない	同胞の顔色をうかがう	2	19,22	4
	同胞から自分に対する嫉妬	1	20	2
	同胞とは頼り・頼られる関係ではない	3	12,19,20	7
	同胞とはかかわりたくない	4	7,12,20,22	9
-同胞の問題行動	同胞は家族に迷惑をかける	6	1,7,19,20,22,27	20
	同胞は母親の意思に反する	2	19,20	6
	同胞は母親の心配の種	5	1,6,7,12,19	13
母子密着				
-母親中心のかかわり	母親に近況を話す	5	22,24,25,27,28	8
	母親から同胞の様子をきく	7	15,19,20,24,25,27,28	14
-母の情緒的・道具的サポートをする	母親から父親の様子をきく	1	28	2
	母親の家族に対する愚痴を聞いてあげる	8	6,7,12,15,19,29,24,27	21
	母親に同胞の面倒をみるよう促される	3	6,12,25	6
	家の手伝いをよくやらされる	2	15,19	2
	母親の味方をする	2	20,27	3
-母親の言うことをきく	いい子をしている	3	12,19,20	4
	母親から干渉される	4	12,15,19,24	15
子どもと父親との葛藤				
-同胞と父は馬が合わない	同胞と父は馬が合わない	5	7,12,19,20,24	11
-同胞は父親に配慮している	自分よりも、同胞は父親に話しかけてあげている	4	11,15,27,28	7
-父親とはかかわり辛い	父親とどうやってかかわったらいいかわからない	6	7,12,15,19,24,27	14
	父親の意見には従わなくてはいけない	1	6	10
	父親に対して好意が持てない	5	7,12,15,22,27	9
きょうだいの結託				
-子どもたちが夫婦仲を取り持つ	夫婦仲を子どもが取り持つ努力をする	3	6,11,27	7
-同胞とまとまる	同胞と結託して親に対抗する	3	2,6,24	3
	同胞は頼りになる	6	2,6,11,17,24,27	10
	同胞とは相談し合える	3	6,11,24	7
	同胞と趣味について話す	3	2,6,28	7
	同胞が自分と親の仲を取り持つ	2	11,24	2
家族との最低限の接触				
-自分は好きなようにやっている	母親には必要最低限の連絡しかしない	2	2,17	3
	同胞とは必要最低限のかかわりしかしない	3	1,17,25	4
	自分の対応に任せられる	4	17,22,25,28	7
	あまり家族の空気を読まない	2	17,28	4
-同胞は家族にかかわって来ない	同胞は家族にあまり関心を払わない	2	19,22	7
	同胞は好きにしている	2	19,22	4

Table4-8 中結びつき家族のカテゴリー (n=11)

カテゴリー	切片名	人数	該当する対象者	切片数	
夫婦間にルールがある	子どもの前で夫婦喧嘩をしない	2	3,9	2	
	夫婦間で言いたいことが言える	2	9,26,	4	
	夫婦間で相談事がなされている	4	3,8,10,14	5	
	夫婦で一緒に行動をする	3	3,16,18	3	
両親に対する信頼	両親は子どもの意見を尊重してくれる	3	4,10,26	4	
	両親の対応はきょうだい平等だと感じる	7	3,4,9,10,16,21,26	11	
	両親の言うことを受け入れる			4	
同胞と親の衝突	同胞は父と衝突する	3	5,18,21	7	
	同胞は両親に反抗する	1	21	2	
親の過保護さ	父親は口出しをしすぎる	1	10	3	
	母親は心配しすぎる	4	10,18,26,21	5	
子ども達と母親との親密なかかわり	-同胞と母親の親密なかかわり	同胞は母親に相談をしている	3	4,5,21	7
		同胞と母親と一緒に行動する	3	3,9,21	4
	-自分と母親との親密なかかわり	母親に相談をする	5	3,10,16,18,21	6
		母親によく近況を報告する	5	5,9,16,18,21	7
		母親から、同胞ついて聞かれる	2	10,18	3
		母親に同胞の困った点を相談する	1	18	3
		母親から家族の愚痴を聞く	2	5,18	3
家族の父親への信頼	-母親は父親を頼りにしている	母親は最終的に父親に任せる	5	8,9,15,16,26	14
		同胞と父の仲裁に母親が入り、父親側につく	2	5,26	4
	-子どもの父親への信頼	父親は正論を言ってくれる	4	5,14,16,26	7
		子ども達は父親のことが本当は好き	3	5,14,16	7
母親が家族を取り持つ	-母親がきょうだいの仲を取り持つ	母親がきょうだい喧嘩の仲裁に入る	2	4,18	2
		母親を通じて同胞の近況を聞く	6	4,5,8,16,21,26	9
		母親を通じて、同胞は自分の近況を知っていると思う	2	4,26	2
	-母親から父親のことを聞く	母親から父親の近況を聞く	1	18	3
	-母親が家族に話題を振る	母親が話題の中心になって、話を振る	2	4,9	3
きょうだい喧嘩	同胞と口喧嘩する	3	4,18,21	3	
	同胞に八つ当たりをする	1	3	3	
同胞との親密なかかわり	-同胞との接触の多さ	同胞と一緒に行動する	3	3,4,10	4
		同胞と近況や趣味についてよく会話やメールをする	7	3,4,10,14,21,26	9
	-同胞への信頼	同胞と相談し合う	2	4,14	8
		同胞とは対等な関係だと感じる	3	8,16,18	3
		同胞は頼れる存在	3	14,16,26	6
		きょうだいで親の性格や家族の出来事について話す	1	3	2
同胞との必要最低限のかかわり	同胞とは必要最低限のかかわり	2	9,16	4	

Tabl4-9 高結びつき家族のカテゴリー (n=2)

カテゴリー	切片名	人数	該当する対象者	切片数
夫婦間にルールがある	夫婦間で悩みや問題について話し合う	1	13	2
	子どもには愚痴や悩みを言わない	1	13	1
	子どもの前で夫婦喧嘩をしない	1	23	1
両親に対する信頼	両親は子ども達の意見を尊重してくれる	2	13,23	2
	きょうだいどちらも平等に扱われる	1	13	2
母親と子ども達との親密なかかわり	同胞は母親に相談する	1	23	2
	母親に相談する	2	13,23	2
	母親に近況を報告する		13,23	2
父親の子どもへの関与	同胞は父の言うことをよく聞く	1	23	2
	父とは実務的な話をする	2	13,23	2
親によるきょうだい間の仲介	-父親がきょうだい間の仲介をする			
	父親から同胞の近況を聞く	1	13	1
	父親は同胞のことをよく見ている	1	13	1
	-母親を通じて家族の状況を知る			
	母親を通じて家族の状況を知る	1	23	1
	母から同胞とのかかわりを促される	2	13,23	2
-両親を介して、自分の近況が同胞に伝わる				
両親を介して、自分の近況が同胞に伝わる	1	23	1	
きょうだい間の親密なかかわり	親には話せないことも同胞との間で相談する	1	13	2
	きょうだい間で親子関係の相談をする	1	13	1
	互いに近況を連絡し合う	2	13,23	4
	同胞の話聞いてあげる	1	13	1
	同胞と家族のことをネタに話す	2	13,23	2

第 4 節 考察

家族構造ときょうだい関係との関連を探索的に調査した結果、家族構造との関連や、家族構造に特徴的な相互作用が見出された。

第 1 項 属性ときょうだい関係、家族との結びつき

はじめに、きょうだい関係スケールの下位尺度得点を用いて、各因子の相関について検討した。その結果、「共存」と「保護・依存」は中程度の正の相関が見られたことから、共に親和的な関係を捉える因子であることが示された。また、「共存」および「保護・依存」と「対立」も、正の相関が見られたことから、親和的な関係であると同時に、「対立」も生じやすく

なることが示された。さらに、「分離」関係は、「共存」や「保護・依存」と負の相関があり、「対立」との相関は見られなかった。そのため、「分離」関係は、他の関係と性質を異にする関係であることが考えられる。これは、きょうだいが青年期になるにつれて、家族外に出て行くようになり自らお互いの接触を選択することができるようになるため、接触の有無によるのではないかと考えられる。つまり、きょうだい間に接触がある「共存」、「保護・依存」、「対立」関係に対して、「分離」関係はきょうだい間に接触がないという点で、他の関係と性質を異にすることが考えられる。したがって、青年期のきょうだい関係は、接触がある関係か、あるいは接触がない関係であるかの、大きく2種類の関係があると推測される。

次に、対象者の属性ごとに、きょうだい関係スケール(飯野, 1994)の下位尺度得点と結びつき得点の平均値の比較を行ったところ、男性よりも女性の方が有意に、「共存」得点、「保護・依存」得点が高く、きょうだい間の結びつき得点も高かった。同様に、同胞の性別で比較した場合にも、同胞が男性であるよりも女性である方が有意に、「共存」得点が高く、きょうだい間の結びつき得点も高いことが示された。また、きょうだいの性別構成を独立変数とした1要因分散分析の結果においても、女きょうだいにおいて最も「共存」、「保護・依存」得点が高いことが示された。このことから、対象者が女性である場合や、女性の同胞を持つ場合、きょうだい関係を親和的だと感じやすく、特に、女きょうだいである場合には、最もきょうだい関係を親和的だと認知しやすいことが考えられる。これは、女きょうだいにおいては、男きょうだいや異性きょうだいよりも親和的な関係が多く見られることを指摘する Buist *et al.*(2002)や Kim *et al.*(2006)の結果を支持するものである。また、中学・高校・大学生の友人関係について男女別に比較した榎本(1999)によると、女性は男性よりも、

友人関係において相互に理解し尊重し合う「相互理解活動」の得点が高いことが指摘されている。反対に、男性は女性よりも、友人関係において一緒に遊ぶことを中心とする「共有活動」の得点が高く見られることが示されている。第3章(【研究Ⅰ】)で明らかにされたように、青年期においては、きょうだいは互いに個と個として対等な付き合いを始める。きょうだいが相互に理解し尊重し合う関係であることから、友人関係でいう「相互理解活動」とも近い関係と考えることができる。「相互理解活動」のように、互いを思いやる関係形成は、青年期においては、女性の方が男性よりも形成しやすいと考ええると、女性の方がより、対等なきょうだい関係を築きやすく、きょうだいの親しさを感じやすいことが推測される。同時に、「対立」得点も、女性の方が男性よりも有意に高かった。これは、女性の方が男性よりもきょうだい関係を親しいと認識していることから、かかわりが増し、同時に対立も生じやすくなることが考えられる。事実、きょうだい関係スケールの各下位尺度得点を用いて相関係数を算出したところ、「共存」関係と「保護・依存」関係は強い正の関連が見られ、「共存」関係および「保護・依存」関係と「対立」関係も、正の関連が見られた。このことから、「共存」関係および「保護・依存」関係といった親和的な関係が増えるに従い、接触頻度やコミュニケーションが増すため、きょうだい間での対立も見られるようになることがわかる。また、女性は男性よりも、自分と同胞の興味・関心や考え方が似ていると認識している(磯崎, 2007)。そもそも、青年期はそれぞれが家を離れる時間も増えることから自分自身で接触を選択できる時期であるが、親密であるためにかかわりが増しやすく、衝突も生じやすいことも考えられる。また、女性は男性よりも母親との結びつきが強いことが示された。特に青年期以降の女性は、母親の心理状態に近づくことが指摘されていることから(池田,

2006), 男性よりも女性の方が母親との結びつきを強く感じると考えられる。

さらに, 出生順位で比較をした場合には, 第1子の方が第2子よりも, きょうだい関係を対立的だと捉えていた。磯先(2007)は, 第1子の方が第2子よりも, 自己の優位性を高く認知していることを示している。そのため, 第1子は第2子よりも自己の有意性を保持するために, 第2子の行動に対して敏感に反応しやすいことが推察される。そのために, 第1子の方が, よりきょうだい間の関係を対立的だと認知することがあるのではないかと考えられる。

第2項 家族構造ときょうだい関係との関連

家族成員同士の結びつきの強さときょうだい関係との関連を検討したところ, すべての成員との結びつきが強いほど「共存」, 「保護・依存」といった親和的なきょうだい関係となり, 反対にすべての成員との結びつきが弱いほど分離的なきょうだい関係となることが示された。家族全体の結びつきとの関連が示されたことから, きょうだい関係は一部の成員との結びつきの強弱によって規定されるのではなく, 家族成員全体の結びつきによって規定されるといえる。

さらに, 本章の結果からは, 従来指摘されてきた親子関係や夫婦関係との関連だけではなく, 同胞の親子関係を受けてきょうだい関係が規定されていることも示された。McHale *et al.*(2000)は, 家事, 親の暖かさ, 親の関与度において子どもが認知する親の養育態度の差について調査し, 各領域による子どもが認知する養育態度の差の程度ときょうだい関係との関連が指摘されている。このことから, 養育態度の差をどのように認識しているかによって, きょうだい関係に与える影響が異なることを示唆している。つまり, 量的にどれほど平等であるかよりも, 差についてどのように解釈をしているか

という点の方が、重要性を持っていることが考えられる。そのため、子どもは、自分が家族内でどのように扱われているか、だけではなく、同胞がどのように扱われているのを見ることで、自分に対する親の養育について解釈していると考えることができる。また、同胞に対する親子関係を見ることで、同胞が家族内でどのように扱われている存在であるのかについて解釈し、きょうだいとのかかわり方が規定されていると考える。特に、青年期は友人関係においても、友人という存在を通じて自己理解を深めていき、人間関係を学んでいることが指摘されていることから(宮下, 1995), 青年期の自己や人間関係の形成にとって同年代の他者の存在が重要性を持っていることがわかる。また, McHale *et al.*(2000)は, 学童期のきょうだいよりも, 思春期のきょうだいの方が親の養育態度の差に反応を示すことを指摘している。つまり, 特に思春期以降, 同胞に対する親のかかわり方を通して, 同胞が家族内でどのような存在であるのかということ認識し, それが同胞に対するかかわり方にも反映されることが考えられる。このように, きょうだい関係は家族成員全体の相互作用の中で規定されるものであるといえるだろう。

しかし, 「共存」や「保護・依存」関係は家族構造間で有意な差が見られたのに対し, 「対立」関係は家族構造間で有意な差はみられなかった。この結果から, 青年期の対立的なきょうだい関係は, 家族成員の結びつきにかかわらず生じていることが考えられる。むしろ, 家族関係によるきょうだい間の葛藤的な心理が生じた場合には, お互いとのかかわりを避けようとする分離的な関係として出現したことが推察される。

第 3 項 各家族構造の詳細

さらに, 家族構造の類型ごとにインタビュー調査を実施し, 家族の相互作用を比較検討した結果, 家族構造の類型によっ

て夫婦関係，親子関係，きょうだい関係それぞれのサブシステムにおいて違いが見られた。

まず，低結びつき家族の夫婦関係においては，夫婦の意思疎通がうまくいかないという夫婦間の葛藤が見られた。また，母子関係では，母親中心のかかわりとなったり，本人が母親の情緒的・道具的サポートを行ったり，母親の言うことに従っているといった，母親との心理的距離の近さがうかがえた。父子関係に関しては，父親とどうやってかかわったら良いのかわかからないというものや，父親に対して好意を持ってないでおり，そのため同胞の方が父親に配慮した対応をしてくれているというように，本人と父親との間に葛藤があることがうかがえた。また，本人だけではなく同胞と父親の衝突も見られ，子ども達と父親との間の情緒的な結びつきが弱いことが感じられた。きょうだい関係では，同胞とは対等な関係ではないと感じたり，同胞を家族内の問題の種と見なしていることから，同胞に対して親和的な感情をあまり抱いておらず，きょうだい間に葛藤があると考えられた。一方で，同胞は頼りになる存在であり，相談や趣味について話したり，同胞が親子仲を取り持つ行動をしている場合も見られた。対象者を見ると，「きょうだい間の葛藤」のうちの“同胞とは対等な関係ではない”と発言している対象者と，「きょうだいの結託」について発言している対象者は異なっていることから，次のような場合が推察される。一つには，夫婦間に葛藤があることで，母親と子どもが強く結びつきやすく，対して父親とは疎遠になり，きょうだい間も葛藤的になる場合である。これは，夫婦間に葛藤があることで自分が親サブシステムに巻き込まれてしまい，対等に同胞と付き合うことができず，きょうだい間に葛藤が生じているのではないだろうか。つまりMinuchin(1974，山根(監訳)，1984)が指摘するように，世代間境界が曖昧になることできょうだいサブシステムとしての機

能が果たされず，葛藤的なきょうだい関係となっていることが考えられる。この場合に見られる子どもが親役割を担っている状態とは，親を情緒的に支えていることから，「親役割 (parentification) を割り当てられた状態」(Boszormenyi-Nagy & Spark, 1973)や，「子どもが親のパートナーのような役割となる状態 (spousification)」(Sroufe & Ward, 1980)」に近いと考えられる。もう一つには，家族内のストレスに対してきょうだいで結託して対処している場合である。これは，夫婦関係が葛藤的になることで，子どもが一方の親と結びつき，他方の親と敵対的になるという補償仮説 (Engfer, 1988) に従って考えることができる。つまり，母子関係や父子関係が葛藤的であるために，補償的にきょうだいが結びつき結託した関係が見られるようになると考えることができる。

以上までは家族とのかかわりについての発言が主であるが，反対に，母親，父親，同胞とは，最低限の接触しかしないという発言や，同胞もあまり家族にかかわってこないという発言が見られた。家族とは最低限のかかわりであるという発言をした対象者を見ると，上述したように家族成員間の葛藤などについて言及している対象者とは，異なる対象者であった。また，対象者とした大学生の結びつきの平均値を見ると，すべての結びつきの平均値が中央値よりも高いことから，低結びつき家族として類型化された家族であっても，まとまりが全くないような非常に結びつきが弱い家族ではないといえよう。したがって，低結びつき家族には，大学進学等によって家族から離れ，接触を取る機会が減ったことで，家族成員との結びつきが弱いと認知している場合や，あまり家族に頼ることなく自分自身の力で日常生活を送れていることから，家族への興味・関心が低く，比較的結びつきが弱いと認知している場合などが含まれていると推察される。つまり，結びつきが弱い家族構造においては，家族内に葛藤が多いために結

びつきが弱いと認知している場合もあれば，家族から離れていることで結びつきが弱いと認知している場合も含まれていると考えることができる。

また，中結びつき家族においては，夫婦間のルールがあり，夫婦間で相談したり言いたいことが言えており，夫婦間で問題の解決がなされていることがうかがえた。また，両親が子どもの意見を尊重してくれたり，平等な対応をしてくれることから，子ども達は両親に対して信頼感を抱いていることが感じられた。Deal(1996)によると，夫婦間葛藤がある場合には，両親間できょうだいに対する養育態度が異なるが，両親が相互に尊敬しあう肯定的なコミュニケーションをとる場合には，両親間できょうだいに対する養育態度の差は少なくなることが指摘されている。この指摘にあるように，中結びつき家族においては，夫婦間で相談したり言いたいことを話し合うことで，肯定的なコミュニケーションとなり，きょうだいも両親から平等な扱いを受けていると考えることができる。また，母親と親密なかかわりであることや，父親に信頼を寄せている発言が見られた。母親を介して同胞や父親の情報を聞いたり，母親が家族に話題を振って，家族成員間のかかわりが円滑になるよう，潤滑油として働いていることがうかがえた。きょうだい関係としては，きょうだい喧嘩も見られる一方で，同胞と頻繁に接触したり，きょうだいは対等な関係だと認識し，同胞に信頼感を持っているなどのきょうだい間で親密なかかわりがなされていることがうかがえた。戸田ら(2002)において，父子間を母親が調節する取り持ち行動をとることで，夫婦間の仲の良さを子どもに認知させ，父子間の親和性を高めることが指摘されているが，母親の取り持ち行動は夫婦関係に対する見方や父子関係の親和性の促進だけではなく，きょうだい間での取り持ち行動である場合には，きょうだい間の親和性を促進していることが考えられる。また，

対象者を見ると、同胞と喧嘩をすると答えた者も、同胞と親密な付き合いもすると発言しており、きょうだい喧嘩と親和的なかかわりは同時に存在することがわかる。きょうだい関係スケールの相関について、「共存」や「保護・依存」関係と「対立」関係は正の相関があったことから、きょうだい間での接触が多く、親和的なかかわりもなされる反面、時に衝突が生じることがあると考えられる。このように、肯定的な夫婦関係によってきょうだいが平等に扱われ、母親の取り持ち行動によってきょうだい間のかかわりが促されることで、親和的なきょうだい関係や、時に対立も見られると考えることができる。その一方で、同胞とは必要最低限のかかわりであるという発言も見られた。それぞれが、家族から離れ自立して生活していることや、母親が仲介役になってくれることで、きょうだい間での連絡は必要最低限にとどまる場合もあると考えられる。

加えて、高結びつき家族においては、夫婦間のルールがあり、夫婦間で問題解決がなされたり、相談事がなされることで、子どもの前では喧嘩や愚痴を言わないでいることがうかがえた。また、子ども達は母親に相談事をするなどの親密なかかわりや、父親とも学校などの実務的なことを話していることが見られた。また、母親や父親を介してきょうだい間での情報が行き来しており、きょうだいが互いにそれぞれの様子をよく把握していることがうかがえた。加えて、きょうだい同士でも近況を報告したり、相談をするなどの頻繁な連絡を取っている様子がうかがえ、親を介してそれぞれの情報が行き来することで、きょうだいは常に互いを身近な存在と感じ、親和的なかかわりがなされるのではないかと考えられた。

以上のことから、家族構造の類型によって、夫婦関係、親子関係、きょうだい関係において、それぞれの特徴が見られた。家族成員全体の結びつきの高さときょうだい関係は関連

することからも、家族成員間のそれぞれの関係が関連し合い、きょうだい関係の規定につながっていることがわかる。

第 4 項 第 5 章(【研究Ⅲ】)への示唆

【研究Ⅱ】を通じて、家族全体の結びつきが強い家族構造であるほどきょうだい関係は親和的になり、結びつきが弱い家族構造であるほどきょうだい関係が分離的になることが見出された。さらに各家族構造について詳細に検討すると、家族の結びつきが弱い家族構造では、きょうだいが互いに家族から離れているために、接触や関心が少ないことで結びつきが弱いと認知している場合や、きょうだいが結託して家族ストレスに対処している場合、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)が指摘するように世代間境界が曖昧になり自分が親サブシステムに巻き込まれ、きょうだい関係が葛藤的になっている場合など、一つの家族構造の類型の中に質の異なるきょうだい関係が見られた。このことから、家族と離れて生活している大学生のきょうだい関係を捉えるためには、結びつきに着目するよりも、子どもが親役割を担っている状態に着目することが、きょうだい関係を捉える指標となることが示唆された。特に、大学生という時期は家族と心理的・物理的距離があくため、家族成員の結びつきよりも、青年が親役割を担うことに着目することが、家族の状態を捉えるために役立つと考えられる。今後、親役割に着目し、きょうだい関係との関連について検討していくことが求められる。ただし、本章のインタビュー調査から得られた結果は、あくまで全対象者の一部であることに留意が必要である。各類型のインタビュー対象者の割合は、低結びつき家族では、クラスタに含まれる全対象者のうちの約 15%程度いるが、中結びつき家族では約 9%、高結びつき家族においては約 4%に留まっており、類型間で偏りがある。したがって、本章のインタビュー調査

の結果が、各家族構造について、すべてを抽出しきれているとはいえないであろう。特に、高結びつき家族においては、インタビュー対象者が2人と非常に少ないことから、この結果は高結びつき家族の一つの特徴として解釈するに留まる。また、各家族構造の相互作用の特徴について詳細に検討することが主な目的であったため、対象者をクラスタ分析し、家族の類型ごとに詳細に調査を行った。だが、クラスタ分析は、対象者の類似度・非類似度に基づいて対象の群分けを行う分析であるため、示された役割の類型は、サンプリングによって異なってくることに留意が必要である。つまり、各類型における特徴は、本章の調査対象者に依存した結果である。したがって、低結びつき家族や高結びつき家族といったクラスタ名であるからといって、必ずしも低結びつき家族が病理的な家族であったり、高結びつきが理想的な家族を示しているのではないことに留意が必要である。Table4-1にあるように結びつきの平均値を見ても、全体的に中央値以上の値をとっていることから、低結びつき家族に含まれる対象者も、非常に結びつきが低く問題を抱えた家族ばかりであるとはいえないだろう。本調査の調査対象者の中において、結びつきが低い対象者の類型であるという解釈を行う必要がある。

また、本研究の目的は、きょうだい関係が家族関係とどのように関連しているのかについて、包括的に家族を捉え検討を行うことであったため、男女差や同胞の性別、きょうだいの性別構成等の別に家族関係ときょうだい関係との関連について、詳細な検討は行わなかった。しかし性別や出生順位によって家族関係の認知に違いがあることが指摘されており(例えば、磯崎, 2007)、本章からも、属性によってきょうだい関係や結びつきの得点が異なることが示された。そのため、属性によっては、家族関係ときょうだい関係との関連は異なってくることも考えられる。一方で、きょうだい関係研究の

課題として、属性の煩雑さがある。以上を踏まえ、第 5 章(【研究Ⅲ】)以降では、多様なきょうだいの属性の組み合わせをどのように扱っていくのかという手法の検討も試みることにする。

第 5 章

【研究Ⅲ】

青年が担う家族内の役割尺度の作成

第 1 節 目的

第 4 章(【研究Ⅱ】)において、結びつきの低い一部の家族構造においては、きょうだいのうちの一方が母親の情緒的・道具的なサポートをするという状態が見られたのに対して、結びつきの高い家族構造においては、夫婦間でのルールが明確で、子どもが巻き込まれた状態は見られなかった。このような家族構造間の違いは、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)のモデルにあるように、世代間境界の有無によるものではないかと考えられた。よって、家族の状態を捉えるにあたり、子どもが親サブシステムに巻き込まれた状態が指標となることが示唆された。そこで、本章(【研究Ⅲ】)では、青年の親役割に着目することを提案し、親役割と子役割からなる尺度を作成することを目的とする。

かねてより家族療法家は“親のような役割を担う子ども”に着目してきおており、Boszormenyi-Nagy & Spark(1973)は、発達上不適切なほど、1人または複数の子どもが家族内で親の役割を満たす存在となっている状態を「親役割(parentification)」を割り当てられた状態と表現している。Jurkovic(1998)および Jurkovic *et al.*(1991)は、離婚や夫婦間葛藤によって“破壊的な”家族の形態が生じることで、子どもが親役割(parentification)を担うリスクが高まることを指摘している。また、離婚や死別によって物理的に片親が失われた場合や、アルコール依存や仕事依存等によって心理的に一方の親が不在となった場合にも多く見られることが指摘されている(Chase *et al.*, 1998; Carroll & Robinson, 2000; Jurkovic *et al.*, 2001)。Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)および Hooper *et al.*(2008), Hooper & Wallace(2010)によると、子どもや青年が燃え尽きたり、子どもの発達に見合わないほど多くの責任を負わされたりしている場合には、子どもの精神的健康に負の影響が生じることが明らかにされている。

一方で、Walsh *et al.*(2006)および Herer & Mayseless(2000)においては、親役割の適応的な側面が指摘されており、離婚等によって一時的に家族形態が変化した場合に見られる親役割は、適応的であることが示されている。つまり、家族システムを維持するためには、親役割を担うことは必要である一方で、子どもの発達に見合わないほど過度に親役割を担ったり、長期に渡り親役割が固定されると、子どもの精神的健康や心理的発達に否定的な影響が生じると考えることができる。

しかしながら、従来の子どもが担う親役割を測定している親役割測定尺度 (parentification questionnaire)(Sessions & Jurkovic, 1986)では、子どもが親に代行してどのような役割を担っているかを測定することが目的となっている。そのため、子どもがどの程度の比重で、家族内でその役割を担っているのかは不明である。先行研究の概観を通じて、発達上適切な親役割は問題視する必要はなく、子どもの発達に見合わないほど過度であったり、長期に渡り固定化した親役割に着目する必要があるが見出された。したがって、子どもが発達上不適切なほどの比重で親役割を担っているのかどうかを捉えるために、親役割だけではなく、子どもが、子どもサブシステム内において担っている役割についても着目する。よって、親役割測定尺度 (parentification questionnaire)(Sessions & Jurkovic, 1986)を参考に親役割の項目を作成し、同時に子役割の項目を作成する必要があると考える。

以上のことから、本章(【研究Ⅲ】)では、親役割と子役割を測定する尺度を作成し、内的整合性、妥当性の検討を行う。特に、青年自身が認知する親からの期待は青年の職業選択、社会的行動、精神的健康等に大きな影響を及ぼす重要な要因であることから(例えば、Feldman & Wood, 1994; Neuenschwander, Vida, Garrett, & Eccles, 2007; 藤目・東條・鈴木, 2008), 親役割と子役割をどの程度青年が期待されているのかについて

測定することとする。また、親役割は親役割研究で多く使用されている親役割測定尺度 (parentification questioniar)(Sessions & Jurkovic, 1986)を参考に項目を作成する。

第 2 節 方法

調査対象者および手続きについて示す。

第 1 項 対象者

調査対象者は東北地方の A 大学, B 大学に通う大学生 470 名であった。470 名のうち, 455 名から質問紙を回収し(回収率 96.80%), そのうち, 回答の半分以上に欠損のある者, 母子・父子家庭の者を除いた 429 名のデータを分析の対象とした。対象者の平均年齢は, 20.82 歳 ($SD=0.63$)で, 男性 266 名, 女性 156 名, 不明 7 名であった。

第 2 項 調査方法と調査時期

大学生に対して自記式質問紙調査を行った。調査者が, 授業を持つ教員数名に質問紙配布の実施の依頼をし, 承認が得られた講義の時間を借りて, 受講している学生に対して質問紙を配布した。授業終了前に時間を取り一斉に質問紙に回答してもらい, 終了後に回収を行った。

調査時期は 2012 年 9 月～12 月であった。

第 3 項 質問紙の構成

(1)フェイスシート

性別, 年齢, 家族構成, 生活形態について記入を求めた。

(2)家族内の役割尺度

青年が, 家族内でどのような役割期待を感じ, その期待に対

してどのように行動しているのかを測定することを目的とした尺度であり，独自に作成した。作成する際，親役測定尺度 (parentification questionnaire)(Sessions & Jurkovic, 1986) を参考にしながら，家族に対して子どもが親のように道具的・情緒的なサポートをする働きをしている状態，つまり青年が親と横並びになっている関係を想定し「親役割」を作成した。そして「親役割」に対し，親と青年が上下になっている関係を想定し「子役割」を作成した。さらに，心理学を専門とする大学教員 1 名，心理学を専攻する大学院生 3 名により，内容的妥当性の検討を行い，最終的に「親役割」6 項目，「子役割」6 項目からなる，合計 12 項目の原案が作成された。

回答は，「あなたが家族からどのくらい期待されているかについてお答えください」という質問(家族からの期待を問う質問)に対して，1(全くそうではない)から 4(大変そうである)の 4 件法で回答を求めた。

(3)親子関係診断尺度(EICA)(辻岡・山本, 1976)

作成した「家族内の役割尺度」の構成概念妥当性を検討することを目的として，親子関係診断尺度(EICA)(辻岡・山本, 1976)を使用した。この尺度は因子的妥当性が高く，「情緒的支持」，「同一化」，「統制」，「自律性否定」の各 10 項目の 4 因子から構成されている。さらに，辻岡・山本(1978)は，主成分分析を行い，2 次因子として，「情緒的支持」(第 1 主成分への因子負荷量 .87，第 2 主成分への因子負荷量 -.02)と「同一化」(第 1 主成分への因子負荷量 .89，第 2 主成分への因子負荷量 .09)からなる「受容性-拒否性」因子と，「統制」(第 1 主成分への因子負荷量 .14，第 2 主成分への因子負荷量 .83)と「自律性否定」(第 1 主成分への因子負荷量 -.21，第 2 主成分への因子負荷量 .80)からなる「統制性-自律性」因子の 2 つの因子が見出されている。そこで，項目数を考慮し，「受容性-拒否性」因子と「統制性-

自律性」因子それぞれにおいて、因子負荷量の高い「同一化」因子と「統制」因子を用いることとした。辻岡・山本(1978)によると、「同一化」は「子どもが、自分の父(または母)は子ども自身と一体感をもち、意識の底で子どもを親自身と同一化し、自分の延長あるいは分身として子どもを認知していることを、子ども自身もまた感じ取る傾向をとらえるものである。所謂親子の肉親間の『へその緒』によって象徴される親子の臍帯的な結合の強度を測定するものである」とされ、子どもがどの程度、親が自分と一緒に過ごしたかということや、親が自分を喜ばそうとしているかを感じているかを問う項目からなる。また、「統制」とは「親の子どもへの統制、しつけ、訓育、勉学等へのきびしさ、すなわち親からの超自我の圧力を子どもがいかに認知しているかを調べるもの」であり、どの程度、親が子どもの発言や自由を制限したり、子どもに対して秩序を順守させようとしているかを問う項目からなる。回答は1(まったくあてはまらない)から6(非常にあてはまる)の6件法で求めた。親子関係診断尺度は、本来、中学生・高校生を対象として用いられるが、大学生に対しても多く使用例が見られていることから(例えば、佐藤, 2001)、本研究においても使用可能であると判断した。

「親役割」は青年が親に道具的・情緒的に近づき、青年が親の役割を代行する状態を想定している。親の役割を代行するためには、青年が家族のニーズを察知し親の考えや心情を理解することが必要であろう。したがって、自分の父(または母)が子ども自身と一体感をもち、自分の延長または分身として子どもを認知していることを、青年が感じ取っている「同一化」と正の相関があることが考えられる。反対に「子役割」は親と青年が上下の関係であることを想定し、子どもが親の決めたルールに従順であることや、子どもが親に従うといった項目が含まれる。したがって、親からの規範的なかわりを子どもが認知してい

る「統制」と正の関連があることが考えられる。

第 4 項 倫理的配慮

対象者に対して質問紙実施前に口頭で、本調査は強制ではないこと、不快感を感じる事等があった場合には回答を途中で中断することができ、その場合にも対象者が不利益をこうむることはないこと、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されることはないこと、研究以外の意図でデータを使用することはないことを説明し、それに同意した上で質問紙に回答するよう説明した。また、同様の内容は質問紙のフェイスシートにも記載し、対象者自身にも各自読んでもらい、質問紙への自発的参加、守秘義務について対象者が同意した上で実施された。

第 3 節 結果

尺度の内的整合性の検討，妥当性の検討，各下位尺度得点について示す。

第 1 項 家族内の役割尺度の因子構造の検討

天井効果，フロア効果は見られなかったため，全 12 項目に対して，最尤法，プロマックス回転による探索的因子分析を行った。負荷量.35 以上を基準として検討した結果，まず問 8「私は家族から，私が親に頼ることを期待されている」が第 1 因子への因子負荷量.17，第 2 因子への因子負荷量.27 であったため削除された。次に 11 項目に対して因子分析を行ったところ，問 2「私は家族から，家事をすることを期待されている」が第 1 因子への因子負荷量.33，第 2 因子への因子負荷量.17 であったため，削除された。さらに 10 項目に対して因子分析を行ったところ，すべての項目が負荷量.35 以上であり，解釈可能な 2 因子 10 項目が抽出された (Table 5-1)。第 1 因子は，「私は家族から，家族のメンバーを励ましたり手助けすることを期待され

ている」といった項目に高い因子負荷量を持つことから、青年が親と横並びの関係になるように振る舞うことを家族内で期待されていることから、「親役割」と解釈された。第2因子は、「私は家族から、親に従順であることを期待されている」といった項目に高い因子負荷量を持つことから、親と青年が上下の関係になるよう振る舞うことが家族内で期待されていることから、「子役割」と解釈された。

Table5-1 家族内の役割尺度の因子分析結果(プロマックス回転後のパターン)

項目	因子	
	親役割	子役割
問4 私は家族から、家族のメンバーを励ましたり手助けすることを期待されている。	.82	-.03
問3 私は家族から、家族に何か起こったとき、私が行動することを期待されている。	.62	-.08
問5 私は家族から、家族を楽しませることを期待されている。	.51	.00
問1 私は家族から、親の愚痴や相談事を聞いてあげることを期待されている。	.50	.06
問6 私は家族から、家族の世話をすることを期待されている。	.45	.15
問12 私は家族から、親に従順であることを期待されている。	-.07	.85
問9 私は家族から、親が決めた進路選択をすることを期待されている。	-.01	.64
問10 私は家族から、門限や交友関係など親が決めたルールに従うことを期待されている。	.00	.64
問7 私は家族から、親になんでも報告することを期待されている。	.16	.51
問11 私は家族から、何か問題が起こったとき、それにかかわらないことを期待されている。	.00	.38
因子間相関		
	親役割	1.00
	子役割	.36

第2項 家族内の役割尺度の内的整合性・妥当性の検討

(1) 内的整合性の検討

抽出された2因子それぞれのCronbachの α 係数を算出したところ、「親役割」 $\alpha = .72$ 、「子役割」 $\alpha = .74$ であった。

(2) 因子的妥当性の検討

因子的妥当性を検討するため、10項目を観測変数、探索的因子分析で抽出された因子を潜在変数とする因子分析モデルを構成し、確認的因子分析を行った。分析を行った結果、適合度指標は、 $\chi^2(34)=76.93(p<.001)$, GFI=.97, AGFI=.95, RMSEA=.05, AIC=118.93であった。

(3) 構成概念妥当性の検討

EICAの各下位因子の α 係数を算出したところ、父親版「統制」 $\alpha=.92$ 、「同一化」 $\alpha=.92$ 、母親版「統制」 $\alpha=.94$ 、「同一化」 $\alpha=.93$ とそれぞれ十分な値が得られた。

次に尺度の構成概念妥当性を検討するために、家族内の役割（「親役割」、「子役割」）と、父親版・母親版EICAの下位因子（「統制」、「同一化」）とのPearsonの積率相関を求めた（Table5-2）。その結果、「親役割」は父親版・母親版の「統制」と弱い正の相関があり（ $r=.16, p<.01$; $r=.19, p<.001$ ）、「同一化」とも弱い正の相関が見られた（ $r=.25, p<.001$; $r=.28, p<.001$ ）。また、「子役割」は父親版・母親版の「統制」と中程度の正の相関が見られ（ $r=.42, p<.001$; $r=.51, p<.001$ ）、「同一化」と弱い正の相関が見られた（ $r=.20, p<.001$; $r=.28, p<.001$ ）。

Table5-2 役割とEICAとの関連 ($n=429$)

	父親:統制	父親:同一化	母親:統制	母親:同一化
親役割	.16**	.25***	.19***	.28***
子役割	.41***	.20***	.51***	.28***

*** $p<.001$, ** $p<.01$

第3項 各下位尺度得点と属性ごとの比較

性別、きょうだいの有無、出生順位別に尺度の平均値と標準偏差を算出した（Table5-3）。さらに、これらの属性によって得

点に差があるかを検討するために、属性を独立変数、家族内の役割尺度の下位尺度得点を従属変数とした t 検討を行った。

まず男女で得点の比較を行ったところ、「親役割」得点 ($t(420)=3.46, p<.01$), 「子役割」得点 ($t(420)=5.10, p<.001$) について、男性よりも女性の方が有意に高い値を示した。また、きょうだいの有無で得点の比較を行ったところ、きょうだい無群と有群との間で、有意な得点の差は見られなかった。そして、きょうだいがおり出生順位が明らかな者 ($n=374$) を対象に、出生順位(第1子・第2子以降)で得点の比較を行った。その結果、「親役割」得点 ($t(346,81)=3.72, p<.001$) において、第2子以降よりも第1子の方が有意に高い値を示した。

Table5-3 基本属性の集計結果と基本属性の比較(性別・同胞の性別・出生順位)

	<i>n</i>	性別		<i>t</i> 値 <i>df</i>	きょうだいの有無		<i>t</i> 値 <i>df</i>	出生順位		<i>t</i> 値 <i>df</i>
		男性	女性		無	有		第1子	第2子以降	
親役割	<i>M</i>	2.28	2.47	3.46**	2.39	2.35	.42	2.46	2.25	3.72***
	<i>SD</i>	.55	.57	420	.65	.56	427	.59	.49	346,81
子役割	<i>M</i>	1.96	2.29	5.10***	2.11	2.07	.40	2.13	2.02	1.50
	<i>SD</i>	.62	.67	420	.67	.66	427	.67	.65	372

*** $p<.001$, ** $p<.01$

第4節 考察

家族内の役割尺度を作成し、内的整合性と妥当性の検討を行ったところ、十分な値が示された。また、性別・きょうだいの有無・出生順位のそれぞれを独立変数、役割得点を従属変数として、属性による役割得点の比較を行ったところ、性別や出生順位といった属性により有意な差が見られた。

第1項 「親役割」, 「子役割」についての検討

家族内の役割尺度について探索的因子分析を行った結果、「親役割」, 「子役割」の2因子が抽出された。項目の内容を見ると「親役割」は、「私は家族から、家族のメンバーを励ましたり手

助けすることを期待されている」といったものが高い因子負荷量を示しており、青年が親のように家族関係の安定や調整を図る役割をとる項目がまとまった。作成時に参考にした親役割測定尺度(parentification questionnaire)(Sessions & Jurkovic, 1986)の「情緒的な親役割代行」因子においても、家族の中で自分が問題解決をしたり、陰ながら自分が犠牲となっていることを問う質問項目が高い因子負荷量を示しているが、これらの項目は、青年が家族内を調整し、親に代わって負担を負うという点で、「親役割」の項目と類似している。このことから、「親役割」とは、青年が、家族内を安定状態に保つよう調整する負担を負っている状態であると考えられる。

また、構成概念妥当性の検討のために、EICA との関連について検討したところ、予想したように「親役割」と父親の「同一化」、母親の「同一化」との間にそれぞれ弱い正の相関が見られた。このことから、親が自分の延長あるいは分身として子どもを認知していることを、青年自身も感じ取っているほど、親役割期待を感じていることがわかる。加えて、父親・母親の「統制」との間にも弱い正の相関が見られている。このことから、子どもが親に近い考え方や感じ方を持っている一方で、家族の中では、子どもという立場から、家族内での規則を守ることも求められていると推察される。つまり、親役割とは、青年が親よりも上の立場になったり、完全に親と同じ立場に立つのではなく、あくまで青年期にある“子ども”として、家族内を調整する負担を負うことだと考えることができる。

反対に「子役割」は、項目を見ると、「私は家族から、親に従順であることを期待されている」といったものが高い因子負荷量を示しており、青年が親の言うことに従う役割をとる項目がまとまっている。また、EICA との間には予想したように、「子役割」と父親の「統制」、母親の「統制」との間にそれぞれ中程度の正の相関が見られた。このことから、横並びの親子関係

である「親役割」に対して、「子役割」は、想定したように、親子間の関係が上下の関係となっていることが考えられる。加えて、「同一化」との間にも正の相関が見られた。これは、青年が親の“子どものままであってほしい”，“自分の子どもは大人になっても子どもとして見る”という親の心情を子どもが察することで、子どもが親に対して従順な振る舞いをするために、関連が見られたのではないかと考えられる。特に、青年期には親を配慮する気持ちが生まれ、心理的距離が近くなることが指摘されていることから(宮下, 1996), 親の心情を汲んで、子役割をとっているのではないかと考えられる。以上のように、「親役割」と「子役割」ともに、「統制」と「同一化」と関連が見られたことから、大学生という時期は、親とほぼ同様の振る舞いが求められていると同時に、子どもとしてもあってほしい、という期待を受けている時期ではないかと推察される。

また、 α 係数の算出を行ったところ、「親役割」が $\alpha = .72$ 、「子役割」が $\alpha = .74$ であり、十分な内的整合性が確認された。この結果からも、本尺度の因子内の信頼性が高いといえ、一貫した項目のまとまりであることが確認された。さらに、因子的妥当性の検討を行ったところ、高い適合度が得られたことから、2因子構造が妥当であると考えられる。

以上のことから、「親役割」は青年が親と横並びの関係になることで、家族を調整する役割であり、他方「子役割」は親と青年が上下の関係になり、親の言うことに従う役割であると考えられる。

第2項 属性と役割との関連

属性と家族内の役割との関連について検討を行うために、属性を独立変数、家族内の役割尺度の下位尺度得点を従属変数とする対応のない t 検討を行った。その結果、男性よりも女性の方が、有意に「親役割」・「子役割」得点が高く、第1子の方が

第2子以降よりも「親役割」得点が有意に高いという結果が得られた。

まず、性別について考察する。第4章(【研究Ⅱ】)より、男性よりも女性の方が、家族との結びつきが高いことが示されたことから、女性は男性よりも家族成員とのかかわりが多いことが考えられる。このことから、女性は男性よりも家族との接触頻度や会話量が多く結びつきを強く感じているために、男性よりも家族内のニーズに敏感であることが考えられる。つまり、女性は男性よりも、家族内の状況や家族成員のニーズで敏感であるために、役割期待を多く感じていることが考えられる。また、池田(2009)は、男子大学生は親からの期待に反発するのに対し、女子大学生は、親の期待に対して表面的に迎合する傾向があることを指摘している。つまり、女性は男性よりも家族内のニーズに敏感であるために、家族からの期待に迎合していることが考えられる。加えて、伊藤(1986)は、大学生にとって、女性役割期待として共同性が求められていることを明らかにしている。共同性とは、思いやることや気配りをすること、献身的であるといった、他者に対して配慮する性質を指す。つまり、女性は性役割として、他者を配慮するような役割が求められているといえるだろう。また、男性役割期待として、作動性、つまり行動力や指導力、意志の強さを持つことが求められている。女性として他者を配慮することが求められていることから、女性は男性よりも、家族を調整するような親役割期待を受けやすいことが考えられる。また、行動力や指導力は男性に求められていることから、女性はより家族に従順であることを求められやすく、男性よりも女性の方が子役割期待も高いことが考えられる。

また、きょうだいの有無による有意差は見られなかった。このことから、きょうだいの有無にかかわらず、青年は家族内の役割期待を感じていることがわかる。つまり、家族成員の数

にかかわらず，家族システムの一員として役割期待がなされているといえる。さらに，きょうだいがいる者について，出生順位による「親役割」・「子役割」得点の比較をしたところ，第1子の方が第2子よりも，有意に「親役割」得点が高かった。中山(1992)は，母親から子どもに対する達成期待について調査し，出生順位による達成期待の差は見られないことを指摘し，伝統的な役割期待が薄れていることを示唆している。しかしながら，中山(1992)で扱った達成期待は，家庭外である勉強や適切な人間関係といった社会適応に関する期待についてであった。本研究では家族内の役割に着目したところ，出生順位による有意差が見られたことから，家族内の役割においては，出生順位に対する伝統的な役割期待が存在していることが考えられる。つまり，兄・姉として見なされることで，家族関係を調整するような役割が周囲から期待されていることがうかがえる。

以上のように，性別や出生順位，すなわち属性によって役割に差が見られたことから，ある属性であることによって，特定の相互作用が生じているという場合があると解釈することができる。役割期待の機能として，他者の行動を拘束するルールとなることに着目し，相互作用を捉える概念として役割を見なすと，ある属性であることで，周囲から特定の役割期待がなされていると考えることができる。また，その期待に対する特定の行動の仕方が出現すると解釈することができる。したがって，本研究の目的に従い，属性を役割として捉え直すことができると考える。

第3項 第6章(【研究Ⅳ】)への示唆

本章(【研究Ⅲ】)では，家族内の役割尺度を作成し，その内的整合性および妥当性の検討を行った。その結果，「親役割」と「子役割」の2因子からなる尺度が作成された。「親役割」とは，子どもが親と横並びの関係となり，家族内を調整する負担

を負う因子であることが示された。また、「子役割」は、親と子どもが上下の関係となる因子であることが示された。しかし、本尺度の項目の中心は役割期待を問うものであり、それらの項目について内的整合性および妥当性の検討が行われた。以降では、本研究の目的に照らし、相互作用を捉える概念として役割を位置付けるために、役割期待だけではなく役割行動についてもたずねる必要がある。そのため、【研究Ⅲ】で作成された尺度を用いて、役割行動についても測定することが求められる。加えて、役割期待および役割行動との関連性について検討し、役割期待と役割行動がどのように生じているかについて示すことが求められる。特に、家族関係との関連から検討を行い、家族関係の文脈の中で、どのように役割を担っているのかを示すことが求められる。そして、大学生の親役割と子役割について、一層理解を深めていくことが必要だろう。

また、本章では属性と役割との関連を検討したところ、属性によって役割得点が異なることが示されたことから、属性によって特定のパターンが生じていると考えられた。本研究の目的においては、属性によって生じる相互作用に着目し、役割として捉えることで、きょうだい関係の説明を試みている。したがって、次章以降では、属性にかかわらず、役割に着目していくこととする。

第 6 章

【研究Ⅳ】

家族機能ときょうだいの役割パターンとの 関連

第 1 節 目的

第 4 章(【研究Ⅱ】)において、家族構造間における違いは、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)のモデルにあるように、世代間境界の有無によるものではないかと考えられ、家族の状態を捉えるにあたり、子どもが親サブシステムに巻き込まれた状態が指標となることが示唆された。中でも、家族全体の結びつきが弱い家族構造では、大学生となり家族との接触が減少したために結びつきが弱いと認識し、きょうだいとも必要最低限の接触である場合と、家族成員間に葛藤が多く、青年が母親の情緒的・道具的サポートとなっており、きょうだい関係も葛藤的であるという場合が見られた。つまり、接触が少ないことで結びつきが低いと認知している家族と、葛藤的な家族であるために結びつきが低いと認知している家族というように、質の異なる家族関係が見られた。この質の違いは、世代間境界が曖昧となり、子どもが親サブシステムに巻き込まれているかどうかの違いだと推察された。ゆえに、大学生のように家族との接触がもともと減少していく時期においては、子どもが親役割を担っている状態に着目する方が、より家族の状態を捉えてきょうだい関係を説明することができるのではないかと考えられた。そこで、第 5 章(【研究Ⅲ】)では、青年が担う親役割を捉えるために、親役割と子役割からなる尺度の作成を行った。だが、そもそも、家族関係の文脈の中で青年はどのように役割を担っているのだろうか。

まず、役割について整理すると、これまでの役割研究から、人は役割を割り当てられることで、与えられた役割期待に応じた行動をとるようになることや(Haney *et al.*, 1973)、発話者は、相手に抱く役割期待に応じて、対話の内容を選択していることが指摘されており(青木, 1993)、役割期待をすること・されることによってコミュニケーションが拘束され、対人関係においてルールが与えられていることがわかる。さらに役割期待に対

して役割遂行をすることが、友人関係の親密化・維持において重要となること(下斗米, 2000)が指摘されており、役割期待によって与えられたルールに沿うことで、関係形成・維持がなされることが考えられる。すなわち、役割期待をすること・されることでコミュニケーションが拘束され、対人関係における相互作用のルールとなるといえる。そして、そのルールの下で役割行動をとることによって関係の形成・維持がなされると解釈することができる。したがって、役割を、相互作用を捉える概念として用いることができるだろう。

家族内での相互作用については、Minuchin(1974, 山根(監訳),1984)のモデルを参考にすることができる。Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)によると、明確な世代間境界が保たれている家族、つまり機能的な家族では、夫と妻の間で情報が保持されるが、養育のために親が子どもに接近できる柔軟さも持ち合わせている家族であるとされる。一方で、世代間の境界が曖昧な家族、つまり非機能的な家族では、子どもが親サブシステムの階層に入り、あるべきポジションにおらず、親のような役割を担うと述べられている。また、きょうだいサブシステムでの相互作用が阻害されると述べている。このことから、機能的な家族では、夫婦・親子・きょうだいの各サブシステム内で相互作用がなされるが、非機能的な家族では巻き込まれた子どもと親との間で相互作用がなされ、きょうだいサブシステムでの相互作用は見られない状態があると考えることができる。

しかし、青年期の子どもが親役割を担うことの、適応的な側面も指摘されている。Walsh, *et al.*(2006)は、凝集性の高い家族においては、凝集性の低い家族よりも、青年が親役割を担うことを指摘している。また、青年期という時期は、子どもが親と対等な関係に移っていくことから(落合・佐藤, 1996)、親のように家族のメンバーを励ましたり、時には親を情緒的に支えることがあっても不思議ではない。凝集性が高く適応的な役割

として青年の親役割が出現する家族を、機能的な家族であると考え、機能的な家族では、発達に適したものとして、青年が親役割を担っていると考えることができる。

Minuchin(1974, 山根(監訳),1984)のモデルと、青年期という発達段階を踏まえると、機能的な家族では、青年期のきょうだいが、発達に適したものとして、それぞれ親役割を担っていると考えることができる。さらに、きょうだいサブシステム間の相互作用があることから、きょうだいが独立して親役割を担っているのではなく、互いに影響し合いながら親役割を担っていることが考えられる。したがって、家族機能の高い家族では、自分も同胞も親役割期待を受け、親役割行動をとっているが、さらに自分の親役割期待と同胞の親役割期待、自分の親役割行動と同胞の親役割行動が関連し合っていると推察される。一方、家族機能の低い家族では、親サブシステムに巻き込まれた青年は親役割を担っているが、巻き込まれていない子どもは親役割を担っていないと考えられる。さらに、きょうだいサブシステム間の相互作用が阻害されていることから、きょうだい間で役割は関連し合っていないであろう。したがって、家族機能の低い家族では、きょうだいのうちに親役割期待を受け親役割行動をとっている青年と、親役割期待を受けていない、あるいは受けても行動しない青年とが見られ、さらに、自分の親役割期待と同胞の親役割期待、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連は見られないと推察される。

以上のことから、次の仮説が立てられる。

①家族機能の高い家族の場合には、自分の親役割期待と親役割行動、同胞の親役割期待と親役割行動との間に相関があり、また、自分の親役割期待と同胞の親役割期待や、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との間にも相関がある。

②家族機能の低い家族の場合には、きょうだいの一方のみに親役割期待と親役割行動の高い相関があるが、もう一方のきょう

うだいの親役割期待と親役割行動は弱い相関がある。

よって、本研究では、第 5 章(【研究Ⅲ】)で作成した尺度を用い、家族機能の高い家族と低い家族の比較を通じて、家族の状態を反映し、きょうだいがどのように役割を担っているのかを明らかにする。また、子役割についても、家族機能の状態によって、どのような特徴が見られるのかについて明らかにしていく。

第 2 節 方法

調査対象者および手続きについて示す。

第 1 項 対象者

調査対象者は東北地方の A 大学、B 大学に通う大学生 470 名であった。470 名のうち、455 名から質問紙を回収し(回収率 96.80%)、そのうち、回答の半分以上に欠損のある者、母子・父子家庭の者、同胞との年齢が 10 歳以上離れている者、1 人っ子の者を除いた 374 名のデータを分析の対象とした。対象者の平均年齢は、19.72 歳($SD=1.30$)で、男性 239 名、女性 130 名、不明 5 名であった。また、自分と年齢の近い同胞の平均年齢は 19.14 歳($SD=5.32$)で、男性 184 名、女性 180 名、不明 10 名であった。

第 2 項 調査方法と調査時期

大学生に対して自記式質問紙調査を行った。授業を持つ教員数名に対して、調査者が質問紙配布の実施の依頼をし、承認が得られた講義の時間を借りて、受講している学生に対して質問紙を配布した。授業終了前に時間を取り一斉に質問紙に回答してもらい、終了後に回収を行った。

調査時期は 2012 年 9 月～12 月であった。

第 3 項 質問紙の構成

(1)フェイスシート

性別，年齢，家族構成，生活形態，同胞の性別，同胞の年齢について記入を求めた。

(2)家族内の役割尺度

第 5 章(【研究Ⅲ】)で作成された尺度を用い，対象者が家族内で担っている役割期待を測定した。さらに，同様の質問項目を用いて，対象者がどの程度役割行動をしているのかについても測定した。教示文は「家族からどのくらい期待されているかについてお答えください。また，その事柄についてあなたはどのくらいしているかについてお答えください」である。回答は役割期待，役割行動ともに 4 件法である。役割期待については，1(全くそうではない)から 4(大変そうである)の 4 件法，役割行動については，1(全くしていない)から 4(大変している)の 4 件法で求めた。

同様に，対象者から見て，同胞がどの程度役割期待を感じ，それに対してどの程度役割行動をしているのかについても回答してもらった。複数きょうだいの場合には，対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

(3)FACESⅢ(Family Adaptability and Cohesion Evaluation ScalesⅢ)(Olson *et al.*, 1985)日本版(草田・岡堂, 1993)

家族機能を測定ために使用した。「凝集性」，「適応性」の 2 因子の計 20 項目からなる。回答は 1(まったくあてはまらない)から 6(非常にあてはまる)の 6 件法で求めた。

第 4 項 倫理的配慮

対象者に対して質問紙実施前に口頭で，本調査は強制ではないこと，不快感を感じる事等があった場合には回答を途中で

中断することができ、その場合にも対象者が不利益をこうむることはないこと、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されることはないこと、研究以外の意図でデータを使用することはないことを説明し、それに同意した上で質問紙に回答するよう説明した。また、同様の内容は質問紙のフェイスシートにも記載し、対象者自身にも各自読んでもらい、質問紙への自発的参加、守秘義務について対象者が同意した上で実施された。

第 3 節 結果

親役割と子役割それぞれについて、自分の役割および同胞の役割との関連について示す。

第 1 項 各尺度の内的整合性の検討

自分の役割(親役割・子役割)と同胞の役割(親役割・子役割)について内的整合性の検討を行った。その結果、自分の役割期待については、親役割は $\alpha = .68$ 、子役割は $\alpha = .73$ であり、自分の役割行動については、親役割は $\alpha = .78$ 、子役割は $\alpha = .69$ であった。また、同胞への役割期待については、親役割は $\alpha = .80$ 、子役割は $\alpha = .82$ であり、同胞の役割行動については、親役割は $\alpha = .81$ 、子役割は $\alpha = .79$ であった。

第 2 項 各下位尺度得点の平均値と標準偏差

家族内の役割尺度ときょうだい関係スケールの各下位尺度の平均値および標準偏差を Table6-1 に示す。

Table6-1 家族内の役割尺度, FACESⅢの平均値と標準偏差
(*n*=374)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
家族内の役割尺度		
自分の親役割期待	2.35	.55
自分の親役割行動	2.34	.58
自分の子役割期待	2.07	.66
自分の子役割行動	2.00	.55
同胞の親役割期待	2.29	.62
同胞の親役割行動	2.24	.61
同胞の子役割期待	2.25	.71
同胞の子役割行動	2.10	.60
FACESⅢ		
凝集性	3.65	.70
適応性	3.61	.85

第3項 きょうだいそれぞれの役割の関連

全体の傾向を見るために、親役割のきょうだいそれぞれの役割の関連を調べた(Table6-2)。

その結果、自分の親役割期待と自分の親役割行動との間には中程度の正の相関($r=.70, p<.001$)、同胞の親役割期待と同胞の親役割行動との間に強い正の相関が見られた($r=.79, p<.001$)。また、自分の親役割期待と同胞の親役割期待・同胞の親役割行動との間に中程度の正の相関が見られ($r=.46, p<.001; r=.36, p<.001$)、自分の親役割行動と同胞の親役割期待・同胞の親役割行動との間にも中程度の正の相関が見られた($r=.37, p<.001; r=.40, p<.001$)

Table6-2 親役割における自分の役割と同胞の役割の関連 ($n=374$)

	役割期待(自分)	役割行動(自分)	役割期待(同胞)	役割行動(同胞)
役割期待(自分)		.70***	.46***	.36***
役割行動(自分)			.37***	.40***
役割期待(同胞)				.79***
役割行動(同胞)				

*** $p<.001$

また、子役割のきょうだいのそれぞれの役割の関連を調べた(Table6-3)。その結果、自分の子役割期待と自分の子役割行動との間に中程度の正の相関($r=.63, p<.001$)、同胞の子役割期待と同胞の子役割行動との間にも中程度の正の相関が見られた($r=.66, p<.001$)。また、自分の子役割期待と同胞の子役割期待・同胞の子役割行動との間にも中程度の正の相関が見られ($r=.61, p<.001; r=.32, p<.001$)、自分の子役割行動と同胞の子役割期待・同胞の子役割行動との間にも中程度の正の相関が見られた($r=.40, p<.001; r=.39, p<.001$)

Table6-3 子役割における自分の役割と同胞の役割の関連 ($n=374$)

	役割期待(自分)	役割行動(自分)	役割期待(同胞)	役割行動(同胞)
役割期待(自分)		.63***	.61***	.32***
役割行動(自分)			.40***	.39***
役割期待(同胞)				.66***
役割行動(同胞)				

*** $p < .001$

第4項 高群と低群におけるきょうだいそれぞれの役割の関連

家族機能の高い家族と低い家族では、きょうだいの役割の関連がどのように異なるのかを検討するために、凝集性と適応性が共に平均値+1SD以上を高群、凝集性と適応性が共に平均値-1SD以下を低群とし、家族機能の高群と低群におけるきょうだいの役割の関連をそれぞれ検討した。高群の人数は37名、低群の人数は36名であった。加えて、より関連があるといえるのかを明確にするために高群と低群ともに有意な相関が見られた場合には、Meng(1992)を参照し、 z 得点の絶対値を用いて相関係数の差の検定を行った。

まず、高群と低群における役割期待と役割行動の記述統計を示す(Table6-4)。

Table6-4 家族機能の高群と低群の記述統計

	高群(<i>n</i> =37)				低群(<i>n</i> =36)			
	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
自分の親役割期待	1.20	3.80	2.56	.52	1.00	3.40	2.15	.64
自分の親役割行動	2.00	4.00	2.83	.52	1.00	3.20	2.06	.62
自分の子役割期待	1.20	3.60	2.22	.67	1.00	4.00	2.05	.84
自分の子役割行動	1.20	4.00	2.38	.71	1.00	3.40	1.86	.64
同胞の親役割期待	1.00	4.00	2.42	.61	1.00	3.60	1.98	.82
同胞の親役割行動	1.00	4.00	2.56	.62	1.00	3.20	1.89	.76
同胞の子役割期待	1.00	4.00	2.40	.80	1.00	3.80	2.19	.86
同胞の子役割行動	1.00	4.00	2.29	.67	1.00	3.60	1.97	.78

自分の役割期待と自分の役割行動の関連を検討した (Table6-5)。その結果、親役割における自分の役割については、自分の親役割期待と親役割行動との間には高群と低群どちらも正の相関が見られ ($r=.39, p<.05$; $r=.78, p<.001$)、高群と低群の相関係数の間に有意な差が見られた ($z=-2.66, p<.01$)。また、子役割における自分の役割については、自分の子役割期待と子役割行動との間には高群と低群どちらも正の相関が見られたが ($r=.64, p<.001$; $r=.81, p<.001$)、有意な相関の差は見られなかった。

Table6-5 家族機能の高群と低群における自分の役割の関連

	役割行動(自分)					
	親役割 (高)	親役割 (低)	<i>z</i>	子役割 (高)	子役割 (低)	<i>z</i>
役割期待(自分):親役割	.39*	.78***	$z=-2.66^{**}$			
役割期待(自分):子役割				.64***	.81***	<i>n.s.</i>

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

そして、同胞の役割期待と役割行動との関連を検討したところ (Table6-6)、親役割における同胞の役割については、同胞の親役割期待と親役割行動間には高群と低群どちらも正の相関が見られたが ($r=.69, p<.001$; $r=.85, p<.001$)、有意な相関の差は見られなかった。また、子役割における同胞の役割については、同胞の子役割期待と子役割行動との間には高群と低群どちらも正の相関が見られたが ($r=.65, p<.001$; $r=.69, p<.001$)、有意な相関の差は見られなかった。

Table6-6 家族機能の高群と低群における同胞の役割の関連

	役割行動(同胞)					
	親役割 (高)	親役割 (低)	<i>z</i>	子役割 (高)	子役割 (低)	<i>z</i>
役割期待(同胞):親役割	.69***	.85***	<i>n.s.</i>			
役割期待(同胞):子役割				.65***	.69***	<i>n.s.</i>

*** $p < .001$

最後に、自分の役割と同胞の役割との関連について検討した (Table6-7)。

まず、親役割における自分の役割と同胞の役割については、自分の親役割期待と同胞の親役割期待との間に高群、低群において、正の相関が見られた ($r = .34, p < .05$; $r = .33, p < .05$) が、有意な相関の差は見られなかった。また、自分の親役割期待と同胞の親役割行動との間に高群においては有意傾向の正の相関が見られた ($r = .30, p < .10$) が、低群においては有意な相関は見られなかった ($r = .22, n.s.$)。そして、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との間に、高群においては有意傾向の正の相関が見られた ($r = .28, p < .10$) が、低群においては有意な相関は見られなかった ($r = .20, n.s.$)。

子役割における自分の役割と同胞の役割との関連については、自分の子役割期待と同胞の子役割期待との間に高群、低群において、正の相関が見られた ($r = .70, p < .001$; $r = .55, p < .001$) が、有意な相関の差は見られなかった。自分の子役割期待と同胞の子役割行動との間に高群においては中程度の正の相関が見られた ($r = .41, p < .01$) が、低群においては有意な相関は見られなかった ($r = .21, n.s.$)。また、自分の子役割行動と同胞の子役割期待との間には、高群と低群どちらも正の相関が見られたが ($r = .45, p < .01$; $r = .50, p < .01$)、有意な相関の差は見られなかった。自分の子役割行動と同胞の子役割行動の間にも高群と低群どちらも正の相関が見られたが ($r = .50, p < .01$; $r = .32, p < .10$)、有意な相

関の差は見られなかった。

Table6-7 家族機能の高群と低群における自分の役割と同胞の役割の関連

	役割期待(同胞)						役割行動(同胞)					
	親役割 (高)	親役割 (低)	<i>z</i>	子役割 (高)	子役割 (低)	<i>z</i>	親役割 (高)	親役割 (低)	<i>z</i>	子役割 (高)	子役割 (低)	<i>z</i>
役割期待(自分):親役割	.34*	.33*	<i>n.s.</i>				.30 [†]	.22	-			
役割行動(自分):親役割	.05	.21	-				.28 [†]	.20	-			
役割期待(自分):子役割				.70***	.55***	<i>n.s.</i>				.41**	.21	-
役割行動(自分):子役割				.45**	.50**	<i>n.s.</i>				.50**	.32 [†]	<i>n.s.</i>

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

第 4 節 考察

家族機能の高い家族と低い家族におけるきょうだいの役割について比較検討を行ったところ、高群と低群において関連に違いが見られた。

第 1 項 家族機能ときょうだいの役割との関連

まず、親役割について着目する。家族機能の高い家族(高群)と家族機能の低い家族(低群)における、自分の親役割期待と自分の親役割行動の関連について検討したところ、高群においては、弱い正の相関が見られたのに対し、低群においては、強い正の相関が見られた。加えて、相関の差の検定を行ったところ、高群と低群との間に有意な相関の差が認められた。また、平均値を見ると、高群では、自分の親役割期待の平均値よりも自分の親役割行動の平均値が高いことから、親役割期待に対して、期待以上の行動をとりやすいと考えられる。それに対して、低群においては、自分の親役割期待の平均値の方が自分の親役割行動よりも高いことから、親役割期待に従って親役割行動がなされていると考えることができる。つまり、高群では、期待に対して期待以上の行動をとる場合もあることから、期待と行動との間には弱い相関が見られ、低群では、役割期待に従って役割行動がなされることから、強い相関が見られたと考えること

ができる。また、同胞の親役割期待と同胞の親役割行動との関連について検討したところ、高群においては中程度の正の相関、低群においては強い正の相関が見られた。平均値を見ると、高群は期待よりも行動が高く、低群では、期待の方が行動よりも高かった。しかし、自分の場合には、高群と低群との間で有意な相関の差が見られるほどであったが、同胞の場合には、それほど高群と低群との間で相関に大きな違いは見られなかった。これは、自分の視点から同胞の役割も捉えているために、同胞の役割については知らない部分も多くあることや、同胞に対して興味を払っていない者もいるために、同胞の役割については曖昧な回答になりやすく、高群と低群との間ではっきりとした違いが見られなかったのではないだろうか。

さらに、自分の親役割期待や自分の親役割行動と、同胞の親役割期待や同胞の親役割行動との関連について検討した結果、高群、低群ともに、自分の親役割期待と同胞の親役割期待との間に弱い正の相関が見られた。また、高群のみに、自分の親役割期待と同胞の親役割行動との間に有意傾向の弱い正の相関が見られ、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との間にも有意傾向の弱い正の相関が見られた。これらの結果から、高群でも低群でも、自分と同胞は同じように親役割期待を受けていることがわかる。言い換えると、青年本人は、自分が求められているのと同じように、同胞も親役割を求められている、という認識をしていることがわかる。さらに高群では、自分が感じている親役割期待に対して、同胞がその親役割期待に従って行動する傾向があるといえるだろう。平均値を見ると、高群では、自分の親役割期待と同胞の親役割行動が同程度であるため、自分が感じている親役割期待と同程度の親役割行動を同胞がとってくれている、と認知する傾向があることがうかがえる。加えて、高群では、自分の親役割行動に従って、同胞も親役割行動をとってくれている、と認知する傾向があることもうかがえる。

以上のことから、高群では、自分も同胞も、親役割期待に従って親役割行動をとっているが、期待以上に行動もしているといえるだろう。さらに、高群でも低群でも、自分も同胞も同じように親役割を求められていると感じているが、さらに高群では、自分が感じている親役割期待と同程度の親役割行動を同胞がとっていると感じる傾向や、自分の親役割行動と同じように同胞も親役割行動をとっていると感じる傾向があることがわかる。つまり、青年本人が、自分が感じている家族のニーズを、同胞も同じように感じて行動してくれていると認知しており、きょうだい間での家族に対する認識にズレが小さいと認知していることが想像できる。反対に、低群では、自分も同胞も、親役割期待に従って親役割行動をとっていることが示された。特に自分の場合には、高群よりも、親役割期待に従って親役割行動をとることが多いことがわかった。つまり低群では、きょうだいそれぞれが、家族関係を維持するために、求められているように行動していることがうかがえる。

したがって、高群においては、自分の親役割期待と親役割行動との関連、同胞の親役割期待と親役割行動の関連、さらに、自分の親役割期待と同胞の親役割期待との関連と、有意傾向ではあるものの、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連が見られたことから、仮説①は支持されたといえるだろう。我が国においては、凝集性と適応性は明確に区別されず(田村, 1994; 立山, 2006)、また凝集性・適応性の高さと夫婦関係の満足度や子どもの心理的発達の程度とはリニアな関係があることから(Green *et al.*, 1991; Vandvik & Eckblad, 1993)、凝集性・適応性が高い家族を、家族機能の高い家族であるといえることができるだろう。また、家族機能の高い家族とは、家族の境界が明確であり、子どもが自由に親サブシステムと子どもサブシステムを出入りすることのできる家族である(Minuchin, 1974, 山根(監訳), 1984)。したがって、高群では、きょうだいそれぞれ

れが親役割を担い、きょうだい間でも関連が見られたと考えられる。また、家族機能の高い家族においては、凝集性が高いため、家族成員間のコミュニケーションが多い状態といえるだろう。そのため、きょうだいと同じように役割期待を受け、役割行動をしているだけではなく、自分の役割期待を見て、同胞が役割行動をしてくれる場合もあると推察される。

一方で、低群においては、高群よりも、自分の親役割期待と親役割行動の関連は強く、親役割期待に従って親役割行動をとっているという特徴が見られた。しかし、自分の場合だけではなく、同胞の親役割期待と親役割行動との間にも強い関連が見られ、同胞も、親役割期待に従って親役割行動をとっていた。よって、きょうだいどちらも親役割期待と親役割行動との間に強い関連が見られたことから、仮説②は支持されなかった。これは、一方の子どもが親役割を担っているというよりも、きょうだいそれぞれが、親役割期待に従って親役割行動をとっていると考えられる。また、自分が親役割期待に従って親役割行動をとっている家族もあれば、同胞が親役割期待に従って親役割行動をとっている家族もあり、これらが混在していたことが考えられる。その中で、低群では高群で見られたような、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連や、自分の親役割期待や同胞の親役割行動との関連が見られなかったことから、きょうだい間で相手の役割行動を見て行動したり、役割期待を見て行動するといったきょうだい間での連動した動きはないと推察される。したがって、きょうだいサブシステムにおいて相互作用がなされていないことが想像される。

第 2 項 子役割について

子役割については、自分の親役割期待と自分の親役割行動との間に、高群では中程度の正の相関、低群では強い正の相関が見られた。平均値を見ると、高群では、自分の子役割期待より

も自分の子役割行動の平均値が高いことから、期待以上に行動する場合も見られることが推察される。つまり、高群では、子役割期待に従うことあれば、期待以上に行動する場合もあると考えることができる。それに対して、低群では、自分の子役割期待の方が、自分の子役割行動よりも平均値が高く、子役割期待に従って子役割行動をとっていることがわかる。また、同胞の子役割期待と同胞の子役割行動との間には、高群・低群ともに、中程度の正の相関が見られた。平均値を見ても、高群・低群ともに、役割期待の方が役割行動よりも高いことから、どちらの場合も、同胞は子役割期待に従って子役割行動をとっていることがわかる。

さらに、自分の子役割期待や子役割行動と、同胞の子役割期待や子役割行動との関連について検討した結果、自分の子役割期待と同胞の子役割期待との間には、高群では強い正の相関、低群でも中程度の正の相関が見られた。また、自分の子役割行動と同胞の子役割行動との間には、高群には中程度の正の相関、低群では有意傾向の中程度の正の相関が見られた。これらの結果から、高群・低群ともに、きょうだいそれぞれが家族から同じように子役割期待を受けており、家族内で同じように子役割行動をとっていることがわかる。つまり、青年本人からすると、同胞も自分と同じように子役割を求められており、自分の子役割行動と同胞の子役割行動は連動していると感じていることが推察される。しかし、高群においてのみ、自分の子役割期待と同胞の子役割行動との間に中程度の正の相関が見られた。平均値を見ると、高群では、自分の子役割期待の方が同胞の子役割行動よりも高いのに対し、低群では、自分の子役割期待よりも同胞の子役割行動の方が高い。したがって、高群においては、自分が感じている子役割期待に従って同胞も子役割行動をとっていると認知しているのに対して、低群では、自分が感じている子役割期待以上に、同胞が子役割行動をとっていると認知し

ていることがうかがえる。

以上のことから、高群では、自分は期待以上の子役割行動をとりやすいが、同胞は期待に従って子役割行動をとっていることがわかる。同胞については、高群・低群でも、子役割期待に従って子役割行動をとっていることが示された。また、高群・低群でも、自分と同胞は同様に子役割期待を受け、子役割行動をとっているが、特に高群においては、自分の子役割期待を察して、同胞も子役割行動をとってくれていると感じていることが推察される。

これらのことから、親役割と子役割それぞれについて考察する。高群と低群の間で、顕著な違いが見られたのは、自分の親役割期待と親役割行動との関連であった。自分の親役割については、高群では期待以上に行動するのに対し、低群では期待に従って行動するという特徴が示された。それに対して、自分の子役割期待と子役割行動の関連は、高群と低群の間で、相関の強さには違いが見られたものの、有意な差ではなかった。このことから、自分の親役割期待と親役割行動は、家族機能の高さによって左右されやすく、家族機能が高いほど、期待以上に行動するようになることが考えられる。Walsh *et al.*(2006)は、子どもが親役割を担えるようになるには、高い家族の結びつきと、年齢に適した自律性を許す家族の雰囲気が必要であることを示唆している。つまり、家族機能が高い環境においては、青年は、期待される以上に自律的に家族を調整するような行動をとるようになることが解釈することができる。家族システムが発達的变化をしていく中で家族関係は再編され(Carter & McGoldrick, 1989)、子どもは次第に親と対等な関係に移っていくことから(落合・佐藤, 1996)、子役割よりも親役割において、家族機能の状態によって違いが見られたと考えることができる。また、きょうだい間での関連については、親役割においては、高群と低群との間で、自分の役割行動と同胞の役割行動との関連や、

自分の役割期待と同胞の役割行動との関連に違いが見られたが、子役割では、高群と低群の間で、自分の役割期待と同胞の役割行動の関連にしか違いが見られなかった。このことから、子役割は家族機能の高低にかかわらず、自分も同胞も同じように子役割が求められ、子役割行動をとっていると認識していることが推察される。精神的には親に近い青年期においても、家族機能によらず、子どもとしての存在が家族から必要とされていることがうかがえる。また、親役割・子役割にかかわらず、高群では、自分が感じている役割期待に従って同胞も役割行動をとっていることがわかる。つまり、家族機能が高い場合には、自分が感じている役割期待を同胞が察知し、役割行動をとってくれるという状況があると考えられる。これは、上述したように、きょうだい間で家族の認識に対するズレが小さいことで、きょうだいの役割期待と役割行動の関連が多く見られると推察される。

第 3 項 第 7 章(【研究 V】)への示唆

【研究 IV】では、家族機能の高い家族と低い家族との間で役割期待と役割行動の関連について検討を行った。その結果、高群では、自分も同胞も、親役割期待以上に親役割行動を取りやすいが、低群では、自分も同胞も親役割期待に従って親役割行動をとっていることが示された。また、高群でも低群でも、自分も同胞も同じように親役割を求められていると感じているが、さらに高群では、自分が感じている親役割期待に従って親役割行動を同胞がとっていると感じる傾向や、自分の親役割行動と同じように同胞も親役割行動をとっていると感じる傾向があることがわかった。このことから、家族機能によって、青年本人が、自分が家族から求められている親役割や、自分が行なっている親役割行動に対して、同胞がどのように行動していると認知しているのかが異なると考えられた。加えて、自分の親役割

は、家族機能の状態を反映しやすいことが示唆された。

しかし、本章の結果の解釈について、留意すべき点がある。まず、低群においては、自分も同胞も、親役割期待と親役割行動との間には強い関連が見られた。これは、自分と同胞がそれぞれ別個に親役割期待に従って親役割行動をとっているのか、あるいは、自分が巻き込まれている場合と同胞が巻き込まれている場合が混在していたのか、はっきりと示すことができていない。さらに、対象者のきょうだい数を2人きょうだいに限定しなかったために、家族機能の低い家族においても3人きょうだいのうちの、親サブシステムに巻き込まれていない2人について思い浮かべて回答した可能性も考えられる。したがって、低群における自分と同胞の親役割期待と親役割行動の状態については、解釈を控えめにすることが必要だろう。

また、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連、自分の親役割期待と同胞の親役割行動との関連は有意傾向であることから、家族機能が高い場合には、自分の親役割行動と同じように同胞も親役割行動を取ったり、自分が感じている役割期待を同胞が察知し、役割行動をとってくれるという傾向があると示されたに留まる。

以降では、自分の親役割に対して同胞がどのように親役割を担っているか、という点により焦点を当てていくことが求められるだろう。また、第4章(【研究Ⅱ】)において、家族構造ときょうだい関係との関連が明らかにされていることから、家族の状態を反映してきょうだいがどのように役割を担っているのかを踏まえ、役割ときょうだい関係との関連についても検討していくことが必要である。

第 7 章

【研究 V】

きょうだいが担う役割ときょうだい関係
との関連

第 1 節 目的

第 6 章(【研究Ⅳ】)から，家族機能の高い家族においては，自分の親役割期待と同胞の親役割期待が関連し，自分の親役割行動と同胞の親役割行動や，自分の親役割期待と同胞の親役割行動が関連する傾向があることが示された。この結果から，家族機能の高い家族においては，青年本人が，自分が感じている家族のニーズと同じように，同胞も感じて行動してくれていると認知しており，きょうだい間での家族に対する認識にズレが小さいと認知していることが推察された。これは，例えば，家族内に問題が生じた時，自分が家族内の調整をするよう家族から求められていると，同胞も一緒になって問題解決に取り組んでくれると認知している，と推察される。しかし，家族機能が低い家族の場合には，きょうだい間で親役割期待の関連は見られたものの，親役割行動の関連や，自分の親役割期待と同胞の親役割行動との関連は見られなかった。この結果から，家族機能によって，青年本人が，自分が家族から求められている親役割期待や，自分が行なっている親役割行動に対して，同胞がどのように行動しているかと認知しているのかが異なると考えられた。Namysłowska & Siewierska(2010)において，非機能的な家族においてはきょうだいに葛藤が生じると指摘されていることから，機能的な家族や非機能的な家族で見られた役割のパターンはきょうだい関係と関連することが考えられる。では，自分と同胞の親役割のパターンは，どのようにきょうだい関係と関連するのであろうか。そこで，本章(【研究Ⅴ】)では，本研究の目的に従い，きょうだいそれぞれの親役割の程度に着目し，きょうだい関係との関連について検討を行う。

黒川・吉田(2006)は，集団内において，他成員からの役割期待と他成員に対する自分の役割遂行が高いほど，仲間集団との関係満足度が高くなることを指摘している。これを，家族に置き換えてみた場合，自分が求められている親役割期待に対して

自分が親役割行動をとることで家族成員との関係満足度が高まることはもちろん、同胞が自分の親役割期待を感じて親役割行動をとると、同胞を含む家族成員との関係認知はどのようなであろうか。

上述したように、自分の親役割行動と同じように同胞が親役割行動をとったり、自分の親役割期待を察して同胞が親役割行動をとるということは、きょうだい間での家族に対する認識のズレが少ないと推察される。2者間における認識のズレとコミュニケーションとの関連について、夫婦間で互いの心理的距離に関する認識のズレが小さいほど、夫や妻は家族と肯定的なコミュニケーションをとることが指摘されている(草田・山田, 1998)。この指摘から、2者間の認識のズレが、コミュニケーションに影響することがわかる。したがって、きょうだい間においても、自分の家族に対する認識と、同胞が持っているであろう家族に対する認識との間にズレが小さいほど、きょうだい間のかかわりも肯定的なものになることが予想される。言い換えると、自分が家族から感じている親役割期待や親役割行動に対して、同胞も親役割行動をとるようになるほど、きょうだい関係も親和的になると考えることができる。黒川・吉田(2006)の指摘とも合わせて考えると、青年本人が感じている家族からの親役割期待に対して、同胞が同程度の親役割行動をとるほど、きょうだい関係は親和的になることが予想される。反対に、自分が家族から感じている親役割期待や親役割行動に対して、同胞の親役割行動が伴わないほど、きょうだい関係は分離的になると考えることができる。つまり、青年本人が感じている家族からの親役割期待に対して、同胞の親役割行動が少ない場合、きょうだい関係は分離的になることが考えられる。

以上のことから、以下の仮説が立てられる。

①自分の親役割期待の程度と同胞も同程度の親役割行動をとるほど、きょうだい関係は親和的になる。

②自分の親役割期待が高くても，同胞の親役割行動が低い場合，きょうだい関係は分離的になる。

また，同胞が受けている親役割期待に対する自分の親役割行動はどのようなであろうか。そこで，同胞の親役割期待と自分の親役割行動ときょうだい関係との関連についても同時に検討を行う。これらの検討を通じて，自分の親役割の程度に対する同胞の親役割の程度によって，どのようなきょうだい関係が見られるのかを明らかにする。

第 2 節 方法

調査対象者および手続きについて示す。

第 1 項 対象者

調査対象者はインターネット調査会社を通じて募集した大学生 175 名であった。そのうち，出鱈目な回答(すべて同じ数値等)の者，きょうだいとの年齢差が 10 歳以上ある者を除いた 165 名を分析の対象とした。対象者の平均年齢は 20.70 歳($SD=1.72$)で，男性 76 名，女性 89 名であった。また，同胞の平均年齢は 19.93 歳($SD=4.27$)で，男性 81 名，女性 70 名，不明 14 名であった。出生順位については，第 1 子の者が 84 名，第 2 子以降の者が 74 名，不明 7 名であった。きょうだいの性別構成としては，男きょうだい 39 名，女きょうだい 37 名，異性きょうだい 75 名，不明 14 名であった。

第 2 項 調査時期と調査方法

インターネット調査会社である「スマートサーベイ」を通じて，全国の大学生を対象に実施した。

調査時期は 2014 年 1 月であった。

第 3 項 質問紙の構成

(1)フェイスシート

性別，年齢，家族構成，生活形態，同胞の性別，同胞の年齢について記入を求めた。

(2)家族内の役割尺度

対象者と同胞が家族内で担っている役割を測定するために使用した。

教示文は「家族からどのくらい期待されているかについてお答えください。また，その事柄についてあなたはどのくらいしているかについてお答えください」である。回答は役割期待，役割行動ともに 4 件法である。役割期待については，1(全くそうではない)から 4(大変そうである)の 4 件法，役割行動については，1(全くしていない)から 4(大変している)の 4 件法で求めた。

同様に対象者から見て，同胞がどの程度役割期待を感じ，それに対してどの程度役割行動をしているのかについても回答してもらった。複数きょうだいの場合には，対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

(3)きょうだい関係スケール

飯野(1994)による「青年期のきょうだい関係スケール」16 項目を用いた。「よく経験した(4)」から「一度も経験したことがない(1)」の 4 件法で回答を求めた。(2)と同様に，複数きょうだいの場合には，対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

第 4 項 倫理的配慮

実施前に，家族関係に関連した内容が含まれていること，不快に感じたり，答えにくい設問がある場合は，途中で回答を中

止しても構わないことを示し、同意した上で回答するよう明記した。

第 3 節 結果

まず、役割尺度の下位尺度である「自分の親役割期待」と「同胞の親役割行動」、および「同胞の親役割期待」と「自分の親役割行動」のそれぞれについて、得点の平均値を基準として、全対象者を 2 群(高群と低群)に分けた。そして、「自分の親役割期待」高・低と「同胞の親役割行動」高・低の組み合わせからなる 4 群を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った。同様に、「同胞の親役割期待」高・低と「自分の親役割行動」高・低の組み合わせからなる 4 群を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った。

第 1 項 各尺度の内的整合性の検討

自分の役割(親役割・子役割)と同胞の役割(親役割・子役割)について内的整合性の確認を行った。その結果、自分の役割期待については、親役割は $\alpha = .79$ 、子役割は $\alpha = .78$ であり、自分の役割行動については、親役割は $\alpha = .80$ 、子役割は $\alpha = .76$ であった。また、同胞への役割期待については、親役割は $\alpha = .85$ 、子役割は $\alpha = .88$ であり、同胞の役割行動については、親役割は $\alpha = .86$ 、子役割は $\alpha = .83$ であった。

また、きょうだい関係スケールの「共存」は $\alpha = .84$ 、「対立」は $\alpha = .89$ 、「保護・依存」は $\alpha = .84$ 、「分離」は $\alpha = .92$ であった。

第 2 項 各下位尺度得点の平均値と標準偏差

家族内の役割尺度ときょうだい関係スケールの各下位尺度の平均値および標準偏差を Table 7-1 に示す。

Table7-1 家族内の役割尺度, きょうだい関係スケールの平均値と標準偏差 (n=165)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
家族内の役割尺度		
自分の親役割期待	2.44	.57
自分の親役割行動	2.67	.58
自分の子役割期待	2.34	.62
自分の子役割行動	2.27	.58
同胞の親役割期待	2.28	.65
同胞の親役割行動	2.36	.71
同胞の子役割期待	2.34	.71
同胞の子役割行動	2.22	.67
きょうだい関係スケール		
共存	2.46	.71
対立	2.75	.72
保護・依存	2.53	.68
分離	2.07	.81

第3項 役割ときょうだい関係の関連

きょうだい関係スケールの下位尺度得点を用いて相関係数を算出した(Table7-2)。その結果, 「共存」関係は, 「対立」関係と弱い正の相関($r=.29, p<.001$), 「保護・依存」関係と中程度の正の相関($r=.63, p<.001$), 「分離」関係と弱い負の相関($r=-.19, p<.05$)が見られた。「対立」関係は, 「保護・依存」関係と中程度の正の相関($r=.40, p<.001$), 「分離」関係と弱い正の相関($r=.21, p<.01$)が見られた。

Table7-2 きょうだい関係スケールの関連 ($n=165$)

	共存	対立	保護・依存	分離
共存		.29***	.63***	-.19*
対立			.40***	.21**
保護・依存				-.15
分離				

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

また、家族内の役割尺度ときょうだい関係スケールの関連を調べた (Table7-3)。まず、きょうだい関係スケールと自分の役割との関連について示す。「共存」関係は、自分の親役割期待と親役割行動、自分の子役割期待と子役割行動との間に弱～中程度の正の相関が見られた ($r=.26\sim.44$, $p<.001\sim p<.01$)。「対立」関係は、自分の親役割期待との間に弱い相関 ($r=.18$, $p<.05$)、自分の子役割期待との間に弱い正の相関が見られた ($r=.16$, $p<.05$)。また、「保護・依存」関係は、自分の親役割期待と親役割行動、自分の子役割期待と子役割行動との間に弱～中程度の正の相関が見られた ($r=.17\sim.54$, $p<.001\sim p<.05$)。そして、「分離」関係は、家族内の役割との関連は見られなかった。

また、同胞の役割との関連については、「共存」関係は、同胞の親役割期待と親役割行動、同胞の子役割期待と子役割行動との間に中程度の正の相関が見られた ($r=.36\sim.51$, $p<.001$)。また、「対立」関係は、同胞の親役割期待、同胞の子役割期待と子役割行動との間に、弱い正の相関が見られた ($r=.16\sim.29$, $p<.001\sim p<.05$)。「保護・依存」関係は、同胞の親役割期待と親役割行動、同胞の子役割期待と子役割行動との間に、弱～中程度の正の相関が見られた ($r=.28\sim.50$, $p<.001$)。「分離」関係は、自分の役割と同様、家族内の役割との関連は見られなかった。

Table7-3 役割ときょうだい関係スケールの関連 (n=165)

	自分の 親役割期待	自分の 親役割行動	自分の 子役割期待	自分の 子役割行動
共存	.44 ^{***}	.37 ^{***}	.26 ^{**}	.38 ^{***}
対立	.18 [*]	.13	.16 [*]	.11
保護・依存	.53 ^{***}	.54 ^{***}	.17 [*]	.35 ^{***}
分離	-.11	-.11	.07	.01

	同胞の 親役割期待	同胞の 親役割行動	同胞の 子役割期待	同胞の 子役割行動
共存	.47 ^{***}	.51 ^{***}	.36 ^{***}	.37 ^{***}
対立	.16 [*]	.15	.29 ^{***}	.22 ^{**}
保護・依存	.50 ^{***}	.50 ^{***}	.32 ^{***}	.28 ^{***}
分離	-.10	-.09	-.01	.08

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

第 4 項 自分の親役割期待と同胞の親役割行動

自分の親役割期待と同胞の親役割行動の程度によって、どのようなきょうだい関係が見られるのかを検討するために、「自分の親役割期待」高・低と「同胞の親役割行動」高・低の組み合わせからなる 4 群を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った (Table7-4)。その結果、「共存」得点 ($F(3)=13.52$, $p<.001$), 「保護・依存」得点 ($F(3)=12.55$, $p<.001$) において有意差が認められたため、Tukey 法による多重比較を行なった。その結果、「共存」得点は、「自分の役割高群・同胞の役割高群」が「自分の役割高群・同胞の役割低群」($p<.01$)と「自分の役割低群・同胞の役割低群」($p<.001$)よりも有意に高かった。また、「自分の役割低群・同胞の役割高群」は「自分の役割高群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった ($p<.05$)。さらに、「自分の役割低群・同胞の役割高群」は「自分の役割低群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった ($p<.001$)。「保護・依存」得点も、「自分の役割高群・同胞の役割高群」が「自分の役割高群・同胞の役割低群」($p<.01$)

と「自分の役割低群・同胞の役割低群」($p<.001$)よりも有意に高かった。また、「自分の役割低群・同胞の役割高群」は「自分の役割高群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった($p<.01$)。さらに、「自分の役割低群・同胞の役割高群」は「自分の役割低群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった($p<.001$)。

Table7-4 自分の親役割期待の高低と同胞の親役割行動の高低からなる4群の分散分析結果 ($n=165$)

n	①自分の役割高 ・同胞の役割高		②自分の役割高 ・同胞の役割低		③自分の役割低 ・同胞の役割高		④自分の役割低 ・同胞の役割低		F値	多重比較
	50		31		24		60			
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	df	(Tukey法)
共存	2.84	.68	2.20	.75	2.69	.60	2.05	.70	13.52***	④, ②<①; ②, ④<③
対立	2.84	.69	2.65	.91	2.80	.65	2.61	.88	.88	
保護・依存	2.89	.68	2.23	.79	2.79	.55	2.17	.70	12.55***	④, ②<①; ②, ④<③
分離	.82	.15	.99	.20	.69	.09	.91	.12	2.52	
									3	

*** $p<.001$

第5項 自分の親役割行動と同胞の親役割期待

自分の親役割行動と同胞の親役割期待の程度によって、どのようなきょうだい関係が見られるのかを検討するために、「自分の親役割行動」高・低と「同胞の親役割期待」高・低の組み合わせからなる4群を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った(Table7-5)。その結果、「共存」得点($F(3)=9.82$, $p<.001$), 「保護・依存」得点($F(3)=20.38$, $p<.001$), 「分離」得点($F(3)=2.74$, $p<.05$)において有意差が認められたため、Tukey法による多重比較を行なった。その結果、「共存」得点は、「自分の役割高群・同胞の役割高群」($p<.001$)と「自分の役割高群・同胞の役割低群」($p<.05$)が「自分の役割低群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった。また、「保護・依存」得点は、「自分の役割高群・同胞の役割低群」は「自分の役割低群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった($p<.001$)。さらに、「自分の役割高群・同胞の

役割高群」は「自分の役割低群・同胞の役割高群」よりも有意に高く ($p<.05$), 「自分の役割低群・同胞の役割高群」は「自分の役割低群・同胞の役割低群」よりも有意に高かった ($p<.001$)。そして, 「分離」得点は, 「自分の役割低群・同胞の役割高群」が「自分の役割高群・同胞の役割高群」よりも有意に高かった ($p<.1$)。

Table7-5 自分の親役割行動の高低と同胞の親役割期待の高低からなる4群の分散分析結果 ($n=165$)

n	①自分の役割高 ・同胞の役割高		②自分の役割高 ・同胞の役割低		③自分の役割低 ・同胞の役割高		④自分の役割低 ・同胞の役割低		F値	多重比較
	50		31		24		60			
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	df	(Tukey法)
共存	2.80	.60	2.51	.74	2.48	.77	2.09	.69	9.82*** 3	④<①, ②
対立	2.81	.68	2.61	.90	3.01	.63	2.60	.81	2.09 3	
保護・依存	2.98	.55	2.73	.72	2.49	.70	2.07	.61	20.38*** 3	④<②; ④<③<①
分離	1.90	.74	2.30	.85	2.44	.78	2.12	.91	2.74* 3	①<③

*** $p<.001$, * $p<.05$

第4節 考察

きょうだい担う親役割の程度ときょうだい関係との関連について検討を行うために, まず, 役割尺度の下位尺度である「自分の親役割期待」と「同胞の親役割行動」, および「同胞の親役割期待」と「自分の親役割行動」のそれぞれについて, 得点の平均値を基準として, 全対象者を2群(高群と低群)に分けた。そして, 「自分の親役割期待」高・低と「同胞の親役割行動」高・低の組み合わせからなる4群を独立変数とし, きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。同様に, 「同胞の親役割期待」高・低と「自分の親役割行動」高・低の組み合わせからなる4群を独立変数とし, きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。

第 1 項 きょうだいの役割ときょうだい関係との関連

きょうだい関係スケールの相関を検討したところ、「共存」と「保護・依存」は中程度の正の相関が見られたことから、共に親和的な関係を捉える因子であることがわかる。また、「共存」・「保護・依存」と「対立」も、正の相関が見られたことから、親和的な関係であることで接触やかかわりが増すために「対立」も生じやすくなることが考えられる。これは、第 4 章(【研究Ⅱ】)で得られた結果と一致する。すなわち、「共存」、「保護・依存」、「対立」関係は、きょうだい間のかかわりがあることで生じる関係であり、各関係は同時に見られる関係であると考えられることができる。また、「分離」関係は、「共存」関係と弱い負の相関があり、「対立」関係と弱い正の相関があることが示された。第 4 章(【研究Ⅱ】)においても、「分離」関係は、「共存」や「保護・依存」と負の相関が見られた。この結果から、「分離」関係は、きょうだい間の接触がある「共存」や「保護・依存」関係とは異なり、きょうだい間の接触がないという性質を示していると考えられることができる。しかし、第 4 章(【研究Ⅱ】)においては、「分離」関係は「対立」関係との相関は見られなかったが、本章では「分離」関係は、「対立」関係とも正の相関が見られた。本章の結果を踏まえると、「分離」関係は「対立」が発展していくことで生じる関係でもあることが推察される。ただし、「分離」関係と、「対立」関係との相関係数は弱いことから、「分離」関係は、きょうだい間の接触があることに基づく「共存」、「保護・依存」、「対立」とは性質が異なり、きょうだい間のかかわりがないという因子であるといえるだろう。

また、きょうだい関係と家族内の役割との関連について検討したところ、「共存」や「保護・依存」関係については、すべての家族内の役割との関連が見られた。反対に、「分離」関係においては、すべての家族内の役割との関連は見られなかった。このことから、親和的な関係は、きょうだいの家族内での役割が

多いほど見られる関係であることが考えられる。また、「対立」関係においては、主に役割期待との関連が見られた。「対立」関係は、「共存」や「保護・依存」関係と同時に見られる関係であることが示されたが、「共存」や「保護・依存」関係とはやや異なり、家族内での役割期待が増していくことで生じてくることが示された。つまり、家族内である役割が期待されたり、家族に対して役割行動をとっているということは、家族内での存在が認められ、求められているということである。そのため、きょうだい間でも接触が生じやすく、親和的なきょうだい関係や対立的なきょうだい関係が見られると考えられる。一方で、「分離」関係においては、家族内の役割との関連は見られなかった。きょうだい間の接触があることに基づく「共存」、「保護・依存」、「対立」と性質が異なり、「分離」関係は、きょうだい間のかかわりが生じていないという性質であることから、役割との関連も見られなかったのではないかと考えられる。

第 2 項 きょうだい担う親役割ときょうだい関係との関連

きょうだい間における自分の親役割期待と同胞の親役割行動あるいは、自分の親役割行動と同胞の親役割期待と、きょうだい関係との関連について検討を行った。

まず、自分の親役割期待と同胞の親役割行動の組み合わせについて考察を行う。自分の親役割期待の高低群と同胞の親役割行動の高低群を組み合わせた 4 群を独立変数とし、きょうだい関係スケールを従属変数とした 1 要因分散分析を行ったところ、「共存」、「保護・依存」得点において、自分の親役割期待が高く同胞の親役割行動も高い群の方が、自分の親役割期待が高いが同胞の親役割行動が低い群や、自分の親役割期待も同胞の親役割行動も低い群よりも、有意に得点が高いことが示された。自分の親役割期待と同胞の親役割行動のどちらも高い方が、どちらか一方が高くもう一方が低い群よりも、親和的になること

がわかる。また、自分の親役割期待と同胞の親役割行動がどちらも高い方が、どちらも低い群よりも得点が高いことから、自分の親役割期待と同胞の親役割行動は同程度に高いほど、きょうだい関係は親和的になると考えられる。したがって、仮説①の「自分の親役割期待の程度と同胞も同程度の親役割行動をとるほど、きょうだい関係は親和的になる」は一部支持されたといえるだろう。例えば、家族のサポート(例えば、家事や親の話の聞き役、問題の解決等)をすることが自分に求められている時、同胞も自分と同じように家族のサポートをする行動をしてきていると認識している場合、きょうだい関係は親和的になると推察される。また、自分の親役割期待が低く同胞の親役割行動が高い群の方が、自分の親役割期待が高く同胞の親役割行動が低い群や、自分の親役割期待も同胞の親役割行動も低い群よりも、親和的になることも示された。これは、そもそも自分が親役割期待を受けていない場合よりも、自分が親役割期待を感じているのに対して同胞が親役割行動をとってくれないと感じる方が、きょうだい関係の親和度を下げるといえる。つまり、自分の親役割の程度そのものよりも、自分の親役割期待に対して同胞がどれほど親役割行動をとってくれていると認知しているのか、ということがきょうだい関係を規定する上では重要になってくると考えられる。また、分離関係や対立関係において有意な差は見られなかったことから、「②自分の親役割期待が高くても、同胞の親役割行動が低い場合、きょうだい関係は分離的になる」という仮説は支持されなかった。

次に、自分の親役割行動と同胞の親役割期待の組み合わせについて考察を行う。自分の親役割行動の高低群と同胞の親役割期待の高低群からなる4群を独立変数とした場合、「共存」得点および「保護・依存」得点において、自分の親役割行動と同胞の親役割期待がどちらも高い場合や、自分の親役割行動が高く同胞の親役割期待が低い場合には、自分の親役割行動と同胞の

親役割期待がどちらも低い場合よりも、有意に得点が高いことが示された。この結果から、自分の親役割行動と同胞の親役割期待の組み合わせにおいては、自分の親役割行動が高いほど、きょうだい関係は親和的になることがわかる。また、「分離」得点においては、自分の親役割行動が低く同胞の親役割期待が高い群の方が、自分の親役割行動と同胞の親役割期待がどちらも高い群よりも、有意に得点が高いことが示された。このことから、同胞の親役割期待に対して自分の親役割行動が低いことで、きょうだい関係は分離的になることがうかがえる。したがって、自分の親役割行動以上に同胞が親役割期待を受けていると認知すると、同胞が家族の中心的存在になり、同胞と比較して自分は親役割行動ができていないと感じ、同胞と距離を置くようになることが想像される。

以上のことから、自分の親役割期待と同胞の親役割行動は同程度に高いほど、きょうだい関係は親和的になると考えられる。また、同胞の親役割期待に対して自分の親役割行動が低いことで、きょうだい関係は分離的になることがうかがえた。これらの結果を踏まえると、自分の親役割の程度に対して、どの程度同胞の親役割を認知しているのかによって、きょうだい関係は規定されていることが推察される。つまり、自分と同胞の役割期待と役割行動のバランスによって、きょうだい関係は説明されるといえるだろう。これは、青年本人が、自分の親役割期待や親役割行動に対する同胞の親役割をうかがうことで、青年本人が抱いている家族の認識と、同胞が抱いている家族の認識にズレが少ないことを実感し、きょうだい関係も親和的になることが考えられる。また、黒川・吉田(2006)は、集団からの役割期待に対して役割遂行をすることで集団の成員との関係満足度が高まることを指摘しているが、自分の役割期待を受けて同胞が役割行動をとることで、きょうだい関係の親密さが促進することが示された。すなわち、自分が感じている親役割期待に

対して同胞が親役割行動をとることでも、家族成員との満足度が高まっていることがうかがえる。反対に、青年本人が、自分の親役割と同胞の親役割との間に偏りを感じている場合には、自分と同胞との間の家族内での違いを感じ、同胞とのかかわりを避けるようになると想像される。第3章(【研究Ⅰ】)でも示唆されたように、特に、青年期にはきょうだい互いに個と個として対等な付き合いを始める。また、青年期においては、適応的な役割として子どもが親役割を担うようになる時期である(Walsh *et al.*, 2006)。したがって、きょうだい互いに同程度に高い親役割を担っていると感じられることで、互いに青年として見なし、青年期のきょうだいとしての個と個としてのかかわりが促され、きょうだい関係が親和的になると考えることができる。一方で、同胞と比較して、自分は親役割を担えていないと感じる場合、同胞との優劣を感じ、同胞とのかかわりを持たなくなることがうかがえる。

第3項 第8章(【研究Ⅵ】)への示唆

本章(【研究Ⅴ】)では、自分の役割期待と同胞の役割行動の程度あるいは、自分の役割行動と同胞の役割期待の程度と、きょうだい関係との関連について検討を行った。その結果、自分の親役割期待と同胞の親役割行動は同程度に高いほど、きょうだい関係は親和的になることが示された。また、同胞の親役割期待に対して自分の親役割行動が低いことで、きょうだい関係は分離的になることがわかった。そして、これらの結果を踏まえると、自分の親役割の程度に対して、どの程度同胞の親役割を認知しているのかという、自分と同胞の役割期待と役割行動のバランスによって、きょうだい関係は説明されることが明らかにされた。特に、自分と同胞が同程度に親役割を担っているのか、あるいは、きょうだい間に偏りがあると感じているのかによって、きょうだい関係が異なることが推察された。

しかし、仮説検証を行ったところ、「分離」関係において仮説は支持されなかった。したがって、分離的なきょうだい関係については、十分に明らかにされていない。そのため、第 8 章(【研究 V】)の知見も踏まえ、さらに検討を行うことが必要であろう。

また、本研究の目的に従い、親役割の偏りによってきょうだい関係が規定されているかどうかを示すために、親役割に着目し検討を行っている。だが、第 6 章(【研究 IV】)から、子役割も家族機能の高い場合と低い場合とでは、違いが見られている。そのため、子役割の状態によっても、きょうだい関係が異なることも考えられる。また、青年期のきょうだい関係においては、親役割に対して子役割はどのように見られ、きょうだい関係と関連するのであるか。したがって、第 8 章(【研究 VI】)では、親役割だけではなく子役割も用い、きょうだいそれぞれが担っている役割を全体的に捉えることが求められる。そして、全体的に捉えた役割ときょうだい関係との関連について検討を行うことが必要だろう。

第 8 章

【研究 VI】

きょうだいが担う役割のバランスと

きょうだい関係との関連

第 1 節 目的

第 7 章(【研究 V】)から、きょうだい関係は、自分の親役割行動と同胞の親役割期待の程度に着目することで予測されうることが示された。特に、きょうだい間で同程度の親役割期待と親役割行動がなされていると認知している場合にきょうだい関係は親和的になり、きょうだい間で偏りがあると認知している場合にきょうだい関係は分離的になることが示された。しかし、第 7 章(【研究 V】)で行った役割ときょうだい関係との関連は、親役割のみに着目しており、きょうだいの役割全体については捉えていない。そのため、自分の親役割の程度に対する同胞の親役割の程度は示されたが、親役割に対して子役割はどのような状態であるのかは不明である。したがって、実証研究の最後として、本章(【研究 VI】)では、きょうだいが担っている役割全体を捉え、そのバランスときょうだい関係との関連について検討する。本章を通じて、親役割と子役割をどのようにきょうだいが担うことで、きょうだい関係が規定されるのかについて示す。

第 2 節 方法

調査対象者および手続きについて示す。

第 1 項 対象者

調査対象者はインターネット調査会社を通じて募集した大学生および、授業時間を通じて配布を行った大学生であった。

インターネット調査会社を通じて募集した大学生は 175 名で、そのうち、出鱈目な回答(すべて同じ数値等)の者、きょうだいとの年齢差が 10 歳以上ある者を除いた 165 名を分析の対象とした。

また、授業時間を通じて配布を行った調査対象者は、東北地方の A 大学に通う大学生 120 名であった。120 名のうち、104

名から質問紙を回収し(回収率 86.67%)、そのうち、回答の半分以上に欠損のある者、母子・父子家庭の者、同胞との年齢が 10 歳以上離れている者、1 人っ子の者を除いた 94 名のデータを分析の対象とした、

これら、インターネット調査と質問紙調査から得られた 259 名を分析に用いた。対象者の平均年齢は 20.73 歳 ($SD=1.56$) で、男性 111 名、女性 148 名であった。また、同胞の平均年齢は 20.37 歳 ($SD=4.03$) で、男性 133 名、女性 112 名、不明 14 名であった。出生順位については、第 1 子の者が 123 名、第 2 子以降の者が 128 名、不明 8 名であった。きょうだいの性別構成としては、男きょうだい 65 名、女きょうだい 64 名、異性きょうだい 124 名、不明 6 名であった。

第 2 項 調査方法と調査時期

インターネット調査は、インターネット調査会社である「スマートサーベイ」を通じて、全国の大学生を対象に実施した。調査時期は 2014 年 1 月であった。

加えて、大学生に対して自記式質問紙調査を行った。調査者から、授業を持つ教員数名に対して質問紙配布の実施の依頼をし、承認が得られた講義の時間を借りて、受講している学生に対して質問紙を配布した。授業終了前に時間を取り一斉に質問紙に回答してもらい、終了後に回収を行った。質問紙調査の調査時期は 2014 年 8 月であった。

第 3 項 質問紙の構成

(1)フェイスシート

性別、年齢、家族構成、生活形態、同胞の性別、同胞の年齢について記入を求めた。

(2)家族内の役割尺度

対象者と同胞が家族内で担っている役割を測定するために使用した。

教示文は「家族からどのくらい期待されているかについてお答えください。また、その事柄についてあなたはどのくらいしているかについてお答えください」である。回答は役割期待、役割行動ともに4件法である。役割期待については、1(全くそうではない)から4(大変そうである)の4件法、役割行動については、1(全くしていない)から4(大変している)の4件法で求めた。

同様に対象者から見て、同胞がどの程度役割期待を感じ、それに対してどの程度役割行動をしているのかについても回答してもらった。複数きょうだいの場合には、対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

(3)きょうだい関係スケール

飯野(1994)による「青年期のきょうだい関係スケール」16項目を用いた。「よく経験した(4)」から「一度も経験したことがない(1)」の4件法で回答を求めた。(2)と同様に、複数きょうだいの場合には、対象者と最も年齢の近い同胞を思い浮かべて記入してもらった。

第4項 倫理的配慮

インターネット調査に関しては、家族関係に関連した内容が含まれていること、不快に感じたり、答えにくい設問がある場合は、途中で回答を中止しても構わないことを実施前に明記した。

質問紙調査は、対象者に対して質問紙実施前に口頭で、本調査は強制ではないこと、不快感を感じる事等があった場合には回答を途中で中断することができ、その場合にも対象者が不利益をこうむることはないこと、得られたデータは統計的に処

理し個人が特定されることはないこと，研究以外の意図でデータを使用することはないことを説明し，それに同意した上で質問紙に回答するよう説明した。また，同様の内容は質問紙のフェイスシートにも記載し，対象者自身にも各自読んでもらい，質問紙への自発的参加，守秘義務について対象者が同意した上で実施された。

第 3 節 結果

きょうだいが担う役割ときょうだい関係との関連について検討した結果を示す。

第 1 項 各尺度の内的整合性の検討

自分の役割(親役割・子役割)と同胞の役割(親役割・子役割)について内的整合性の確認を行った。その結果，自分の役割期待については親役割は $\alpha = .80$ ，子役割は $\alpha = .77$ であり，自分の役割行動については親役割は $\alpha = .80$ ，子役割は $\alpha = .77$ であった。また，同胞への役割期待については，親役割は $\alpha = .86$ ，子役割は $\alpha = .87$ であり，同胞の役割行動については親役割は $\alpha = .88$ ，子役割は $\alpha = .83$ であった。

また，きょうだい関係スケールの「共存」は $\alpha = .83$ ，「対立」は $\alpha = .89$ ，「保護・依存」は $\alpha = .80$ ，「分離」は $\alpha = .94$ であった。

第 2 項 各下位尺度得点の平均値と標準偏差

家族内の役割尺度ときょうだい関係スケールの各下位尺度の平均値および標準偏差を Table8-1 に示す。

Table8-1 家族内の役割尺度, きょうだい関係スケールの平均値と標準偏差 ($n=259$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
家族内の役割尺度		
自分の親役割期待	2.51	.66
自分の親役割行動	2.69	.63
自分の子役割期待	2.24	.66
自分の子役割行動	2.21	.66
同胞の親役割期待	2.31	.73
同胞の親役割行動	2.37	.77
同胞の子役割期待	2.29	.78
同胞の子役割行動	2.16	.74
きょうだい関係スケール		
共存	2.60	.76
対立	2.63	.77
保護・依存	2.80	.75
分離	2.01	.88

第 3 項 きょうだいが担う家族内の役割の種類

自分と同胞の役割からなる役割の種類を検討するために, 家族内の役割尺度の下位尺度得点(自分の親役割期待, 自分の親役割行動, 自分の子役割期待, 自分の子役割行動, 同胞の親役割期待, 同胞の親役割行動, 同胞の子役割期待, 同胞の子役割行動)を z 値に変換したものを変数としたクラスタ分析を行なった(Ward 法)。クラスタ数の検討には, デンドログラムを基準に各クラスタに含まれる被験者数やクラスタの解釈可能性の観点から検討し, 3 クラスタを採用した(Figure8-1)。

第 1 クラスタは, すべての役割の得点において, 標準得点の平均が $.00SD$ 以上であることから, “高役割群” と命名した($n=100$)。第 2 クラスタは, すべての役割の得点において, 標準得点の平均が $.00SD$ 以下であることから “低役割群” と命名した($n=113$)。第 3 クラスタは, 自分と同胞の親役割が $.00SD$ 以上, 自分と同胞の子役割は $.00SD$ 以下であることから “親役割優位群” と命名した($n=46$)。以上の 3 クラスタを役割の 3 類型とした。

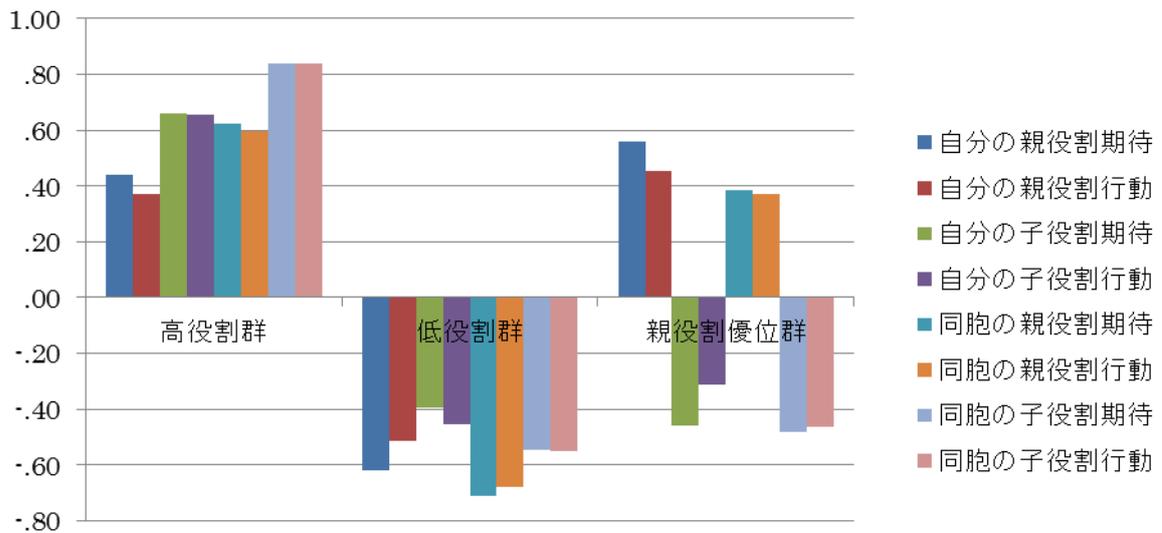


Figure8-1 家族内の役割の類型

第 4 項 家族内の役割類型ときょうだい関係との関連

次に、役割の 3 類型を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度(共存, 対立, 保護・依存, 分離)得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行なった (Table 8-2)。その結果、「共存」得点 ($F(2)=24.22, p<.001$), 「対立」得点 ($F(2)=15.16, p<.001$), 「保護・依存」得点 ($F(2)=10.19, p<.001$), 「分離」得点 ($F(2)=3.25, p<.05$) において有意差が認められたため、Tukey 法による多重比較を行なった。その結果、「共存」得点は、「高役割群」 ($p<.001$) と「親役割優位群」 ($p<.001$) が「低役割群」よりも有意に高かった。また、「対立」得点は、「高役割群」 ($p<.001$) と「親役割優位群」 ($p<.05$) が「低役割群」よりも有意に高かった。「保護・依存」得点も、「高役割群」 ($p<.001$) と「親役割優位群」 ($p<.01$) が「低役割群」よりも有意に高かった。「分離」得点は、「低役割群」が「親役割優位群」 ($p<.1$) よりも有意に高い傾向が見られた。

Table8-2 役割類型におけるきょうだい関係の下位尺度得点と分散分析結果 ($n=259$)

n	高役割群		低役割群		高親役割群		F値	多重比較
	100		113		46		df	(Tukey法)
	M	SD	M	SD	M	SD		
共存	2.89	.71	2.26	.73	2.79	.55	24.22*** 2	低役割<高役割, 親役割優位
対立	2.90	.71	2.36	.74	2.70	.73	15.16*** 2	低役割<高役割, 親役割優位
保護・依存	2.99	.63	2.57	.82	2.97	.68	10.19*** 2	低役割<高役割, 親役割優位
分離	1.95	.87	2.16	.92	1.80	.74	3.25* 2	親役割優位<低役割

*** $p<.001$, * $p<.05$

第4節 考察

きょうだいが担う役割ときょうだい関係との関連について検討するために、役割を類型化し、類型間のきょうだい関係得点の比較を行ったところ、類型間できょうだい関係に有意な得点差が見られた。

第1項 きょうだいの役割ときょうだい関係との関連

家族内の役割尺度の下位尺度得点を用いて、役割の類型化を行った。その結果、すべての役割の得点において標準得点の平均が $.00SD$ 以上である“高役割群”，すべての役割の得点において標準得点の平均が $.00SD$ 以下である“低役割群”，自分と同胞の親役割が $.00SD$ 以上、自分と同胞の子役割は $.00SD$ 以下の“親役割優位群”の3類型が見出された。また、各役割の類型を独立変数とし、きょうだい関係スケールを従属変数とした1要因の分散分析を行ったところ、類型間に有意な差が見られた。

まず、「共存」関係と、「保護・依存」関係についてであるが、高役割群および親役割優位のほうが、低役割群よりも有意に「共存」，「保護・依存」関係が高いことから、自分や同胞の親役割期待，親役割行動が多いほど，親和的な関係になることがわかる。また、高役割群と親役割優位群との間には有意な得点の差はみられなかったことから、子役割の量にかかわらず、自分や

同胞の親役割期待，親役割行動が多いほど，きょうだい関係は親和的になるといえるだろう。また，「対立」関係においても，「共存」や「保護・依存」関係と同様の結果が得られた。これは，第7章(【研究V】)において示されたように，「共存」や「保護・依存」関係と「対立」関係は正の関連があるためだと考えられる。つまり，「対立」関係は，きょうだい関係が親和的で接触があることで生じやすくなる。また，第7章(【研究V】)において，「対立」関係は，「共存」や「保護・依存」関係と同様に，役割期待との間に正の関連が見られ，家族内での役割が存在することで，きょうだい間の接触が生まれ，親和的なきょうだい関係や対立的なきょうだい関係は見られるようになることが考えられた。ゆえに，本章(【研究VI】)において，「対立」関係も，「共存」や「保護・依存」関係と同様に，親役割の多さとの関連が示されたと推察される。すなわち，青年期においては，子役割の量にかかわらず，きょうだいの親役割の量が多いほど，きょうだい間の接触が促され，親和的な関係や対立的な関係が生じることがわかる。反対に，「分離」関係については，低役割群の方が，親役割優位群よりも有意に高い値を示した。しかし，親役割優位群と高役割群との間や，高役割群と低役割群との間には有意な差は見られなかったことから，子役割の量にかかわらず，親役割が低いほど，きょうだい関係は分離的になることが考えられる。

以上の結果から，子役割の高さにかかわらず，親役割が高いほど，きょうだい関係は親和的になり，子役割にかかわらず，親役割が低いほど，きょうだい関係は分離的になることが示された。

また，第7章(【研究V】)においては，自分の親役割の程度に対して，どの程度同胞の親役割を認知しているのかという，自分と同胞の役割期待と役割行動のバランスと，きょうだい関係は関連することが示された。しかし，本章(【研究VI】)で得

られた役割の類型結果では、きょうだい間の親役割の量の違いというよりも、親役割や子役割の量によって類型化されていることがうかがえる。したがって、第7章(【研究V】)で示されたようなきょうだい間の親役割の偏りときょうだい関係との関連については、十分に示すことはできなかつた。ただし、きょうだいの親役割の量が多いほど、きょうだい関係は親和的になることから、青年期においては、親役割が高いことは問題ではなく、親和的なきょうだい関係を促進するものであると考えることができる。よって、親役割の高さと、青年期のきょうだい関係について考察を行う。

落合・佐藤(1996)は、大学生の青年においては、「子が親から信頼・承認されている関係」や「親が子を頼りにする関係」が見られるようになる」と指摘している。また、親を配慮する気持ちが生まれ、心理的距離が近くなることが指摘されている(宮下, 1996)。このように青年期においては、子どもが親と対等な関係になり、親の気持ちや考えを理解するようになることができる。こうして、親と同じ目線で家族内のニーズについて感じ取ったり、行動することができるようになる」と想像される。したがって、Walsh *et al.*(2006)が指摘するように、青年期には適応的な役割として親役割が見られるようになる」と考えられる。また Walsh *et al.*(2006)は、親役割は凝集性が高く、子どもの自律性を認める家族環境において、子どもが十分に親役割を担えるようになる」と示唆している。第6章(【研究IV】)において、家族機能の高い家族においては、親役割期待以上に行動していることが見られたことから、きょうだいそれぞれが親役割期待を感じ親役割行動を多くとっているということは、機能的な家族の中で、青年期の子どもとして自発的に親役割をとっている」と考えることができるだろう。また、第3章(【研究I】)において、青年期のきょうだいはそれぞれが個と個としての付き合いを始めるようになることが見出された。つまり、き

ようだいが互いに家族内で親役割を担うようになるほど、互いをひとりの大人として認め、対等な付き合いができるようになり親和的な関係が多く見られるようになる」と推察される。

また、「共存」、「保護・依存」、「対立」関係においては、高役割群と低役割群との間に有意差が見られたものの、高役割群と親役割優位群との間には有意な差がみられなかったことから、子役割の程度にかかわらず、親和的な関係や対立的な関係が見られると考えられた。第7章(【研究V】)において、子役割ときょうだい関係スケールとの関連について検討した際も、子役割は親役割ほど、きょうだい関係との相関は見られていない。したがって、青年期の子どもにとっては、子役割は親役割ほど、きょうだい関係に対して大きな影響は持たないことが考えられる。第6章(【研究IV】)においても、大学生という時期においては、親役割の方が家族の状態を反映しやすいことが示されている。就職し経済的自立に至る前の大学生という時期は、子どもと大人の過渡期にあたるが、その中で、子どもの発達に伴って、親子関係が対等になっていくよう親子関係の再編、つまり親役割を担うように変化していく。そのため、青年期においては、子役割よりも親役割のあり方によって、きょうだい関係が規定されると推察される。

第2項 本章(【研究VI】)の限界

本章(【研究VI】)では、第7章(【研究V】)で示されたきょうだいの役割ときょうだい関係との関連について、親役割・子役割の役割期待および役割行動のすべての役割を用いて検討を行った。その結果、「共存」関係、「保護・依存」関係、「対立」関係は高役割群と親役割優位群の方が、低役割群よりも、有意に得点が高いことが示された。また、「分離」関係は、低役割群の方が、親役割優位群よりも有意に得点が高いことが示された。この結果から、子役割の程度にかかわらず親役割が高いほど、

きょうだい関係は親和的な関係や対立的な関係が見られるようになり，親役割が低いほど，きょうだい関係は分離的になることが示された。しかし，本章(【研究VI】)の結果からは，きょうだい間の役割期待と役割行動の程度によるきょうだい関係との関連については明らかにすることはできず，親役割や子役割の量ときょうだい関係との関連について示されたに留まる。したがって，第7章(【研究V】)で示されたようなきょうだい間の親役割の偏りについては，十分に示すことはできていない。今後，自分と同胞の役割期待と役割行動の差がある場合についても，検討していくことが求められるだろう。

また，本章(【研究VI】)では，全体的な役割のバランスからきょうだい関係との関連を捉えるために，クラスタ分析を採用した。だが，クラスタ分析は，対象者の類似度・非類似度に基づいて対象の群分けを行う分析である。そのため，示された役割の類型は，サンプリングによって異なってくることに留意が必要である。特に，本章(【研究VI】)で分析に用いた対象者の標準偏差の値も0.63～0.88程度であることから，ある程度均一な大学生のサンプルであることに留意が必要である。また，平均値を見ると，すべて中央値よりも高い値となっており，全体的にやや高い値を示しているサンプルであると考えられる。そのため，本章(【研究VI】)から得られた結果は，第7章(【研究V】)までで得られた結果とともに，親役割の程度と子役割の程度について補足的に考察するために用いるに留め，今後は，臨床群等についても検討していくことが必要であろう。

第 3 部

討論

第 9 章

総合考察

本研究の目的は、青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにすることであった。きょうだい関係の規定は家族関係の文脈の中でなされるという前提に基づき、家族関係との関連から青年期きょうだい関係について検討を行った。その際、きょうだい間においても家族関係の認知は異なるために、青年自身が認知する家族関係を重視し、本人の視点から家族関係を捉えた。家族関係を捉えるにあたっては、相互作用を捉える概念として役割を用いた。役割は、親役割および子役割に着目し、さらにそれぞれの役割期待と役割行動を測定することで、相互作用的な視点で用いた。そして、自分と同胞のこれらの役割の組み合わせと、きょうだい関係との関連について検討を行った。加えて、役割に着目することで、煩雑な属性に代わる手法を提案することを試みた。

第 1 節 仮説の検証

青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにするという目的に沿い、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)の構造派モデルに見られる、世代間境界が曖昧な家族に関する知見や、青年期において親役割は適当であることを指摘する知見(例えば、Herer & Mayseless, 2000; Walsh *et al.*, 2006)から、親役割と青年期きょうだい関係との関連について仮説生成した。

まず、家族の世代間境界が曖昧になり子どもが親サブシステムに巻き込まれ親役割を担っている状態の家族においては、子どもは症状行動を呈し家族として機能不全状態になるという指摘(Minuchin, 1974, 山根(監訳), 1984)や、このような家族においてはきょうだい間に葛藤が生じるという家族療法事例からの指摘(Namysłowska & Siewierska, 2010)がある。これらの指摘から、子どもが親役割を担う状態に着目することで、きょうだい関係を予測できると考えられた。そして、きょうだいのうち

の一部の子どもが親サブシステムに巻き込まれ親役割を担っている、つまり、きょうだい間で親役割を担う子どもとそうではない子どもがいることと、きょうだい関係が関連することが予想される。一方で、青年期に親役割を担うことは必ずしも不適切なものではなく、適応的な行動とみることにもできるという指摘もある(例えば、Herer & Mayseless, 2000; Walsh *et al.*, 2006)。そのため、青年期の子どもにとっては、親役割を一部の子どもが過度に担っているのか、それとも適応的な役割として子ども達が担っているのかというように、どのようにきょうだいが親役割を担うのかによって、きょうだい関係への影響は異なると考えられた。

また、役割という概念を扱うにあたって、Haney *et al.*(1973)の実験、およびその実験から Bronfenbrenner(1981, 磯貝・福富(監訳), 1996, p.100)が導き出した、役割を割り当てられることで役割を与えられた人は、「その役割を占める人やその人と関係のある他者の行動にふさわしいという期待に対応した知覚、活動、対人関係のパターンが引き起こされる」という役割に関する仮説を参考にした。加えて、青木(1993)の、発話者は相手に対して抱く役割期待によって対話の内容を選択しているという知見や、役割期待に対して役割遂行をすることで友人関係の維持・親密化が図られているという指摘(下斗米, 2000)、他成員からの役割期待と他成員に対する自分の役割遂行が高いほど、仲間集団との関係満足度が高くなるという指摘(黒川・吉田, 2006)から、役割期待は、対人関係において個人の行動を拘束するルールとなり、そのルールの下で役割行動をとることによって関係の形成・維持がなされていると解釈した。したがって、役割を、相互作用を捉える概念として用いることとした。さらに、役割の概念を家族システムに援用すると次のように考えることができた。

Walsh *et al.*(2006)は、親役割は、青年の適応的な役割として、

強い結びつきを持った家族において出現することを指摘している。したがって、青年期の子どもとしての適応的な役割として親役割を見なすと、きょうだいそれぞれが、親役割期待を感じ親役割行動をとることで、家族システムの一員として関係維持を図っていることが推察された。よって、きょうだい共に親役割期待を受け、親役割行動をとっている場合にはきょうだい関係は親和的になると考えられた。反対に、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は、世代間境界が曖昧な家族では、子どもが親サブシステムに巻き込まれ、きょうだいサブシステムとしての機能が阻害されると述べている。この場合には、巻き込まれた子どもは親役割を担うのに対し、巻き込まれていない子どもは親役割を担わないため、きょうだい間で親役割を担う子どもと、そうではない子どもが存在するだろう。また、親サブシステムに巻き込まれた子どもは、家族関係を維持するために、親役割期待に従って親役割行動をとるが、巻き込まれていない子どもは、そもそも親役割期待を受けていなかったり、親役割期待を感じても親役割行動はあまり見られないのではないかと考えられた。加えて、世代間境界が曖昧になり子どもが親サブシステムに巻き込まれた家族においては、親サブシステムに巻き込まれた子どもと巻き込まれていない子どもとの間に葛藤が生じるという指摘(Namysłowska & Siewierska, 2010)があることから、親役割期待に従って親役割行動をとっている子どもと、親役割期待が少なかったり親役割期待を受けてもあまり親役割行動をとらないといった、きょうだい間に親役割の偏りがある場合には、きょうだい関係は分離的になることが考えられた。

以上のように、これらの親役割に関する指摘と、役割理論の考え方を踏まえ、「きょうだいそれぞれが親役割を担う場合にはきょうだい関係は親和的になるが、一方のきょうだいのみが親役割を担う場合にはきょうだい関係は分離的になる」という仮説を提示した。以下に、6つの実証研究の概要とそこから明ら

かにされた主な結果を示し、本研究全体の仮説と照らし合わせて検討する。

まず第3章(【研究I】)の「きょうだい関係の発達的变化に関する研究」では、青年期きょうだい関係を家族関係との関連から検討するに先立ち、従来の研究の問題点を踏まえた上で、きょうだい関係と家族関係との関連、青年期きょうだい関係の重要性を指摘した。具体的には、従来のきょうだい関係研究は本人以外の視点から調査されているものが多いことや、青年期きょうだい関係と家族関係との関連についてあまり検討がなされておらず、そのため、青年期きょうだい関係と家族関係との関連について本人の視点からはあまり論じられていないことを指摘した。そこで、本人の視点から、きょうだい関係の発達的变化について検討を行った。第3章(【研究I】)の検討は、家族関係におけるきょうだい関係の位置づけおよび、青年期きょうだい関係の特色について示すための基礎的研究として位置づけられる。本人の視点から幼児期から高齢期までのきょうだい関係をたずねるために、きょうだいを持つ50代、60代の第1子に対して質的調査を行った。その結果、[家族期]、[自立期]、[親族期]、[介護期]、[統合期]の5段階からなるきょうだい関係の発達段階が見出された。青年期のきょうだい関係は[自立期]にあたり、上下関係が中心の[家族期]から、新しく形成した家族との付き合いが中心になりきょうだいとは距離をとりながら関係を保つ[親族期]までの過渡期にあたることが示された。[自立期]にかけて、きょうだい関係が次第に対等になり、きょうだいが互いに個と個としての付き合いができるようになることで、続く[親族期]においても情緒的な結びつきを中心とした親和的なかわりがなされることが示唆され、青年期きょうだい関係の重要性が示された。また、きょうだい関係の変化は家族システムの発達的变化に伴い生じていることが推察された。つまり、きょうだい関係は家族との相互作用の中で形成されており、家

族関係に着目する必要性が示された。

第4章(【研究Ⅱ】)の「青年期の家族構造ときょうだい関係との関連」では、第3章(【研究Ⅰ】)で示された青年期きょうだい関係の重要性および、きょうだい関係は家族関係の文脈の中で形成されているという点を踏まえ、どのような家族関係の中で青年期きょうだい関係が規定されているかについて探索的な検討を行った。具体的には、家族関係を包括的に捉えるために、各家族成員間の結びつきを査定し家族構造として家族を捉え、きょうだい関係との関連について検討を行った。その結果、家族全体の結びつきの強い家族構造であるほどきょうだい関係は親和的になり、反対に、家族全体の結びつきが弱い家族構造であるほど、きょうだい関係は分離的になることが示された。また、家族構造ごとに見られる家族の相互作用について詳細に検討し、家族構造ごとにどのような家族成員間の相互作用が見られ、きょうだい関係の規定につながっているかを探索的に検討した。その結果、夫婦関係、親子関係、きょうだい関係にそれぞれ特徴が見られた。家族全体の結びつきが強い家族構造では、夫婦間にルールがあり親子間では信頼関係があり、親の取り持ちを通じて、接触の多い信頼したきょうだい間のかかわりとなっていることが考えられた。家族全体の結びつきが弱い家族構造では、夫婦間に葛藤があり、きょうだいのうちの一方の青年が母親の道具的・情緒的サポートを担う等の親役割をとるようになることで、きょうだい間での葛藤が生じたりきょうだいとのかかわりを避けるようになることが推察された。あるいは、きょうだいで結託することで、家族ストレスに対処しているきょうだい関係も見られた。さらに、家族全体の結びつきが弱い家族構造では、家族成員とは必要最低限の接触であり、大学進学等によって家族との心理的・物理的距離が離れていることで、家族成員との結びつきを低く認知している場合もあると推察された。これらの結果から、きょうだい関係は親子関係あ

るいは夫婦関係との直接的な関連を検討するだけではなく、家族の全体性に着目する必要が示された。特に、青年本人が、自分の親子関係や夫婦関係の認知だけではなく、同胞の親子関係をどのように認知しているのかも、きょうだい関係を規定する上での重要な要因であることが示唆された。夫婦関係や自分の親子関係、同胞の親子関係が家族内で複雑に相互影響し合うことできょうだい関係は規定されているといえるだろう。また、結びつきの弱い家族構造においては、家族内に葛藤が多いために結びつきが弱いと認知している場合もあれば、家族から離れていることで結びつきが弱いと認知している場合も含まれていることがうかがえた。したがって、家族との心理的・物理的距離があく大学生という時期においては、青年が親役割を担うことに着目することで、より家族の状態を捉え、きょうだい関係を説明することができるのではないかと推察された。

第4章(【研究Ⅱ】)から、青年が担う親役割に着目することの有効性が示されたものの、親役割を測定する尺度にはいくつかの課題があった。従来の研究で多く使用されている親役割を測定する尺度(例えば、Sessions & Jurkovic, 1986)は、子どもが親に代行してどのような役割を担っているかを測定することが目的となっている。そのため、子どもがどの程度の比重で、家族内で親役割を担っているのか、発達上不適切なほど親役割を担っているのかどうかは不明である。したがって、第5章(【研究Ⅲ】)の「青年が担う家族内の役割尺度の作成」では、子どもが発達上不適切なほど過度な割合で親役割を担っているのかを捉えることができるように、親役割だけではなく、子どもが、子どもサブシステム内において担っている役割についても着目した。そして、「親役割」と「子役割」からなる「家族内の役割尺度」の作成と、内的整合性および妥当性の検討を行った。その結果、「親役割」因子5項目、「子役割」因子5項目の計10項目からなる尺度が作成された。「親役割」は、親と青年が横並

びになる関係で、「子役割」は、親と青年が上下になる関係であることが示された。また、属性と家族内の役割との関連について検討したところ、男性よりも女性の方が、有意に「親役割」・「子役割」得点が高く、第1子の方が第2子以降よりも「親役割」得点が高いという結果が得られた。この結果から、ある属性であることで、特定の相互作用のパターンが生じていることがうかがえた。本研究は、相互作用を捉える概念として役割を用い、きょうだい関係との関連について検討することを試みていることから、ある属性であることで、特定の相互作用のパターンが生じていることを踏まえ、以降では属性にかかわらず、役割に着目することとした。

第6章(【研究Ⅳ】)の「家族機能ときょうだいの役割パターンとの関連」では、家族機能の高い家族と低い家族の比較を通じて、家族の状態を反映し、きょうだいがどのように役割を担っているのかを明らかにすることを試みた。具体的には、第5章(【研究Ⅲ】)で作成された尺度を用いて、家族機能の高群と低群におけるきょうだい間の役割の関連に着目した。その際、「①家族機能の高い家族の場合には、自分の親役割期待と親役割行動、同胞の親役割期待と親役割行動が関連し、また、自分の親役割期待と同胞の親役割期待の関連や、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連が見られる。②家族機能の低い家族の場合には、きょうだいの一方のみに親役割期待と親役割行動の強い関連が見られるが、もう一方のきょうだいの親役割期待と親役割行動は弱い関連が見られる」という仮説に従い検討を行った。その結果、親役割については、高群では、きょうだい間で自分の親役割期待と同胞の親役割期待、自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連が見られ、きょうだいと同じように親役割期待を感じ、親役割行動をとっていることが示された。さらに、自分が感じている親役割期待に従って同胞が親役割行動をとっていると感じる傾向もあることがわかった。また、自分

も同胞も、親役割期待以上に親役割行動するという特徴が見られた。反対に、低群では、自分と同胞それぞれが別個に、親役割期待に従って親役割行動をとっていることが示された。子役割については、高群と低群の間で、自分の子役割期待と同胞の子役割行動の関連にしか違いが見られず、高群において、自分の子役割期待を察して、同胞も子役割行動をとってくれていると感じていることが推察された。親役割と子役割それぞれの結果から、子役割よりも、親役割の方が、家族の状態を反映しやすいことが考えられた。また、親役割・子役割にかかわらず、高群では、自分が感じている役割期待に従って同胞も役割行動をとっているという認知があることがわかった。つまり、家族機能が高い場合には、自分が感じている役割期待を同胞が察知し、役割行動をとってくれるという状況があると考えられた。したがって、家族の機能状態によって、自分の親役割に対して、同胞がどのように親役割を担ってくれているのか、という感じ方に違いがあることが推察された。

そのため、第7章(【研究V】)の「きょうだい担う役割ときょうだい関係との関連」では、きょうだいの親役割期待と親役割行動に着目することで、きょうだい関係を説明することを目的とした。特に、自分の親役割に対して、どの程度同胞が親役割を担っているのかということと、きょうだい関係との関連について検討した。その際、第6章(【研究IV】)において、家族機能の高い家族においては、自分の役割期待と同胞の役割行動に関連が見られるが、家族機能の低い家族においては、関連が見られなかったことを受け、「①自分の親役割期待の程度と同胞も同程度の親役割行動をとるほど、きょうだい関係は親和的になる。②自分の親役割期待が高くても、同胞の親役割行動が低い場合、きょうだい関係は分離的になる」という仮説に従って検討を行った。「自分の親役割期待」高・低と「同胞の親役割行動」高・低の組み合わせからなる4群を独立変数とし、きよ

うだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った。同様に、「同胞の親役割期待」高・低と「自分の親役割行動」高・低の組み合わせからなる 4 群を独立変数とし、きょうだい関係スケールの下位尺度得点を従属変数とした 1 要因の分散分析も行った。この結果から、自分の親役割期待と同胞の親役割行動が同程度に高いほど、きょうだい関係は親和的になることが示された。また、同胞の親役割期待に対して自分の親役割行動が低いことで、きょうだい関係は分離的になることがわかった。これらの結果から、自分の親役割の程度に対して、同胞がどの程度親役割を担っているかと認知しているのかという、自分と同胞の役割期待と役割行動のバランスによって、きょうだい関係は説明されることが明らかにされた。特に、自分と同胞が同程度に親役割を担っているのか、あるいは、きょうだい間に偏りがあると感じているのかによって、きょうだい関係が異なることが推察された。

第 6 章(【研究Ⅳ】)ならびに第 7 章(【研究Ⅴ】)を通じて、家族機能ときょうだいの役割パターン、きょうだいそれぞれの親役割の程度ときょうだい関係との関連について検討し、自分の親役割の程度に対して、同胞の親役割がどの程度であるのかということが、きょうだい関係と関連することが見出された。しかし、第 7 章(【研究Ⅴ】)では、親役割の偏りときょうだい関係との関連について検討するという本研究の目的に従い、親役割のみを独立変数として用い、きょうだい関係について説明した。そのため、親役割に対してどの程度の子役割が見られるのかについては示されていない。そこで、第 8 章(【研究Ⅵ】)の「きょうだいが担う役割のバランスときょうだい関係との関連」では、自分と同胞の親役割および子役割からなる役割の類型を提示し、きょうだい関係との関連について検討した。役割の類型化を行った結果、すべての役割の得点において標準得点の平均が $.00SD$ 以上である“高役割群”，すべての役割の得点におい

て標準得点の平均が $.00SD$ 以下である“低役割群”，自分と同胞の親役割 $.00SD$ 以上，自分と同胞の子役割は $.00SD$ 以下の“親役割優位群”の3類型が見出された。そして，きょうだい関係との関連について検討した結果，「共存」関係と，「保護・依存」関係については，高役割群および親役割優位の方が，低役割群よりも有意に「共存」，「保護・依存」関係が高いことから，子役割の量にかかわらず，自分や同胞の親役割期待，親役割行動が多いほど，親和的な関係になることが示された。また，「対立」関係においても，「共存」や「保護・依存」と同様の結果が得られた。反対に，「分離」関係については，低役割群の方が，親役割優位群よりも有意に高い値を示したことから，子役割の量にかかわらず，親役割が低いほどきょうだい関係は分離的になることが示された。これらの結果から，きょうだい共に親役割得点が高いほど，親和的なきょうだい関係や対立的なきょうだい関係が見られるようになり，一方で，きょうだいの親役割得点が高いほどきょうだい関係は分離的になることが明らかにされた。きょうだい間の役割期待と役割行動の程度によるきょうだい関係との関連については十分に明らかにすることはできなかったが，親役割の量がきょうだい関係と関連することが示されたといえるだろう。

これらの実証研究を通して，きょうだい関係は家族関係の文脈の中で規定されており，家族関係の状態によってきょうだいがどのように役割を担うのかは異なることが示された。そして，きょうだいが共に同程度に高い親役割を担うほどきょうだい関係は親和的になり，きょうだい間に役割の偏りがあると感じられるときょうだい関係は分離的になることが示された。したがって，役割を用いて青年期きょうだい関係の規定について検討した結果，「きょうだいそれぞれが同程度に高い親役割を担う場合にはきょうだい関係は親和的になるが，きょうだい間に親役割の偏りが生じていると認知している場合にはきょうだい関係

は分離的になる」ことが明らかにされた。これは、青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにするという本研究の目的に沿って提示した「きょうだいそれぞれが親役割を担う場合にはきょうだい関係は親和的になるが、きょうだい間に親役割の偏りがある場合にはきょうだい関係は分離的になる」という仮説と照らし合わせると、本研究の仮説を支持する結果となった。

本研究から得られた結果は Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)のモデルと照らし合わせると、どのように位置づけられるのであろうか。Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は、子どもや青年が燃え尽きたり、子どもの発達に見合わないほど多くの責任を負わされたりしている場合、子どもが親役割を担うことは潜在的に危険性を含んでいることを指摘している。また、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は、世代間の境界が曖昧な家族においては、子どもが親サブシステムに巻き込まれ、ストレスが他のサブシステムに影響し非機能的だと述べ、Namysłowska & Siewierska(2010)は、このように世代間境界が曖昧になった家族においては、葛藤的なきょうだい関係が存在することを指摘している。本研究の結果からは、青年本人が親役割を担っていないのに対し、同胞は親役割を担っていると感じる場合、きょうだい関係は分離的になることが示された(【研究V】)。つまり、本研究の検証を通じて、青年が実際に親サブシステムに巻き込まれているかどうかよりも、本人の視点を通して、自分と同胞の親役割、つまり、自分と同胞との間に、家族から求められていることや家族に示している行動に差があると感じることが、きょうだい関係に作用すると推察される。また、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)は子どもが過度で固定的な親役割を担うことの危険性を指摘している。しかし、機能的な家族においては、親役割期待以上に親役割行動をとっていること(【研究IV】)や、親役割の高さは親和的なきょうだ

い関係にもつながること(【研究VI】)が示され、大学生という時期には、親役割そのものが危険因子となるものではないことを本研究では明らかにした。特に、本研究では、親役割と子役割を同時に用いることで、子役割に対して親役割の方がきょうだい関係と関連することを示し(【研究V】、【研究VI】)、大学生を対象とした青年期きょうだいにおいては、きょうだいがどのように親役割を担っているかに着目することで、きょうだい関係を説明できることが示された。

第2節 青年期のきょうだい関係と家族関係について

次に、青年期のきょうだい関係を家族関係の文脈から検討するために行った基礎研究(【研究I】【研究II】)について考察する。第3章では、5段階からなるきょうだい関係の発達的变化を見出した(【研究I】)。さらに、青年期に焦点を当て、家族構造ときょうだい関係との関連について探索的に検討を行った(【研究II】)。その結果、家族構造ときょうだい関係との関連が見出された。

従来、青年期のきょうだい関係研究は主に、青年の精神的健康や社会適応との関連について検討がなされているものの(例えば、Bullock *et al.*, 2002; East & Khoo, 2005; Oliva & Arrantz, 2005)、家族関係との関連から青年期きょうだい関係の規定についてはあまり関心が寄せられていなかった。その背景には、同胞との結びつきは、親や配偶者、自分の子どもとの結びつきと比較して、子どもの成長とともに重要性が低下していくため(Parsons, 1943)、家族関係の中で青年期きょうだい関係自体への関心が低い傾向にあることが要因として挙げられるだろう。しかし、第3章(【研究I】)の結果からは、きょうだい関係の変化は常に、きょうだいサブシステムの上位システムである家族システムと連動して生じていることが推察された。また、子どもが原家族から独立し、自分の新しい家族を持った

後でも，互いが持つ新しい家族システムからの影響を受けながらきょうだい関係のあり方は規定されていることが見出された。さらに親の死後，吉原(2006)の指摘するように，きょうだいは高齢期における貴重なサポート源となることが示唆された。その中で，青年期のきょうだい関係は，青年期以降のきょうだい関係につながることから，青年期きょうだい関係の形成は決して無視することはできないだろう。加えて，きょうだいサブシステムは上位のシステムの影響を受けやすく，家族システムの状態がよく反映されているといえるだろう。Namysłowska & Siewierska(2010)は，自身の家族療法の経験から，夫婦間の葛藤や子どもの問題行動等の問題を抱えて来談する家族では，きょうだい関係が良くないことを指摘している。そして，夫婦関係，母子関係，父子関係といった家族の構造を見立てる際，きょうだいサブシステムの状態は指標になると述べている。この指摘からも，きょうだいサブシステムは，家族システムの状態を反映しやすいサブシステムであることがわかる。

さらに，青年期に焦点を当てると，きょうだい関係は，家族全体の複雑な相互作用の中で規定されていることが明らかにされた(【研究Ⅱ】)。従来の研究においても，システム的な視点から，家族関係との関連が検討されてきたが(例えば，Stocker, Ahmed, & Stall, 1997; Erel *et al.*, 1998)，それらは，きょうだい関係を規定する夫婦関係・親子関係の影響過程に着目していた。しかしながら，第4章(【研究Ⅱ】)においては，家族構造として包括的に家族を捉えることで，夫婦関係や自分と親との関係だけではなく，同胞の親子関係も含めてきょうだい関係が規定されていることが示された。つまり，家族内で同胞がどのような存在であるのかを認識することを通じて，きょうだい関係が規定されていることが推察された。また，従来，親の養育態度の差について検討が行われ，きょうだいに対する養育態度に差があることできょうだい関係は否定的になることが示さ

れてきた(例えば, Stocker *et al.*, 1989; Brody *et al.*, 1992)。さらに, MacHale *et al.*(2000)は, 家事, 親の暖かさ, 親の関与度という 3 領域の中では, 子どもは特に親の暖かさにおいて, きょうだい間での差を感じ取りやすいことを指摘している。MacHale *et al.*(2000)の指摘から, 養育態度の中でも, 差が生じても気にならない部分と, 差に対して敏感に反応しやすい部分があることがわかる。つまり, きょうだいに対する親の養育態度の客観的な偏りではなく, 本人が親の養育態度の偏りをどのように解釈しているのかが, きょうだい関係を規定する上では重要になってくると考えることができる。例えば, 勉強が得意な青年と運動が得意な青年からなるきょうだいに対して, それぞれの得意分野を伸ばすような親のかかわり方であれば, 客観的に養育態度に差はあっても, 青年は公平に扱ってもらっていると感ずることも想定される。しかし, きょうだいどちらも勉強することを重視し, 運動が得意な青年に対して勉強を強いるかかわり方をすれば, 強いられた青年は養育態度の差を感じ, 不公平感を募らせたり, 勉強が得意な青年は運動が得意な青年を“勉強ができない同胞”と見なすことも考えられる。第 4 章(【研究Ⅱ】)の結果からは, 同胞の親子関係に対する認知も含めてきょうだい関係が規定されていることが示唆されたが, 前述したように, 自分と同胞に対する親のかかわり方を見比べていく中で, 同胞がどのような存在であるのかを認識し, その認識がきょうだい関係に波及していくと考えることができる。

また, 第 6 章(【研究Ⅳ】), 第 7 章(【研究Ⅴ】)を通じて, 家族機能の状態によって自分の親役割期待に対する同胞の親役割行動が異なることや, 自分の親役割期待に対して, 同胞がどれほど親役割行動をとっているかと認知しているのかによってきょうだい関係が異なることが示された。つまり, 自分がどのように親役割を担っているかだけでなく, 自分と比較して同胞がどのように親役割を担っているのかによって, きょうだい関

係が規定されることが考えられる。すなわち、本人の視点を通して、同胞は家族とどのようにかかわっており、どのような存在なのか、という見方によって、きょうだい関係が規定されることができると考えることができる。これは、同胞からすれば、同胞も家族を調整しようと親役割を担っているつもりでも、青年本人が、それをどのように捉えているかという点が重要であることがわかる。ただし、本研究の課題として後述するが、本研究は一貫して青年本人の視点を通して、家族関係やきょうだい関係を捉えているため、同胞が捉えている家族関係やきょうだい関係はまた異なるという可能性もある。本研究の結果は、青年本人が自分の役割と同胞の役割をどのように認識しているのかによって、きょうだい関係を説明したものである。

以上のように、青年期きょうだい関係は自分の家族とのかかわりだけではなく、同胞の家族とのかかわりを通じて規定されることが明らかにされた。これは、青年期は友人関係においても、友人という存在を通じて自己理解を深めていき、人間関係を学んでいるという指摘もあるように(宮下, 1995)、同年代の他者の存在が重要性を持つ青年期であるということも、背景にあることが想像される。

第3節 役割ときょうだい関係について

本研究では、家族の状態を捉える指標として親役割に着目し、きょうだいがどのように親役割を担うことで、きょうだい関係が規定されるのかについて検討を行った。その結果、「きょうだいそれぞれが同程度に高い親役割を担う場合にはきょうだい関係は親和的になるが、きょうだい間に親役割の偏りが生じていると認知している場合にはきょうだい関係は分離的になる」という結果が得られた。

上述した結果の背景として、青年期きょうだい関係、特に対象とした大学生という時期が大きく関与していることが考えら

れる。親役割を担うことで子どもの精神的健康や社会適応に対して否定的な影響があること(例えば, Hooper *et al.*, 2008; Hooper & Wallace, 2010)や, 親役割は破壊的な家族において見られること(Jurkovic *et al.*, 1991; Jurkovic, 1998)が指摘されている一方で, 青年期の子どもの親役割の出現について調査を行った研究からは, 親役割は適度な凝集性の家族において見られ(Walsh *et al.*, 2006), 家族形態の変化に対して適応するための行動として見られること(Herer & Maysel, 2000)が指摘されている。つまり, 青年期においては, 親役割は必ずしも問題を生じさせるのではなく, 発達上の適応的な役割として生じることが考えられる。実際に, 第6章(【研究Ⅳ】)や第8章(【研究Ⅵ】)において, 家族機能の高い場合には親役割行動が多く見られることや, 親役割が高いほどきょうだい関係が親和的になることが示された。これは, 多くの大学生が過度の親役割を担っているのではなく, 青年期の子どもとして適応的な役割として親役割を担っているといえるだろう。青年期にかけての子ども・家族の変化として, 子どもは親の心情に近くなり(池田, 2006), 青年期の子どもを持つ時期には家族関係は再編され(Carter & McGoldrick, 1989), 親子関係は次第に対等になる(落合・佐藤, 1996)ことが指摘されている。したがって, 青年期後期にあたる大学生の時期には, 個人や家族関係の変化に従い, 子役割よりも親役割が期待されるようになっていると推察される。

また, 第6章(【研究Ⅳ】)では家族機能の高い家族と低い家族におけるきょうだい間の家族内の役割の関連について検討を行ったところ, 機能的な家族では自分の親役割期待と同胞の親役割行動, 自分の親役割行動と同胞の親役割行動との関連が見られた。第7章(【研究Ⅴ】)では, きょうだいそれぞれの親役割の程度ときょうだい関係の関連について検討したところ, 自分の親役割期待と同胞の親役割行動が同程度に高いほど, 親和

的なきょうだい関係が見られることが示された。これらのことから、青年期の家族として機能的な状態とは、親役割を担っていない状態ではなく、きょうだい互いに親役割を担っている状態であると解釈することができる。これは、親役割は、高い家族の結びつきと、年齢に適した自律性を許す家族の雰囲気の中で出現するとする Walsh *et al.*(2006)の指摘を支持するものであろう。すなわち、きょうだいそれぞれ親役割を担うことができている場合とは、家族の凝集性が高く、青年期にかけて家族関係の再編を達成した家族でもあると言い換えることができるだろう。ゆえに、青年期の子どもを持つ時期として家族システムを変容させた家族では、きょうだい互いに親役割を担うことで、互いをひとりの大人として認め、第3章(【研究I】)で示されたような、青年期のきょうだいそれぞれが個と個としての付き合いを始めるようになると推察される。

一方で、非機能的な家族の場合には、自分と同胞それぞれが別個に親役割期待に従って親役割行動をとっており(【研究IV】)、自分の親役割行動が低いのに同胞の親役割期待が高い場合には、きょうだい関係は分離的になることが示された(【研究V】)。このことから、きょうだいそれぞれは、親役割期待に従って親役割行動をとっているが、きょうだい間でそもそもの親役割期待や親役割行動の程度に違いがある場合、きょうだい関係は分離的になるといえるだろう。すなわち、きょうだい間で家族から求められていること、家族に対する振る舞いに差がある場合には、きょうだい間での対等なかかわりが促されず、分離的なきょうだい関係へと発展していくことが推察される。

そして、第8章(【研究VI】)において、きょうだいの役割全体ときょうだい関係について検討した結果、子役割の程度にかかわらず、きょうだいの親役割が高いほど、親和的なきょうだい関係や対立的なきょうだい関係が見られるようになることが示された。この結果から、青年本人が、きょうだいと共に同程

度に高い親役割期待を受け親役割行動をしていると認知している場合に、親和的なきょうだい関係や対立的なきょうだい関係が見られるようになるといえるだろう。また、第7章(【研究V】)では、対立的なきょうだい関係は見られなかったが、第8章(【研究VI】)で見られたことについては、きょうだいの役割期待と役割行動の差と対立関係は関連せず、親役割の量と関連することがうかがえる。つまり、青年期のきょうだいがどちらも親役割を担う場合には、きょうだいが一緒に何かをしたり、家族について相談し合うことや、時に言い争いをする機会が生じやすくなるために、親和的な関係と同時に、対立的な関係も見られるようになるが、自分と同胞の親役割に差があることによって、対立が生じるわけではないと考えられる。反対に、子役割にかかわらず、きょうだいの親役割が低いほど、きょうだい関係は分離的になることが示された。きょうだいの親役割が共に低いということは、青年期の子どもとして親役割を担っておらず、家族成員の一員として、家族関係を調整するなどの家族を維持しようとする動きが少なく、家族に対する興味や関心が低いことがうかがえる。そのため、きょうだい関係も分離的になるのではないだろうか。

また、子役割は、第7章(【研究V】)において、子役割ときょうだい関係スケールとの関連について検討した際も、親役割ほどきょうだい関係との相関は見られていない。したがって、青年期の子どもにとっては、子役割は親役割ほど、きょうだい関係に対して大きな影響は持たないことが考えられる。つまり、本研究では、子役割との相対的な比較を通じて、親役割の高さの重要性や有効性について指摘しているといえるだろう。

以上のように、青年期においては、きょうだい共に親役割が高いことは発達段階に適した役割となっていることが明らかにされた。そして、きょうだいが互いに親役割を担うことで、互いをひとりの大人として認め、第3章(【研究I】)で示された

ような、個と個としての付き合いを始めるようになると推察された。しかし、他の発達段階においては、必ずしも親役割の高さが適応的とは言えないことも考えられる。第3章(【研究I】)において、青年期にあたる[自立期]以前の[家族期]においては、年長者は親とのコミュニケーションを通じて兄・姉役割を担うようになり、年少者に対する養護的なかわりが中心となっていることが示された。したがって、[家族期]にあたる幼児期や学童期の家族においては、きょうだいの役割は年長者と年少者で異なることから、きょうだい間に役割の偏りがあるのは不適応的なことではないことが想像される。一方、[自立期]以降の[親族期]においては、きょうだい在家と家としての付き合いを始めるようになる。互いに新しく築いた家族を含めてきょうだい関係を維持していかななくてはいけない時期である。しかし、例えばDさんのように、親との同居問題について、弟から批判されたことで、きょうだい間の関係が悪化したというエピソードも見られた。これは、原家族の問題に対する取り組み方にきょうだい間で差があったことで、きょうだい関係が分離的になったと考えられる。つまり、自分も同胞も一緒になって問題に取り組むのか、あるいはきょうだいのうちのどちらかが取り組むかによって、親族としてのきょうだいの付き合い方にも影響が生じることが推察される。また、Hさんは[統合期]において、弟とは疎遠になってしまったことを後悔する発言が見られたが、これまで父親の死や母親の介護にHさん1人で対応してきたことが語られている。つまり、きょうだい間で原家族の問題への取り組みに偏りがあることで、同胞やその親族との関係が疎遠になっていくことがうかがえる。特に、[介護期]においては、きょうだい親を介護するめに介護体制を整える必要性が生じてくるが、この体制を形成する際に、どのようにきょうだいが役割分担をするのかによって、その後のきょうだい関係にも作用すると考えられる。きょうだいと同じように親役割を担って

いない場合には、一部のきょうだいも親の介護を行い、多くの負担を強いられることになる。一方で、きょうだいが共に親役割を担っている場合には、介護という原家族の問題についても一緒に取り組むことができ、きょうだい間の結束もより固くなっていくことが考えられる。例えば、Eさんは、“また今、凄く密接な関係にあるんですけど、それは母が15年前に亡くなったんですけれど、病気になったので。その時シフトを組んで、2人の妹は仕事があるので土曜とか日曜とか夏休みとか、そういう風に付き添って。”と、きょうだい皆で役割分担をして母親の介護にあたったことで、その後、きょうだい関係の親密さが増したことを述べている。つまり、青年期以降、きょうだい間で同程度に親役割を担っている関係とは、家族問題に対して同じようにきょうだいで取り組むことができる関係であるとも解釈することができ、続く関係において原家族の問題が生じて、安定したきょうだい関係を築いていくことができるのではないかと考える。

第4節 役割理論の援用について

最後に、役割という概念を用いたことについて考察を行う。

まず一つは、きょうだい研究の課題であった属性の煩雑性を回避できたことである。きょうだい関係研究においては、きょうだいの属性(性別、年齢差、出生順位、きょうだいの性別構成等)の組み合わせ方によって異なる知見となり(例えば、Buhrmester, 1992; Cole & Kerns, 2001)、その煩雑性が研究の発展の妨げとなっていることが指摘されていた(白佐, 2004)。このような背景を踏まえて、本研究では、属性によって生じる相互作用に着目し、役割として言い換えることを試みた。特に、Minuchin(1974, 山根(監訳), 1984)の指摘等を踏まえ、親役割に着目することが家族を捉える指標になることから、役割を用いる上で、“親役割”に着目することの必要性を指摘した(【研

究Ⅲ】)。これらのことから，親役割と子役割を測定する尺度を作成し(【研究Ⅲ】)，親役割と子役割の役割期待と役割行動からきょうだい関係を説明することを試みた結果，きょうだいが互いに同程度の親役割を担っている場合にはきょうだい関係は親和的になり，偏りがある場合には分離的になることが示された。

従来の研究においては，親和的なきょうだい関係の要因として，例えば，きょうだい構成が女きょうだいであることが指摘されている(Kim *et al.*, 2006)。本研究の中では，女性は男性よりも家族との結びつきが高いために(【研究Ⅱ】)，女性は男性よりも，親役割期待や子役割期待を感じやすいことが推察された(【研究Ⅲ】)。また，女きょうだいは，異性きょうだいや男性きょうだいよりも，きょうだい間で類似性が見られることから(磯崎，2007)，互いが同じように親役割を担いやすい傾向があることが考えられる。本研究から得られた結果を踏まえ，Kim *et al.*(2006)の指摘について考察すると，女きょうだいである場合には，互いに親役割を担いやすく，かつ同等の親役割を担いやすいため，親和的なきょうだい関係が見られるのではないかと考えられる。このように，役割の観点から，従来の研究結果について解釈することができる。役割を用いることできょうだい関係を説明するという新しい方法が示されたといえるだろう。

また，青年期という発達段階においては，きょうだい間での年齢差は小さくなり，個と個としての対等な付き合いが始まる(【研究Ⅰ】)。そのため，きょうだい間における出生順位や年齢差といった要因は，幼児期・学童期のきょうだい関係よりも大きな意味をなさなくなり，相互作用がきょうだい関係をより説明すると考えることもできる。したがって，大学生等の青年期きょうだい関係は，相互作用に着目し，説明することが有効だといえるだろう。

さらに、役割理論の観点から検討を行ったことで、家族内でなされている相互作用を踏まえ、きょうだい関係について検討することが可能となった。これまで Namysłowska & Siewierska(2010)等から、世代間境界が曖昧になり子どもが親サブシステムに巻き込まれ、きょうだい関係が葛藤的になっている家族について、臨床報告がなされている。本研究では、親役割期待と親役割行動に着目することで、きょうだい間に親役割の偏りが生じているというような、世代間境界が曖昧になっていると推察される家族の状態を捉え、実証的にきょうだい関係との関連について説明した。また、本研究の結果からは、大学生においては、親和的なきょうだいは共に親役割を担っており、親役割が必ずしも不適応的な役割ではないことが明らかにされた。つまり、親役割や子役割といった役割を役割期待と役割行動から捉えることで、きょうだいが現在置かれている家族システムの状態や発達段階について捉え、きょうだい関係について説明することができると考える。役割を用いたことで、きょうだいが、青年期の子どもとして、家族から求められていることや、家族に対して行動できている場合にきょうだい関係は親和的になり、また、家族システムが、きょうだいがそのような役割を担える状態に変容できていることで、親和的なきょうだい関係の形成に繋がること示されたといえるだろう。

第 10 章

今後の課題と展開

最後に、本研究の限界や、今後の課題と展開について述べる。加えて、本研究で得られた結果の意義や、学問的位置づけおよび臨床的示唆について示す。

第 1 節 今後の課題

まず、役割について述べる。本研究で使用した役割の因子は「親役割」と「子役割」の 2 因子からなる。これは、親役割が家族の状態を捉えるための指標として用いることができることから親役割と、親役割に対して子役割に着目した。しかし、これは本研究において、家族内の相互作用を捉えるために着目した役割であり、親役割と子役割が家族内で絶対的な役割であることを意味しない。本研究はあくまで親役割と子役割という概念を用いることで、きょうだい関係の規定について解明することを試みたものであることに留意することが必要である。また、本研究では、親役割を指標として用いたことから、特に親役割に重点を置いて検討を行った。しかし、臨床場面においては、青年期になっても親の意見に従うよう求められている青年や、青年自身の考えよりも親の考え方を押し付けられている青年が見受けられる。そして、このような家族においては、青年の不登校や引きこもりといった家族内の問題が生じている場合もある。この場合には、親役割よりも、むしろ子役割が高いことが問題といえるだろう。本研究はきょうだい関係の規定について検討するために親役割と子役割を用いたが、今後は親役割や子役割と、青年の精神的健康や社会適応との関連についても検討を行い、親役割や子役割自体の理解を深めていくことが求められる。そして、きょうだい関係のメカニズムの検討にあたって親役割や子役割を用いることの有用性について検討していくことが必要である。

次に本研究の対象者についてである。本研究は一貫して青年本人の視点を通して家族関係やきょうだい関係の検討を行って

いる。そのため、青年本人が捉える家族関係と同胞が捉えている家族関係には違いがあることも考えられる。つまり、青年本人はきょうだい間に役割の偏りがあり分離的と捉えていても、同胞はきょうだい共に同じ役割を担っており親和的と捉えている可能性もある。また、本研究は家族構造や親役割の担い方について、青年本人の視点を通して捉えたものであり、客観的に家族について示しているものではないことに留意が必要である。

加えて、本研究では、青年期のきょうだい関係がどのように規定されているのかを明らかにするための基礎的な知見を得る必要性、かつ大学生のきょうだい関係の重要性が増してきていることを踏まえ、大学生に焦点を当てて検討を行った。しかし、大学生という時期は、きょうだいそれぞれ家から離れて生活している場合も多く、きょうだいとの物理的接触は必然的に減少してくる。自分自身できょうだいとの接触を選択できるようになるため、親和的な関係あるいは分離的な関係が見られやすくなることが考えられる。しかしながら、中学生から高校生のきょうだいである場合には、互いに自宅で生活しているために接触も多く、大学生で見られる関係の質とは異なる関係の質が見られることも想定される。高校生と大学生を対象にきょうだい間の葛藤場面における対処方法を調査した Reese-Weber(2000)によると、きょうだい間の攻撃行動は大学生よりも高校生のきょうだいに有意に多く見られ、譲歩的解決方略は高校生よりも大学生のきょうだいに有意に多く見られることが示されている。Reese-Weber(2000)が指摘しているように、高校生と大学生で葛藤解決方略に違いが見られるのは、きょうだいの心理的成長の度合いや物理的な距離といった背景があることが推察される。また、高校生と大学生では、葛藤に対する対処が異なることから、対立の質も異なってくるのではないかと予想される。大学生を対象にした本研究においては、親和的な関係になることで接触頻度が高まることから対立関係も同

時に見られるようになると考えられた。しかし、高校生においては、対立関係の出現の仕方はまた異なる可能性がある。加えて、中学生や高校生においては、役割期待と役割行動の程度が異なることも考えられる。大学生は青年期後期にあたることから、家族関係もある程度再編がなされ、関係が安定し始めている時期であるといえるだろう。そのため、青年の役割が家族内で確立されており、青年に対する役割期待と、青年の役割行動とのズレが少ないことが考えられた。しかし、中学生や高校生といった時期は、まだ青年期にかけて家族関係の再編がなされている時期にあたる。そのために、家族内における青年の役割が確立されておらず、役割期待と役割行動が食い違う場合もあるだろう。システム論の観点に立つと、青年期の子どもを持つ家族システムに移行していく際、家族システムには自己制御的な力に加えて、自己組織的な力が働くとされる(中釜ら, 2008)。すなわち、青年期にかけて、子どもは役割期待に対して従わない役割行動をとることで家族システムを変容させていくと解釈することもできる。したがって、中学生や高校生を対象として、きょうだい関係の調査をした場合、役割期待と役割行動の差については、大学生とは異なる結果が得られることも予想される。今後は、中学生や高校生を対象に、役割ときょうだい関係との関連について検討していくことで、役割を用いてきょうだい関係を捉える方法の有用性を示すことや、この手法を理論的に精緻化していくことが求められる。

加えて、本研究は、一般大学生を対象とした質問紙調査である。そのため、病理的な家族が対象にはなっていない。本研究において、きょうだいが共に親役割を担っていることで親和的なきょうだい関係が見られることが明らかにされたが、家族機能が低く、対象者と同胞が共に親サブシステムに巻き込まれて親役割を担っている場合も含まれていることも考えられる。この場合、きょうだいは共に親役割を担い親和的なきょうだい関

係といえるが、家族としては健康的な家族とは言い難い。現段階では、非機能的な家族において見られる親和的なきょうだい関係と、機能的な家族に見られる親和的なきょうだい関係が一緒に扱われているため、今後、それらが同じ親和的な関係といえる性質のものであるのかについて、検討していくことが必要だろう。また、葛藤度が高いきょうだいや虐待が生じているきょうだい等の臨床的な問題を抱えるきょうだい関係については、きょうだい間に役割の偏りが生じているのではないか、という示唆に留まる。今後は、葛藤度の高いきょうだいや虐待の恐れのあるきょうだいも対象として、仮説の検証を行い、本研究の応用可能性を高めていくことが必要だろう。また、きょうだい間の役割に偏りが生じやすいケースとして、一方の子どもが障害や病気を持つきょうだいも考えられる。本研究で得られた結果は、非臨床群に留まるが、今後は病理的な家族や、問題を抱えるきょうだいや、役割に偏りが生じやすいきょうだいにも焦点を当て、本研究の知見を精緻化していくことで、具体的な臨床的提案を行っていくことが求められる。

第 2 節 本研究の意義

最後に、本節では、従来の研究の課題と、それに対する本研究を通じた課題の克服や本研究の独自性について述べる。また、本研究から得られた知見の意義および、本研究の学問的位置付けや臨床的示唆について述べる。

本研究は、青年期きょうだい関係がどのように規定されているのかを解明するにあたって、特に、家族関係がきょうだい関係を規定する上で重要性を持つと考え、家族関係の文脈の中できょうだい関係の規定について検討した。家族関係ときょうだい関係との関連について検討した従来の研究は、主に幼児期や学童期を対象にしており、青年期にはあまり焦点が当てられておらず、青年期の親和的な関係や葛藤的な関係が、どのような

家族関係の中で規定されているのかが明らかにされていなかった。また、誰の視点から家族関係を捉えるかによって家族関係の認知が異なるにもかかわらず、これまでは、本人を対象とした調査の他に、母親に対する聞き取り調査や、観察法に基づいた結果も混在していた。そのため、本研究では、一貫して本人の視点から青年期の家族関係ときょうだい関係について捉える立場を重視した。加えて、家族システム論に依拠し、家族をひとまとまりのシステムであると捉えた。家族関係との関連から、一貫して本人の視点に立ちきょうだい関係を捉えることで、生涯に渡るきょうだい関係の中で、きょうだい関係は家族システムの下位システムとして位置付けられていることが示された。特に、青年期の時期のきょうだい関係は、きょうだい関係の転換を感じる時期であることや(【研究Ⅰ】)、自分の親子関係だけではなく、同胞の親子関係を自分がどのように認知しているのかによってきょうだい関係が規定されていることが示された(【研究Ⅱ】)。さらに、自分の親役割に対する、同胞が担う親役割のバランスによって、きょうだい関係が規定されていることが明らかにされた(【研究Ⅳ】～【研究Ⅵ】)。これらの結果は、これまで夫婦関係や親子関係との直接的・間接的な影響過程からきょうだい関係が説明されてきたことに対し、きょうだい関係が複雑な家族の相互作用の中で規定されていることを示す結果となった。また、自分が認知する夫婦関係や親子関係からきょうだい関係が影響を受けていることは確かであるが、それだけではなく、同胞の家族とのかかわりを見ることで、同胞に対して自分はどうかなのかということや、自分に対して同胞はどうかなのかということ意識することによって、きょうだい関係は規定されていくことが新たに明らかにされたといえよう。つまり、自分の視点を通して、同胞をどのように捉えているかの重要性が示された。特に、自己や他者を強く意識する青年期においては、同胞がどのような存在であるのかという点は、同

胞との関係性に強く反映すると推察される。

さらに、従来のきょうだい関係研究では、性別や出生順位、きょうだいの性別構成といった、きょうだいの属性の煩雑さや知見が一致しないことが大きな課題となっていた。すなわち、どの属性を考慮すべきであるのかという点や、用いる属性によって異なる知見が得られるという課題があった。そのため、本研究では、属性によって生じる特定の相互作用に着目し、役割を用いて相互作用を捉えることで、属性の煩雑性を回避するための提案を行った。特に、役割期待と役割行動に着目することで、対人システム内で生じる相互作用を捉えることができるのではないかと考えた。そして、きょうだいの役割期待と役割行動に着目することで、きょうだい関係を説明しうることが示された(【研究 V】、【研究 VI】)。この結果からは、青年本人が感じている役割のバランスによってきょうだい関係が規定されることが示されただけでなく、役割を用いてきょうだい関係を説明しうることが示されたといえるだろう。これまで性別や出生順位、きょうだいの性別構成別に、家族関係ときょうだい関係との関連が検討され、メカニズムが述べられることもあったが、本研究から、きょうだいの役割に着目することで、属性にかかわらずきょうだい関係を説明できる可能性が示された。よって、役割は、属性の煩雑さを回避できる手段となることが示唆された。きょうだいそれぞれの家族との相互作用に着目するという提案は、後述するが、今後のきょうだい関係研究の進展や、きょうだい関係への臨床的支援に寄与する、非常に意義のあるものだといえる。

さらに、本研究では、青年期のきょうだい関係の中でも、知見の蓄積が少ない大学生のきょうだい関係に着目し、家族関係との関連から検討した。近年、進学率の上昇に伴い青年の自立が遅れ、青年期が延長されていることが指摘されている(例えば、馬場・永井, 1997)。そのため、数十年前に比べて 20 代前半の

青年が、きょうだいを含めた家族と物理的・精神的かかわりをする程度が必然的に増してきていることが考えられる。したがって、大学生においても、家族やきょうだいとの付き合いの重要性が増してきているといえるだろう。事実、大学生の時期においても、きょうだい関係が青年の社会適応の支えとなっていることが指摘されてきており(例えば、Caya & Liem, 1998)、今後さらに、大学生のきょうだい関係についても注目していく必要があるだろう。特に、本研究では、「親役割」と「子役割」という因子を用いてきょうだい関係の説明を試みた。その結果、きょうだい間の親役割が同程度に高いことできょうだい関係は親和的になり、きょうだい間の親役割に偏りがあることできょうだい関係は分離的になることが示された。これは、特に大学生の時期に特徴的な、役割ときょうだい関係との関連であると考えることができる。これまでは問題として扱われることの多かった親役割であるが、大学生においては適応的な側面が示された。この結果は、大学生のきょうだい関係に関する知見であると同時に、親役割の研究に関しても新しい知見であるといえるだろう。本研究を通じて、大学生においては、きょうだいそれぞれが家族を助けるような親役割を担っていることが、青年期後期の発達段階に適した相互作用であることが示唆された。そして、きょうだいそれぞれが発達段階に適した位置にあることで、対等で親和的なきょうだい関係が導かれることが推察された。

以上のように、本研究では、青年期きょうだい関係の規定について明らかにするという目的のもと、家族システム論の立場から役割を用い、本人の視点から青年期きょうだい関係について検討を行ってきた。そして、本人の視点から青年期のきょうだい関係と家族関係を検討したことや、役割を用いたことによって、従来の課題が克服され新たな知見が得られた。次に、本研究の知見の学問的位置付けおよび臨床的示唆について考察す

る。

本研究のような，役割を用いて青年期きょうだい関係を説明することを目的とした家族研究は，家族療法研究の基礎研究として位置づけられる。従来あまり着目されてこなかった，青年期のきょうだい関係と家族関係の重要性について指摘し，また相互作用を捉える概念として役割を用いるという新しい手法を用いて，きょうだい関係のメカニズムについて示している。これは，今後きょうだい関係研究を行う際，属性に代わって用いることのできる新たな手法を提案しているといえるだろう。したがって，中学生・高校生のきょうだい関係のメカニズムや，青年期に至るまでのきょうだい関係の変容について，属性にかかわらず，家族との相互作用の観点から説明していくことが可能となった。今後は相互作用に着目していくことで，一貫した青年期きょうだい関係の知見が得られ，きょうだい関係研究が発展していくことが期待できる。また，これまで臨床上指摘されてきた，曖昧な世代間境界の家族ではきょうだい関係が葛藤的になる(Namysłowska & Siewierska, 2010)という報告について，親役割期待と親役割行動を用いて家族の状態を捉えることで，実証的に示すことが可能となった。

また，きょうだい関係の研究は，家族心理学分野に留まらず，臨床心理学的研究や障害児教育研究の分野でも行われている。臨床心理学的な分野としては，青年の精神的健康や社会適応にきょうだい関係のあり方が肯定的にも否定的にも影響を及ぼすことが指摘されてきた(例えば，Tucker *et al.*, 1997; Bullock *et al.*, 2002)。したがって，本研究で得られた知見を用い，親和的なきょうだい関係を促していくことで，青年の精神的健康や社会適応を促進することが期待される。また，きょうだい間の深刻な葛藤や虐待について，近年注目され始めている。これまできょうだい間の葛藤や虐待は，きょうだい喧嘩として見過ごされあまりメカニズムの解明が進んでいない。しかし，今後この

ような問題を抱えるきょうだいへの支援が求められている。本研究の知見は、一般大学生のきょうだいを対象としているが、問題を抱えたきょうだいの役割に着目し、きょうだい関係を見立てることで、臨床的介入の糸口になることも考えられる。特に、本研究では、属性ではなく役割によってきょうだい関係を説明している点に特徴がある。すなわち、役割は介入によって変容可能であるため、葛藤や虐待のあるきょうだいの役割を変えていくことできょうだい関係の変容にもつながる可能性が示唆された。

さらに、障害児教育の分野においては、きょうだいのうちの一方が病児である場合や、障害、発達障害を持つ場合について注目がされている。そして、このようなきょうだいにおいては、きょうだい関係にも影響があり、時に健常児の子どもが心身の不調を呈することが指摘されてきている(例えば、立山・立山・宮前, 2003; 田倉, 2007)。本研究の知見を踏まえれば、本人がきょうだい間に役割の偏りを感じていることも考えられる。また、健常児の子どもは親に負担を掛けまいとするため、特に親役割を担いやすいことも予想される。本研究を通じて、同胞の家族関係をどのように認知しているのかということや、きょうだいそれぞれの役割によって、きょうだい関係が規定されていることが示されていることから、健常児の障害を持つ同胞への見方や、負担となっている役割を和げることで、きょうだい関係や健常児の精神的健康の促進にもつながると考えることができる。今後の課題としても挙げたように、本研究の知見を臨床事例にも適用していくことで、様々なきょうだい関係のメカニズムについてより精緻化され、臨床心理学分野や、障害児教育分野におけるきょうだい支援に資するものになると考えられる。以上のことから、本研究を通じて得られた知見や手法の提案は、青年期きょうだい関係に関する家族心理学的研究のさらなる知見蓄積に寄与するものだといえるだろう。また、それだけでは

なく，問題を抱えるきょうだい関係を扱う臨床心理学分野や障害児教育分野においても，見立てと支援方法に関する示唆を与える一つの手がかりになると考える。

引用文献

- 安達正嗣 (1999). 高齢期におけるきょうだい関係 高齢期家族の社会学 世界思想社 pp.82-109.
- Adler, A. (1930). *The education of children*. Oxford: Greenberg.
(岸見一郎(訳)(1970). 子どもの教育 一光社)
- 赤澤淳子 (2006). 青年期後期における恋愛行動の規定因について: 関係進展度, 恋愛意識, 性別役割の自己認知が恋愛行動の遂行度に及ぼす影響 仁愛大学研究紀要, **5**, 17-31.
- Amato, P. R. (1986). Marital conflict, the parent-child relationship and child self-esteem. *Family Relations*, **35**(3), 403-410.
- Amato, P. R., & Afifi, T. D. (2006). Feeling caught between parents: Adult children's relations with parents and subjective well-being. *Journal of Marriage and Family*, **68**(1), 222-235.
- 青木多寿子 (1993). 青年における身近な他者への役割期待の違いと性差 心理学研究, **64**(2), 140-146.
- 新美明夫・松尾貴司・永田忠夫 (2004). 大学時代の友人関係の維持と役割行動期待 愛知淑徳大学論集 コミュニケーション学部篇, **4**, 105-115.
- 馬場礼子・永井徹 (1997). ライフサイクルの臨床心理学 培風館
- Bank, L., Burraston, B., & Snyder, J. (2004). Sibling conflict and ineffective parenting as predictors of adolescent boys' antisocial behavior and peer difficulties: Additive and interactional effects. *Journal of Research on Adolescence*, **14**(1), 99-125.
- Boszormenyi-Nagy, I., & Spark, G. M. (1973). *Invisible*

- loyalties : Reciprocity in intergenerational family therapy.* New York: Harper & Row.
- Bowen, M. (1978). *Family treatment in clinical practice.* New York: Jason Aronson.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., MacKinnon, C. E., & MacKinnon, R. (1985). Role relationships and behavior between preschool-aged and school-aged sibling pairs. *Developmental Psychology*, **21**(1), 124-129.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & McCoy, J. K. (1992a). Associations of maternal and paternal direct and differential behavior with sibling relationships: Contemporaneous and longitudinal analyses. *Child Development*, **63**(1), 82-92.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & McCoy, J. K. (1992b). Parental differential treatment of siblings and sibling differences in negative emotionality. *Journal of Marriage and the Family*, **54**(3), 643-651.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & McCoy, J. K. (1994a). Contributions of family relationships and child temperaments to longitudinal variations in sibling relationship quality and sibling relationship styles. *Journal of Family Psychology*, **8**(3), 274-286.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & McCoy, J. K. (1994b). Forecasting sibling relationships in early adolescence from child temperaments and family processes in middle childhood. *Child Development*, **65**, 771-784.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., McCoy, J. K., & Forehand, R. (1992). Contemporaneous and longitudinal associations of sibling conflict with family relationship assessments and family discussions about sibling problems. *Child*

- Development*, **63**(2), 391-400.
- Bronfenbrenner, U. (1981). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge: Harvard University Press.
- (磯貝芳郎・福富譲(監訳) (1996). 人間発達の生態学—発達心理学への挑戦 川島書店)
- Brown, J. R., Donelan-McCall, N., & Dunn, J. (1996). Why talk about mental states? The significance of children's conversations with friends, siblings, and mothers. *Child Development*, **67**, 836-849.
- Brown, J. R., & Dunn, J. (1992). Talk with your mother or your sibling? Developmental changes in early family conversations about feelings. *Child Development*, **63**(2), 336-349.
- Bryant, B. K. (1987). Sibling as teachers and therapists. *Journal of Children in Contemporary Society*, **19**(3,4), 185-204.
- Buhrmester, D. (1992). The developmental courses of sibling and peer relationships. In F. Boer & J. Dunn(Eds.), *Children's sibling relationships: Developmental and clinical issues*. England: Psychology Press, pp.19-40.
- Buhrmester, D., & Furman, W. (1990). Perceptions of sibling relationships during middle childhood and adolescence. *Child Development*, **61**(5), 1387-1398.
- Buist, K. L., Deković, M., Meeus, W., & van Aken, M. A. (2002). Developmental patterns in adolescent attachment to mother, father and sibling. *Journal of Youth and Adolescence*, **31**(3), 167-176.
- Bullock, B. M., Bank, L., & Burraston, B. (2002). Adult sibling expressed emotion and fellow sibling deviance: A

- new piece of the family process puzzle. *Journal of Family Psychology*, **16**(3), 307-317.
- Carroll, J. J., & Robinson, B. E. (2000). Depression and parentification among adults as related to parental workaholism and alcoholism. *The Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, **8**, 360-367.
- Carter, E.A., & McGoldrick, M. (1989) *The changing family life cycle: A framework for family therapy*. 2nd ed. New York: Gardner Press.
- Castro, D. M., Jones, R. A., & Mirsalimi, H. (2004). Parentification and the impostor phenomenon: An empirical investigation. *The American Journal of Family Therapy*, **32**(3), 205-216.
- Caya, M. L., & Liem, J. H. (1998). The role of sibling support in high-conflict families. *American Journal of Orthopsychiatry*, **68**(2), 327-333.
- Chase, N. D. (1999). Parentification: An overview of theory, research, and societal issues. In N. D. Chase(Ed.), *Burdened children: Theory, research and treatment of parentification*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, pp.3-33.
- Chase, N., Demming, M., & Wells, M. (1998). Parentification, parental alcoholism, and academic status among young adults. *The American Journal of Family Therapy*, **25**, 105-114.
- Cole, A., & Kerns, K. A. (2001). Perceptions of sibling qualities and activities of early adolescents. *The Journal of Early Adolescence*, **21**(2), 204-227.
- Cortner, C., Abramovitch, R., & Pepler, D. J. (1983). The role

- of the mother in sibling interaction. *Child Development*, **54**(6), 1599-1605.
- Daniels, D., & Plomin, R. (1985). Differential experience of siblings in the same family. *Developmental Psychology*, **21**(5), 747-760.
- Davies, P. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, **116**(3), 387-411.
- Deal, J. E. (1996). Marital conflict and differential treatment of siblings. *Family Process*, **35**(3), 333-346.
- Deater-Deckard, K., & Dunn, J. (2002). Sibling relationships and social-emotional adjustment in different family contexts. *Social Development*, **11**(4), 571-590.
- Dunn, J. (2007). Siblings and socialization. In J. E. Grusec & P. D. Hastings(Eds.), *Handbook of socialization: Theory and research*. New York: Guilford Press. pp.309-327.
- Dunn, J., Deater-Deckard, K., Pickering, K., Golding, J., & The ALSPAC Study Team. (1999). Siblings, parents and partners: Family relationships within a longitudinal community study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **40**, 1025-1037.
- Dunn, J., & Plomin, R. (1991). Why are siblings so different? The significance of differences in sibling experiences within the family. *Family Process*, **30**(3), 271-283.
- Dunn, J., Slomkowski, C., & Beardsall, L. (1994). Sibling relationships from the preschool period through middle childhood and early adolescence. *Developmental Psychology*, **30**(3), 315-3224.
- East, P. L., & Khoo, S. T. (2005). Longitudinal pathways linking family factors and sibling relationship qualities

- to adolescent substance use and sexual risk behaviors. *Journal of Family Psychology*, **19**(4), 571-580.
- Emery, R. E., Fincham, E. D., & Cummings, E. M. (1992). Parenting in context: Systematic thinking about parental conflict and its influence on children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **60**, 909-912.
- Engfer, A. (1988). The interrelatedness of marriage and the mother-child relationship. In R. A. Hinde & J. S. Hinde(Ed.), *Relationships within families: Mutual influences*. New York: Oxford University Press, pp. 104-118.
- 榎本 淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**(2), 180-190.
- Epstein, N. B., Baldwin, L. M., & Bishop, D. S. (1983). The McMaster family assessment device. *Journal of Marital and Family Therapy*, **9**(2), 171-180.
- Erel, O., & Burman, B. (1995). Interrelatedness of marital relations and parent-child relations: A meta-analytic review. *Psychological bulletin*, **118**(1), 108-132.
- Erel, O., Margolin, G., & John, R. S. (1998). Observed sibling interaction: Links with the marital and the mother-child relationship. *Developmental Psychology*, **34**(2), 288-298.
- Eriksen, S., Jensen, V. (2006). All in the family? Family environment factors in sibling violence. *Journal of Family Violence*, **21**, 497-507.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle: Selected papers*. London: Psychological issues.
- (小此木啓吾(訳)(1973). 自我同一性: アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1963). *Childhood and society*. 2nd ed. New

- York: W. W. Norton & Company.
- (仁科弥生(訳)(1980). 幼児期と社会 2 みすず書房)
- Fauber, R., Forehand, R., Thomas, A. M., & Wierson, M. (1990). A mediational model of the impact of marital conflict on adolescent adjustment in intact and divorced families: The role of disrupted parenting. *Child Development*, **61**, 1112-1123.
- Fauchier, A., & Margolin, G. (2004). Affection and conflict in marital and parent-child relationships. *Journal of Marital and Family Therapy*, **30**(2), 197-211.
- Feldman, S. S., & Wood, D. N. (1994). Parents' expectations for preadolescent sons' behavioral autonomy: A longitudinal study of correlates and outcomes. *Journal of Research on Adolescence*, **4**(1), 45-70.
- Fincham, E. E., Grych, J. H., & Osborne, L. (1994). Does marital conflict cause child maladjustment? Directions and challenges for longitudinal research. *Journal of Family Psychology*, **8**, 128-140.
- 藤目文子・東條光彦・鈴木伸一 (2008). 親の期待認知が高校生の強迫傾向に及ぼす影響 行動療法研究, **34**(2), 127-135.
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1985). Children's perceptions of the qualities of sibling relationships. *Child Development*, **56**(2), 448-461.
- Green, R. G., Harris, R. N., Forte, J. A., & Robinson, M. (1991). Evaluating FACES III and the circumplex model: 2,440 families. *Family Process*, **30**(1), 55-73.
- Gross, N., Mason, W. S., & McEachern, A. W. (1958). *Explorations in role analysis: Studies of the school superintendency role*. Oxford: Wiley.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1990). Marital conflict and

- children's adjustment: A cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, **108**(2), 267-290.
- Haley, J. (1976). *Problem-solving therapy: New strategies for effective family therapy*. San Francisco: Jossey-Bass Inc.
- (佐藤悦子(訳) (1985). 家族療法—問題解決の戦略と実際—川島書店)
- Haney, C., Banks, W. C., & Zimbardo, P. G. (1973). Study of prisoners and guards in a simulated prison. *Naval Research Reviews*, **9**, 1-17.
- 長谷川啓三 (1987). 家族内パラドックス: 逆説と構成主義 彩古書房
- Herer, Y., & Mayseless, O. (2000). Emotional and social adjustment of adolescents who show role-reversal in the family. *Megamot*, **40**(3), 413-441.
- 平木典子 (1998). 家族との心理臨床: 初心者のために 垣内出版
- Hoffman, L. (1981). *Foundations of family therapy*. New York: Basic Books.
- (亀口憲治(訳) (1986). 家族療法の基礎理論: 創始者と主要なアプローチ 朝日出版社)
- Hoffman, L. W. (1991). The influence of the family environment on personality: Accounting for sibling differences. *Psychological Bulletin*, **110**(2), 187-203.
- Hooper, L. M., Marotta, S. A., & Lanthier, R. P. (2008). Predictors of growth and distress following childhood parentification: A retrospective exploratory study. *Journal of Child and Family Studies*, **17**(5), 693-705.
- Hooper, L. M., & Wallace, S. A. (2010). Evaluating the parentification questionnaire: Psychometric properties

- and psychopathology correlates. *Contemporary Family Therapy*, **32**(1), 52-68.
- 飯野晴美 (1994). きょうだい関係スケール 明治学院論叢, **541**, 89 - 109.
- 池田幸恭 (2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, **54**, 487-497.
- 池田幸恭 (2009). 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究, **21**, 1-16.
- 磯崎三喜年 (2007). 出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響 国際基督教大学学報 II-B 社会科学ジャーナル, **61**, 203-220.
- 伊藤裕子 (1986). 性役割特性語の意味構造 教育心理学研究, **34**(2), 168-174.
- Jenkins, J. M., Rasbash, J., & O'Connor, T. G. (2003). The role of the shared family context in differential parenting. *Developmental Psychology*, **39**(1), 99-113.
- Jurkovic, G. J. (1997). *Lost childhoods: The plight of the parentified child*. New York: Brunner/Mazel.
- Jurkovic, G. J. (1998). Destructive parentification in families: Causes and consequences. In L. L'Abate(Ed.), *Handbook of Family Psychopathology*. New York: Guilford, pp.237-255.
- Jurkovic, G. J., Jessee, E. H., & Goglia, L. R. (1991). Treatment of parental children and their families: Conceptual and technical issues. *The American Journal of Family Therapy*, **19**, 302-314.
- Jurkovic, J. G., Morrell, R., & Thirkield, A. (1999). Assessment of childhood parentification: Guidelines for researchers and clinicians. In D. N. Chase(Ed.),

- Burdened children: Theory, research, and treatment of parentification.* Thousand Oaks: Sage, pp.92-113.
- Jurkovic, G. J., & Thirkield, A. (1998). *Parentification questionnaire.* Available from GJ Jurkovic, Department of Psychology, Georgia State University, University Plaza, Atlanta, GA, 30303.
- Jurkovic, G. J., Thirkield, A., & Morrell, R. (2001). Parentification of adult children of divorce: A multidimensional analysis. *Journal of Youth and Adolescence*, **30**(2), 245-257.
- 上子武次 (1979). 家族役割の研究 ミネルヴァ書房
- 笠原嘉 (1976). 今日の青年期精神病理像 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦(編) 「青年の精神病理 1」 弘文堂 pp.3-27.
- 柏木恵子 (2003). 家族心理学: 社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について 発達心理学研究, **7**(1), 31-40.
- Kerig, P. K. (2005). Revisiting the construct of boundary dissolution: A multidimensional perspective. *Journal of Emotional Abuse*, **5**(2-3), 5-42.
- Kerig, P. K., Cowan, P. A., & Cowan, C. P. (1993). Marital quality and gender differences in parent-child interaction. *Developmental Psychology*, **29**(6), 931-939.
- 木戸功 (2010). 概念としての家族－家族社会学のニッチと構築主義 新泉社
- Kim, J. Y., McHale, S. M., Crouter, A. C., & Osgood, D. W. (2007). Longitudinal linkages between sibling relationships and adjustment from middle childhood through adolescence. *Developmental Psychology*, **43**(4),

960-973.

Kim, J. Y., McHale, S. M., Wayne Osgood, D., & Crouter, A. C. (2006). Longitudinal course and family correlates of sibling relationships from childhood through adolescence. *Child Development*, *77*(6), 1746-1761.

木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い 弘文堂

狐塚貴博 (2011). 青年期における家族構造と家族コミュニケーションに関する研究－青年の認知する家族内ストレスからの検討－ 家族心理学研究, *25*(1), 30-44.

狐塚貴博・野口修司・閏間理絵・石橋曜子・若島孔文 (2008). 家族構造の測定における構成因子に関する研究 立正大学臨床心理学研究, *6*, 19-32.

国立社会保障・人口問題研究所 (2005). 第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査夫婦調査の結果概要」出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査) <<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13/doukou13.asp>> (2014年9月13日)

国立社会保障・人口問題研究所 (2011). 第14回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査夫婦調査の結果概要」出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査) 2011年10月21日 <<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp>> (2014年9月13日)

Kramer, L., Perozynski, L. A., & Chung, T. Y. (1999). Parental responses to sibling conflict: The effects of development and parent gender. *Child Development*, *70*(6), 1401-1414.

倉元俊輝・大坊郁夫 (2010). 他者からの役割期待が自己認知にもたらす影響 対人社会心理学研究, *10*, 169-177.

- 黒川雅幸・吉田俊和 (2006). 個人 - 集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足度に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **45**(2), 111-121.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法 岡堂哲雄(編) 心理検査学 垣内出版 pp.573-581.
- 草田寿子・山田裕紀子 (1998). 家族関係単純図式投影法の基礎的研究 VI: 夫婦間の心理的距離に対する認知のズレと家族コミュニケーションとの関連 人間科学研究, **20**, 123-127.
- Lee, R. T., Mancini, A. J., & Maxwell, W. J. (1990). Sibling relationships in adulthood: Contact patterns and motivations. *Journal of Marriage and Family*, **52**, 431-440.
- MacKinnon, C. E. (1989). An observational investigation of sibling interactions in married and divorced families. *Developmental Psychology*, **25**(1), 36-44.
- 松山博光 (1988). 現代家族の「兄弟姉妹」関係—「きょうだい」の実態と家族的機能— 都市科学 東京都市科学振興会 pp.55-66.
- McCall, R. B. (1983). Environmental effects on intelligence: The forgotten realm of discontinuous nonshared within-family factors. *Child Development*, **54**(2), 408-415.
- McCoy, J. K., Brody, G. H., & Stoneman, Z. (1994). A longitudinal analysis of sibling relationships as mediators of the link between family processes and youths' best friendships. *Family Relations: An Interdisciplinary Journal of Applied Family Studies*. **43**(4), 400-408.
- McHale, S. M., Crouter, A. C., Kim, J. Y., Burton, L. M.,

- Davis, K. D., Dotterer, A. M., & Swanson, D. P. (2006). Mothers' and fathers' racial socialization in African American families: Implications for youth. *Child Development, 77*(5), 1387-1402.
- McHale, S. M., Crouter, A. C., McGuire, S. A., & Updegraff, K. A. (1995). Congruence between mothers' and fathers' differential treatment of siblings: Links with family relations and children's well-being. *Child Development, 66*(1), 116-128.
- McHale, S. M., Updegraff, K. A., Helms-Erikson, H., & Crouter, A. C. (2001). Sibling influences on gender development in middle childhood and early adolescence: A longitudinal study. *Developmental Psychology, 37*(1), 115-125.
- McHale, S. M., Updegraff, K. A., Jackson - Newsom, J., Tucker, C. J., & Crouter, A. C. (2000). When does parents' differential treatment have negative implications for siblings?. *Social Development, 9*(2), 149-172.
- McHale, S. M., Updegraff, K. A., Shanahan, L., Crouter, A. C., & Killoren, S. E. (2005). Siblings' differential treatment in Mexican American families. *Journal of Marriage and Family, 67*(5), 1259-1274.
- McHale, S. M., Updegraff, K. A., & Whiteman, S. D. (2012). Sibling relationships and influences in childhood and adolescence. *Journal of Marriage and Family, 74*(5), 913-930.
- McHale, S. M., Whiteman, S. D., Kim, J. Y., & Crouter, A. C. (2007). Characteristics and correlates of sibling relationships in two-parent African American families.

- Journal of Family Psychology*, **21**(2), 227-235.
- Meng, X. L., Rosenthal, R., & Rubin, D. B. (1992). Comparing correlated correlation coefficients. *Psychological Bulletin*, **111**(1), 172-175.
- Mika, P., Bergner, R. M., & Baum, M. C. (1987). The development of a scale for the assessment of parentification. *Family Therapy*, **14**, 229-235.
- Milevsky, A. (2005). Compensatory patterns of sibling support in emerging adulthood: Variations in loneliness, self-esteem, depression and life satisfaction. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 743-755.
- Minnett, A. M., Vandell, D. L., & Santrock, J. W. (1983). The effects of sibling status on sibling interaction: Influence of birth order, age spacing, sex of child, and sex of sibling. *Child Development*, **54**(4), 1064-1072.
- Minuchin, S. (1974). *Family and family therapy*. Harvard University Press.
- (山根常男(監修)(1984). 家族と家族療法 誠信書房)
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・柿見 孝(編) 講座生涯発達心理学 : 4 自己への問い直し 金子書房 pp.155-184
- 宮下一博 (1996). 人間関係の発達と対人的感情 斎藤誠一(編) 人間関係の発達心理学 : 4 青年期の人間関係 培風館 pp.109-133.
- 文部科学省 (2013). 平成 25 年度学校基本調査(確定値)の公表について 学校基本調査: 結果の概要 2013年12月20日 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/01/29/1342607_1_1.pdf> (2014年9月13日)
- 森岡清美・望月嵩 (1983). 新しい家族社会学 培風館

- 森下正康・山口政子 (1992). パーソナリティときょうだい関係. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, **41**, 84-101.
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, **17**(2), 182-192.
- Myers, S. A. (2011). "I have to love her, even if sometimes I may not like her": The reasons why adults maintain their sibling relationships. *North American Journal of Psychology*, **13**(1), 51-62.
- 中釜洋子 (2001). 家族の発達 下山晴彦・丹野義彦(編) 講座臨床心理学 : 5 発達臨床心理学 東京大学出版会 pp.275-294.
- 中釜洋子 (2006). 家族心理学の立場からみた子どものこころの問題 小児内科, **38**(1), 29-33.
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (2008). 家族心理学—家族システムの発達と臨床的援助— 有斐閣
- 中山勘次郎 (1992). 子どもに対する母親の期待とその発達の傾向 上越教育大学研究紀要, **12**(2), 1-12.
- Namysłowska, I., & Siewierska, A. (2010). The significance and role of siblings in family therapy. *Archives of Psychiatry and Psychotherapy*, **1**, 5-13.
- Neiman, L. J., & Hughes, J. W. (1951). The problem of the concept of role—a re-survey of the literature. *Social Forces*, **30**, 141-149.
- Neuenschwander, M. P., Vida, M., Garrett, J. L., & Eccles, J. S. (2007). Parents' expectations and students' achievement in two western nations. *International Journal of Behavioral Development*, **31**(6), 594-602.
- 西出隆紀 (1993). 家族アセスメントインベントリーの作成 家族心理学研究, **7**(1), 53-65.
- 西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は

- 子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, **45**(4), 456-463.
- 野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文 (2009). 家族構造測定尺度—ICHIGEKI—の作成と妥当性の検討 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**(1), 247-265.
- Noller, P., Feeney, J. A., Peterson, C., & Sheehan, G. (1995). Learning conflict patterns in the family. In T. Socha & G. Stamp(Eds.), *Parents, children and communication: Frontiers of theory and research*. Mahwah, NJ: Erlbaum, pp.273-298.
- O'Brien, M., Margolin, G., John, R. S., & Krueger, L. (1991). Mothers' and sons' cognitive and emotional reactions to simulated marital and family conflict. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **59**, 692-703.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- 尾形和男 (2006). 家族の関わりから考える生涯発達心理学 北大路書房
- 尾形和男・宮下一博・福田佳織 (2005). 父親の協力的関わりと家族成員の適応--母親役割・妻役割達成感, 子どもの攻撃性, 父親のストレス・コーピングとの関係 家族心理学研究, **19**(1), 31-45.
- Oliva, A., & Arranz, E. (2005). Sibling relationships during adolescence. *European Journal of Developmental Psychology*, **2**(3), 253-270.
- Olson, D. H., Portner, J. & Lavee, Y. (1985). *FACESIII: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale*. St. Paul: Family social Science, University of Minnesota.
- Osborne, L. N., & Fincham, F. D. (1996). Marital conflict, parent-child relationships, and child adjustment: Does

- gender matter?. *Merrill-Palmer Quarterly*, **42**(1), 48-75.
- Parsons, T. (1943). The kinship system of the contemporary united states. *American Anthropologist*, **45**, 22-38.
- Parsons, T. & Bales, F. R. (1956). *Family : Socialization and interaction process*. London: Routledge and Kegan Paul.
(橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明(訳)
(2001). 家族—核家族と子どもの社会化— 黎明書房)
- Patterson, G. R. (1984). Siblings: Fellow travelers in coercive family processes. In R. J. Blanchard(Ed.), *Advances in the study of aggression*. New York: Academic Press, pp. 174 - 214.
- Peris, T. S., Goeke-Morey, M. C., Cummings, E. M., & Emery, R. E. (2008). Marital conflict and support seeking by parents in adolescence: Empirical support for the parentification construct. *Journal of Family Psychology*, **22**(4), 633-642.
- Reese-Weber, M. (2000). Middle and late adolescents' conflict resolution skills with siblings: Associations with interparental and parent-adolescent conflict resolution. *Journal of Youth and Adolescence*, **29**(6), 697-711.
- Rhodes, S.L. (1977) A developmental approach to the life cycle of the family. *Social Works*, **5**, 301-310.
- Richmond, M. K., & Stocker, C. M. (2003). Siblings' differential experiences of marital conflict and differences in psychological adjustment. *Journal of Family Psychology*, **17**(3), 339-350.
- Richmond, M. K., & Stocker, C. M. (2008). Longitudinal associations between parents' hostility and siblings' externalizing behavior in the context of marital discord.

- Journal of Family Psychology*, **22**(2), 231-240.
- Richmond, M. K., Stocker, C. M., & Rienks, S. L. (2005). Longitudinal associations between sibling relationship quality, parental differential treatment, and children's adjustment. *Journal of Family Psychology*, **19**(4), 550-559.
- Riggio, H. R. (1999). Personality and social skills differences between adults with and without siblings. *The Journal of Psychology*, **133**, 514-522.
- Riggio, H. R. (2000). Measuring attitudes toward adult sibling relationships: The lifespan sibling relationship scale. *Journal of Social and Personal Relationships*, **17**(6), 707-728.
- Rocca, K. A., & Martin, M. M. (1998). The relationship between willingness to communicate and solidarity with frequency, breadth, and depth of communication in the sibling relationship. *Communication Research Reports*, **15**(1), 82-90.
- Rowa, K., Kerig, P. K., & Geller, J. (2001). The family and anorexia nervosa: Examining parent-child boundary problems. *European Eating Disorders Review*, **9**(2), 97-114.
- Rowe, D. C., & Plomin, R. (1981). The importance of nonshared (E_1) environmental influences in behavioral development. *Developmental Psychology*, **17**(5), 517-531.
- 佐藤公代 (2001). 親の養育態度と子どもの性格形成に関する研究 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, **47**(2), 25-29.
- Scarr, S., & McCartney, K. (1983). How people make their own environments: A theory of genotype environment

- effects. *Child Development*, **54**(2), 424-435.
- Scharf, M., Shulman, S., & Avigad-Spitz, L. (2005). Sibling relationships in emerging adulthood and in adolescence. *Journal of Adolescent Research*, **20**, 64-90.
- 関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理 (1991). 働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク 家族社会学研究, **3**(3), 72-84.
- Sessions, M., & Jurkovic, G. J. (1986). *The parentification questionnaire*. Available from Gregory J. Jurkovic, Department of Psychology, Georgia State University, University Plaza, Atlanta, GA 30303.
- Shaffer, A., & Sroufe, L. A. (2005). The developmental and adaptational implications of generational boundary dissolution: Findings from a prospective, longitudinal study. *Journal of Emotional Abuse*, **5**(2-3), 67-84.
- 下村英雄・木村周 (1997). 大学生の就職活動ストレスとソーシャルサポートの検討. 進路指導研究: 日本進路指導学会研究紀要, **18**(1), 9-16.
- 下斗米淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究－役割期待と遂行とのズレからの検討－ 実験社会心理学研究, **40**(1), 1-15.
- 白佐俊憲 (2004). きょうだい関係とその関連領域の文献集成 第3巻 研究紹介編 川島書店
- Sroufe, L. A., Jacobvitz, D., Mangelsdorf, S., DeAngelo, E., & Ward, M. J. (1985). Generational boundary dissolution between mothers and their preschool children: A relationship systems approach. *Child Development*, **56**, 317-325.
- Sroufe, L. A., & Ward, J. J. (1980). Seductive behavior of mothers of toddlers: Currence, correlates and family

- origins. *Child Development*, **51**, 1222-1229.
- Stewart, R. B., Kozak, A. L., Tingley, L. M., Goddard, J. M., Blake, E. M., & Cassel, W. A. (2001). Adult sibling relationships: Validation of a typology. *Personal Relationships*, **8**(3), 299-324.
- Stewart, R. B., Verbrugge, K. M., & Beilfuss, M. C. (1998). Sibling relationships in early adulthood: A typology. *Personal Relationships*, **5**(1), 59-74.
- Stocker, C., Ahmed, K., & Stall, M. (1997). Marital satisfaction and maternal emotional expressiveness: Links with children's sibling relationships. *Social Development*, **6**(3), 373-385.
- Stocker, C., Dunn, J., & Plomin, R. (1989). Sibling relationships: Links with child temperament, maternal behavior, and family structure. *Child Development*, **60**(3), 715-727.
- Stocker, C. M., Lanthier, R. P., & Furman, W. (1997). Sibling relationships in early adulthood. *Journal of Family Psychology*, **11**(2), 210-221.
- Stocker, C. M., & Youngblade, L. (1999). Marital conflict and parental hostility: Links with children's sibling and peer relationships. *Journal of Family Psychology*, **13**(4), 598-609.
- Stoneman, Z., & Brody, G. H. (1993). Sibling temperaments, conflict, warmth, and role asymmetry. *Child Development*, **64**(6), 1786-1800.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連 教育心理学研究, **50**(2), 129-140.
- 田倉さやか (2007). 兄弟姉妹と障害者同胞との関係—母親の

- 養育態度と兄弟姉妹関係との関連— 児童青年精神医学とその近接領域, **48**, 39-47.
- 田村毅 (1994). 日本人家族の適応力と凝集性に関する予備研究: FACESⅢとFACESKGⅡの信頼性と妥当性の検討 東京学芸大学紀要, **45**, 135-145.
- 田中正博 (1996). 障害児を育てる母親のストレスと家族機能 特殊教育学研究, **34**(3), 23-32.
- 谷井淳一・上地安昭 (1993). 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, **26**(2), 113-122.
- 立山慶一 (2006). 家族機能測定尺度 (FACESⅢ) 邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究 創価大学大学院紀要, **28**, 285-306.
- 立山清美・立山順一・宮前珠子 (2003). 障害児の「きょうだい」の成長過程に見られる気になる兆候 広島大学保健学ジャーナル, **3**(1), 37-45.
- 戸田弘二・牧野高壮・菅原英治 (2002). 青年期後期の家族関係と精神的健康及び精神的・身体的不適応との関連 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, **3**, 221-233.
- Tucker, C. J., Barber, B. L., & Eccles, J. S. (1997). Advice about life plans and personal problems in late adolescent sibling relationships. *Journal of Youth and Adolescence*, **26**(1), 63-76.
- Tucker, C. J., McHale, S. M., & Crouter, A. C. (2001). Conditions of sibling support in adolescence. *Journal of Family Psychology*, **15**(2), 254-271.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1976). 親子関係診断尺度 EICA の作成 関西大学社会学部紀要, **7**(2), 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1978). 親子関係の類型 教育心理学研究, **26**(2), 84-93.

- Updegraff, K. A., McHale, S. M., & Crouter, A. C. (2002). Adolescents' sibling relationship and friendship experiences: Developmental patterns and relationship linkages. *Social Development*, *11*(2), 182-204.
- Usami, T., Kozuka, T., Hiraizumi, T., Morikawa, N., Furuyama, A., & Wakashima, K. (2011). Examining family transition with the current narratives. *International Journal of Brief Therapy and Family Science*, *1*(2), 111-116.
- Vandvik, I. H., & Eckblad, G. F. (1993). FACES III and the kvebaek family sculpture technique as measures of cohesion and closeness. *Family Process*, *32*(2), 221-233.
- Volling, B. L., & Belsky, J. (1992). The contribution of mother-child and father-child relationships to the quality of sibling interaction: A longitudinal study. *Child Development*, *63*(5), 1209-1222.
- 若島孔文・狐塚貴博・板倉憲政・宇佐美貴章 (2010). 「ICHIGEKI」を用いた同時的・累積的家族関係に関する研究 *Interactional Mind*, *3*, 92-98.
- Walsh, S., Shulman, S., Bar - On, Z., & Tsur, A. (2006). The role of parentification and family climate in adaptation among immigrant adolescents in Israel. *Journal of Research on Adolescence*, *16*(2), 321-350.
- 渡辺さちや (1996). 個人の発達・家族の発達 日本女子大学紀要, *43*, 13-19.
- 渡辺俊之 (2005). 介護者と家族の心のケア—介護家族カウンセリングの理論と実践— 金剛出版
- Watzlawick, P., Weakland, H. J., & Fisch, R. (1974). *Principles of problem formation and problem resolution*. New York: W. W. Norton & Company.

(長谷川啓三(訳)(1992). 変化の原理：問題の形成と解決
法政大学出版局)

Wells, M., & Jones, R. (2000). Childhood parentification and shame-proneness: A preliminary study. *American Journal of Family Therapy*, **28**(1), 19-27.

White, L. (2001). Sibling relationships over the life course: A panel analysis. *Journal of Marriage and the Family*, **63**, 555-568.

吉原千賀 (2006). 長寿社会における高齢期きょうだい関係の
家族社会学的研究 学文社

Yu, J. J., & Gamble, W. C. (2008). Pathways of influence: Marital relationships and their association with parenting styles and sibling relationship quality. *Journal of Child and Family Studies*, **17**(6), 757-778.

遊佐安一郎 (1984). 家族療法入門—システムズ・アプローチの
理論と実際— 星和書店

付記

本論文の研究は、以下に記載する公刊した論文を加筆、修正、改稿したものである。

博士論文の研究と公表された論文との対応

第1章	森川夏乃 (2014). きょうだい関係のメカニズムに関する研究動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63 (1), 印刷中
第2章	該当なし
第3章	Morikawa, N. (2014). Study on developmental transformation in sibling relationship based on the family system theory: Cases of first children. <i>International Journal of Brief Therapy and Family Science</i> , 4 (2), in press.
第4章	森川夏乃 (2014). 家族システム論の観点から見た青年期のきょうだい関係に関する基礎研究 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62 (2), 133-143. 森川夏乃 (2014). 家族システム論の観点から見た青年期のきょうだい関係－インタビュー調査を通して－東北大学大学院教育宅学研究科臨床心理相談室紀要, 12 , 44-51.
第5章	該当なし
第6章	Morikawa, N. (2014). Siblings' involvement in parental subsystems and parental role expectations and role behaviors. <i>International Journal of Brief Therapy and Family Science</i> , 4 (1), 1-10.
第7章	該当なし
第8章	該当なし
第9章	該当なし
第10章	該当なし

資料

資料 1 【研究Ⅲ】で使用した家族内の役割尺度の原案

あなたの**現在の家族関係**についてお聞きします。あなたが家族からどのくらい期待されているかについてお答えください。

		大変 そう である	やや そう である	あまり そう ではない	全く そう ではない
1	私は家族から、親の愚痴や相談事を聞いてあげることが期待されている。	4	3	2	1
2	私は家族から、家事をすることを期待されている。	4	3	2	1
3	私は家族から、家族に何か起こったとき、私が行動することを期待されている。	4	3	2	1
4	私は家族から、家族のメンバーを励ましたり手助けすることを期待されている。	4	3	2	1
5	私は家族から、家族を楽しませることを期待されている。	4	3	2	1
6	私は家族から、家族の世話をすることを期待されている。	4	3	2	1
7	私は家族から、親になんでも報告することを期待されている。	4	3	2	1
8	私は家族から、私が親に頼ることを期待されている。	4	3	2	1
9	私は家族から、親が決めた進路選択をすることを期待されている。	4	3	2	1
10	私は家族から、門限や交友関係など親が決めたルールに従うことを期待されている。	4	3	2	1
11	私は家族から、何か問題が起こったとき、それにかかわらないことを期待されている。	4	3	2	1
12	私は家族から、親に従順であることを期待されている。	4	3	2	1

資料

資料 2 【研究Ⅳ】，【研究Ⅴ】，【研究Ⅵ】で使用した家族内の役割尺度

あなたの**現在の家族関係**についてお聞きします。以下の質問は＜家族からの期待＞と＜自分の行動＞の2段階からなります。まず、あなたが家族からどのくらい期待されているかについてお答えください。また、その事柄についてあなたはどのくらいしているかについてお答えください。

		＜家族からの期待＞				＜自分の行動＞				
		大変そうである	ややそうである	あまりそうではない	全くそうではない		大変する	ややする	あまりしない	全くしない
例	私は家族から、勉強をすることを期待されている。	4	3	2	1		4	3	2	1
<p>例えば、家族からは勉強をすることを期待されているが、実際には勉強はしていないという場合は・・・＜家族からの期待＞は3か4、＜自分の行動＞は1か2に○を付けます。</p>										
1	私は家族から、親の愚痴や相談事を聞いてあげてくれることを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
2	私は家族から、家族に何か起こったとき、私が行動することを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
3	私は家族から、家族のメンバーを励ましたり手助けすることを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
4	私は家族から、家族を楽しませることを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
5	私は家族から、家族の世話をすることを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
6	私は家族から、親になんでも報告することを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
7	私は家族から、親が決めた進路選択をすることを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
8	私は家族から、門限や交友関係など親が決めたルールに従うことを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
9	私は家族から、何か問題が起こったとき、それにかかわらないことを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1
10	私は家族から、親に従順であることを期待されている。	4	3	2	1	⇒	4	3	2	1

謝辞

本論文は筆者が東北大学教育学部に在学時から現在に至るまで若島准教授のご指導のもと取り組んできた青年期きょうだい関係に関する一連の研究についてまとめたものです。本研究をまとめるにあたり、様々な先生、先輩、同期、後輩からのご指導ご鞭撻を頂きましたこと、心より御礼申し上げます。この紙面を借りて感謝の気持ちとお礼を述べさせていただきます。

また、貴重な時間を割いて質問紙やインタビューに協力してくださいました皆様に深くお礼を申し上げます。さらに、貴重な授業時間を割いて質問紙配布にご協力くださいました、佐藤宏平先生(山形大学),久保順也先生(宮城教育大学)に深く感謝を申し上げます。皆様、先生方の多大なご協力があったことで実証研究を行うことが出来ました。ありがとうございました。

まず、本論文を作成するにあたり、貴重なご助言、ご指導をくださいました東北大学大学院教育学研究科の若島孔文准教授、加藤道代教授、長谷川啓三教授に心からお礼申し上げます。

若島孔文先生には、東北大学教育学部在学中から約7年間に渡り、研究方法、論文作成、臨床実践等について多くのご指導を頂きました。研究も臨床も何もわからなかった学部3年生の頃から、博士論文を書き上げるまで長期に渡りご指導くださり、心より感謝いたします。先生のもとで、家族療法・短期療法に出会い、カウンセリングに対する姿勢や、研究の着想・方法から論文の書き方等の多くの知識、経験を得て、技術を学ばせて頂きました。先生にご指導頂いた7年の間に、振り返れば紙面に収まりきれないほど、誠に多くの事を学ばせて頂いておりました。先生のもとで研究や臨床について多くを学んでこられたことを心より嬉しく思います。多くのご迷惑もおかけしたかと存じますが、なんとか博士論文を提出するという一つの段階まで来ることができたこと、心より感謝いたします。また、長谷

川啓三先生には、研究上の苦しさを感じた際や煮詰まっている時に、さりげない励ましや応援、自分では考えも及ばなかったメタな視点のアイデアを頂きました。多くの応援やアイデアを頂けたこと、心より御礼申し上げます。先生の示されたアイデアは、一つの指針として、これまでの研究の力強い支えとなっておりました。また、加藤道代先生には、研究指導や臨床実践の指導など、他研究室でありながら多くのご指導を頂けたこと、心より感謝いたします。なかなか理解の及ばない私に対して、納得するまで最後まで丁寧にお付き合いをしてくださったこと、誠に感謝しております。加藤先生の研究指導や臨床実践のご指導の中では、家族システム論や短期療法的な見方とはまた異なる視点や方法を多く学ばせていただきました。誠にありがとうございました。

加えて、東北大学大学院教育学研究科臨床心理コースの上埜高志教授、安保秀勇准教授に深くお礼申し上げます。先生方には、木ゼミの時間等を通じて様々な指摘を頂きました。上埜高志先生には、精神医学的な視点からご指摘や、その他、修士課程中に臨床実践先のご紹介を頂き、臨床経験を積ませて頂きました。また、安保秀勇先生には、分析方法の提案等の研究手法について多くのご助言を頂きました。誠にありがとうございました。

そして、大学学部時代から研究や入試に関して非常に多くのご助言、ご指導くださいました若島研究室・長谷川研究室の先輩である狐塚貴博先輩、野口修司先輩に心よりお礼申し上げます。共同研究やゼミ、臨床実践を通じて、研究方法や臨床について多くを学ばせて頂きました。先輩方をモデルとすることで、ここまで研究や臨床を進めてくることができたと考えております。板倉憲政先輩、宇佐美貴章先輩には、研究や臨床上の課題について、よくご相談に乗って頂いたことを覚えております。さらに、浅井継悟先輩、平泉拓先輩には、多くの共同研究を通

じて、経験を積ませて頂きました。先輩方に深くお礼申し上げます。

また、卒業論文の頃より多くのアドバイスをくださった黒澤泰先輩に心より感謝いたします。さらに、苦楽を共にした小林智さん、三道なぎささん、修士時代を共に過ごした、若島研の同期である清水愛麗さん、佐藤未央さん、古山杏加里さんには、論文執筆に関して多く励ましを頂きました。そして、佐藤修哉さんには、他研究室であるにもかかわらず、研究・臨床活動や実生活において多くの協力や励ましを頂きました。執筆活動を支えて下さった同期の方々に心より御礼申し上げます。

そして、若島研究室の張新荷さん、ユキョンランさん、栗田康史さん、富永紀子さん、牧田理沙さん、山形千遥さんには、各実証研究への貴重なご意見、丁寧な添削を頂きました。またそれだけではなく、筆者の精神的健康を気遣いたくさんの励ましを頂きました。非常に多くの情緒的・道具的サポートを頂き心より御礼申し上げます。

最後になりますが、長年にわたり私を支えてくれた両親、祖父母に深くお礼を申し上げます。山口から離れた遠い地で長年にわたり学生生活を送ることを理解し、常に応援してくれました。温かく支えてくれた家族に心より感謝いたします。

本論文の作成にかかわってくださった多くの方に、深く感謝申し上げます。